

# 虚無と銀の鍵

ぐんそ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

銀の鍵としての力を使いこなす為に伯父と共に時空の旅に出たアビゲイル。

しかしとある世界に滞在中、その世界は這い寄る混沌とその使い魔達によって崩壊してしまう。

伯父とはぐれてしまったアビゲイルは未だ修行の身。

それでも銀の鍵としての力を行使して世界からの脱出を図る。

すると目の前に『門』が現れ――

|||||

アビゲイルの小説もつと増えろ！ということでご自給しました。

小説書いたことなかったので変なところ多いと思いますがよろしくお願ひします。

結構設定周りとかもガバガバの見切り発車なので矛盾とか、アドバイスとか、ここ変とかなんかありましたらお願ひします。（一応独自設定みたいな保険タグとかつけときます）

そしてアビゲイルのクロスもの描くぞ！って方がいましたら応援してますのでお願ひします。

# 目次

1 : 序章	1
2 : 始まりと記憶喪失	8
3 : 少女と初めての食事	15
4 : 初めての授業	22
5 : 失意と決意	31
6 : メイドと食堂の喧騒 1	38
7 : メイドと食堂の喧騒 2	44
8 : 一方その頃	52
9 : 青銅と少女の戦い	62
10 : 憧れに誓いを	70
11 : 虚空の奥	78
12 : 償いに約束を	86
13 : 学院長室へ	93
14 : 少女とパンケーキ	102
15 : 一日の終わり	110
16 : 王都へ行こう!	116
17 : 異界迷宮王都トリスタニア	124
18 : 狂気と怒り	132
19 : 少女達と賭博場	140
20 : 爆ぜる大剣	150
21 : 再会と帰宅	157
22 : 夜の訓練と忍び寄る怪盗	165
23 : 土くれのフーケ	173
24 : 忍び寄る混沌	184

25	結成、捜索隊	191
26	手紙	200
27	強敵	210
28	混沌と火炎	219
29	父なる神よ	232
30	帰路	240
31	心の爪痕	248
32	ランチタイム	256
33	暖かな君	265
34	フリッツグの舞踏会	271
35	少女と葡萄酒の休日―1	278
36	少女と葡萄酒の休日―2	286
37	ルイズと夢のなかの男	293
38	トラウマ	300

# 1：序章

『混沌』<sup>かいぶつ</sup>が迫ってくる。

人知を遥かに超えたそれはゆつくりとその世界を侵食し、壊し、狂わせ、飲み込んでいく。

苦しみを断ち切るために死を選ぶ者、現実を受け止めきれずに妄想へ逃げる者、もはや何の選択も選ぶことができずに思考を凍り付かせる者——『混沌』に覆われたこの世界から逃れる為に、人々はみな次々に正気を失って行つた。もはやこの世界で生き残っている生命体は数える程だろう。

「伯父様……！ 何処に居るの……!?!」

小さな街は炎に包まれ、肌をひりひりと焼き付ける熱気に襲われながら少女は走っていた。燃え盛る街道を抜け大広間に出てみるも、共に時空を旅した伯父の姿は何処にも見当たらず、叫び声をあげてみるものの帰ってくるのは正気を失った人間の狂った笑い声だけだった。

伯父が『混沌』に飲み込まれたとは思えないが、姿が見えない以上必ずしも無事だとは限らない。何せ相手は外なる神々、人知を超えし冒瀆的存在。そこに絶対大丈夫などという甘い理想は無く、あるのは無残な現実だけだ。

少女は湧き上がる焦燥感や不安感をぐつと堪えて再び走り始める。大広間を抜け、商業通りを走り続け、遂に街外れの小さな教会までたどり着いてしまった。

ぜえぜえと肩で苦しそうに呼吸をしながら空を見上げれば、まるで初めから何も無かったかのように虚空が広がっていた。緩やかに、しかし確実に世界は終わりを告げている。

「もうこれ以上はダメね。もしかしたら伯父様ももう脱出しているのかも。私もはやくこの世界から離れなくちゃ……！ でも……」

これ以上この世界に留まる事は消滅を意味するに等しく、すぐにも『門』を開きこの世界から離脱しなければならぬ。

しかし少女は未だ修行の身。たった一人で世界を移動するための

『門』を開くためのコツをまだ完全に掴んでいるとは言い難かった。

「ギイイイ!!!」

「っ…!!」

少女は上空からすりガラスをひっかくような声が聞こえ、慌てて教会の中へと入る。

扉を勢いよく閉めると、その巨体を何度も打ち付け始めた。

「はあ、はあ……」

恐怖と焦燥感に押しつぶされそうになりながらも呼吸を繰り返し、周囲をぐるりと見渡す。

教会の中には当然誰一人居らず、外の喧騒から切り離されたこの空間は外の怪物が体当たりを止めると、一気に静まり返った。

「……前に私が門を自分で開いたのもこんな場所だったかしら」

あの時の事を思い出して少女は苦笑いを浮かべる。神をその身に宿し、優しい人たち、大好きな人たちと親友を傷つけてしまったあの瞬間の事だけはどうしても忘れる事はできない。何より、力が制御できずに暴走してまたあの夜の様になってしまっているのではないかと旅の始めは自分自身に恐れを持っていた。だけど今は違う。様々な世界・時空を旅して、少しずつだけど『門』を開くという事に自信を持つことができるようになった。

「……お願い、どこでもいい、今だけでいい、狂った奇跡でいい！ 大好きなあの人たちや大切な親友にまた巡り合えるまで、私は消えるわけにはいかない……!」

少女は両目を瞑り、両手を合わせて祈りを捧げるようにして魔力を込める。これまで努力をしてきた事を全て無駄にしないために、そして叶えたい夢をかなえるために、どうか、どうか——

「——開いた!」

ゆつくりと瞼を開けてみれば、そこには確かに『門』が開いていた。それは少女の力で生み出した『門』とは全く違う性質のものであるのだが、門の中からは希望の光が漏れ出し——冷静に考えればそれはおかしなが——新たな世界への旅立ちを祝福しているかのように見えた。



「先生！もう流石に止めさせてくださいよ!!」

「っ……」

罵詈雑言を浴びせられた、ゼロのルイズと呼ばれた少女は悔しそうに下唇を噛む。しかしそんなもの構うものかといったようにぶんぶんと首を振り、再び召喚魔法を唱えるために杖を構えた。

「ミス・ヴァリエール」

ルイズは自分を呼ぶ声に振り返ると、使い魔召喚の儀を監督していた教師、ジャン・コルベールが神妙な面持ちで側に立っていた。

「時間も押してきていますし、貴女もだいぶ消耗しているでしょう。続きは明日にしましょう」

「っ、あと一回、あと一回だけ召喚させて下さいー!」

悲鳴のような叫び声をあげて、ルイズはコルベールに頭を下げて頼んだ。召喚の儀は教わった通りに完璧にやっている筈、それなのに何度やっても爆発しか起こらず、使い魔は召喚できていない。もしかしたら自分はこのまま使い魔を召喚する事ができず、進級することもできずに、一生ゼロのルイズと馬鹿にされたまま生きて行かねばならないのか。そんな恐怖からルイズは、今日諦めて明日に回すという事を拒んだ。何より、このままできませんでしたと終わる事をルイズのプライドが許さなかった。

「……わかりました。あと一回だけですよ。これでダメだったら明日に回しますからね」

「ありがとうございます!!」

コルベールはルイズの内情を察してか後一回の召喚魔法の許可を出した。あと一回だけというのは、もちろん本当に時間が押していたからという事もあるが、ルイズがこれ以上失敗をし続けた時の心のダ



メージは相当なものになるだろうし、何より魔法を使うための精神力に限界がきて倒れてしまうのではないかという懸念からである。

ルイズはしっかりと杖を握り直すと一度だけ大きな深呼吸をした。後一回だけ、そう思うと今まで以上に緊張してしまいが、周囲の雑音が耳に入らないほど集中できるのはある意味良いコンディションだと言えるかもしれない。

(……もう失敗は出来ない。お願い、どこにいるかもわからない私の使い魔。どんな姿でもいい、今だけでいい、一瞬の奇跡でいい！  
今だけ私の前に現れて。こんな所で私は終わるわけにはいかな  
いのよ……!!)

「五つの力を司るペンタゴン……私の運命に従いし、使い魔を召喚せよ！」

ルイズは慟哭にも似た叫びを上げ、手に持った杖を一気に振り下ろす。

——刹那。

今までの比では無い爆発が起こり、当然爆心地付近にいたルイズは吹き飛ばされる。二回三回転がって制服を土まみれにした所でようやく何が起こったのかを理解し、絶望した。

「ミス・ヴァリエール!!」

「ルイズ!!」

(ああ、また失敗したんだ)

コルベールと、今まで静観を決めていたキュルケは声を張り上げる。

ルイズは身体の痛みと精神力切れで頭を上げることすら難しくなり、身体を起こすことなく静かに啜り泣きを始めた。

「ルイズ！　ちゃんと見なさい!!　あなた、何か召喚したわよ!!」

「え……?」

キュルケの叫び声に顔を上げてみれば、砂埃の中には確かに人影があつた。しばらくすると土煙は晴れ、ようやくその姿が露わになる。

「お、女の子……?」

身長はルイズと同じ153センチかそれより少し小さいぐらいに見える。(帽子を被っていたので一瞬自分より高いとルイズは思っていたが)

金髪碧眼、とても幼い顔つきで、その身に纏っている衣服は見たこととの無い。どこか上品な雰囲気を持つていた為に、まさか貴族の娘でも召喚してしまったのかという思考が一瞬頭をよぎったが、それよりも髪や頬には煤が付着しており、服もいくらか破けてしまっている事の方が気になった。

ルイズはなんとか身体に力を入れて立ち上がるとボロボロの少女へと近づいていく。すると呆けていた少女もこちらに気がついて目を合わせた。

「アンタ名前は?」

「……名前? 私……?」

「そうよ」

肯定してみせると少女は僅かに俯いて暫く考え込んだ後、

「……私は、アビー。 アビゲイル・ウィリアムズ、よ」

小さくそう答えた後、少女のその身体はぐらりと揺れて、青々とした芝生の上へと倒れ込んでしまった。

「ちよっと!大丈夫?!」

「っ……その子を保健室へ! さあいつまでぼうっとしてるのです! 他の生徒達は寮へ戻りなさい!」

コルベールが怒号を発すると、未だ戸惑いの隠せない生徒たちを寮へと帰るように促す。ルイズは指示通りにアビゲイルと名乗った自分の使い魔を運ぼうとするが、力の抜けた人間の重さが想像以上にあるためになかなか運び出せずにはいた。それでもどうにかして運ぼうと四苦八苦しているとアビゲイルの身体がふわりと浮き上がる。

「手伝う」

「え……あ、ありがとう」

協力を名乗り出たのはたしか——キュルケと友人関係にある青髪の少女。名をタバサと言ったか。ルイズが使うことのできない《レビテーション》を使い、そのまま移動を始めた。ルイズは自分の無力さと、タバサへの感謝で若干複雑な気持ちのままその後ろを付いて行った。

## 2：始まりと記憶喪失

アビゲイルが目を覚ますと、そこには見知らぬ天井が広がっていた。当然辺りを見回してみてもその結果は変わらなかった。

窓から外を見ればようやく日が昇り始めた頃であり、春になったばかりということもあって少しだけ寒い風が頬を撫でた。

アビゲイルは自分の服装を見てみるとこれまた覚えのないネグリジェを着ており、より一層困惑した。桃色の生地 of 至る所にフリルがあしらわれ、よくみると下着のパンツまでそんな感じに仕上がっている。

(ち、ちよつと派手じゃないかしら、これ……………つていうか)

どうしてこんなところに寝ていたのだろうか？

その疑問の声を探る為に前日までの記憶を思い起こそうとして――

「!! アンタやつと起きたのね! 良かった…………!!」

いつのまにか扉は開けられており、そこには桃色の髪の少女が立っていた。

安直に桃色と桃色で、もしかしてこの服はこの人が着させてくれたのかしら?と考えたが(まあ正解なのだが)、それよりもこの名も知らない少女がひどく安心した様な声を出した事に対して疑問を浮かべた。

「え、えつと…………あの…………」

「? どうしたのよ」

「私、どうしてここに…………」

「まさか、何も覚えてないの?」

アビゲイルはゆっくりと頷く。ルイズはそう…………と呟いてから「サモン・サーヴァント使魔召喚の儀」についての概要を説明し、昨日ここに使魔として

アビゲイルが呼び出されたという事を伝えた。アビゲイルは話の中に聞き馴染みの無い言葉が多々あったためにその都度聞き返し、掘り下げて見ればここは自分の知る世界とは大きく異なる異世界だという事が分かった。

「……よく分からないけど分かったわ。私はあなたの使い魔なのね」

「そうよ。平民の使い魔なんて聞いた事も無かったわ……それに異世界？だっけ。ねえ、もしかして昨日あんなにボロボロだったのって、その異世界で何かあったの？」

「え……」

「全身に火傷もあったし、切り傷とか打撲の痕もいくつかがあったわ」

心配そうな声を出すルイズの言葉に、アビゲイルは小さく口を開けて啞然とした。いくら思い出そうとしても、その記憶が全くないのだ。そして更にその前の記憶を思い出そうとしても全くと言っていいほど思い出す事が出来ない。

——まさか記憶喪失!?

みるみる顔が青ざめていき、小刻みに震え始めると、流石のルイズも異常に気がつき慌て始める。

「ねねえ本当に大丈夫なの?! 顔色悪いわよ!」

「ご、ごめんなさい……何も、なにひとつ思い出せなくて……私……」

「記憶喪失ってこと……?」

「……そう、みたい。 どうしよう……! どうしよう……!!」

異世界だということに加えて記憶喪失。つまり、誰も自分の事を知る人間は居ないし、自分が誰なのかさえも分からない。アビゲイルはたった一人で光の届かぬ深淵を彷徨っている様な気がして、震えの止まらない自分の身体を抱きしめる。そして双眸を固く閉じ、嗚咽しながら溜まった涙を零した。

記憶喪失、というのはこれ程までに恐ろしい物だとは思わなかった。自分は何に襲われていたのか。自分は何者なのか。自分はどうかやって生きてきたのか。自分は何か大切な目的を持って居たのではないか。

それら全てを思い浮かべ、そして何も思い浮かべることが出来ずの繰り返し。

怖い、怖い、怖い。

先の見えない恐怖が身体を完全に支配さそうになった時、ぎゅつ、とアビゲイルは暖かいものに包まれた。

突然の事にびっくりと身体を震わせてから、目を開けてみれば、そこには桃色の髪が見え——抱きしめられているのだと認識した。

「大丈夫、大丈夫よ。　ごめんね、無理やり連れてきちゃったのは

私だから、せめて主人としてちゃんと面倒は見るわ。　心細いかもし

れないけど、私はアンタの味方よ」

「——っ」

「……きつと記憶も取り戻せるわ。　だから安心しなさい」

ルイズには何があったのかは分からない。　だが少なくとも悪意のある何かに襲われていたのは間違いないだろうという事は推測できた。そして記憶喪失というのは不憫に思ったし、無理やり連れてきてしまったという後ろめたさ、罪悪感というのも勿論あった。しかし、なによりも目の前で泣きながら震える少女がとても小さく見え、折れそうなほど華奢な身体を抱きしめる様をみて『守ってあげたい』と強く思った。

|||||

ルイズはアビゲイルが泣き止んでからも暫くの間抱きしめて居たが、冷静になってみると自分から抱きしめるなどという非常に恥ずかしい状況になっていることに気付き、ゆつくりとアビゲイルから離れていった。

「……………」  
「……………」

アビゲイルの様子を見てみれば、さっきまで泣いてた所為もあつて目の周りや頬を赤く染めているが——そわそわ、そわそわと、どう見ても向こうも恥ずかしくなつて赤面しているということがわかる。

「そ、その……ありがとう。 とつても嬉しかったわ」

「と……当然のことをしたまでよ。 だつてご主人様なんだもの」

「うん……それでも嬉しいの」

「ふ、ふーん、そそ、そう。 ふ、ふふ」

にこりと微笑みを浮かべ、素直な感情を伝えてくるアビゲイルにルイズはますます顔が熱くなる。あまりにもストレートに投げ込まれた好意のオーラに表情がふにやふにやになっている気がするが、主人の威厳を保つ為に素っ気ない態度をとった。完全に表情が崩壊する前にどう言葉を返そうか迷っていると、

「あら、やっと起きたのね！ おはようアビーちゃん、調子はどう？」

「にやわあああああああああ?!」

宿敵・キュルケがいつのまにか起きてきて、部屋の扉を開けて居た。多幸感からくる顔面の崩壊と必死に戦って居たルイズは堪らず奇声をあげる。

「お、おはようございます……?」

「ちよつとキュルケエ!!! なあああああんでアンタが勝手に入ってきてるのよ!!! ノックぐらいしなさいよね!!!」

「何よ失礼ね、ちゃんとノックしたのに気づかない方が悪いじゃない」  
「なっ……、……」

ルイズは金魚のように口をパクパクとさせて言い返そうとするも、

なにも言い返す言葉が出てこず口を閉ざす。そんなルイズを見てなんとか話を変えようとアビゲイルは少し大きめな声で話題をふつた。

「……あ！ え、ええと、そうだ、自己紹介！ 私自己紹介して居ないわ」

「え？ そうだったの？」

「……まあ、この子が起きた直後は色々あつてね」

ルイズは今ではすっかり落ち着きを取り戻して、花のような笑顔を浮かべるアビゲイルを眺めて微笑笑を浮かべる。アビゲイルはコホン！とわざとらしい咳払いをしてから自己紹介を始めた。

「初めまして、私はアビゲイル・ウイリアムズ、12歳です！ 好きな食べ物はパンケーキ！ 私の事はアビーって呼んで下さいな」

「私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、ルイズでいいわよ」

「あたしは『微熱』。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツェルプストーよ。よろしくね、アビーちゃん」

と、キュルケはそこで一度区切り、アビゲイルに対して疑問を投げかける

「ところでなんだけど、あなたって貴族なの？」

「え……？ ううん、違うわ」

「そう……なら、苗字の方は言わない方がいいかもね。要らない誤解を生むかもしれないから」

「そうなの？」

曰く、平民は苗字を持たないものらしい。

アビゲイルはへえ、と声を漏らして頷いた。

3人は自己紹介を終え、アビゲイルは下を向き、二人の名前をなんどか口の中で反芻し、顔と一致させる。一生懸命な感じについて二人は温かい目で眺めているとアビゲイルは顔を上げ、



「それじゃあ改めまして……よろしくね、ルイズ！ それにキュルケお姉さん！」

「お、おねえさあん!!？」

「あらあら、お姉さんだつて！ ねえルイズ聞こえた？ 可愛らしい妹が出来ちゃったわよ！」

「聞こえてるわようっさいわね！ ちよつとアビーどういうつもりよ!!」

「え、え？」

嬉々とした表情で『お姉さん』の聞き心地の良さにテンションを上げるキュルケと、信じられないと言った鬼の形相でアビーに怒鳴るルイズ。アビゲイルには二人がなぜこのような反応を見せるのかいまいち理解できておらず、困惑していた。

それもそのはず、アビゲイルはルイズとそう身長は変わらず、ルイズもそれなりに童顔だったため同じ年ぐらいだと認識していた。一方キュルケは身長も高くスタイルも抜群。更には唇に情熱的な赤色の紅を刺し、その大人っぽい色気には同性のアビゲイルでさえ緊張してしまうほどであった。

「ごめんなさい、私、何か不味い事を言ってしまったかしら……」

「ううんアビーちゃん、何も不味い事は言っていないわよ。ただのお子ちやまルイズの焼きもちなんだから」

「ハアー?! ややや焼きもちなんて焼いてないわよ!! 何でこいつにだけ『お姉さん』なんて付けてんのよって事！」

アビゲイルはようやくルイズが何故怒っているのを理解する。しかし、怒っている理由は分かったが、何がいけなかったのかはまだ分かっておらず、おずおずと反論する。

「だ、だつて年上の方でしょう……？」

「私だつて年上よ!! 16歳なんだからね!!!」

「ええ!？」

驚愕の表情でキュルケの方を見る。グラマラスな得體、オトナつぽ

い雰囲気。それに対して4歳年上であるはずのルイズは自分と殆ど体型が変わらない。胸の方だつて、お世辞にも――

「あいたあつー！」

「今失礼な事考えてたでしょ!!!」

ルイズはアビゲイルの頭をパチンと叩く。想像以上に力がこもっていたのか、叩かれた部分を抑えてアビゲイルは涙目になりながら「そんなに強く叩く事ないのに……」と呟く。

「全くもうー！」

「うう、キュルケ……さんもごめんなさい。綺麗で、とつても大人っぽかったから、そっちの方が良いかと思っただけど……」

胸の前で祈りの時のように手を組み、上目遣い（涙目）で謝罪をするアビゲイル。

それを見たキュルケは思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたがそれをぐつと堪えて、

「ふふ、何言ってるのよ。そんな嬉しい事言ってくれるなんてルイズの使い魔にはもつたないわ」

につこりと笑顔を浮かべてアビゲイルの頭を優しく撫でる。アビゲイルは一瞬恥ずかしそうな顔をするが、すぐに気持ちよさそうに目を細めて笑顔を浮かべる。

それを横で見っていたルイズはものすごく不満そうな顔をしていたが、勢いで叩いてしまった手前なんとなく邪魔をする気になれず、口をへの字にしながら様子を見ていた。

暫くしてキュルケは自分の使い魔を紹介し、その後朝食を取りに食堂へと一緒に向う事になった。

最初こそ見たこともない生き物に対して怖がり、触るのをためらっていたアビゲイルであったが、噛みついていたりしてこないという事がわかるとすぐに仲良くなることができた。

ルイズは勝手にキュルケと仲良くしていくアビゲイルに物申しい気分ではあったが、記憶喪失で涙を流していたアビゲイルの暗い表情よりはずつと良いかと苦笑を浮かべながら歩くのであった。

### 3：少女と初めての食事

「あ、そういえばアビーちゃんの朝食は大丈夫かしら？」

「どういう事？」

「…………人間の使い魔なんて聞いたこともなかったし、突然のことだったでしょう？ 多分アビーちゃんの朝食は用意されてないんじゃないかと思って」

「そ、そんなあ！」

三人（と一匹）が食堂へと歩く最中、唐突に思い出したように呟くキュルケに対してアビゲイルはショックを受けた表情を浮かべる。すでにお腹は何度か空腹を訴えていたのだが、今の発言を聞いて再びくうくうと可愛らしい音を立ててしまう。

この世界ではどんな料理が出るのだろうかと部屋を出てから楽しみにしていたのに、「食べられないかも」などと言われれば急にお預けを食らったような気持ちになり、余計にお腹が空いてしまうというもの。

それに対してルイズはふふんと鼻を鳴らし、

「大丈夫よ。既に厨房の方にもう一人分多めに作ってもらえる様に頼んでおいたから」

「あら、意外。 用意が良いわね」

得意げに胸を張って言うルイズに対して、キュルケは少しだけ感心したような声を漏らす。

隣を歩くアビゲイルはそのサファイアの様な青色の眼をキラキラと輝かせてルイズを見つめていた。

「ル、ルイズ……………！ ありがとう！ 私お腹がペコペコで、もう限界だったの。 ルイズがとっても気配り上手の優しいご主人様<sup>マスター</sup>でよかったわっ！」

「ウオマブシイツ」

心から嬉しそうな表情を浮かべて感謝を伝えるアビゲイル。「えへ」と無垢に笑い、るんるんと上機嫌にスキップまで始めてしまうこのいたいけな少女を目の前に二人の心は一瞬で浄化された。

気配りと言えば確かに聞こえはいいが、ルイズの一番の目的は主人としての威厳を見せつける事。ここで出来る有能貴族をアピールして置くことで後々の上下関係をはつきりさせるという目的があった。今朝の一件があれば「ご飯なしは可哀想だな」と思う事はあるだろうが、厨房にお願いしに行っただのはそれよりも前。つまりアビゲイルの為に手配しようと思っていた訳では無いのである。

そして当然キュルケもルイズのその見栄っ張りな思惑を見抜いていた。

キュルケの言った『意外』は『平民の使い魔なんだからパン一つで十分でしょ』と言い自分の皿から一つ恵んでやるぐらいの塩対応をすると思っていたからだだった。

二人はこの邪な思惑を考え付いた（当然のように見抜けてしまった）自分の心の汚れをそつと恥じた。

ああ、始祖ブリミルよ。私はもつと優しく、そして純粋な人間になります——。

そう心に誓い、二人は祈りを捧げるようにそつと目を閉じた。

「ど、どうして目をつぶって歩いているの？ 前を見ないと危ないわ

……」

「大丈夫よ、なんでもないから」

食堂へ移動する間、ルイズとキュルケの二人は目を閉じ祈りを捧げ続けた。

そしてアビゲイルの制止も虚しく、二人仲良く壁に激突した。


「さあついたわ。 此処がアルヴィーズの食堂よ」

片手で鼻を抑えながらルイズが食堂の扉を開けると、アビゲイルは思わず「わあ」と感嘆の声を漏らした。

内部はかなり広く、大聖堂と言っても納得してしまうほどの大きさである。

また、広さだけではなく生徒たちの人数も多く、それぞれルイズと同じ黒いマントを付けている生徒、茶色や紫のマントをつけている生徒がみられた。

食堂へ来るまでの間にキュルケが説明してくれたが、学年別にマントの色が違い、テーブルも学年別に分けられているようだった。

食堂正面に向かい、左から順番に3，2，1年生の並びになっており、それぞれ紫、黒、茶色の色分けがされた生徒が座っていた。ルイズ達は2年生なので真ん中の長テーブルへと向かっていく。

テーブルの上には朝食だというのに豪華な料理の数々が並んでおり、アビゲイルはついよだれが出てしまいそうになりながらルイズの席があるという場所へと向かうと、自分の分もきちんと配膳されているのが見えた。

ルイズはいつもの定位置、長テーブルの中央より少し右端あたりに座り、その右隣にアビゲイルが座る。キュルケはいつもはルイズから少し離れた位置に座っていたものの、今回はアビゲイルも一緒だという事でそのさらに右隣に座ることになった。

「ねえ見てルイズ。 このシチュー、野菜がゴロゴロ入ってとっても美味しそう！ それにあのパンもふわふわだわ……ますますお腹が減っちゃいそう」

「もうちょつと我慢なさい。 そわそわしてちゃはしたないわよ」

アビゲイルは席に着くとそわそわとテーブルの上の料理を眺めて、食前の祈りを今か今かと待っていたが、ルイズから注意を受け、少しだけしゅんとして反省の表情を浮かべる。しかしそれでも目線だけはきよろきよろと料理の数々を映し、目の前の料理から香る美味しそうな匂いに口の中を涎でいっぱいにした。

そんな主従のやり取りを頬杖を突きながら眺めていたキュルケで

あったが、朝食の前の祈りの唱和が始まるまでまだ時間があつたので、気になった点を質問することにした。

「ねえ、ところで貴方達、コントラクト・サーヴァントはもう済ませたの？」

「……それが実はまだなのよね。今日の授業が全部終わったら、学院長室へ来るように言われているから、多分そこですることになると思うんだけど」

「ふーん、そうなの」

昨日『使い魔召喚の儀』を終え、タバサに手伝ってもらいながらアビゲイルを自室へと運ぶ前にコルベールに言われていたのだ。コントラクト・サーヴァントをすると言われたわけではないが、進級の為にはコントラクト・サーヴァントが必須条件の為、おそらく学院長室で行うのだろうと容易に想像がついた。

「えっと……コントラクト・サーヴァント？ をしたら、正式に使い魔になるのは分かったけれど……具体的に私、どんな事をすればいいの？」

アビゲイルはいまいち使い魔としての仕事についてイメージできておらず、難しそうに眉間に皺をよせ、首を軽く傾けながらルイズへと質問を投げかける。

「まずは……そうね、『主人の目となり、耳となる事』」

「……ど、どうやって？」

「これはコントラクト・サーヴァントをすればできるようになる事だと思おうわ」

「他には？」

「あとは主人の望むものを持つてくることね」

「うーん……お使いぐらいならできると思うわ！」

アビゲイルはえへんと胸を張る。

しかし、アビゲイルをもし街に一人で送り出してお使いを頼もうものなら——財布をスられるか、アビゲイル自身が誘拐されそうである。

それに、そういう事とはちよつと違うんだけど……とキュルケは苦

笑いを浮かべながらも、あえてそれは言わないでおいてあげた。

「他は？　もう無いのかしら」

「あるにはあるわよ。　でも……ねえ……」

ルイズは微妙な表情をしてキュルケを見る。するとキュルケも眉尻を下げて「ちよつと厳しいかもね」と苦笑いを浮かべる。両者ともこの子には無理、と烙印を勝手に押すものだから、アビゲイルはちよつとだけ拗ねた表情になる。

「そんな風にいわなくなつて……私だつてきつと役に立てるわ！　何をすればいいの？」

と、唇を尖らせて言ってみれば、ルイズは諦めたような溜息を吐いて、呟くように言う。

「……主人を守る事」

主人を守る。それはつまり外敵が襲ってきた時、主人が窮地に立たされた時に主人の盾となり、その身を守らなくてはならない。当然其処に必要なになってくるのは死の危険を乗り越え脅威に立ち向かう勇氣、そして迫りくる敵を、それも主人を守りながら退くことのできる武力である。

アビゲイルを見てみれば筋肉は少なく、背丈も12歳としては平均的。武器などは何も持つておらず、もちろん拳法を学んだなどという経験もない。

誰がどう見ても『普通の平民の女の子』であり、敵と戦う戦力として数えられないどころか、むしろ守られる側の人間であることは明白だった。

「そ、それは……難しい、かも。　でも、ルイズの為ならきつと頑張るわ」

「……その気持ちは嬉しいけど、無理な事はしなくていいわ。　何度もボロボロになられたら水薬だつて無くなっちゃうわ」

「う……」

アビゲイルはがつくりと項垂れる。

水のメイジの作る水薬はそれなりに高価で、今回の場合は同級生のメイジ——モンモランシーという少女が譲ってくれたそうだ。

今回こそ彼女の善意で無料で譲ってもらったが、これはレアケースであり普通は簡単に手に入れる事はできない。

今後主人に危険が及びそうになるたびに自らを盾にして、主人の懐へと致命傷を与えてしまうのではルイズが一瞬で破産してしまう事になるだろう。

「……ま、まあアビーちゃんはお洗濯とかそういう身の回りの事をやれば大丈夫よ。手始めにルイズの洗濯物でも洗ってみたらどうかしら？」

「うん……そうね。戦う事はできないけれど、お洗濯ならできると思うわ！」

「出来る事からちよつとずつ頑張りなさい。ほら、そろそろ朝食が始まるわよ」

キュルケが何とかフォローを入れる事でアビゲイルは少しだけ気持ちを取り戻す。食事の方へと意識を向けてあげれば、陰りのあつた表情はころりと笑顔に変わり、今か今かと祈りの合唱を待ちはじめた。

それから間もなくして生徒たちが祈りの合唱を始める。アビゲイルは自分の信じる神以外に祈りを捧げるのは何となく憚られたので、小さな声でぼそぼそと呟きながら主神への祈りを捧げた。

その後の食事はアビゲイルを十分に満足させるものだった。もしかしたら記憶にないだけで食べたことがあるのかもしれないが、それでも絶品だと言えた。パンの表面はサクツツとしており、中身はふわふわ。そこに熱々のシチューと一緒に流し込んでやると極上のハーモニーを奏でてくれる。

途中ルイズが「食べ過ぎないでよね」と注意をしていたものの、結局メイドが運んできたパンをおかわりし、気が付いたら朝から少し食べ過ぎたかもと言えるほどのパンをお腹の中に詰めてしまった。





## 4：初めての授業

食事を終わるとルイズ、アビゲイル、キュルケの3人は他の生徒達と同様に移動を始めた。

教室は本塔とはまた別の塔に行く必要があり、アビゲイルは周囲の人混みに飲まれないようにしながらルイズ達に着いていった。

教室の中へ入るととても広く、入口側に巨大な黒板があり、生徒たちは長椅子と長机の好きなどころへ座るようになっていた。意欲の高いものは席の前側につき、逆に朝の眠気で若干やる気が起こらないと言った生徒は後ろ側の席に陣取っていた。(日本の大学と同じ光景だが、後ろから埋まることの方が多かったように感じる)

そしてその生徒たちの側を見てみれば、キュルケの召喚したというサラマンダーの様に様々な使い魔達が主人の側に佇んでいる。蛙や大きなモグラなんかは可愛いと思っただが、巨大な目の怪物は流石に可愛いとは思えず、巨大な目の怪物と目が合ったアビゲイルは思わず「ひっ」と小さな声を漏らして身体を強張らせた。

「大丈夫よアビーちゃん。 使い魔は主人の言うことをちゃんと聞くから急に襲ってくるなんて事はないわよ」

「そ、そうなの……？」

「ええ、ほら、それより授業が始まっちゃう。 座っちゃいましょう」

キュルケは怯えるアビゲイルの背中を軽く押しつけて教室全体の中でも比較的前方辺りへと座る。アビゲイルはその左隣に座り、ルイズはその隣に挟むように座った。

キュルケは右隣に座るタバサに「おはよう、タバサ」と軽く挨拶をすると、「おはよう」と表情を全く変えずに小さく声が返ってくる。

タバサは本を読んでいたが、これはいつもの光景だったのか特に気にした様子もなく小さな欠伸をして前方へと向き直った。

一応自分も自己紹介しておいた方が良いかと思い、自分の名前と、アビーと呼んで欲しいとだけ伝えると、「タバサ」と短く名前だけ名乗った。

それから暫くして殆どの生徒が揃うと、教室内は様々な話し声でぎ

わつき始めた。会話の内容はやはり昨日の使い魔召喚の義サモン・サーヴァントについてのことで、僕の使い魔はカッコいいだの、私の使い魔は可愛いだの、そういう話が始どであった。そしてその話題の中にも当然ルイズとアビゲイル一番のイレギュラーの事も含まれていた。

(……見られてる？ 人間の使い魔は珍しいって、ルイズもキュルケさんも仰ってたものね。でも……なんだか……)

アビゲイル自身、教室へ入った時から気になっていた声と視線だが——単に「珍しいから」という理由だけでは無いような気がしていた。確かに「本当に人間を連れてるぞ」という話し声と好奇の視線は感じるのだが、同時にジツとりと纏わりつくような嫌な視線、そして『ゼロ』『平民』という単語と共にくすくすと嘲笑が聞こえてくるのだ。

『ゼロ』という単語は初めて聞いた為理解できなかったが、「平民」という言葉は自分のような魔法の使えない、貴族でない人間を指しているという事はルイズから教わっていた。

周囲からのこういった黒い感情に馴染みがないアビゲイルは、少しだけ嫌な気持ちになり軽く下唇を噛んで俯く。それから、ちらりと助けを求めるようにルイズの方を見た。

するとルイズはそんな話し声は全く耳に届いていないといったような素振りで、黙って静かに教科書のページをめくり、予習をしていた。

本当に何も聞こえてないのかしら、と一瞬思ってもみたが、ルイズが本を持つ手に力が入っているのを見て、悔しいか、憤っているんだなど察しがついた。

(ゼロ、って何のことかしら。キュルケさんなら何か知ってないかな……)

そんな事を考えてキュルケに声をかけようとした直後、がちやり、と入り口の扉を開けて紫色のマントと帽子をかぶった小太りの女性が入って来た。

年齢は40後半に差し掛かったところだろうか、いかにも魔女といった風貌の女性は柔らかな笑顔を浮かべるとそのまま大きな黒板前前にある教壇に立った。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですね。私はシュヴルーズ。『赤土』のシュヴルーズですこれから一年間みなさんの授業を受け持つことになりました。これからよろしくお願いしますね」『赤土』というのはそのメイジの持つ二つ名なのだとキュルケが言っていた。二つ名を持つことでそのメイジがどんな系統を持つメイジなのかがわかるそうだ。

つまり、シュヴルーズというこの女性は赤土——つまり土系統の魔法を扱う先生だと言う事を表し、そして同時に自分の系統を誇りに思っていると言うことなのだろう。

シュヴルーズが教室をぐるりと見渡していたが、此方側に気づくとやや驚いたように目を大きく開いた。

「あら？　貴方は……制服はどうしたのですか？」

「えっ、えつと……」

「ミセス・シュヴルーズ。彼女は私の使い魔です」

突然の指摘にあわあわと戸惑うアビゲイルを他所に、ルイズがきつぱりと言うと、すかさず周囲の生徒が叫ぶ。

「嘘だね！　どうせ留年したくないからってその辺の平民を連れてきたんだろうー！」

「早く帰してやれよ！　その平民が可哀想だろ？」

周りを見渡せば何人かの生徒が大きな声でルイズを嗤っていた。それどころか、目立って声を張り上げている生徒の他にも半数ほどがクスクスと含み笑いを浮かべている。

あんまりな状況にアビゲイルはむっとし、文句の1つでも言っようと思うた次の瞬間、シュヴルーズは素早く杖を振るった。するとゲラゲラと下卑た笑いを上げる生徒数名の口に粘土の様なもの張り付き、もごもごと呻くだけでそれ以上の声が出なくなった。

「なんですか、貴方達は。みつともない。貴族がその様に他人を貶してはなりません。罰としてこの授業ではそのままでも受けられませんからね」

ピシヤリと注意されて数名の生徒たちはバツが悪そうにもごもごと口を動かしてから、大人しく椅子に座る。

「それでは始めますよ」と言うと、シュヴルーズはそれら一切が何事も無かったかのように授業を始めた。

この教師然とした振る舞いに、初めて見る土の魔法。アビゲイルはきらきらと目を輝かせ、心の中で凄い、と感動をしていた。

それから行われた授業は、更にアビゲイルの興味を引く素晴らしい内容だった。

「火」「水」「風」「土」の四系統に合わせ、失われた系統の「虚無」を合わせた五系統があり、それぞれの系統には他の系統には出来ない役割を持っている。

また、それらの要素を掛け合わせることが出来るようになるとドットからライン、ラインからトライアングルと言ったようにメイジとしてのランクが上がっていくらしい。

そしてそれらを踏まえたくうえでシュヴルーズは自分の土の系統は農業や建築の分野で活躍をする、人の生活に密接な魔法だと得意げに語っていた。

その中でもく錬金>のスペルは土系統のメイジには切っても切れない代表的なスペルだとシュヴルーズは言い、教壇の上に大きめの石ころを転がすと、石ころに向って杖を振るった。

次の瞬間、石ころが光沢をもつ物質へ変化し、その変化を目の当たりにしたキュルケは目を見開いて机の上から身を乗り出した。

「ミセス・シュヴルーズ!! それは、ゴゴ、ゴールドですか!？」

シュヴルーズは控えめに肩を竦ませて、

「残念ですが、ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのはスクウェアで——私はただのトライアングルですから」

あくまで謙虚を装って言ったが、トライアングルというのはそう簡単に出来ることができないものである。シュヴルーズのからはそれを自慢したいという気持ちが見て取れたため、キュルケは少しだけ呆れたような表情を作り隣を見る。するとアビゲイルは全くそんな事に気づいていないかのように「すごい」と呟いていた。あまりの純粹さに若干心配になりながらキュルケは苦笑いを浮かてしまう。

アビゲイルは心の中でひとしきりシュヴルーズへの賞賛を送ると、ふとルイズがどのようなメイジなのかを自分が知らない事に気づいて声を掛ける。

「ねえルイズ。ルイズってなんの系統魔法が得意なの？」

「どうしたのよ突然？」

「ちよつと気になって……キュルケさんは火だつて言つてたけど、ルイズの系統は聞いてなかったんですもの。確か誰かが『ゼロ』のルイズって言っていたけど、どの系統に属するのかあんまりイメージ湧かなくつて」

「っ！」

ルイズは目を見開いて、それから不機嫌そうに口をへの字に曲げ、眉間に皺を寄せる。そして「うるさいわね、何でもいいでしょ」と吐き捨てるように言うとそのっぱを向いてしまう。

冷静に考えてみれば『ゼロ』という単語を使っていたのは、ルイズの事を嘲笑をしていた内の一人の太った金髪の男子生徒であったのだが、シュヴルーズの授業と実演によつて興奮していたアビゲイルにはそこまで頭が回らなかった。

理由の分からないままにあんまりな対応をするルイズに、アビゲイルは思わずムツとして、

「……どうして突然怒るの？ 酷いわ」

「別に怒ってない」

「ちよ、ちよつと二人とも」

「怒ってる！ だつてルイズ、顔すら合わせてくれないもの」

「だから怒つていつて言つてんでしょ！ うっさいわね！」

「二人ともそれぐらいにしないと……」

キュルケが何とか諫めようとするも、二人は聞く耳を持たずますますヒートアップしていく。12と15ではまだまだ子供と言つた所、喧嘩になれば冷静になるのは難しい。とはいえ今は授業中であり、ともすれば叱られるのは免れない。

「ミス・ヴァリエール！ そしてその使い魔さん！ 授業中の私語は慎みなさい！」

「す、すみません……」

あちやあ、とキュルケは額に手をやり、叱られた二人はさすがと矛を収め、それからばつの悪そうにしながらも静かになった。

シュヴルーズはその皺の刻まれた眉間で暫く二人を睨みつけていたが、やがてはつと何かを閃いたような表情になり、

「そうですね、力が有り余ってるようですので、貴方に実践してもらいましよう」

「え、私ですか」

「はい。ミス・ヴァリエール。こちらに来て、ここにある石ころをあなたの望む金属に変えてごらんなさい」

次の瞬間、教室に緊張が走る。

それどころかルイズも立ち上がり、どこか迷ったような素振りを見せながら視線を泳がせていた。

それもその筈。ルイズは魔法を使う度に爆発、周りへの被害は計り知れない事で有名だったのだ。今この場で錬金などしようものなら教壇や黒板、最悪飛び散った破片で硝子なども破壊しかねない。

当然、自分でもその事を理解していた。ルイズは前に出て魔法を使う事を躊躇い、どうしようかと迷っていたのだが、この場でその事を理解していないのはアビゲイル、そして教師であるシュヴルーズだけだった。

「どうしたのです？ミス・ヴァリエール。早く前に来てください」

「え、えつと……」

「ミセス・シュヴルーズ」

アビゲイルの隣で他の生徒同様に緊張した表情を浮かべていたキュルケが拳手をしながらすつと立ち上がる。その表情は兎に角真剣で、ますますシュヴルーズは不思議そうな顔をするが、キュルケははつきりとした口調で言った。

「やめておいた方が良いと思います」

「何故です？」

「危険です」

危険、という言葉に周囲の生徒はコクコクと同意するように頷く。

それがどんな結果になるか、皆経験済みだからである。

しかしその言葉は初めてこの生徒たちを受け負うことになったシユヴールズには旨く伝わらず、むしろ「失敗を恐れる生徒を叱咤激励する」という教師らしいと言えば教師らしい方向性へと向かって行ってしまった。

「失敗を恐れて何が貴族ですか。大丈夫、彼女は努力家と聞いています。恐れてばかりでは何も始められませんよ」

「良い事言った」と、シユヴールズは思っていたが、生徒の反応は余り芳しくない。むしろ「ああ、終わった」と言ったような絶望的な表情を浮かべているものまでいた。

流石にここまで緊張、絶望が伝播すると、何も知らないアビゲイルも少々不安になってくる。ルイズも動こうとしないし、キュルケも真つ先に止めようとしていた。危険とは言っていたが、アビゲイルにはその危険の規模が分からない。しかし、危険なものは危険なのだ。その規模がどうであれそれは変わらない。

ふとキュルケの更に奥を見ると、タバサが本を読みながら机の下へ隠れ始めているのが見えた。この教室の机は前側が木の板で覆われているので、前方でなにかがあった時にちょうど盾として使う事ができるのだ。

アビゲイルは益々不安になり、じわりと嫌な汗をかき、良くない予感が胸をよぎる。ついに不安がピークに達し、ルイズへと声を掛けた。

「……ル、ルイズ。危ないんだったら、やめた方がいいわ」

しかしそれがいけなかった。プライドの高いルイズへ「やめた方がいい」というのは全くの逆効果であり、ましてやそれが自分の使い魔——年下の平民の女の子に言われたのでは尚更である。

ルイズは迷ったような表情から一転、アビゲイルをキツと睨むと「馬鹿にしなないで」と言い、

「やります」

とシユヴールズへ宣言してずんずんと力強い歩みで教壇へと向かって行つた。



アビゲイルにはルイズを馬鹿にする意図は全くなかったのだが、こうなってしまった以上もう止める手立てはないだろう。

気が付けばキュルケも、周りの生徒も姿勢を低くし、まるで爆弾処理を見守る人々のように机の陰から顔だけを覗かせる姿勢になってしまっていた。

「アビーちゃんも隠れていた方が良いわよ」とキュルケが引つ張り、それに従ってアビゲイルも机に隠れる。

(なによアビーまで。　良いわ、絶対成功させて皆をあつと驚かせてやる！)

一方のルイズはこれまで以上にやる気を出していた。

これまででずっと『ゼロ』だと罵られる事は今までのように耐えることができるが、自分の使い魔にそんなカッコ悪い姿を見せることが何よりも屈辱で悔しかった。

今朝の弱った「私はアンタの味方よ」と言った時にアビゲイルの浮かべた心の底から安堵したような表情。

それから、泣きながら震えるアビゲイルを抱きしめた時、「守ってあげたい」と強く思った。

しかしそれを叶えられるのは力を持ったものだけであり、自分は『ゼロ』であり、彼女を守る事なんてできやしない。

そう、今までのままなら。

(……そうよ、私は使い魔を召喚できたんだから。　もう『ゼロ』なんかじゃない……!!)

教壇の前に立つと意を決したように顔を上げ、杖を振り上げる。

するとルイズの意思に答え、石ころはカタリと震えるとその姿を変え、鉄の塊になる。

——などという事はなく、次の瞬間、石ころは教壇ごと爆ぜ、その衝撃と煙が教室中に押し寄せる。

「きゃあああ!!」

飛び散った破片は派手に周囲へと飛散し、窓ガラスや天井に取り付

けられたランプは次々にガシャン！と音を立てて割れた。

急に起こった爆発にアビゲイルは思わず頭を抱えて悲鳴を上げる。キュルケに引つ張られて机の下に隠れていなかったら、最悪大けがを負っている可能性もあった。

タバサが他の生徒たちの持つ杖よりも遙かに長い杖を軽く振るうと、砕けた窓から煙が排出されて教壇の方の煙が晴れていく。

爆発源に居たシュヴルーズとルイズは奇跡的に大けがを負った形跡はないが、二人ともくもくと煙に巻かれた所為か黒い煤が至る所にこびり付いていた。

が、シュヴルーズは吹き飛ばされ気絶。これではとてもではないが授業を続行することは不可能だろう。

「いい加減にしてよ、『ゼロ』のルイズ!!」

「なんで貴族なんかやってんだ！ この才能『ゼロ』のルイズ!!」

ルイズは現実を目の当たりにし、悔しそうに表情を歪め、爪が食い込むほどの握りこぶしを作った。

もはやこの誹謗中傷に反論する余裕がルイズの中には残っていないかった。

そしてアビゲイルは『ゼロ』の意味を知った。

## 5：失意と決意

あの爆発騒動によって授業は中断。ルイズとアビゲイルは煤や破片まみれになった無残な教室の床に箒をかけていた。

さっさつ、と箒の音だけが聞こえる教室にはほかの音は何もなく、二人の会話も全くなかった。

ルイズは完全に自信を無くし、何かをする気力さえほとんどなくなってしまうていた。

自分は確かにアビゲイルを召喚した。魔法を使うことに成功したのだ。だからこそ自分はもう今までとは違う、もう魔法を失敗することなんてない。そう思っていた。

しかし現実はあまりにも非情。たった一度成功したからと言って、何かが変わるわけでもなかった。

否——そもそも、あの召喚だって成功してないのではないだろうか？

アビゲイルは記憶喪失になって召喚されてきた。それは召喚される前にボロボロになったショックで記憶を失ったものだと思っていた。

しかし、自分の召喚魔法が失敗しているせいで記憶を失ったのだとしたら？

そもそも順番が違っていて、自分の失敗の爆発でボロボロになってしまっていたら？

コントラクト・サーヴァントだってまだ行っていない。もしかしたら、召喚自体はできたもののコントラクト・サーヴァントができないという可能性だってある。

ルイズは暗い思考から抜け出すことができず箒を固く握りしめ、涙が零れ落ちそうになるのを歯を食いしばって堪えながら箒を動かす続けた。

一方、アビゲイルは今にも壊れてしまいそうなルイズを見て、なんて声をかければいいのかわからなかった。

「今回は失敗しちゃっただけよ」——違う。偶然の失敗じゃないことはあの表情を見ればわかる。

「頑張れば、いつかきつとできるようになるわ」——違う。彼女はずっとそう信じてきて杖を振っていたはずだ。

頑張れ、元気を出して、諦めちや駄目。

アビゲイルの頭の中に励ましの言葉が思い浮かんで消えていく。そう、結局のところルイズを励ますための言葉は思い浮かべはするのだが、記憶の無い自分にルイズの痛みを共有することはできないのだ。その痛みが分からないのであれば、どんな言葉も綺麗事。ルイズには届かない。

なんて声をかければルイズは元気になるだろう。笑ってくれるだろう。そう考えながら何もできない自分の不甲斐なさに顔を歪めた。

暫くして片付けが終わりに近づく頃、ルイズは相変わらず顔を俯かせたままだが、静かに口を開いた。

「……『ゼロ』のルイズ。これで私の系統が何なのかかったでしょ」  
「あ……それは……」

先ほどの生徒からの罵声の中に混ざっていた『ゼロ』という言葉、それを理解してしまっていたからか、アビゲイルの言葉じりは気まずそうに萎んでいった。

「才能『ゼロ』、成功確率『ゼロ』。……ずっとそう言われてきた。すごく悔しかった」

爆発するたびに嗤われ、他の生徒が魔法を成功させるたびに「どうして自分にはできないのだろう」と悩んだ。自分はヴァリエール家の三女。才能云々であれば、あれほどまでに優秀な姉たちの妹である自分が何故、と苦しんだ。

「それでも私、必死に勉強して、魔法の練習だって何回もしたわ。……

それなのにコモン・マジックの一つも使えやしない。一生使えないんじゃないかって、すごく怖かった。……でもね、もしかしたら、切っ掛けがあれば使えるようになるんじゃないかって思ってたのだから、あんたを召喚した今ならきつと……なんて思ったけど」

ぽつりぽつりと溢れる言葉には期待を裏切られた、という悲壮感ありありと見て取れる。

きっかけがあれば変われるかもしれない——そう信じることで、何度馬鹿にされても曲げずに努力し、立ち続けることができた。どれだけ苦しくても、たった一つの希望があれば耐えることができたから。

——しかしルイズは何も変わらなかった。

たった一つの希望にさえ裏切られ、力なくルイズは続ける。

『使い魔は主を映し出す鏡である』って言葉があるのよ」

キュルケは火のメイジ。そしてその使い魔は美しい火蜥蜴<sup>サラマンダー</sup>。

タバサは風のメイジ。そしてその使い魔は教師をも驚かす立派な

風 竜

二人がどれ程のメイジなのかルイズには分からなかったが、少なくともあのような上等な使い魔を召喚出来たということはメイジとしての格が高いという事に他ならなかった。

そして自分が召喚したのは平民。なんの力も持たない、魔法とはかけ離れた幼い少女。使い魔が主人をあらわすなら、つまり。

「私は人を——あんたみたいな平民を召喚した。……きつとそれが真実だったんだわ」

「——っ」

絞り出すような声量で呟いたが、静かな教室に響き渡り、アビゲイルの息をのむ音だけが聞こえた。

言葉にしてみたら、ルイズはハツとする。これではまるでアビゲイルを責めているような言い方ではないか。

そんな理不尽な事を言われて、アビゲイルは呆れているだろうか。それとも「なんて勝手な」と怒っているだろうか。

ルイズは気まずそうにゆっくりと顔を上げる。そこには酷く悲し

そんな表情を浮かべたアビゲイルがいた。

しかしそれでも励ましの言葉をさがしていたのだろう。アビゲイルは何度か口を開き何かを言おうとするが、直ぐに閉口してしまうという事を繰り返す。

「……ごめん、あんたを責めるつもりじゃなかったの」

ルイズは力なく謝罪を述べ、再び口を閉ざして顔を逸らす。

口を開けば、再びアビゲイルを傷つけることになる。そう思って、これ以上の会話をすることを止めた。

それから二人は再び会話をすることなく、掃除が終わるとルイズは「ちよつと部屋で休むわ」と言って一人で教室から立ち去って行った。

|||||

ぽつんと一人残されたアビゲイルはルイズの事を考えていた。

ルイズに言われたことはショックだったし、記憶喪失になってしまった自分などではなく、もつと別の誰かがルイズの使い魔であれば、あの時彼女を励ますための言葉の一つや二つ簡単に見つけられたのかもしれない。

教室の椅子へと腰を下ろし、どうすればよかったのかしら、と呟く。

「……それにしても皆ひどいわ。 あんなに笑わなかつたっていいのに……」

口をへの字にしてルイズを馬鹿にしていた生徒や、それに一緒になつて笑っていた生徒達の顔を思い出す。その中でも金髪でぽつちやりとした、前髪がふんわりと巻いた部分が少し特徴的な少年が最も特徴に残っていた。

ゲラゲラといつまでも笑っていたその姿は言われた本人でないアビゲイルでさえかなり不快だった。

「くっくっ！もう！もう！あの人のばか！ 私のばか！」

今更になつて、自分への不甲斐なさとの少年へ文句を言つてやりたい気持ちがちや混ぜになつた怒りがふつふつと湧き上がり、アビゲイルはバシバシと怒りのままに自分の太腿をグーで叩いた。

「あら、随分とお怒りね?」

「きゃあああ?!」

教室の壊れた扉から突然顔をのぞかせるキュルケに思わず悲鳴を上げる。くすくすと笑うキュルケを見て、先ほどの行動を見られてた可能性があると思ひ、アビゲイルは少し恥ずかしくなつて顔が熱くなるのを感じながら目を泳がせた。

「……見てた?」

「可愛かったわよ」

につこりと笑顔で答える。

アビゲイルは赤くなる顔を抑えながら、うー、と唸り、

「え、えっと。それで、どうしたのキュルケさん」

「……あー、ほら、もうお昼じゃない? だからまた一緒にどうかと思つてね」

今度はキュルケの目が少しだけ泳いだ。

アビゲイルは首を傾げるが、直ぐにあつと思ひ当たり、顔を綻ばせる。

「優しいのね、キュルケさんは。でも残念だわ……ルイズは先に部屋に戻って行つてしまったの」

「な、なんであの子が出てくるのよ」

「隠さなくてもいいのに。ルイズの事、心配してきてくれたのでしよう?」

キュルケはぽりぽりと頬を搔く。それから、はあ、と小さくため息を吐き、降参と言わんばかりに両手をひらひらとさせる。

「……まあ違うはないんだけどね。あの子、魔法の失敗自体はこれまでに何度もあつたし、周りから揶揄われるのもいつものことだったけど、あの落ち込み方は初めて見たわ」

「そうなの……?」

「ええ。あの子、プライドだけは一流でね。どれだけ周りから何言われても全然折れないのよ。きっと沢山悩んでるんでしようけど、真つ直ぐ前だけ見えて、人前で弱音を吐いた所なんて見たことない」

そういう所が応援したくなるのよ、と言いながらキュルケは小さく

笑う。

使い魔召喚の儀の時もそうだったが、ルイズは何度失敗したって諦めなかつた。何度も呪文を唱え、その度に爆発して髪がぐしゃぐしゃになり、土煙に巻かれて咳き込んでも、その目だけは決して死ぬ事は無かつた。

だから呪文を唱えた後の煙が晴れるに連れて、その煙の中になにかが見えた時、キュルケはつい大声を上げ、ルイズと同じくらい——もちろん表にはだしてやらないが——喜んでしまった。

「よく見ていらつしやるのね。さすがお友達だわ」

「……アビーちゃんからかつてるでしょ」

「ふふふ、そんなことないわ？ 良いお友達だと思う」

「それ、ルイズが聞いたら発狂するからね」

ヴァリエールとツエルプストーの因縁は深い。

ルイズの実家ヴァリエール家とは領地が国境を挟んだ隣同士であり、先祖が何度も戦いを繰り返してきた上に、「ツエルプストー家がヴァリエール家の恋人を奪った」という事例がいくつもある——いわゆる仇敵同士の間柄なのである。

「それでも二人はお友達だわ。喧嘩するほど仲がいいって、きつとこういう事だと思う」

くすくすとアビゲイルは笑った後、すぐに真面目な顔になると、

「ねえ、キュルケさん……ルイズは立ち直れるかしら？」

「分からないわ。あの子は今までずっと一人で戦ってきた……けど今はもう違うでしょう？ もし立ち直れそうにない時は貴方が支えて上げてちょうだい」

不安そうに問うアビゲイルの頭をぽんぽんと撫でてキュルケは笑う。

アビゲイルもつられて小さく笑うと、力強く頷いた。

「……！ ええ、任せて！」

何ができるかわからない、だけど、ルイズがそうしてくれたように泣いていたら抱きしめてあげよう。

胸を張って、アビゲイルがそう決意した直後、



きゆう

と、アビゲイルのお腹が空腹を訴え始めた。

あわててお腹を押さえるが、なつてしまった事実はもう取り消せない。  
い。

キュルケにもしつかりと聞こえていたようで、くすくすと笑うと、「ぎ、とりあえず食べに行っちゃいませよ。ルイズの分は食堂へ行ったついでに部屋に運んでもらうようお願いすればいいでしょ」と気を使ってくれる。

アビゲイルは「え、ええ…」と顔が再び赤くなりながらも頷いたのだった。

## 6：メイドと食堂の喧騒――1

キュルケとアビゲイルは昼食をとるために今朝と同じくアルヴィースの食堂を訪れる。

今朝とは違い教室での一件があつた為、既に生徒たちの多くは席に着いて食事をしながら歓談をしている時間であつた。

並んでいるのは今朝とは違った料理ではあるがさすがは貴族の料理といったところか。食欲をそそる良い匂いが鼻腔をくすぐり、再びアビゲイルのお腹がきゆうと鳴ってしまう。

しかし教室でお腹を鳴らしてしまった時とは違い食堂は騒がしく、今の流行りだとか、誰が気になっているだとか、そういった世間話や恋愛話にかき消されていった。

すぐにも料理にありつきたいが、遅れてきてしまった為その前に食事の配膳とルイズへの食事を部屋に運んでもらえるよう誰かに頼まなくてはならない。キュルケには座席を確保してもらうために一度別れ、自分は配膳を頼めそうな人がいないか探しに行くことにした。

食堂を見渡せば、黒髪のメイドがケーキを運んでいるのが見えたため、声をかけることにした。

「あの、ちよつといいかしら」

「? はい、どうかなさいましたか?」

「ちよつと遅れちゃつただけど、二人分のお料理をお願いできるかしら。……それと、ルイズのお部屋に昼食を一人分運んでもらいたくつて」

「はい、構いませんよ。……あの、もしかしてミス・ヴァリエールの召喚した使い魔の方でしょうか?」

黒髪のメイドは『ルイズ』という単語と見慣れない格好をしたアビゲイルを見て思いついたように質問をする。

「ええ、そうだけど……」

「やっぱり! 私たちメイドの間でも噂になつてたんですよ。ミス・ヴァリエールが平民の女の子を召喚したつて」

「そう……なの」

教室での噂話の所為で噂、と聞くとあまり良い印象がないアビゲイルは少しだけ微妙な表情を浮かべて相槌をうつ。もしかしたら平民を召喚したのかと馬鹿にされていると思ったからだ。

しかし黒髪のメイドは馬鹿にしたような様子もなく、むしろ嬉しそうに笑いながらアビゲイルの手を握って言った。

「悩んでる事とかがありましたら何でも言ってくださいね！ 折角の平民同士なんですから、遠慮しないでいいですよ！」

とたんに声が大きくなるこのメイドは、ただ単に平民仲間ができて嬉しいだけらしい。

それが自分より年下の可愛らしい少女ともくればテンションが上がってしまうのも仕方のない事だった。

きやつきやと舞い上がりながら、手をぶんぶんと上下に振るメイドを他所にアビゲイルは「ありがとう」と苦笑いを浮かべる。しかし折角だから仲良くなりたいと自分も思い、自己紹介をする事にした。

メイドの名前はシエスタというらしく、ラ・ロシエールという場所の向こうにあるシエスタの故郷、タルブ村からはるばる学院に勤めに来たのだという。少しばかりの垂れ目に顔にはうつすらとそばかすがあり、この場所では珍しい黒髪も相まって優しげな印象を受ける。

貴族たちの洗濯物やベッドメイキング等、身の回りの世話は全ての学院のメイドが行っているらしく、今は配膳を終え、デザートのカキを配りに回っているらしい。

アビゲイルはシエスタとの自己紹介を終えると、ワゴンの上に乗せられたカキに視線を移す。そこには瑞々しく大きな苺が贅沢に乗せられたショートケーキがいくつも乗せられており、つつい目を輝かせて見入ってしまった。

「そ、そのケーキは私もあとで頂けるのかしら……？」

まだ食前だというのに、食後のデザートにすっかり心を奪われてしまう。

背丈こそあまり変わらないのだが、子供らしいアビゲイルの様子にシエスタは、

「ええ、もちろん。食事の後にまた声をかけていただければ持ってきますよ」

と、くすくす微笑ましいものを見るように笑った。

「ケーキ、好きなんですか？」

「ええ！ 甘いシヨートケーキも好きだけど、塩気のあるパンケーキも大好きよ！」

「へえ……例えばどんなパンケーキが好きなんですか？」

シエスタが興味深そうに問うと、アビゲイルは待つてましたと言わんばかりに表情を輝かせる。エピソードは忘れてしまったが、それが自分の知る中で一番美味しいと覚えていた。記憶のヒントになるかもしれない、という考えなどカケラもないアビゲイルは嬉々として前のめりに語り出す。

「よくぞ聞いてくださいました！パンケーキと言ったら勿論！ふわふわのパンケーキにとろっとろのバター！カリツカリに焼いたベーコンを載せていただくの！ああ、想像しただけでよだれが出てしまいそう……」

厚めのパンケーキにじわりと溶けたバターが滑り、カリカリでジューシーなベーコンが存在感を出す。卵なんかを載せても間違いなく美味しいだろう。

うつとりと頬を抑えて語るアビゲイルを見て、シエスタはたしかにそれは美味しそうだと思った。

「うふふ、それなら今度コック長へ作ってもらえるよう頼んで見ましょうか。話を聞いていたら、私も少し食べて見たくなってしまったので」

「えっ……本当?! ありがとうシエスタさん！」

嬉しさのあまりここが食堂である事も忘れてぴよんぴよんと飛び跳ねてしまうが、くすくす笑いながらも優しくシエスタに宥められ、周りの人に慌てて「ごめんなさい」と謝罪をする。

「それじゃあシエスタさん。キュルケさんが待つてるから戻るわ」

「はい。直ぐにお料理もお持ちしますね。ミス・ヴァリエールのお部屋にも運んでおきます」

それでは失礼します、魔法学院のメイドらしく上品に礼をすると顔を上げ、再び笑顔を交わした後、アビゲイルはキュルケの元へと戻る。それから間も無くして料理が並び、既に空腹感が限界に近かったキュルケとアビゲイルは絶品の料理に舌鼓を打ちながら食事を進める。

食事をしながら二人はさまざまな会話をした。火の魔法の素晴らしさや曜日の数え方、学園の施設について、そして先ほど仲良くなつたメイドのシエスタについてやその時に話に出した絶品のパンケーキなど、他愛もない会話から為になる事まで、いろんな会話を交わしながら楽しい食事の時間を過ごした。

しばらくして食べ終わり、次はルイズとも一緒に食べたいな、そう思いながらご馳走さまと行儀よく両手を合わせた。

「さてと、それじゃあキュルケさん、デザートのケーキをいただいでくるわ」

「はぁーい、お願いね」

「ええー！」

そう言つてアビゲイルは再び席を立ち、シエスタを探し始める。

ちようど良い満腹感で動くのが億劫であったが、あの大きくて真っ赤な苺のつたショートケーキのためならば仕方がない。デザートは別腹とよくいうが、確かに想像するだけで胃が動き、ショートケーキの為のスペースを生み出していくのがわかる。

るるんと上機嫌で歩いていると、あら、という声が聞こえてアビゲイルは振り返る。

するとそこにはいかにもお嬢様と言つたような少女が立っていた。

きちんと手入れがされている髪はさらさらと触り心地が良さそうであり、大きな深紅のリボンとくるくると見事な縦ロールが『お嬢様』と言つた感じを際立たせる。

「元氣になったみたいね」

「え、えつと……あー！」

誰だろうと頭を巡らせていると、料理とは違つた独特の良い香りが鼻をくすぐり、ハツとアビゲイルは今朝のルイズの話进行い出す。

自分が召喚された時にボロボロだったため、貴重な水薬を誰かから手に入れて治療する必要があったと言っていた。そして水薬を譲ってくれると申し出てくれたのが『香水』のモンモランシーだったのだ。「モンモランシーさん……よね！ 私、私の怪我とか治してくれたってルイズから聞いたわ。本当にありがとう！」

「別にそれは良いわよ。全く、どんな火遊びをしたらあんなになるんだか」

溜息を吐きながら質問をされるが、それを答えるための記憶は生憎持ち合わせていない。

答えられない物は仕方ないので、正直に「ごめんなさい、覚えてないの」と言うと「なら仕方ないわね」とそこまでの追及はしてこなかった。

恐らく嫌な事をあまり深く思い出させまいというモンモランシーなりの気遣いなのだろう。傍から見ればツンとしたお嬢様だが、貴重な水薬を譲ってくれるほどに心根の優しい少女なのだ。アビゲイルは思った。

モンモランシーはアビゲイルに声を掛けたものの、しきりに辺りをきよろきよろと見ている。

もしかして自分と同じくケーキを貰うために適当なメイドを探しているのかと思い、聞いてみることにした。

「モンモランシーさんもメイドさんを探してるのかしら？」

「え？ ……ああ、違う違う。もう私ケーキは食べたし」

「そうなの？じゃあ何を探してるの？」

「……ギーシュっていうんだけど、そいつを探してるのよ。金髪でちよつと気障なやつ」

聞いたことのない人物の名前が出たため、アビゲイルは小さな声で名前を反芻する。それからどんな人物か聞いてみると、薔薇の杖を持つている事、胸元がぱっかりとはだけていることなどが挙げられた。どうやら一緒に昼食をとる約束をして居たらしいのだが、何の連絡もなしにすっぱかされてしまったらしい。

不機嫌そうな顔をして周囲を睨みまわすモンモランシーにアビゲ

イルはちよつとだけ怖いという印象を持ちながらそれを表に出さないよう苦笑いを浮かべた。

「じゃ、じゃあ私とそのギーシユさんを見つけたら教えてあげるわ！」  
「ええ、ありが——」

ピシリ、とモンモランシーの表情が固まる。目線の先は食堂のテーブルとはまた別に食事をとる事の出来るテラス席であった。

「——どうやらその必要はなくなったみたい」

モンモランシーはにっこりと笑みを浮かべたと思いきや、明らかにぶち切れているのがわかる程両手の拳を握りしめ、顔を葉缶の様に沸騰させていく。それからズシンズシンと歩いているとは到底思えない素早さでテラス席へと歩いて行ってしまった。

触れたら大やけどしてしまいそうなモンモランシーの姿にアビゲイルは「ひっ」という情けない声を出してその背中を見つめていたが、少しだけ遅れてその後ろをついていく事にした。

## 7：メイドと食堂の喧騒―2

「この浮気者!!もう知らないんだから!!」

バチン!! と怒り狂うモンモランシーの平手が繰り出されれば、それを受けた金髪の少年――ギーシュは派手に吹き飛ばされる。

そして芝生へ倒れたギーシュには目もくれず、「さようなら!」と吐き捨てるど何処かへ去って行ってしまった。

その場にいたシエスタと後から追いついてきたアビゲイル、それに周りの野次馬達はヒステリックな叫び声に誰しもが戦慄してるといふこの状況。

何が有ったのかとアビゲイルがシエスタに尋ねてみれば、どうやらギーシュの服のポケットから落ちた小瓶を拾って渡したところ、その小瓶はモンモランシーからの贈り物の香水だったようで、ギーシュと共にいた1年生の少女がモンモランシーとギーシュが付き合っていると勘違いしたという。

それでギーシュの事を慕っていた1年生が泣きだしてしまい、騒ぎを聞きつけてつい先ほどここに来たモンモランシーは自分との約束を破って1年生と遊んでいた事に怒って……といった事らしかった。

「……それ、要するに二股って事?」

「ま、まあ、そういう事ですね……」

アビゲイルは溜息を吐く。

派手に吹き飛ばされるギーシュを見た時は余りにも痛そうだったからすこし同情してしまっていたが、話を聞いてみれば完全に自業自得。悪い事をするど神様はきちんと見ていて、天罰が下るんだなと心に留めた。

周りの生徒達は最初こそモンモランシーの剣幕に怯えて言葉を発しなかったが、モンモランシーが去ってから暫くすればギーシュを囁し立てる生徒がチラホラ見え始めた。



当の色男の頬には真つ赤な紅葉模様が張り付き、かなり痛むのか頬を抑えて悶絶しているため、野次馬に言い返す元氣も無さそうであった。

アビゲイルとしては、モンモランシーは怒って何処かへ歩いて行ってしまったし、自分は周りの生徒のように自業自得でフラれたこの男を笑う趣味はなかったため、さっさとこの場を去ってケーキを食べることにした。

「シエスタさん、もう行きましょう」

と声をかけ、この場を去ろうと背を向けて歩き出そうとした直後、

「待ちたまえ」

と、背後から声が聞こえたと思えばギーシュはゆっくりと起き上がる。

相変わらず真つ赤に熱を放つ頬を抑えながら、キツとシエスタを睨み付けると、激しくシエスタを非難し始めた。

「どうしてくれるんだ！君の軽率な行動で二人のレディの心に傷を負わせてしまったではないか!!」

「もっ、申し訳ございません！」

「君がもつと氣を利かせてくれればこんな事にはならなかった！そうだろう!?!」

シエスタは怒鳴られ、「はい……」と反論する事もせず、びくりと肩を震わせて小さくなりながら謝罪を繰り返す。ギーシュ自身、これは完全な八つ当たりだと理解はしていたのだが、まだまだ彼も子供。頬の痛みと周りの野次、それらがやり場のない怒りとなって堪えられなくなってしまうたのである。

その様子を見てゲラゲラと周りの生徒は笑いを浮かべて事の経緯を見守っていた。貴族に叱られる平民、という構図は普遍的であり娯楽にもなったからだ。調子のいい子供は意外と残酷なのである。

平民を見下すものは皆にやにやと笑い、そうでないものもあまり関わりたくないように遠巻きに見ている。

しかし、この場にたった一人意義を申し立てる人間がいた。

「そんなの……そんなの理不尽すぎるわ！シエスタさんだって、厚意で落し物を拾っただけなのに」

突然割りこむ声にぴしり、とシエスタとギーシュの表情が固まる。そんな人間が現れるとは微塵も思っていなかったからだ。

誰だ誰だと声のでどころを探していると、シエスタを庇うようにしてアビゲイルが前に飛び出る。イレギュラーの乱入に対して生徒達は物珍しそうに目を丸くしたあと直ぐににやにやと笑って、

「そうだぞー！」

「その女の子の言う通りだ」

「いい平手打ちを貰ったじゃないかギーシュ！」

とますます囃し立てた。

「な、なんだね君は。 貴族に向かって口答えしようと言うのかね？」  
突然の出来事に一瞬怯むが、相手が平民だとわかるとすぐに余裕のある表情を浮かべた。そして余裕そうな表情の中に苛立ちを隠せない様子だ。

ギーシュとは対照的にシエスタはアビゲイルを視界に捕らえると元々恐怖で青ざめていた表情を更に青くし、ぶるぶると震えながらアビゲイルの袖を掴んだ。

しかしアビゲイルは毅然とした態度で続ける。

「だ、だめ、アビーさん」

「全部自業自得だわ！ モンモランシーさんだってずっとあなたのことを探していたのに。人の所為にしないでちゃんとあの二人に謝って！」

アビゲイルを止めようとシエスタが慌てて言うが、アビゲイルは止まらずに主張する。

貴族が平民に謝罪を求めるといふシーンは普遍的であるがその逆、平民が貴族に謝罪を求めるなんて見たことも聞いたこともない。

生徒達はますます笑い声をあげ、ひどいものには笑い転げているものまで現れた。

「お、おいギーシュ。 ふふ、はははは！ぐうの音も出ないなこれは！」

「人の所為にするなよ二股男ー!」

完全にアウエーになったギーシユはあまりの屈辱に余裕そうな表情が崩れ、真っ赤な顔でアビゲイルを睨み付ける。

「……この僕を……貴族であるこの僕をコケにしてただで済むと思っ  
ているのか?」

「悪いのはそっちよ。そこに平民も貴族も関係ないわ」

「いいや、関係あるね。平民とは貴族に傅くものだ!平民ごときが、貴族に向って口答えをして良いはずがない!……ああ、もつとも君は知らなくても仕方のないことかもしれないね。『ゼロ』のルイズの使い魔くん」

ギーシユは怒りに任せて叫んでから、はっとして気づく。

真っ黒な服に帽子、そして沢山のリボンをした金髪の女の子——この少女はあの『ゼロ』のルイズが召喚したという使い魔ではないか。

心底馬鹿にした様子を浮かべて主人のあだ名を呼んでみれば、アビゲイルの表情が険しくなった。

「落ちこぼれの『ゼロ』だと思えば、使い魔教育の才能も『ゼロ』だったということか。さつきもそうだが、あの落ちこぼれは人に迷惑しかかけないな。全く、身の程をわきまえてさつきと退学でもしてしまえば良いものを」

「なっ……」

「だってそうだろう?今だってこうして君という使い魔の教育が出来ていないせいで僕は不快な思いをさせられているんだ」

興奮して頭に血が上っているせいかよく口が回り、言ったこともないような誹謗中傷が出てきてしまうが、ヒートアップしていたギーシユは止まることをしらない。次から次へと口から吐き出されるこの場にいらないルイズへの罵声はエスカレートしていった。

あまりの言いっぷりに、「流石に言い過ぎじゃないか……?」という声がちらほら上がるが、ギーシユの頭は完全に冷静さを欠いており、その声は耳に届かない。

「魔法も使えない癖にプライドばかり高い。全く、格好悪くて見てられない。貴族失格だよ」

いつのまにか誰かを貶め、自分のなかの苛立ちを解消することだけが目的にすり替わった罵声。

周りは完全に引いていたが、ギーシユは言っただけで、口で言い負かしてやったと勝ち誇った気分には浸っていた。現にこの使い魔が俯き、肩を震わせているのが何よりの証拠ではないか。

最も、この口論に勝ちも負けも無いのだが、熱くなっていたギーシユにはそれを理解するほどの余裕がなかった。

しかし、

パン！という乾いた音が響く。

誰しもが一瞬何が起きたのか理解できずにいたが、やがて平民の少女が貴族であるギーシユの頬を叩いた事を認識した。

「――違う」

アビゲイルは否定する。

小さな口から絞り出された言葉は決して大きいものではなかった。それにもかかわらず、強く怒気を孕んだ言葉だと理解できた。

いつのまにか顔を上げ、キツと鋭くギーシユを睨みつける目は、隣で見て見たシエスタも生唾をぐくりと飲み込んでしまう程の気迫があり、ギーシユは頬を押さえてたじろいた。

「ルイズは誰よりも立派で、誰よりも貴族らしい人だわ」

アビゲイルは言う。

プライドばかりが高い。

それは確かに、他人の目から見たらそうなのだろう。

しかしそれはキュルケが尊敬するとまで言っていたルイズの決して折れない、強い心の現れだ。

どれだけ努力を積み重ねても結果が出ず、色々な人に蔑まれても腐らずに高いプライドを持ち続けて努力をする。

時には他人を妬み、どうしようもなく落ち込む時は何度もあつただろう。

それでも前を向こうとするルイズを貴族貴い人と呼ばずして何と呼ぶのか、と。

ルイズに召喚されてからそれほど時間は経っていない。その為、彼

女という人間がどういう人間なのか、それを知る機会はそう多くなかった。

しかしそれでも彼女の優しさを知る事ができたし、彼女の血の滲むような努力はキュルケが見てきた。

それを『貴族失格』などと言い、否定するのだけはどうしても許せないのだ。

「あなたみたいに人を傷つけて、それを人のせいにしようとする人の方がよっぽど貴族失格よ。魔法が使えなくなつてルイズみたいに必死に努力して、真っ直ぐ自分に向き合つていける人の方がずっと格好いいわ！」

「——ッ！」

ギーシュは一瞬体の熱が急速に冷めていくような感覚に襲われた。ぐざり、とアビゲイルの言葉が胸に刺さつたからだ。

実らない努力。ドットの自分。アビゲイルの言うそれは決して自分の知らないことでは無かつた。

目を逸らしそうになるが、必死に堪えて睨み返す。そう言われて目を逸らしてしまえば、諦めた自分を自分の非を認めたことになるからだ。

それに平民に手を出された以上、これ以上黙っているわけにもいかない。

「……今の行動、到底許される事ではないが大目に見よう。しかし僕の事を『貴族失格』だと言つたことは看過できない」

「……」

「何もできない『ゼロ』のルイズの方が格好いいだと？馬鹿げている！そんなわけある筈がない！」

ギーシュは怒り、というよりも悲鳴のような叫び声をあげて否定する。

生徒たちはワイワイとはやし立てるばかりでその様子の変化に気づくことはなかつたが、アビゲイルとその近くにいたシエスタだけは様子の変化をわずかに感じ取っていた。

ギーシュはポケットから薔薇の杖を抜き出してびつとアビゲイルへ突きつけて激しく宣言する。

「君に決闘を申し込む！ 多少痛い目をみて貰えば不躰な使い魔くんも少しはお利口になるだろう！ 君の主張が正しいというのならば僕と戦ってそれを証明して見せろ！ 場所はヴェストリの広場だ！」

もつとも臆病風に吹かれて逃げ出してもいいがな、と言うとギーシユはマントを翻し、眉間に深くしわを寄せながら去って行った。野次馬の生徒達は面白いものが見られると沸き立ち、いい場所で決闘を見られるようにとヴェストリの広場へと駆け出して行った。

『決闘』などといえばそれらしくも聞こえるが、これは魔法を使える『貴族』と何も持たない『平民』が主役を務めるもの。つまり、一方的な懲罰に他ならなかった。

それを理解していたシエスタはぶるぶると震え、涙を流しながらアビゲイルの腕をがしりと掴む。

「あ、あなた殺されちゃう……今からでも謝りましょう！ ミスタ・グラモンも今ならまだ、許してくださいさるかも！」

懇願するシエスタの腕をそつとはずし、ゆっくりと首を横に振る。

「シエスタ、私をヴェストリの広場に案内して」

「アビーさん……！」

シエスタはくしやりと表情を歪め、まるで懇願するようにアビゲイルに縋り付いた。ヴェストリの広場へとアビゲイルを連れていくということ、それはまるで処刑台に連れ出す役人のようだったからだ。

この少女を今広場に連れ出せば、間違いなく大怪我を負う。それどころか本当に殺されてしまうかもしれない。

もちろん、自分のことを庇って貴族を怒らせる事になってしまった事に対しての罪悪感があった。しかしそれ以上にこの幼い少女が痛めつけられ、苦悶の表情を浮かべさせる事になることが堪らなく恐ろしかった。

シエスタという少女の持つ優しい心がじくじくと痛み悲鳴を上げる。

「お願い。 ここで逃げたくないの」

「どうして……」

顔を上げて見てみれば、さらさらと金糸の様な髪が風に揺れ、その

中に見える表情は決意の様な力強さがあつた。怖くないのだろうか  
とシエスタは思い、もう一度アビゲイルの手に触れてみれば、自分の  
手のひらからアビゲイルの震えが確かに伝わって来た。

(怖くないわけない……アビーさんだつてこんなに震えてる。それ  
でも戦おうとしてるんだ)

シエスタにはアビゲイルが何を考えているのか、なぜそこまでして  
戦おうとするのか分からない。しかしそれでも戦おうとする理由が  
きつとそこには有るのだ。それならば、自分ができることはもう、  
一つしか残っていない。

バクバクと心臓の鼓動が激しく、恐怖で体の震えが止まらない。  
シエスタは二度三度と深呼吸をして息を整えた。それからアビゲ  
イルを一度だけ抱きしめ、ゆっくりとした動きで離れてからヴェスト  
リの広場のある方角へと数歩あるき、振り返る。

「こちらです。……絶対に無理しないでくださいね」

自分にできることは最後まで見届けることだけ。恐怖で今にも  
逃げ出しそうな足に力を入れて再び歩き出す。シエスタはパン！  
と自分の頬を両手で叩き覚悟を決めたが、

「う、うん……頑張る」

と、何とも頼りない返事が返って来たので、シエスタは再び不安に  
なり、広場に着くまでに何度か「やっぱりやめませんか」と聞いた。

## 8：一方その頃

時を同じくして、キュルケは食堂で一人待ち惚けていた。

アビゲイルがケーキを取ってくると言ってから十数分、全く戻ってくる気配がない。それどころか、食堂からちらほらと外へ出ていくのが見える。流石に手近なメイドが見当たらなかったにせよ、時間が掛かりすぎと言えるだろう。

キュルケの口は既にケーキを受け入れる気満々になっていたため、中々戻ってこない事によって少し口寂しさの様なものを感じていた。

しかしそれよりも心配なのは当然アビゲイル自身の事だ。

「まさか迷子になったのかしら……いや、流石にそんな変な所まで探しに行ってるわけないわよね……」

身長こそルイズと殆ど変わらないものの、中身はまだまだ幼い子供。食事中に話してみれば、意外と好奇心旺盛だということがわかった。興味本位で色々歩き回った結果迷子になってしまった……なんてことも十分に考えられる。

キュルケは一抹の不安を覚えながら、燃えるように赤い髪をかきあげながら長テールブルへと両肘を着いて「うー」と唸った。

金髪で長い美しい髪、珍しい黒い服と沢山のリボン、そして透き通った碧眼。これだけの特徴さえあればすぐに見つけられるはずだ。

あと5分して戻ってこなかったら、探しに行くとしよう。

キュルケはそう思いながらアビゲイルの帰りを待った。

「戻ってこない!!」

ガタツと思いい切り音をたてて立ち上がり、キュルケは叫んだ。不



幸にも近くに座っていた男子生徒はビクウ！と驚き、持っていた水を盛大にこぼした。

あらごめんさいね、とウインクをしながら少し前かがみに謝れば、その誰もが振り返る様な美貌と前かがみになって強調された胸の谷間に目を奪われた男子生徒は鼻の下をだらしなく伸ばしながらキュルケの事をすぐに許した。

ある意味これはキュルケの持つ得意魔法と呼べるのかもしれない。

「……流石に心配よね。 本当に変なことに巻き込まれたりしていないといいんだけど」

ため息を吐いて椅子を机に仕舞い食堂の外へと歩き出す。すると、窓の外に沢山の人が集まっているのを見つけた。

先ほどからちらほらと外に出ていった生徒たちは真つ直ぐ部屋に戻ったのかと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

がやがやとその場に立ちながら会話をしている者の集団もあれば、ヴェストリの広場のある方角へ向かって歩き出す集団も見えた。

男女比で言うならば、その場を動かさずに微妙な顔をしているのは女子生徒が多く、これから祭りでも起こるのかと思うほどはしゃいでいるのは男子生徒——特にルイズに対してからかいの言葉を日頃から浴びせている生徒たちが多く見える。

キュルケは少し嫌な予感がしたが、まずは状況を把握することが先決であると考えた。ひそひそと3人ほどで集まっていた一年生の女子生徒を見つけたため、平然を装い手をひらひらと振って輪に入っていくことにした。

「ハ—イ、ちよつといいかしら」

「は、はい」

「なんだかやけにあつちの方とか騒がしいけど、何かあったの？」

「それは……」

尋ねてみれば、一人の女子生徒の女子生徒は暗い顔というよりは憐れみのような顔を浮かべた。とても言いにくいことなのだろうか、キュルケは怪訝そうに眉を顰める。

「私たちも遠巻きに見てただけなので詳しい内容はわからないんです

けど……ギーシュ様が女の子と口論になって……」

「ギーシュが？あー、痴話喧嘩ね」

その二枚目の見た目から、一年生の女子にそこそこ人気のある男であるが、口を開いてみればナルシストの女好き、というのが同級生の中での共通認識である。概ね一年生にちよつかいでも掛けて何か問題を起こしたのだろうとキュルケは呆れた。

「それで決闘をする事になったんです。ヴェストリの広場で待つてるって……」

「決闘？貴族同士の決闘は禁止されてるのよ？」

そこまで怒る事だったのだろうかと思しながら、堂々と規則違反をしている事実に再び呆れ返る。しかし、次の言葉で目を大きく見開き、驚愕した。

「い、いえ、相手は平民の子だったので規則違反にはならないと思いますけど……」

「え?!」

「だけどなんだか可哀想……あの子戦えそうにないし、きっと一方的に痛めつけられちゃう……」

「ちよ、ちよちよつとまって」

嫌な予感に更に強くなり、憐れみで少し涙ぐむ一年生の生徒を一度止めると深呼吸をする。まだその平民の子がアビゲイルと決まった訳ではない。まずは分かりやすい特徴を聞くべきだとキュルケは冷静に判断した。

「その平民の女の子はどんな子だった？」

「金髪で真っ黒な珍しい服にリボンが……」

「アビーちゃんじゃない!!」

キュルケは絶叫して頭を抱えた。一年生の子はびくりと肩を震わせる。

金髪、黒、リボン。この三点セットはまず間違い無くアビゲイルだ。

キュルケはアビゲイルが記憶喪失であり、またこの世界の住人でないと言う事を知っていた。ルイズとアビゲイルは秘密にしているよ

うだが、実は今朝二人が話しているの部屋の扉の前でを立ち聞きしていたのだ。

もちろんいい感じのところでもノックして入っていくつもりだったのだが、アビゲイルが泣き出してしまった事で入ることもできず、結局泣き止むまで乱入タイミングを掴めずその場にいる事になった、と言う事である。(もちろん静かに退散すると言う選択肢はあったもののそこはキュルケの持ち前の好奇心が勝った)

だからこそ、とキュルケは思った。

アビゲイルがこれまでに見た事のある魔法は《錬金》とルイズの爆発——これを魔法と呼んでいいかは不明だが——しかないはずだ。

もちろん食堂で火の系統のスペルについて聞かれた時にいくつか聞かせたが、それを実演した訳ではない。

つまり、アビゲイルは実戦で使う魔法について、どれほどの危険があるかを知らないはずなのだ。

彼女の知る、『子供同士の喧嘩』の様には決してならない。

そこに居るのはドットとは言え、土系統の魔法を操るメイジなのでから。

キュルケは「ありがとう」と一年生に言うのと全力で走り出す。女好きのギーシュの事だからそう酷い事にはならない筈だという思いはあるが、決闘を申し込んだとなればそれはどうか分からない。

頭に血が上ったギーシュが加減を間違え、最悪殺してしまう……などという未来もあり得るのだ。

それだけは絶対に阻止しなくてはならない。

走りながら杖を抜きしばらくすると、ヴェストリの広場で人が集まっているのが見えた。幸いにもまだ決闘は始まっていない様子だ。

ここに向かってきた者の殆どがお祭り気分ですり上がっている生徒だった為、広場は大勢の生徒たちが一堂に集う食堂よりも遥かに騒がしく、アビゲイルの名前を呼んでも簡単には見つかりそうになかったが、

「……いたー！」

その目立つ外見からすぐに発見することができた。と言うよりは

人集りの中央はこれから決闘をするぞと言わんばかりにぽっかりと空いており、その対面にはギーシユが何時になく険しい表情で立っていた。対するアビゲイルも真剣な表情ではあるが、やはり緊張しているのか顔を強張らせ、恐怖からか遠目でも少し震えて居るのが分かる。袖の長い服装であるため、下ろした両手がどうなっているのか分からないが、きつと硬く握り拳が作られて居るのだろう。

キュルケは急いで近づいて行くが、既に見やすい位置で見ようとすると生徒たちのせいで上手く近づくことができない。それでも持ち前の身長で何とか顔だけを覗かせる事に成功し、大声でアビゲイルを呼ぶ。

「アビーちゃん！」

「！・キュルケさん……」

突然聞こえてきたキュルケの声に振り返ると、荒い息を立てながら此方を睨むキュルケの姿があった。もともと、キュルケは怒って睨んでいるのではなく、単純に先ほどまで全力で走っていて疲弊していた為にそうなっていたのだが、今までのすつかりキュルケの事が頭の中から抜け落ちていたアビゲイルはハツとした表情を浮かべてから、直ぐに申し訳なさそうな表情に変わる。

「ご、ごめんなさい。 ケーキ……」

「え？ そつちり!? そつちはどうでも良いわよ！ 危険だから戻って来なさいって！」

予想外の謝罪に素っ頓狂な声を上げて思わずズッコケそうになる。キュルケは直ぐに勘違いを訂正すると、コホンと小さく可愛らしい咳ばらいをする。しかしこちら側に戻ってくることは無く、それどころかもう一度だけ「ごめんなさい」と呟くと背を向けて、

「……私、此処で逃げるわけにはいかないの」

と、何やら決意を含んだ声で言った。

一年生の女子生徒から話を聞いただけのキュルケは何がなんだか分からず、アビゲイルが何のために、何故そんな事をしているのか理解できなかった。

詳しい話を聞かせてもらうために人ごみをかき分けようとするが、

「おい、邪魔をするなよ！」と人ごみの輪の外に追い出されてしまった。

「ちよつと……もうー！」

軽く舌打ちをしながら、どきくきに紛れて尻を触った男子生徒の髪を後で素敵燃えな髪型ハゲにしてやろうと心に誓いながらどうするかを考える。すると、少し離れた所にタバサが本を読みながら佇んで居るのを発見した。タバサがこういう事に興味を示すのは珍しい、と軽く驚きながら近づいていく。

「タバサ！ 今どうなってるの?!」

と、声を荒げながら問いかけてみれば、タバサは本から顔を上げて目線を送る。その先を辿ってみれば黒髪のメイドが今にも泣きそうな表情でアビゲイルを見守っていた。

「彼女を庇った」

「……ごめん、もうちよつと詳しくお願いできる?」

タバサの表情は殆ど変わらなかったが、キュルケには一瞬面倒臭そうにしたのが分かった。それでも答えてくれるのは付き合いが長いからというのが大きいだろう。

タバサはゆっくりと事の経緯を話した。

ギーシュの二股がばれたこと、それをメイドの責任だと怒鳴り散らしたこと、アビゲイルがメイドを庇った後にギーシュがルイズを『ゼロ』と何度も馬鹿にし、直後にアビゲイルの様子が変わった事。

それを聞いたキュルケは今日何度目か分からないが再び頭を抱える。

「あああ……そういう所ルイズの子にそっくりね……」

「……」

ルイズの持つ貴族観は良くも悪くも『立派』であった。悪い事は悪い、見逃せない、というのは悪い事ではないのだが、余りにも無鉄砲に突っ込んで行くのは考え物である。

いつだったか、一年生の時に男子生徒と取っ組み合いの喧嘩になり、相手が泣いて謝るまで続いた、という事件があったのをうつすらと覚えている。

タバサもそれを覚えているのか、こくんと頷き同意を示した。

「……それにしてもタバサも珍しいわね。　　こういう事に興味を持つなんて」

普段のタバサであれば、こういうときにはさっさと部屋に戻って本を読んでいるのだが、今回はそうではない様だ。

太陽が照り、食堂以上の喧騒が聞こえるこの状況にも関わらず本を読んでいるのはなかなか器用だと思ったが、部屋へ向かわずこの場に居ると言うだけでも十分に珍しい。

タバサはキュルケの質問に答える前に、本を片手に持ちながら再び文字を追い始めるが、そのもう片手で壁にあった杖を手に取ると、

「心配」

と、一言だけ呟いた。

それを聞いたキュルケは思わずぱあっと表情を明るくしてタバサを抱きしめる。

「タバサ！　　貴方のそういう所最高よ！」

「苦しい」

鬱陶しそうに呟くもキュルケの抱きつく力は弱まらない。　　小さ

く溜息を吐き、それに、とタバサは続ける。

「……それに彼女の力に興味がある」

「うーん……多分、タバサが考えているような事には成らないと思うわよ」

キュルケはタバサの言葉に若干の苦笑いを浮かべる。　　確かにアビゲイルが召喚された時、全身に火傷や切り傷を負っているのが見えただ。　　何かに襲われて、逃げていた所を奇跡的に召喚した、というのが他の生徒たちの見解であったが、二人の場合は少し違うと考えていた。

彼女には全身、つまり彼女の前面側にも切り傷があった。　　なんの力もない少女であれば、前など向かずに背を向けて逃げ出す、怯えて小さく体を縮める——いずれにせよ、脅威から逃げ出すだけではそこまでの傷はつく筈がないのだ。

だからこそ、何か力を隠しているのかもしれない。　　そう考えてい

たのだが――

(あの子、今は記憶喪失なのよねえ……)

先ほどのギーシュを前にして震えている姿。あれは決して力をひた隠しにしている者の態度ではないように思えた。

であれば、今あそこの輪の中心にいる少女はただの少女。メイジでも戦士でもない、幼く純粋な心を持つ紛れもない普通の女の子なのだ。

「……？ そう」

記憶喪失の事について知らないタバサは、自分と同じ予想を立てていた筈のキュルケの様子に小さく首を傾げた。

そうこうしている内に人だかりの輪ができてきている方からワアツ！と歓声が上がる。　どうやらそろそろ決闘が始まるらしい。

「タバサ、アビーちゃんのことお願いね。　なんならギーシュの奴をぶっ飛ばしちやっつていいから」

「任せて」

そう言いながら、キュルケも杖を握りしめてアビゲイルを見守る。願わくば彼女がすぐに降参することを祈りながら。

|||||

ルイズは一人、部屋の中。　マントを椅子に掛け、制服のままベッドの上に身体を投げ出し、枕に頭を埋めて唸っていた。

カーテンは閉めきっており、ランプもつけていない為、カーテンからうつすら漏れる光だけがこの部屋を照らして居る。

何もする気が起きない……もうどうでもいい……そう思っ居たのだが、今では別の事を考える余裕ができる程に回復していた。

つい先ほど部屋に食事が届き、それを食べていたらいつの間にか気分がある程度戻ったのである。

という訳でルイズは現在絶賛自己嫌悪中。

先ほど教室でアビゲイルに対して少し酷いことを言ってしまった

のに、どうやら彼女はわざわざ自分の部屋に料理を届けてくれるよう頼んでくれていた様なのだ。

優しくて可愛い私の使い魔。

それなのに私という奴は……

「う」ううおお……馬鹿馬鹿私の馬鹿……」

ルイズはおよそヴァリエール家の令嬢とは思えない声でうめき声をあげる。

声の大きさもそれなりで、万が一キュルケが部屋にいたならこの呪いの様な呻き声を思い切り聞かれていただろうが、幸いにも不在だったので聞かれてしまうという事故は起こらなかった。

ルイズは頭をゆつくりと持ち上げて溜息を吐き、しかしすぐに力尽きた様に再び頭を枕へ埋める。既に何度繰り返されたか分からない動作であったがその痕跡を残すかの様に髪の毛はぐしゃぐしゃになっっていた。

もぞもぞ動きながら毛を揺らし、呻き声を上げる。そこに居るのはもはやピンクの怪物であった。

「はあ……ヤな愚痴も聞かせちゃったし、かつこ悪い所も見せちゃったし、八つ当たりみたいなのもしちゃったし……もう最悪。

アビーが私の事を励まそうとしたのは分かったのに……最悪のご主人様よ……」

ピンクの怪物は泣きなくなった。あんな所を見せてしまって、アビゲイルがどんな印象を自分に持ったのか想像するだけで恐ろしかった。

せめて嫌われないといいな……そう思いながらとうとうと眠気が襲ってきた為、ぐしゃぐしゃの髪のまま現実逃避するように眠りについた。

それから暫くして、ドンドン！という扉を叩く音に叩き起こされる。そのあまりに激しいノックに「うるさいわね！」と憤慨して飛び起き、文句を言っつてやろうと思いい扉を開けた。



「なんなのよ！」

「ルイ……キヤアア!!ピンクの怪物!!」

「なんなのよ!!?」

余りにも失礼な言い分に憤慨すると、目の前で悲鳴を上げるのは金髪の縦ロールと輝くおでこ——モンモランシーだった。

貴重な水菓を譲って貰うまで接点のほとんど無かった彼女がルイズの部屋を訪れるのは珍しく、ルイズは「何事?」と首を傾げた。

「あなた窓の外見た?! 私もさつき気がついたんだけど、大変な事になってるの!」

「はあ……?」

言われてみれば外が何やら騒がしい。

ルイズは怪訝そうな顔をして窓にかけられたカーテンを開く。すると、

「なっ……何やってんのよあいつは……!」

ルイズは絶句した。それから直ぐに部屋を飛び出た。

モンモランシーはルイズの素早い行動に暫く唾然としていたが、髪はともかく、マントぐらい持って行きなさいよと椅子に掛けられたルイズのマントを取り、その後を追いかけた。

## 9：青銅と少女の戦い

ルイズがいまだ自分のベッドで現実逃避している中、ヴェストリの広場ではいよいよ決闘が始まろうとしていた。

ワアワアと大いに盛り上がっている人ごみの中心にいるのはギーシュ、そしてアビゲイルだ。

見物をしに来た生徒は平民が勝てるわけないだろ、いやいやどんでん返しがあるかも……などと好き放題言いながら賭け事を始めるものや、あの子大丈夫かしら……と心配そうな表情を浮かべるものなど様々な様子だった。

途中でキュルケの乱入がありそうなシーンが見られたが、今では輪の外に位置し、暫くの間は静観を決めてくれるようだ。

もつともキュルケと、その隣にいるタバサは杖を持って万が一の時に介入する気満々なのだが、それは中央に意識の向いている誰しもが気が付かないことだろう。

ギーシュは周囲の盛り上がる声に対して何のリアクションも返さずにじっとアビゲイルを見据えていた。

普段の彼ならば声に応えて手を振ったりと何らかの行動をするのだが、ギーシュの内心は苛立ちと、しかしその熱とは対照的に心が冷え切っていくような奇妙な感覚に襲われていた。

——魔法が使えなくなつてルイズみたいに必死に努力して、真つ直ぐ自分に向き合つていける人の方がずっと格好いいわ！

目の前にいる少女が言い放つた言葉。  
それが頭の中で何度もリフレインし、ギーシュは頭を勢いよく振つた。

（馬鹿馬鹿しい、無駄な事をする人間の何処が格好いいって？ そんなのはただ惨めで、虚しいだけだ）

あの少女の言葉は唯の綺麗事。 唾棄すべき妄言でしかない。

頭の中では分かっている筈なのに、もやもやとした気分がなかなか晴れずにいた。

ギーシュはそれらの雑念を振り払うように目の前の少女へと語り

かけた。

「いいのかね、使い魔くん。彼女の言ったように、危険だからと言って今からでも逃げ出していいんだよ」

「ううん、私は戦う。貴方からも——ルイズからも逃げない」

アビゲイルは真つ直ぐとギーシュを見て答える。

自分はルイズの事を支えるとキュルケに、そして自分自身に誓った。

それならば彼女の努力を、その生き方を、馬鹿にされたまま黙っているわけにはいかない。

彼女のその姿を、他ならぬ、ゼロアビゲイルの使い魔ルがそれを何よりも貴いものだと証明しなくてはならない。

だからこそ、勝たなくては。

アビゲイルは恐怖と緊張で足が震え、両手の指先の温度がどんどん無くなっていくのが分かる。それでもギーシュを睨み続けた。

「っ、……そうか。ならば決闘を始める前にまずルールを決めようでは無いか」

アビゲイルはこくと頷いて同意する。

「……それなら私が貴方の杖を折ったら、私の勝ちにするわ」

「ほう？ 貴族の証たる杖を折るときか。良かろう、ならば僕は君自身の心を折るとしよう！」

ギーシュは薔薇を横した自前の杖をアビゲイルへと突き立てるようにして向ける。ギーシュは呪文を小さく唱えながら杖を振ると、その先端からは造花の薔薇の花弁が一片はらはらと地面に落ちた。

するとどうだろう。花卉の触れた地面の土がぼこぼこことせり上がり、一体の騎士が現れた。

《クリエイト・ゴレム》——ワルクユール。……これが『青銅』の二つ名を持つ僕の魔法だ。さあ、何処からでもかかってくるが良い！ 君の覚悟など、僕のワルクユールの前にはどうにもならない事を教えてやる！」

「——ッ！」

ギーシュの叫びと共に、アビゲイルは走り出す。

ついに始まった決闘に、周りの生徒達はワアツと大いに歓声をあげた。

アビゲイルは何か飛び道具を持っているわけでは無い。

それならば取れる行動はただ一つ。とにかくギーシユへと近づき、彼の持つ薔薇の杖を奪う事だ。しかし、その為には目の前のワルキューレをなんとかするしか無い。

アビゲイルは助走をつけて思い切りワルキューレの胴体を蹴飛ばした。が、

「いいっ?! たあ……!」

ビリビリと足に反動が返り、アビゲイルの目には痛みで涙が溜まる。

痛みでじんじんと両足が脈打ち、よろめいて転びそうになりながらも一度ワルキューレから距離を取った。

ワルキューレは跳び蹴りの勢いに飛ばされないように姿勢をやや丸め、耐える姿勢のまま傷一つ負っていないかった。

「はははっ! まさか蹴りなんかで壊れるとでも思ったのかい?」

「ちよ、ちよつと試ただけよ!」

ギーシユが馬鹿にしたように言うと、周りの生徒達もゲラゲラと笑い出す。

アビゲイルは悔しくなり、むつと頬を膨らませて反論するも、すこしだけそんな淡い期待があったと言う事実も否めない。

(青銅、なんて言うからどれぐらいの硬さかと思ったけど、流石に本物みたいね……土から青銅をつくるなんて、授業の時にやってた《錬金》が基礎になってるんだわ)

アビゲイルは授業を思い出してそう推測し、内心で舌を巻く。魔法という存在を決して侮っていた訳では無いが、これは想像以上に強い。

青銅で作られた騎士を動かすことができるのなら、確かにこれでは『平民』は『貴族』には勝てないと言われるのも分かるものだ。

(でも、絶対に諦めない——!)

アビゲイルは再び前屈みになり走り出す姿勢になると、そこから一

気にワルキューレへと走り出す。

また同じ事を繰り返すつもりかい？とギーシュが言い、外野から嘲笑の聲が上がるが、アビゲイルは突然ワルキューレの目の前で大きく横に飛んだ。

「何?!」

再び跳び蹴りをすると思っていた所に不意を突かれ、ギーシュは叫ぶ。慌ててワルキューレの耐える姿勢を切り替え、アビゲイルに掴みかかろうとしたが、ワルキューレの指先はアビゲイルの服の裾を掴んだ所ですりりと抜けてしまった。

ワルキューレの指先もつるりとした青銅できており、摩擦が少なかつた為にその指先から抜けてしまったのだ。

まさか勝つちやうんじやないか?!と外野がざわつき、アビゲイルはそのまま一気にギーシュへと距離を詰める。

ギーシュまであと少し——という所で、アビゲイルは盛大に転んだ。

「きやうつ?!」

物凄い派手に転びそのままヘッドスライディングでも決めそうになるが、そうはならない。転びはしたが慣性は殺され、その場に縫い付けられる様に静止しているのだ。

アビゲイルは全身を打ち付け悶絶するが、それよりも片足首に強烈な痛みが走った。

違和感を覚えて見てみれば、そこにはがっしりと足にまとわりつく土の手が生え、地面へと縫い付けられていた。

「《アース・ハンド》……僕の魔法は一つじゃない。残念だが、君の疾走は僕には届かないよ」

にやりとギーシュは笑い、もう一度杖を振る。

背後からがしやがしやとワルキューレの発する金属鎧の擦れる音が聞こえだと思えば、アビゲイルはワルキューレに片手で持ち上げられた。

「っ……」

「さて僕も反撃といこうか」

ワルキューレの力は強く、片腕だけで持ち上げているというのに、その強い握力は大の大人でも抵抗をするのは難しいのではないかと思うほどだ。このまま空いている手で何度も殴りつけられたら、鍛えてもいない自分の体など容易く折れ砕けてしまうだろう。

まずい、とアビゲイルはなんとか拘束から逃れようと暴れる。しかし非力な自分が力を入れてみても、ワルキューレはびくりともしなかった。

暫く格闘を続けているとアビゲイルは突然宙へと浮いた。

ワルキューレがブン！とアビゲイルを空中へ放り投げたのだ。

不格好のまま投げ出されたアビゲイルは、受け身も取ることができずに背中から地面へと叩きつけられる。

「か、は——」

全身の酸素が一気に吐き出され、背中に鈍い衝撃が広がる。

それからゴロゴロと勢いのまま芝生の上を転がっていった。

高さとしては2メートルに届かないほどの高さから地面へと叩きつけられるという事。

2メートル、といえば大したことがないと思うかもしれないが、受け身も取れずに背中から落ちた時の衝撃は計り知れない。

「もうおしまいかね？」

「……まさか。まだ始まったばかりよ」

アビゲイルが暫くの間動けずにいると、ギーシュが腕を組みながら声をかける。

すると苦しそうに息をしながら答え、ゆっくりと立ち上がった。

「……ふん。ならば何度でもかかってくるがいい！ 全て無駄だと君自身が理解するまで、いくらでも付き合ってやる！」

ギーシュはマントをはためかせて叫ぶ。

それに答えるように、アビゲイルは大きく息を吸い、再び駆け出した。

どれぐらいの時間が経ち、何度この攻防が続いただろう。

アビゲイルはギーシュに少しずつ迫ることができるところか、《アース・ハンド》を最初に受けて以降ワルキューレを出し抜く事すら困難になっていた。

アビゲイルが左に飛ぶとワルキューレは追従するように素早くサイドステップし、アビゲイルの腕を掴む。

アビゲイルが右に飛び、再びワルキューレが腕を掴もうとした所を upper body を反らして避ける。しかしワルキューレが更に一步素早く踏み込み、アビゲイルの胸ぐらを掴む。

走る、転がる、飛ぶ——あらゆる方法を駆使しても、ワルキューレの守りを突破することができない。

ワルキューレは青銅で作り上げられたゴーレムだ。しかし彼の生み出すゴーレムの最たる特徴はその機動力にあった。

人間とそう変わらない素早さを、金属鎧で覆われた体で行うことができるというのがワルキューレの武器なのだ。

投げ飛ばされ、叩きつけられ、髪の毛や服に芝生を絡めさせながら転がる。

アビゲイルはもはや何度目かも分からぬほどそれを繰り返し、そして今もまた投げ飛ばされ、倒れていた。

「……もう分かっただろう。無駄なことをしても何も変わらない。君とてこれ以上の苦しみを続ける必要もなからう」

ギーシュは仰向けに倒れこんだままのアビゲイルを見下ろす。

服の至る所は破れ、さらさらと綺麗な金糸の様な髪は見る影も無くぐしゃぐしゃに乱れ、その至る所に草と土を纏わりつかせている。

ギーシュとて、この無力な平民の少女に本気で殴りつけようとは思っていない。

もちろん、いくら決闘だとはいえ女性に、それも無力な女の子相手

に一方的な暴力を振るうほどギーシュは非道ではないということもある。

しかし、それとはまた違った理由でその選択を選ばなかった。

この戦いは言わばプライドの勝負。彼女自身の口から「参った」と言わせなくてはならない。彼女の言葉を、彼女自身が間違っていたと否定させる必要があるのだ。

もともと体力がそこまでない少女だったのか、最初こそは乱れた呼吸を整えるために荒い呼吸を何度も繰り返している。今となってはそれすらも苦しいのか浅い呼吸を細かく繰り返しているに過ぎない。

何度も転がるうちに口を切ったのか、口の端からはたらりと血が流れているが見える。

彼女はもう立ち上がれない。

ギーシュはそう確信していた。

だが、その予想は裏切られる。アビゲイルはゆらりと、まるで幽鬼の様に立ち上がるのだ。

何度も、何度も、何度も——それが無駄ではないと言うように立ち向かってくる。

彼女のその目はいまだ死んでおらず、真つ直ぐと此方を見ている。ギーシュはこの少女が恐ろしくなり、じり、と一歩後ずさりをした。何度も地べたを転がり、無様を晒して、どうしてそこまで立ち上がる？

ボロボロになって、力の差は分かっている筈なのに、何故そうやって前を向ける？

そんな思考が頭の中をぐるぐると巡り——

「!! しまった!」

アビゲイルの接近に一瞬反応が遅れてしまう。既に彼女は握りこぶしを作って走り始めていたのだ。既に彼女は握り

ギーシュは慌てて杖を振り、ワルキューレへを動かす。

ワルキューレはがしやがしやと高い金属音を響かせながら、その高い敏捷性でアビゲイルの胴体目がけて手を伸ばし、服を掴んだ。



しかし、ビリ、という布の破ける音と共にアビゲイルは疾走を続ける。

何度も転んで脆くなった服の生地を引っ張ったことで、ついに破けてしまったのだ。

「何っ…!? だ、だが…:~!」

素早く《アース・ハンド》を唱えてしまえば、それは一番最初の光景の焼き直しになるだけだ。

周囲の生徒達も一瞬驚いていたが、ギーシュが素早く次の詠唱を始めたことを察して落胆する。

だが、同じ光景の焼き直しにはならなかった。

「やあっ!!」

バツつとアビゲイルが握りこぶしを開き、ギーシュへと何かを投擲する。

それが土だと理解した直後、アビゲイルの手から放たれた土は瞬間に拡散してギーシュの目を潰した。

「ぐあああ!!」

まずい、まずい、まずい——!!

視界が潰され、魔法の照準が定められない。

まさか、僕は負けるのか？

そう思うと冷静では居られなかった。

縫るような思いで杖を振り、咄嗟に《クリエイト・ゴーレム》を唱える。

「ああああああ！ ワルキューレツ!!」

悲鳴のように叫び、ただ闇雲に目の前にワルキューレを召喚して暴れさせる。闇雲に振るわれた青銅の腕は——

ゴッ、つと鈍い音を鳴らした。

## 10：憧れに誓いを

ルイズとモンモランシーが慌てて寮を駆け降りてヴェストリの広場に着いた時、広場に居る生徒たちはシン、と静まり返っていた。

闇雲に振るわれたワルキューレの本気の一撃がアビゲイルの胴体を捕え、鈍く痛々しい音を鳴らして彼女の身体を吹きとばしたのだ。

涙で土を洗い流して視界の戻ってきた決闘相手のギーシュですら、今現在起きたことをようやく理解し、目を見開いて息を飲んでいた。

中身が空洞だとはいえワルキューレは金属。思い切り鈍器で殴りつけられたようなものだ。

先ほどまで繰り返されていた投げ飛ばされる痛みとは違い、直接的に、それもパニックに陥った影響で手加減なしの一撃。

頭部ではなく、胴体にあたったのは不幸中の幸いか。しかし少なくとも骨が折れたか、ひびぐらいは入ってしまったかもしれない。

「アビー!!」

「ちよつと、あれやばくない!?!」

モンモランシーは青ざめ、ルイズは倒れるアビゲイルへと駆け寄る為、生徒の輪へと突っ込もうとした。すると突然爆風が吹き荒れ、生徒の一部が強引に押しつけられる。

何事かと思つて後ろを振り返ってみれば、顔を青ざめさせたキュルケと、いかにも「失敗した」と言わんばかりに眉を顰めたタバサが何やら騒がしくしながら走るのが見えた。

「ちよつとちよつとタバサあ! アビーちゃん凄い良いの貰っちゃったわよ大丈夫なの?!」

「……不覚。 決着がつきそうだったから、つい見入った」

「うぐつ……それは私もだけど!」

どうやら二人はこの決闘を最初から眺めていたらしい。

なんでもつと早く止めないのよ!とルイズは憤慨しなくなったが、それよりも心配なのはアビゲイルである。

ぐつたりと地に伏し、傷だらけのアビゲイルの元へとルイズは駆け

寄ると声を掛けた。

「アビー！ちよつと、大丈夫?!」

「う……」

ルイズに声をかけられ、アビゲイルは辛そうにゆっくりと目を開ける。それを見たルイズは「良かった……」と安堵のため息を吐いてから、眉を吊り上げた。

「全く！何でこんな事してんのよ！心臓飛び出るかと思ったじゃない！」

「え……えつと。ごめんなさい……」

「本当よ……ギーシュ！あなたも、なんでこんなことしてるのよ!!」

事情を全く知らないルイズはアビゲイルを叱り、モンモランシーはギーシュを睨み付けて怒鳴る。アビゲイルは何となく言いづらそうにして目を逸らしていたが、隣から割り込むように黒髪のメイド――シエスタが声を挟んだ。

「じ、事情は私がお話します、ミス・ヴァリエール、ミス・モンモランシー」

シエスタは先ほどからずっとアビゲイルとギーシュの戦いを見ていたために既に死んだような青白い顔を浮かべていたが、アビゲイルが自分をギーシュから庇った事、そしてその後ルイズを『ゼロ』と馬鹿にされて怒った事をぽつりぽつりと絞り出すように語った。

シエスタが語り終えると、モンモランシーの顔はみるみる内に怒りで赤くなる。

「最っ低！自分の事を棚に上げて八つ当たりするなんて!!」

「……………」

ギーシュは言い返さない。

硬く口を閉ざしたまま、ただその場に立ち尽くす。

しかしその表情は少し前までの言い訳がましくしていた時とは違い、どこか感情のはっきりしない、そんな様子だった。

それに対してモンモランシーはますます怒りがこみ上げる。

「あやまりなさいよ！」とか、「何とか言ったらどうなの！」とか、そういう言葉がじわじわと腹の中からこみ上げ、それらをぶちまけ

た。

「ぶっ飛ばしてやるわ!!!」

「ちよっ?!?!」

「?!?!」

余りにもストレートな物言いをしてモンモランシーは杖を抜く。

アビゲイル達はその勢いに驚いて口をぽかんと開けるが、素早く正気に戻ったキュルケが慌てて羽交い絞めにした。

「まってあんたがそうなるとますますややこしくなるから!!」

「うるさい! 一発だけ、一発ぶん殴るだけよ!」

「杖抜いちやつてるじゃないのよ!……んもー!! タバサも手伝って!」

キュルケとしてもギーシユの事は一発ぶん殴ってやりたいとは思っていたが、この場を一旦解散させてアビゲイルを休ませてあげることが先決であると考えた。

タバサの協力のもと、モンモランシーの暴走を一旦は止めることに成功する。

そんな光景を他所に、ルイズは先ほどのシエスタの話に今だ衝撃を受けていた。

自分がふて寝している間に、まさかそんな事が起こっているなどと夢にも思っただけでなかったからだ。

そしてもう一つ、ルイズには分からない事があった。

ねえ、とルイズはアビゲイルの頬に触れる。

その柔らかい頬は傷だらけになり、薄っすらと血が滲んでいた。

目を離れた隙に随分と変わり果ててしまったアビゲイルの姿に、胸が痛くなる。

「アビー……どうしてそこまでして戦ったの? そりゃ、私の事を怒ってくれたらいいって言うのは嬉しいわよ……でも、何もこんなふうになるまで戦う事なかったじゃない」

「それは……」

ルイズがそう問いかけてみれば、アビゲイルは突然のその質問に驚いたように目を開き、うーんと唸る。言おうか言わまいかと迷ったように目を泳がせるその様子は、少しだけ恥ずかしそうで、ルイズは

ますます疑問を深める。

確かに、アビゲイルの性格なら誰かを馬鹿にされればそれを諫めたり、注意したりするだろう。少し会話をするだけでもその優しい性格は容易に知ることができた。

しかし、それと同時に彼女が『決闘』などといった争いを好まない性格だということもだ。

——メイドの為？ モンモランシーの為？ それとも純粹にムカついたから？

ルイズは考えても考えても答えを導き出すことができずにいた。

難しい表情を浮かべてうんうんと唸っていると、アビゲイルは照れたような表情を浮かべたままくすりと笑って、「どうか笑わないで聞いてくださいな」と前置きした。

「私、ルイズに憧れたの」

「——」

え、とルイズは声を漏らして目を見開き、アビゲイルの言っている事を暫く飲み込めずにいた。冗談を言っているのかとすら思う。

アビゲイルに見せた姿は色んな人から馬鹿にされ、見下され——そして魔法を失敗する情けない主人の姿だ。

それに教室でも召喚したのは自分の癖に、勝手に失望したような、自分勝手な言葉も吐いてしまった。

そののどに憧れる要素があるというのか。

胸が苦しくなり、ルイズは悄然とした面持ちでアビゲイルにそう問いかける。

しかしアビゲイルは「ううん」と首を振ると、ルイズが今現在そうしているようにゆっくりと手を伸ばしてルイズの頬にそっと触れる。

髪に手の甲が触れ、ルイズはさらりと自分の髪が揺れるのに少しだけくすぐったさを感じた。

「ずっと魔法が使えなくなたって、色んな人から馬鹿にされたって、それでも諦めないでずっと頑張ってきた」

「……………」

「それって、とっても凄い事だと思う。 たった一人で努力をし続ける事は、難しい事だもの」

「……！」

ルイズは言葉が出なかった。「才能がない」「ゼロ」などと言われる事はこれまでに何度もあった。 しかし、「凄い」と自分を褒めてくれる事は殆ど無かったからだ。

鼻の奥がツンとし、涙が出そうになる。 褒められる事はこんなに嬉しい事だったのか、と胸の奥が暖かくなった。

「だから、私もそうなりたくなって思ったの。 『使い魔は主を映し出す鏡である』なら、私もそうでありたいって。 ……そうすれば私はきつと、ルイズの使い魔だって胸を張れるわ」

喋るのも辛そうにしながら、アビゲイルは微笑む。 この戦いに勝つ事、負ける事など、アビゲイルにとってはきつと、どうでも良かったのだ。

ただ真っ直ぐ立ち向かい、諦めないと牙を剥くその姿こそが彼女の憧れる姿なのだから。 そして同時に、それが彼女の精一杯の、ルイズに対する応援<sup>エール</sup>なのかもしれない。

ルイズはついに堪えられなくなり、遂に一筋の涙が頬を伝う。

流れ出したそれは顎を伝い、やがてぽたぽたとアビゲイルの頬を温かく濡らした。

涙を流すと思っていなかったのか、アビゲイルは少しだけ慌てたような表情を浮かべるが、ルイズは「ばかね」と言って笑った。

「あんたは立派な私の使い魔よ」

「ルイズ……」

「……でも、そうね。 まだアビーにはその証をあげてなかったわね」

ルイズはそう言って杖を出す。「何をするの？」と問いかけてみれば、ルイズは「目をつぶって」と答えた。

「——我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。 五つの力を司るペンタゴン。 この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

周囲はシンと静まり返っていたため、ルイズの声が辺りに染み渡る

ように響く。

そしてゆっくりと顔を近づけ——そつと触れるように、口づけを交わした。

「——っ」

その瞬間、アビゲイルは不思議な感覚と胸に走る痛みに襲われた。胸の奥底から全身へ掛けて何かの流れ出し、ドクドクと心臓が脈打つ度に全身に力が漲ってくるのだ。

コントラクト・サーヴァント。

使い魔と契約を交わし、主人と使い魔としての繋がりを持つ為の証を与える儀式。

つまり、全身にあふれ出しているのは恐らく魔力であり、何らかの影響で自分へと活力をもたらしているのだろう。

そしてその魔力の繋がりを感じ取っているのはルイズもまた同じであった。

身体の内を感じるこのエネルギーが魔力であるのなら、それは今までよりも遥かに大きいと実感することができる。

まるでアビゲイルから巨大な魔力の塊が流れ出てきているような、そんな感覚だった。

「……ありがとう、ルイズ。 とつても嬉しいわ」

にこりとアビゲイルが笑い礼を言うと、先ほどまでこの少女とキスをしていたという事実が無性に恥ずかしくなり、ルイズはぷいとそっぽを向いた。

しかしその横顔は赤く、誰がどう見ても照れているのだと分かる状態だった為アビゲイルはふふ、ともう一度小さく笑い、もぞもぞと身体を動かすと上体を起こした。

「あっ……まだ動いちゃだめよ」

「もう少しだけ頑張らせて、ルイズ」

「……で、でも」

「お願い。 ……なんだかとっても気持ちが良いの。 此処から力が溢れかえってくるみたいで」

「う……」

彼女の意見は尊重してあげたい。　だけど、流石にこれ以上の無茶はさせられない。

主人として、この場合どうするべきか。　どちらの選択が正しいのか、ルイズにはなかなか決めることができず、暫くの間沈黙をしてみよう。

するとアビゲイルはルイズの返事を待たず、ゆっくりとした動きで立ち上がった。

「ちよつとアビーー！　まだ良いなんて一言も……」

「……」

勝手に動き出してしまったアビゲイルを叱咤しようとして、その言葉を最後まで言うことができなかった。

アビゲイルは視線をこちらに合わせないどころか、まるで虚空を見つめているかのようにぼんやりとしながら口を開いたからだ。

「いあ……いあ……」

「……アビーー？」

小さく呟くような言葉と共にアビゲイルは目を細め、その表情はどこか恍惚としていた。

声を掛けても振り返る事はなく、そのままゆっくりとした歩みでギーシユの前へと歩いて行く。

その様子にルイズは違和感を覚える。　そしてその違和感を覚えたのはルイズだけでは無く、モンモランシーと格闘し続けていたキユルケやタバサ、そしてシエスタまでもがその表情の持つ冷たさの様なものを感じ取っていた。

「ふ、ふん、まだ立ち上がってくるか。　先ほどはひやりとしたが、どうやら心配いらなかったようだね」

「……………」

ギーシユは再び立ち上がってきたアビゲイルに対して内心かなり驚いていたが、それをおくびに出さないようにしてそう言った。

しかし、アビゲイルはそれに答えず、緩慢な動きで手を前に突き出す。　すると突如としてタバサの持つ杖程の大きさの黒色の長い棒が現れ、しつかりとそれを握った。



それを見てこの場に居る生徒達は全員目を丸くして驚く。そこには無かった筈の大きめの物体が急に表れたのだから仕方のない事かもしれない。

生徒達は口々に「どこから取り出したんだ?」「まさか、魔法か?」とざわつき始める。

当然平然を装っていたギーシュも慌てたような声を出した。

「なっ……ど、どこからそんなものを!」

「……………」

「……まあ良い。そんな武器を手にした所で、僕の勝ち揺るがない。君はもう動くことも難しいだろう」

ギーシュはそういうが、その言葉は事実であった。

たとえ武器を召喚する魔法があつたとしても、それを振り回すための体力がもうない。

それどころか、先ほどまでの戦いで既に身体のどこかに大きなダメージを負っている筈なのだ。

いまや立っているだけでも奇跡であり、賞賛に値する程の状態。

そんな人間が武器を振り回すことなど到底不可能である。

「潔く、降参を——」

するとい。 という言葉は最後まで発するができず、パン!と何かが弾ける音でかき消された。

何事かと認識するよりも前に強い衝撃と共にギーシュは意識を失った。

## 11：虚空の奥

——いあ いあ

——いぐああ いいがい がい

これはかつての記憶だろうか。

——んがい ん・やあ しょごく ふたぐん

——いあ いあ い・はあ

これは誰かの声だろうか。

頭の中で繰り返される良く分からない音は、胸をざわつかせる様な恐怖を孕んでいた。

しかしそれでいて、どんな言葉よりも耳に馴染み、自分の身体へと染み込んでいくような——

「いあ……いあ……」

口遊めば、その心に宿るのは空虚だ。

しかし、その度に身体が満たされていく。

身体の痛みはもう感じない。

辛いという感情はどうに無く、むしろ父に抱かれているかのような安らぎを感じていた。

我は禁断の秘鑰。

虚無へと繋ぐ銀の鍵。

ああ、ならばこの身の使命たるは、我が父なる神の眠る窮極の門へと至ることなり。

そして全ての人類に——をもたらさん。

|||||

ヴェストリの広場は再び静寂に包まれていた。

突如として虚空鍵穴から現れた、名状しがたい嫌悪感を放つ触手がワルキューレを一撃で粉碎し、そのままギーシュを薙ぎ払った。たったそれだけ。

この決闘を締めくくるにはあまりにも呆気ない幕切れだ。

しかし、たったそれだけがどれだけ異常なものであるか、この場に居る人間は皆、理解する事ができずに呆然としていた。

否——理解する事が出来なかったのではない。

脳が理解する事を拒んだのだ。

なんだあれは。 化け物か。

戦いが終わってみれば勝利への賞賛、驚愕の声などどこにもなく、ただ生徒たちは身体を震わせる。

先ほどまで幾度となく野次を飛ばしていた男子生徒など、尻もちをついて悪臭を垂れ流しにする無様な姿を晒す始末だ。

しかしそんな姿を誰も気にも留める気配がない。

ただただ、この決闘の場の中心に佇む少女から目を離すことができずに居たからだ。

やがて触手はぼつかりと開かれた虚空鍵穴へと戻っていく。

この場に残されたのは芝生に転がったまま動かなくなったギーシュと、恍惚とし、それでいてどこか虚ろな目をしたアビゲイルのみだ。

それからしばらくしても、誰も動き出すことができずに居た。

ルイズ達もアビゲイルのその様子に違和感を覚え、戸惑いを隠せないでいる。

さらさらと風に靡く金糸の髪。

幼く、あどけなさを残した顔。

その何もかもがアビゲイルのものであるはずなのに、どうしても何かが違う、そう思ってしまうのだ。

「ア……アビー？」

「まって」

ルイズは痺れを切らしてアビゲイルを呼び、一步前へ踏み出す。しかしタバサが杖をルイズの前に出しそれを制止する。

「今の彼女は危険。 ……かもしれない」

「かもしれないってどういう事よ」

「……分からない。 だけど、刺激は禁物」

タバサの胸中は嫌な予感で埋め尽くされていた。 数々の危険を自らの手で掻い潜ってきた経験からか、それともアビゲイルの浮かべているあの虚なる目の所為か。

いずれにせよ不用意に近づけば——その先に待っているのはギ―シュと全く同じ結果だろうと確信できる。

かといって何か打つ手が有るかと言われれば、答えは否である。

彼女を攻撃すればこの場を収める事は出来るだろう。 しかし、それは彼女を傷つけ、唯でさえボロボロになったその体にとどめを刺す事に他ならないからだ。

彼女はルイズの使い魔であり、キュルケの友人だ。 その為、その選択は最後まで取るべきではない。

歯がゆい思いでタバサはアビゲイルを観察し続ける。

しかし、この膠着状態は直ぐに途絶える事となった。

アビゲイルがゆらり、と緩慢な動きで周囲を見渡し始めたのだ。

獲物を狙うような、品定めするような目線ではない。 ただ虚ろに、その瞳に景色を写しているだけ。

たったそれだけの動きで、周囲の生徒達の間には緊張が走る。

恐ろしい。

たったそれだけのシンプルな恐怖が、この場を支配して身体の動きを縛り付けていた。

「アビー」

じつとりと頬を伝う汗を拭い、竦む足を強引に動かしてルイズは前に出た。

名前を読んでもやはり返事が無かったが、その目線はルイズの方へと向けられる。

「ちよつとルイズ……!」

「……アビーは危険なんかじゃないわ」

「それは……」

ルイズは睨みつけるようにキュルケを睨む。  
キュルケは息を飲み、口を噤んだ。

今どう動くべきか、その正解が誰も分からない以上、ルイズの行動を諫める気にはなれなかった。

それにタバサはああ言ったがキュルケ自身、彼女が危険だという言葉に対してあまり信じたくないという気持ちもあった。

無垢な笑顔を浮かべる、優しい心を持った少女——それはキュルケ自身が彼女と接した結果、疑いようのない事実だったのだから。

生徒達はルイズがアビゲイルに近付いていく間、いつギーシユの様にあの触手で吹き飛ばされるかとひやひやしていたが、意外にもアビゲイルは何もアクションを起こさずにじっとルイズの姿を瞳に映したまま動くことは無かった。

ルイズはゆっくりと手を伸ばす。

伸ばした手は払いのけられるという事は無く、先ほどと同じようにアビゲイルの頬に触れると、ゆっくりとその柔らかい肌を撫でた。

「アビー……頑張ったわね」

自らの使い魔に恐怖など浮かべない。浮かべるとしたら、それは我が子を慈しむような慈愛に満ちた表情だけだ。

するとどうだろう。

アビゲイルの胸元が急に青白い光を発し、それはやがて激しさを増し、周囲からは二人の姿が見えない程の輝きになった。

キュルケ達は発生源であるアビゲイルの近くに居たルイズの身を案じ、腕で目を覆いながら「ルイズ！」と叫ぶ。

しかしルイズは何事かと慌てふためくよりも前に、ああ、と納得してしまった。

理屈は全く分からないままだったが、これはコントラクト・サーヴァントをした時にアビゲイルから魔力が流れてくる時と同じ感覚だったのだ。

それが今、アビゲイルの頬に触れた手から直接流れ込んでくる。

まるで貯水槽が決壊したように激しく——それでいてどろりとした暗い魔力だ。

「……あ、れ？」

虚ろな目をしていたアビゲイルはその瞳に輝きを取り戻す。まるでついさつきまで意識を失っていたかのようにはっと息をのみ、周囲を見渡していた。

その姿はルイズの知るアビゲイルそのものであり、良かった…と心の中で安堵の息を吐いた。それから主人として、使い魔の無茶を叱る必要があると考え、唇を尖らせる。

「……全く、今日一日だけでどれだけ心臓が止まると思ったか……」

「……ごめんなさい……ルイズ……私……、……」

「!?」

アビゲイルは細い声で謝ったかと思えば、急に意識を失い倒れ込む。

咄嗟にルイズが支えようと踏ん張ったが、流石に体格が同じ二人。

ルイズもアビゲイルの下敷きになるように倒れ込んだ。

「ミス・ヴァリエール！ アビーさん！ 大丈夫ですか！」

「え、ええ……私は大丈夫。 アビーも多分疲れて眠っているだけだと思いますわ」

「そうですか……それでしたら、早く医務室へ運んであげた方が良くありませんね」

意外にもシエスタが他の人たちよりも早く行動を再開し、提案をする。

ルイズは「ええ、そうね」と同意し、一度アビゲイルをシエスタに持ち上げてもらった後におんぶする形で運ぶことにした。

モンモランシーもアビゲイルが心配だと言い、歩き出したルイズとシエスタに付いていくような形で数歩歩くとくるりと振り返り、

「……あとあのバカも医務室に運ばないとね」

「まああそこに放置しておく訳にもいかないものねえ。 タバサ、お願いできる？」

「……………」

タバサは面倒くさそうに溜息を吐くとギーシュの身体をふわりと浮かせる。それからぽつきりとへし折れた杖を回収すると医務室

の方へと歩き出した。

この場に残されて生徒たちは暫くの間動けずにいたが、ルイズ達の姿が見えなくなつてからようやく動き出し、のろのろと自分たちの寮へと戻つていった。

|||||

時を同じくして、トリステイン魔法学院の主塔にある学院長室。

そこには一人の老人——オールド・オスマンが荒く肩で息をし、積み重ねられた書類をまき散らしながら机に突っ伏していた。

目は血走り、額からは冷や汗をたらたらと流している。その様子は普段のオールド・オスマンの温厚で、それでいて助平な表情を知っている者であればまず間違ひなく驚いてしまうほどに険しく、また懊惱の色がべつとりとこびりついていていた。

「ハア、ハア……ハア……」

「オールド・オスマン。大丈夫ですか？」

「あ、ああ……なんとかな。じゃが本当に危なかつた。あれ以上深く覗いていたら……」

ぶる、と全身が震える。先ほどの光景を思い出し、急激に上がつて来た胃液を口を抑えることで何とか堪えた。

実はオールド・オスマンはこの学院長室で先ほどの戦いを頭から見物していた。

というのも、一番初めに決闘が行われるという情報をいち早く入手したコルベールが、オールド・オスマンに《眠りの鐘》の使用許可を願い出るためにこの学院長室へと駆け込んだのだ。

しかし、結果として《眠りの鐘》の許可は下りず、こうして《遠見の鏡》で見物をする事となつたのだが——

「……何が見えたのですか？ あの虚空鍵穴の奥に」

コルベールはオールド・オスマンに問う。

オールド・オスマンは決闘の最後に突如として現れた一つの虚空鍵穴をよく観察しようとし、《遠見の鏡》で虚空へと焦点を当ててその奥を

見た。

虚空《鍵穴》の奥にはきらきらとした光が揺れている。

それは今まで生きてきた中で、最も美しい星々の輝きだ。

思わず魅入ってしまう程の輝きは無数の光、大きさとなつて現れては消えていく。

これは『宇宙』というものだろうか。

気が付けば自分は真っ白な空の中で自分の足元に広がる宇宙を見下ろしていた。

しかし自分は驚く事もせず、ただそれが当たり前だと言うように星々の輝きを見つめていた。

いつまでも、いつまでも——その星々が自分の事を見つめていると気づくまでは。

刹那、目をカツと見開いたオールド・オスマンが突然叫びだしたかと思えばそのまま椅子からひっくり返り、暫くの間正常な呼吸が難しい程に呼吸が乱れ、床に突き立てた爪がバキバキとわれ砕ける痛みにすら気付かないを程に手に力を入れて痙攣し始めたのだ。

コルベールはそのあまりの凄惨な状態に慌ててオールド・オスマンの意識を確かめ——そして現在に至ると言う訳だ。

オールド・オスマンはコルベールの問いかけに対して暫く返事を返さなかったが、やがて肘をつき、両手の上に顎を載せる。それから重々しい口調でゆっくりと話し出した。

「率直に言えば、わからん」

「分からない……？」

「儂にはあれを理解する事はできん。アレを理解できるものは……とうに狂つておるものだけじゃろう」

「……」

コルベールにはオールド・オスマンが何を言っているのかさっぱり理解する事が出来なかった。しかしオールド・オスマンはコルベールの様子を気に留める事無く、深く眉間に皺を刻んだまま呟いた。



「……『無数の貌を持つ神の代行者現る時、世界に狂気と混沌をもたらすだろう』……」

「は……？」

「……コルベール君。彼女は儂ら人類の敵になるやもしれん。くれぐれも警戒を怠らぬように頼むぞ」

「……、……分かりました」

重々しい空気の中、コルベールは頷く。

全ては生徒たちの安全の為——まずは彼女が目を覚ましたら、接触を図らなければならないと思った。

## 12：償いに約束を

夢を見ている。

それは少年のまだ短い人生の夢だ。

彼の家は名門であり、軍に所属する者、政治界に名を連ねる者であれば誰でも知っている程の軍属貴族であった。

父親は元帥であり、三人の兄も軍に在籍し、既に数々の輝かしい武功を上げている。

少年はそんな家族達に憧れていた。

そして同時に、いつか自分も立派なメイジになり兄達や父と同じ道を歩むのだろう。そう思っていた。

だからこそ少年は努力をした。

勉強が終わった後、精神力が尽きるギリギリまで杖を振るっては、ヘトヘトになって家に帰ってくる。そんな日々を繰り返した。

家族はそんな自分を褒めた。

少し休んだらどうだ、と言われる事もあったが、少年は笑顔で大丈夫だと答えた。

憧れの人達の様になりたい、そう思えば無限に活力が漲ってくるのだ。

——しかし現実には少年の思うようには行かなかった。

少年はいつまで経ってもドット・メイジのままだったのだ。

もちろん、軍の人間が皆ラインやトライアングルのメイジと言うわけではない。むしろ、ドット・メイジの方が多い部類だという事を少年は理解していた。

しかしそれでは駄目なのだ。

自分は父や兄達と同じように、家名に相応しい優秀な軍人にならなくてはならない。

少年の理想と現実とは徐々に食い違っていた。

懸命な努力の末に7体同時に《クリエイト・ゴーレム》を使役する事が出来るようにはなった。

しかしそれ以上の進歩が無かった。

いつまでもドット・メイジ止まりだったのだ。

やがて家族への憧れは劣等感へと変わっていった。

どうして自分はドットのままなんだ。

どうして自分は兄達のようになれないのか。

少年は憤り、嘆きながらも杖を振り続けていたが、努力を重ねても上に行けないどころか、同じ年にして自分よりも遥かに巧みに魔法を使いこなす少女まで現れた。

気がつけば少年は杖を下ろし、前に進むのをやめていた――

ギーシュは重たい瞼をゆっくりと開く。

視界に映るのは見慣れた自分の部屋ではなく、カーテンで仕切られた部屋だった。

何故こんなところに自分は居るんだという疑問に思ったが、頭に走るズキズキとした痛みが答えを教えてくれる。

あの決闘の最後、輪郭の無い触手がワルキューレを打ち抜き、そのまま自分を吹きとばしたのだ。

「……そうか。僕は負けたのか」

「そうよ」

自嘲気味に呟くと、カーテンの向こう側から声が返ってくる。

どこか冷たく、それでいて怒っているのがわかるツンとした少女の声だ。

カラカラとカーテンを開いてみればそこには予想通り、くるくると巻かれた金髪と広いおでこをした少女、モンモランシーが椅子に座っていた。

何故ここに、と口にする前に少し空けた先の反対側のベッドからすうすうと寝息が聞こえるのに気がついた。

ベットのの上を見てみると、そこには顔に痣や傷を残したアビゲイルが少しだけ苦しそうな表情を浮かべて眠っていた。

外を見ればとくに外が暗くなっており、あれからそれなりの時間が経った事がわかる。

「少しは頭が冷えた？」

「……ああ。冷静じゃなかったとは言え、幼い少女に手をあげるなど男として恥じるべきことをしてしまった」

「……ふうん。冷水をぶっかけてやる必要は無さそうで良かったわ」

モンモランシーはギーシュに視線を合わせる事なく、言葉を返し、続ける。

「ただど何でここまででしたのよ、貴方らしくもない」

「……そうだね。僕もそう思うよ。彼女の言葉は何処までも正しくて……僕はそれが認められなかったんだ」

「ふーん……？」

「……いや、すまない。言い訳みたいになっちゃおうけど……僕が何を思ったか、聞いてくれるかい？」

憑き物が落ちた、と言った感じのギーシュの様子を見てモンモランシーは「どうぞ」と返事を返す。するとギーシュは「ありがとう」と言い、ぽつりぽつりと語り出した。

食堂での一件、最初こそは完全に頭に血が上り、暴走してしまっていた。自分の小さな自尊心が傷つけられ、未熟な自分ら誰かに八つ当たりせずにはいられなかったのだ。

しかし口論を続けると、アビゲイルの口から出た言葉が状況を変える。

——魔法が使えなくなっちゃってルイズみたいに必死に努力して、真っ直ぐ自分に向き合っている人の方がずっと格好いいわ！

その言葉は努力をしても実らず、ついに心から折れてしまった自分の心を突き刺したのだ。

才能がないから、努力をしても無駄だ。

自分はあるの兄や父達の血をもっているのだから、いつか大成できる

はずだ。

自己矛盾をしながら、心の折れた自分を正当化する事ばかりをしてきた自分には耐えられない言葉だった。

そんな事本当は分かっている。　だけど、それは簡単にできる事じゃない。

ギーシユは心の奥底でルイズの事を尊敬し、そして嫉妬していた。

何故そこまで頑張れるのか、それを聞きたくてたまらなかったが、ギーシユは自分が逃げ出したという事実を認めたくない思いからルイズの事をバカにし続けていたのだ。

どうせ無駄だ。

そんなものやめてしまえば良い。

——僕と同じように——

そして啖呵を切ったアビゲイルに決闘を挑んだ。

この使い魔だって無理だと分かればすぐに諦めるだろう、そう思ったからだ。

しかし彼女は諦めなかった。

何度地面に転がり、叩きつけられてもその瞳は闘志を失わず、何度も立ち向かってくるのだ。　彼女はその小さな身体で証明しようとし続けていたのだ。

そして、そこで初めて何故そこまで頑張れるのか、立ち上がれるのかという理由を聞く事になる。

——私、ルイズに憧れたの。

ギーシユは心臓を掴まれたような錯覚を覚えた。

それはかつて父や兄達に憧れ、無我夢中に努力をしていた子供の頃の自分が目の前の少女と重なって見えたのだ。

自分は知っていたのだ。　憧れは無限の力になると。

それが醜い嫉妬へといつの間にか変わり果て、忘れてしまっていただけなのだ。

「……彼女はそれを思い出させてくれた。　だからこそ僕は彼女に感謝しなくてはならない。　そして、すまなかつたと彼女に……彼女達

に謝らなければならぬね」

本当に反省している様子のギーシュに対してモンモランシーは言葉挟まずに聞いていた。夜の医務室は静寂に包まれ、ギーシュの言葉は外の闇に吸い込まれて行くようだった。するとアビゲイルがもぞもぞと身動きし、

「私も……ごめんなさい……最初に叩いてしまったのは私だもの……」

と申し訳なさそうに呟いた。

「アビーー！ 目が覚めたのね！ 全く、いつから起きてたのよ……」

「『こいつの頭を丸めたら、少しは反省するかしら』……あたりから」

「ぼ、僕が目覚めるより前に目覚めてたんだね……」

そんな事言つてたのか……とギーシュの顔が引き攣る。

モンモランシーはめちやくちやなひとりごとを聞かれたのが恥ずかしくなり、わー！と声をあげた。

「もうー！ 起きてるなら早く言いなさいよおー！」

「だ、だってその時のモンモランシーさん、ちよつぱり怖かったんですもの……」

ぶるりと震えアビゲイルは掛け布団を鼻の上まで引き上げる。

その様子にはははとギーシュは少しだけ笑い、それから顔を引き締めめる。

「さっきの事だが、君が謝る事はないよ。全ては僕の招いたことだからね」

「……」

「そして本当にすまなかった。僕自身の事がどうであれ、君達に対して非礼な事をしてしまった。君が望むなら、どんな事をしてでも償おう。……それで許されるとは思っていないが、どうか僕の誠意を受け取ってほしい」

ギーシュはベッドから降りると深く頭を下げた。男として、貴族として、けじめとして——彼女へ謝り、そしてその罪を償わなければならぬ。

アビゲイルもゆつくりとベッドを降りる。

まだ身体を癒す薬の効果が完全に表れていないためまだ体が痛むのか小さく苦悶の声を漏らした為、モンモランシーは「まだ起き上がっちゃだめよ」と声を掛けたが、アビゲイルは「大丈夫」とそれを制した。

ギーシュが頭を下げたまましていると、アビゲイルが目の前まで歩み「頭をあげてくださいな」と声がかかる。

顔を殴られるでも、あらゆる罵声を浴びせられるでも、全て受け入れるつもりだったギーシュはゆっくりと顔をあげ、そして困惑した。アビゲイルが手のひらを差し出していたのだ。

ギーシュはその手の意味が理解できずに困惑していると、アビゲイルは微笑んで言った。

「仲直りの握手をしましょう。そして——どうか私のお友達になつてくれたら嬉しいわ」

「——」  
ギーシュは目を丸くし、ぽかんと口を開ける。暫くの間そうしてから釣られて小さく笑うとその手を取った。

「……君は本当に強く、そして優しい子だね」

「そ、そうかしら……」

「ああ……僕も君たちの様に真つすぐに生き、努力すると誓うよ」

「なんだか恥ずかしいわ。でも……ふふ、それなら」

アビゲイルは一度手を離すにつこりと花のような笑顔を浮かべてから再び手を差し出した。

今度は手のひらではなく、小指を一本だけぴんと立てていた。

「もし、もつと凄い魔法が使えるようになったら……また私にみせてくださいな」

「ああ、約束しよう。きっとメイジとして成長し、友である君に見せる事を！」

こうして少年と少女は約束を交わす。

窓の外に浮かぶ二つの月の光がそれを祝福するように妖しく輝いていた。

それから学院長室に事情説明の為に呼び出されていたルイズ達に戻り、ルイズとキュルケのグーパンがギーシユの顔に炸裂するのは別の話。



### 13：学院長室へ

ギーシュとアビゲイルは保健室で安静にさせられている間に二人は随分と仲良くなった。

下級水薬の効果が完全に発揮されるまでは動いてはダメだと教師に言われていた為動くこともできず、二人して暇を持て余し続けたのだ。

勿論ルイズは「男子と同じ部屋に寝かせるなんて出来ないわ!」と反対していたのだが、アビゲイルが「折角だしお話ししたい」という要望で今の形になったのである。

もつとも、実際のところ二人して部屋で寝ているだけでは暇で暇で仕方がなかったので、アビゲイルのこの提案は正解だったと言えるだろう。

また、シエスタとギーシュも打ち解けていた。

ベッドの上から動けない二人の世話をしに何度もこの部屋を訪れていたのだが、アビゲイルが巻き込んでいく形で話の輪の中に入れていたのだ。

勿論、もともとギーシュがフェミニストだったと言うこともあるが、やはりそこは人と人。

シエスタが謝罪を受け入れ話していくうちに、お互いに平民と貴族の壁で見えなかった部分が見えたと言う部分も大きかったのだろう。

基本的な話の内容は様々で、ギーシュの家族の話やメイドの間で流布している占い話、皆の好きな食べ物の話（この辺りはアビゲイルのパンケーキへの情熱を語ることがメインになっていた）、キュルケの時と似たように土系統の魔法についてどんなものなのか教授する——等である。

ルイズ達も授業が終わる定期的に見舞いに訪れていた。

保健室の外へと漏れ出す楽しそうな声を聞きながら、がらり、と保健室の扉を開けると、そこには、



らしかった。

「まあ、あの件について言うより、もともと学院長室へは行く予定だったのよ」

「そうなの？」

「だってあんたを召喚した時、私とコントラクト・サーヴァントする前に倒れちゃったんだもの。本来ならちゃんとコントラクト・サーヴァントが成功して、それで初めて使い魔の召喚に成功したって認めてもらって進級できるようになるわけ」

「じゃあ本当はあの日、学院長室でコントラクト・サーヴァントをするつもりだったのね……」

「ええ、そうなるわね」

ルイズが当然でしょ、と言った風に答えると、アビゲイルはなんとも言えない表情になり、少しだけ顔を赤らめてルイズから視線を逸らした。

「ル、ルイズったら、先生方の前でキスするつもりだったの？」  
「なっ——」

もじもじと赤くなるアビゲイルにルイズの顔も釣られてカアツと熱くなる。

「ば、ば、ばか！ 変なこと言わないでよ！ そんなこと言ったら……あの場でもっと大勢の前で見られながらキスしてるじゃない！」

「そ……そうだったわ。キスした後のことはなんだか臃げだったから……」

アビゲイルはあの時の事を思い出す。

急に胸が熱くなったと思えば頭の中に声が響き、まるで身体が勝手に動いているかのように鍵を刺した。

頭の中に響いた声の殆どが理解できず、それでいて既に断片的にしか残っていない。

しかしそれでも、記憶の中に残っている単語の意味を理解することができれば、きつと失った記憶に近づけるのではないかとアビゲイルは考えていた。

ルイズは思案を巡らせ顔を曇らせるアビゲイルが気になり、長い服



述べると、オスマンはホッホッホと如何にも老人らしく朗らかに笑って言う。

「いやなに、それについてとやかく言うつもりはないんじやよ。むしろ儂等がもつと早くに止めるべきじやった。すまんのう」

「そ、そんな……」

逆に謝り返されるとは思わずアビゲイルはわたわたと両手を動かして慌てだす。

しかしコルベールはオスマンが『眠りの鐘』の使用許可を却下した時点で止める気などさらさらなく、それ所か『遠見の鏡』で見物をしていたのを隣で見っていたため、しらじらしい、と若干冷めた目でオスマンを見ていた。

コルベールは話が進みそうにないと判断し、コホンと咳ばらいをして一度やり取りを打ち切り、それからアビゲイルの方を見た。

「今日此処へきて頂いたのは、契約の証であるルーンがきちんと刻まれているかという事、それと君に少し話をしたい思っていたからです」

「私にですか……?」

「うむ。……じゃから、ミス・ヴァリエールには少しだけ席を外して頂きたい」

「え……な、なぜですか?」

コルベールの言葉を引き継ぐように言ったオスマンに対して、理由が分からない、とルイズは戸惑いの表情を浮かべる。するとオスマンは何とも言えない複雑な表情を浮かべて口ごもる。

「……いえない理由があるのですか?」

「……ううむ、そういう訳ではなく……いやあるが……」

「どっちですか!?!」

歯切れの悪いオスマンに対してルイズが叫ぶ。とはいえオスマンとしても、

『その子が危険かもしれないからお話し聞かせてね』

などといえればルイズが怒り出すことは目に見えている。現にルイズはアビゲイルを庇うように立ち塞がっているではないか。

構図としては、もはやいじめっ子に虐められている少女を助けにきた学級委員と言ったところだろうか。

まるで自分たちが悪党になってしまったかのような状況にオスマン達は顔を合わせ、どう説明するべきかと頭を悩ませ始める。やはり初めから進級認定の為に呼び出すのは別件で一人だけ呼ぶべきだったかと後悔する。

「仕方がないか……」とオスマンはしぶしぶルイズの同席を認め、アビゲイルの方へと向き直る。

「単刀直入に聞こう。君のあの力はなんじゃ？」  
「……わ、わかりません」

断片的な記憶があれど、詳しい事について何もわからないアビゲイルにはそう答えるしかない。しかしオスマンはその返事を聞いて「ほう？」と呟き、目を細めた。

「本当かね？ 聞いたところによると、君はあの力を自らの手で操っていたと聞いたのじゃが」

「それは……その通りだと思います」

「不思議な言い方をするのう。使えるのに、分からないと？」  
「ごめんなさい……」

しゅん、と表情を曇らせる。大人達に囲まれているという状況もだが、何よりも多人数に責められているような雰囲気アビゲイルへと重くのしかかる。

ルイズは俯き小さくなるアビゲイルを見て、口を挟んだ。

「っ、彼女は記憶喪失なんです！ だからあの力がなんなのか、本人にだって分からないと言うことだってあり得ます！」

「記憶喪失か……君は直感で召喚魔法を唱え、ミスタ・グラモンへ一撃加えた」と

「はい……」

「ふむ……本当に？ 何か隠しているという事ではなからうな」

「い、いえ、そんな……」

ルイズの訴えに反して、オスマンの反応は悪い。確かに、その言葉を鵜呑みにしてしまえばそれは仕方のない事だと納得する事は出

来る。

しかしそれが嘘だという保証も無いのは事実。

まさに悪魔の証明であったが、既にオスマンの中にはそれを信じる程の余裕がなく、疑心暗鬼に陥っていた。

それにしても、ますます訝しみを深め、眉間に皺を寄せるオスマンの威圧感は流石学院の長と言ったところか。

いつもなら朗らかな老人、もしくはただのスケベ親父であるが、認識を改める必要があるとコルベールは内心で舌を巻いていた。

しかしながら、そんな威圧感を出されてしまえば当の本人は堪ったものではない。

アビゲイルはその視線を受けているだけで緊張で喉がカラカラに乾き、伏した目からはじわりと涙が溢れそうになる。

かといって今の自分ではこの場を納得するさせられる回答など考えつかず、ぎゅつと両手で服の裾を握りしめるばかりだ。

当然そんなことになってしまえばルイズも黙ってはいない。

大きく目を開いた後、睨みつけるような視線で非難の声を発する。

「まさか疑ってるんですか?！」

「ま、まあ、そういう事に……」

「アビーはそんな子じゃありません!! 素直で優しい子です!!」

「それはそうかもしれない——」

「何を根拠にそんなことを言ってるんですか!!」

ルイズの剣幕にオスマンは気圧される。

あまりにもヒートアップしすぎて暴れ出さないと若干コルベール達とアビゲイルが不安になってしまっただ。

もはや何を言っても火に油だろう。

コルベールはとりあえずこの場を納めなくてはならないと慌てて仲裁する事にした。

「ミ、ミス・ヴァリエール、ちよつと落ち着きなさい。 オールド・オスマン、あなたも少し疑いすぎです。 彼女が怯えているではありませんか」

「む……それもそうじゃな……」

「つ……、すみません……」

「アビー君、だったかな。君にも申し訳ない。見たこともない魔法だったから、つい構えてしまってたね」

「いえ……」

「この話についてはまた日を改めるとしよう。オールド・オスマン、それでよろしいですね？」

「う、うむ」

オスマンは助かった、と冷や汗をかき、ルイズとアビゲイルはまたあるのか……と内心でため息を溢す。

(主にルイズが)ピリピリとした空気が漂う中、コルベールが一度仕切り直しをするように咳払いをして口を開く。

「よし、ではミス・ヴァリエールの進級についての話をしましょう」

「!……はい!」

待ちに待った進級。数日前までは進級する事ができるかと不安だった日々もあったものだが、それもようやく解放されるわけだ。

ルイズは先ほどのピリついた気持ちが消え、嬉しそうに目を輝かせる。

「召喚が正しく成功した、という証はコントラクト・サーヴァントによつて出現したルーンを見せてくれるだけで大丈夫ですぞ」

「分かりました! アビー、ルーンを先生方に見せて頂戴」

「ええ! ……え?」

アビゲイルヘルーンを見せる様促すと、途端に素っ頓狂な声をあげて固まる。

「アビー? どうしたのよ、早く見せて頂戴」

「ちよ、ちよつと待つてルイズ……見せるの?」

「? 何言つてんのよ、さつきここに来る前話したじゃない」

「聞いてない! 全然聞いてないわ! 『認めてもらえば良い』とは言っていたけど、『ルーンを見せる』なんて一言も言っていない!」

「そ、そうだったかしら……でも別にいいじゃない。何が問題なの?」

ルイズは何がそんなに嫌なの? という表情を浮かべる。コル



ベール達もその様子を不思議に思い首を傾げた。

アビゲイルの表情を見てみれば、目に涙を溜めて今にも羞恥で死んでしまいそうな程顔を赤らめていた。

コルベールは、確かに女性に対して肌を見せろというのは失礼かもしれないと思つたが、それでも此処まで嫌がる事に少し驚いていた。

「だ、だつて……」

「だつて?」

「だつてえ……」

アビゲイルは羞恥が頂点に達したのか、長さの合っていない袖をブーンと振り顔を隠して叫ぶ。

「私のルーン、胸にあるんですもの!!」

## 14：少女とパンケーキ

「……」

「ね、ねえアビー、そろそろ機嫌を治してくれない？」

「……別に全然怒ってないわ」

「いや、そんなほっぺ膨らませてそっぽ向きながら『怒ってない』は無理があるわよ……」

あの強烈なカミングアウトから少しして、今は授業を受けるために廊下を歩いていた。

結局、あの後羞恥で悶えるアビゲイルに気を使ってくれたコルベールが申し訳なさそうにしながらすぐに秘書であるロングビルを呼び出してくれたのだが、学院長である筈のオールド・オスマンは「この目で確かめねば！」と言い出して事体がややこしくなった。

果たして先ほどの疑いの件を引きずった真面目な話だったのか、それともただの変態ジジイだったのか、その真相はルイズにも、コルベールにも分からない。

少なくとも鼻息を荒くし、目を血走らせていただけ付け加えておこう。

廊下でちょうど会ったキュルケもその話を聞いてぶつと吹き出す。

「あっはっは！ 全く、ルイズもそれぐらい気づいてあげなさいよ。」

女性が男性相手に簡単に肌を見せるってだけでもアレなのに「

「うぐっ……いや待ってアンタにだけは言われたくないわよこの色ボケ女！」

「……だけどせめて『見せる』ってことだけは事前にちゃんと伝えておいて欲しかったわ」

「そ、そこは本当にごめん……」

今朝のルイズはその実、完全に浮かれていたのだ。細かい点に気が回らなかつたという点においてルイズが全面的に悪いと自分でも自覚をしていた為言い訳をする事も難しかった。

くつくと腹を抱えて笑っていたキュルケだが、流石にルイズがいたままれなくなってきたと感じてそろそろこの状況を打開するための助け舟を出してあげる事にした。

「まあほら、ルイズも反省してるみたいだし……何か美味しいもの一つで手を打たない?」

「……例えば?」

「んー、そうね。 何がいいかしら」

ちらりとルイズの方へ目配せをする。 ルイズはあっ、と何かを閃いたような表情を浮かべた。

「今日のランチが終わったらデザートにパンケーキを作ってもらえるようお願いしてみましようか」

「パンケーキ!?」

「そうよ。 確か好物だつて言つてたわよね?」

「ええ! 甘いのもしょっぱいのも大好きだわ!」

「そ、そう。 じゃあ決まりね」

「ふふふ! お昼が楽しみだわ……」

アビゲイルのテンションは一気にうなぎ上り。 授業もまだだというのに既にランチの後のデザートを思い浮かべ幸せそうな表情を浮かべている。

るんるんと食べ物一つでスキップをするその姿は全く単純だと言わざるを得ないが、少なくとも機嫌が悪そうにしているよりは断然いいだろう。

キュルケは目線でルイズに対して「貸しひとつね」と送り、ルイズはそれを察して悔しそうにしながら頷いた。

|||||

「おはよう友よ。 なんだか嬉しそうだね」

「おはようギーシュさん! ふふふ、分かってしまうかしら……なんと、ルイズがお昼にパンケーキを作ってもらえるように頼んでくださるんですって!」

教室につくとギーシュが既に椅子に座っており挨拶をかわす。

ギーシュが彼女の事を「友」と呼んだ事についてもだが、ついこの間あんな決闘が行われたとは思えない様子に、周りの生徒たちは驚きの様子を隠せなかった。

「へえ……ルイズがわざわざねえ」

「なによ」

「いや別に。 だけどアビー、あんまり言いふらさない方がいいわよ。 それって特別に作ってもらって事でしょ」

「あつ……そっか、そうよね。 つい嬉しくなっちゃってつい。 ありがとうモンモランシーさん」

そしてギーシュの後ろに座っていたモンモランシーもまたその会話の輪の中に入っていく。

これもまた周りの生徒が驚いているが、ついこの間二股疑惑でギーシュの事を吹き飛ばす程の力でビンタをし、決闘の時もぶん殴ってやると暴れていたとは思えない様子だ。

しかし生徒たちが驚いているのはそれだけではない。

『よく彼女と一緒に居られるな』

という、怯えの混じった感情だ。

誰も教室では口に出さないが、アビゲイルを見る生徒達からはそんな空気が漂って居た。

メイジを一撃で倒した、名状し難い謎の触手。

たしかにソレを見たはずなのに、ここにいる誰しもがその色や形状をはつきりと覚えていない。 しかしそれでも拭えない恐怖感や嫌悪感に残り続けている為、彼女に近づいたり、からかったりなどをしなくなっただけだ。

当然その空気をアビゲイル達も感じ取っていた。

というより、アビゲイルが教室に姿を現した直後に教室がシンと静まり返れば誰でも気づくことだろう。

「なんだか私、怖がられてるわ……」

「そうね……でも気にしない方がいいわよ」

「やっぱりアレはなかなかショッキングだったものねえ」

ルイズが慰め、キュルケが思い出しながら言う。

自分の本能がどれだけアテになるかは分からないが、あのタバサを『危険』と言わしめたあの魔法は本当に危険なものだったのだろう。アビゲイルの表情に影が指し始めると、ギーシュがフツと笑って口を開く。

「安心したまえ。たとえ君がどんな力を持っていたとしても、僕は気にしないよ」

「でもあなた速攻で倒されてたからよく見てなかったんじゃないの？」

「そ、そうよ。はっきりと見たら、怖がって友達じゃ居られなくなるかも……」

モンモランシーの最もな突っ込みに対してアビゲイルも同意する。

しかしそれでもギーシュは表情を崩さぬまま気障ったらしく薔薇を取り出してアビゲイルは差し出した。

「ならばここに誓おう。何があっても僕は君の友であり続けると」

君との約束もあるしね、と付け加えて笑う。

元々ギーシュの顔は整っており一年生の女子にも人気な上、こう言った気取った台詞にもあまり違和感が無い。

アビゲイルは嬉しさと、少しの照れで顔をほんのりと赤らめて「ありがとう」と言うのとギーシュの差し出した薔薇を受け取った。

一方のルイズ達の反応と云えば、

「な……なんかムカつくわねなんでかしら」

「奇遇ねルイズ。あたしもよ」

元はと言えばこいつの所為なのに急にいい奴っぽくなりやがって……とひっそりと毒づいていた。

|||||

授業が終わり、さらに昼食を軽めにして終わるとアビゲイルとルイズは厨房に来ていた。

ルイズが昼食の前にシエスタに先ほどのパンケーキの件を伝えると、「分かりました！」と二つ返事で承諾してくれたのだ。

「待っていてくださいいね。直ぐにあつあつのパンケーキを焼いて頂きますから！」

「ええー……ふふ、楽しみだわ」

ぐつと両手で拳を作ってにこりと笑うと、シエスタも厨房の奥へと引っ込んで行き、事前に用意していたお皿の準備をしたり生クリームやメイプルシロップ、バターなどを用意し始める。

料理長であるマルトーも準備してあった材料を取り出し、大きめのフライパンの上に流し始めた。

実はルイズからパンケーキを作って欲しいと言われる前に厨房ではこう言った用意だけは着実に進められており、回復を祝う意味を兼ねて明日か明後日にでも厨房へ来てもらえないかとお誘いをかけるつもりだったのだ。

しばらくしてシエスタが「お待たせしました！」とかなり大きなパンケーキとともに厨房の奥から現れる。その大きさはルイズも目を見張るほどの大きさで、出来立ての表面はさくつといい感じに焼けており、ほかほかと立ち込める湯気の中に投入されたバターがとろりと溶け、美味しそうな香りが鼻腔をくすぐる。

「わ……凄く大きいわ。それにとっても美味しそう……！」

「どんどん召し上がってくださいいね。トッピングもいろんな種類を用意して見ました！」

ふふん！と得意げなシエスタの前には生クリーム、蜂蜜、チョコレート、アイスクリーム……などなど。バターの染み込んだパンケーキに合わせると最高に美味な面々が並んでいる。

これには思わずルイズもゴクリと喉を鳴らした。

アビゲイルはまずナイフとフォークで丁寧にし少し大きめの一口サイズに切り、バターが染み込んだだけのパンケーキを頬張った。

「〜〜！ 美味しい！ 凄いわルイズ！ 外はさくさくなのに中はふわふわなの！ バターの塩気が生地にあるほんのり優しい甘さを引き立ててこれだけでもいくらでも食べられちゃいそうよ！」

「へ、へえ、そんなに……」

「ええ、ええ！ あつ、この生クリームは甘さ控えめなのかしら。他

のトッピングと一緒にしても甘すぎなくて丁度いい……！　そして何よりアイスもさいつこうね！　熱々のパンケーキにひんやりとしたアイスクリーム！　この口の中で一気に溶け合う感じ……ああ、もうほっぺが落ちてしまいそう……」

「よ、良かったわね……」

ものすごい勢いで捲したてるアビゲイルに少々引き気味のルイズ。しかし本当に美味しそうだった為一口貰おうかと考えていたのだが、パンケーキに夢中になるアビゲイルに割り込むタイミングがなかなか切り出せずにいた。そんな隠されたルイズの葛藤を他所にアビゲイルはお皿の上のパンケーキを全部食べきってしまう。

「ふう……お腹いっぱい。　ちよつと食べ過ぎてしまったかも……」

「……ええ、まさかあの量を全部一人で平らげるとは思わなかったわ私もびつくり」

アビゲイルが幸せそうに目を細めお腹をポンポンと撫で、ルイズは結局一口も食べられず心の中で涙を垂らした。

シエスタはそんな二人の様子を見てくすくすと笑いながら二人分の紅茶を淹れる。

「ふふふ、お気に召したようで何よりです」

「ええ、本当に美味しかったわ……ありがとうシエスタさん。　コツクの皆様にも何かお礼をしたいくらいよ……」

うつとりとしたため息を吐き、紅茶の香りを楽しんでからカップに口をつける。　良質な茶葉で作られたそれは甘くなった口の中をすつきりとりセットしてくれた。

「ははは！　そう言ってくれと嬉しいねえ！　礼なんていいさ、むしろこつちがあんたに礼をする意味で作ったんだ」

アビゲイルは声のした方へと振り向くと、そこには快活に笑う腕を組んだ大熊——のような男が立っていた。

腕の太きなどまるで丸太のように太く、それでいて身長はこの場にいる誰よりも高い。　大人の男、という括りで見ても、コルベールよりも断然大きいことからその身体の巨大さが凄まじい事を伺えるだろう。

アビゲイルは内心でかなりビビっていたが、それをおくびに出さないように気をつけながら口を開いた。

「え、ええと、あなたは？」

「おっとすまねえ、自己紹介がまだだったな。俺はここの調理場の長をやってるマルトーってんだ」

「私はアビゲイルです。マルトーさん、今日は美味しいパンケーキをありがとうございます！ ……あの、礼をする意味で作ったってどういう事ですか？」

「ああ。それはだな…」

実は昨日の騒ぎの中には他の給仕係のメイドもおり、厨房の方にも決闘の事が伝わっていたのだ。

シエスタを庇い、貴族に何度も打ちのめされても、歯を食いしばり果敢に立ち向かっていく幼き少女。

その姿に平民として勇気づけられ、そして人として胸を打たれたのだという。

「……でも私、結局最後はよくわからない力で勝ちちゃったわ」

「おいおい、そんな指摘は野暮つてもんだぜ、『我らが希望』。さつきも言ったが俺たち平民はあんたのその姿勢に感動したんだ。あんたがどんな勝ち方をしたかなんて些細な事よ」

「ええ……、え？」

マルトーの言葉に納得しようとしたアビゲイルだったが、なんだか妙な呼ばれ方をした気がする素っ頓狂な声をあげる。

「そうね……私だってアビーの言ってくれた言葉に結構救われたのよ？」

がははと豪快に笑うマルトーにルイズも同意する。

「そ、そうなの…？」

「ええ……だから私からもお礼を言わせてもらおうわ」

ルイズはにっこりと爽やかな笑顔をアビゲイルに向けてこう言った。



「ありがとう、『我らが希望』」

「やっぱり聞き間違いじゃなかった!!?」

この後マルトーや厨房の面々に普通に呼んでもらうように説得し、そしてパンケーキを一口も食べられなかった事を根に持ったルイズを宥めるアビゲイルなのであった。

## 15：一日の終わり

「はあ……なんだか久しぶりにこの部屋に戻ってきた気がするわ」

「あんたが来てから何だかんだずっとドタバタしてたものね」

アビゲイルは部屋に入ると窓に腕を乗せたため息を吐く。

思い返してみれば初日は気絶し、翌日は授業での一件と決闘騒ぎ。そしてその後は保健室で数日動けずにいた。

今朝の呼び出しを除けば、今日の一日は至って平和な日だったと言えるだろう。

「どう？…この世界でやっていけそう？」

「そうね……」

アビゲイルは眩き、窓の外へと意識を向ける。

窓の外の景色をこうしてゆっくり眺めるのも初めてだろうか。

空を見上げると、そこにはいつも通りの月が二つ妖しく輝き、部屋の中へと月明かりを届けていた。

アビゲイルは窓から入るまだ涼し気な春の風に当てられながら気持ちよさそうに目を閉じ、くすりと笑う。

「記憶もないし、帰り方も、あの力の事も何もわからないけど……全然平気よ」

「それはどうして？」

「だって、皆が居てくれるもの。だから今日もとっても楽しかったわ」

「……ふふ。それなら良かったわ」

アビゲイルが浮かべるのは晴れ晴れとした、ひまわりの様に明るい笑顔。

召喚した翌日に目を覚ましたあの日のような、恐怖で怯える表情などどこにもなかった。

ルイズはつい嬉しくなり、つられるようにして微笑みを浮かべてからベッドに腰を掛けると、アビゲイルが「あっ」と声をあげた。

「ルイズ、お願いがあるんだけど……」

「？ どうしたのよ」

「この世界の文字を教えて欲しいの。言葉は何故か分かるんだけど、文字が読めないからちよつと不便で……」

「……たしかに色々問題よね。とはいえ、流石に言葉を一から教えるとなると何か良い練習になる本とかが欲しいけど、学校の書庫に置いてあるような本じゃ難しいかしら」

うーん、とルイズは暫くの間唸り、それから閃いたと表情を明るくした。

「じゃあ、今度の虚無の曜日には王都へ行きましょう。本屋を探せばきつと子供向けの絵本とか、読み書きの本が有るはずだわ」

虚無の曜日——と言えば、休日の事であるとギーシュが言っていた。

授業の無い休日は王都へ出て様々な娯楽や買い物をするのだとか。

「王都っていうと……トリスタリア？ だったかしら。白石作りの建物が立ち並ぶ美しい街だってギーシュさんから聞いたわ」

「そうよ。丁度色々揃えなきゃいけないものもあったし、丁度良かったわ」

「ふうん……？ 揃えなきゃいけないものって？」

何だろうか？ と興味本位で尋ねてみると、ルイズは何とも言えない表情を浮かべた。

「あんたの服とか下着とか。ずっとそれを着続けて、私の下着を借り続けるっていうなら別にいいんだけど」

「……そ、そうね。いつまでも借りるわけにもいかないし……この服もシエスタに洗ってもらったり縫ってもらったりはしたけど、もう流石にボロボロで生地が駄目かもしれないわ……」

召喚される前から破れていた部分を縫い合わせ、煤と血がべつとりとこびり付いていたものを何とか落とした翌日、ギーシュとの戦闘によつて再び泥まみれになり生地の間隙のいたるところが薄くボロボロになってしまっていた。

流石にこのレベルになると何度縫い合わせてもすぐに破れてしまうので、もう新しい物を買った方が圧倒的に効率が良いだろう。

何となくデザインがとても気に入っていたのでアビゲイルは少し

残念な気持ちになったが、破れてはシエスタに修復してもらおう、というのは流石に申し訳ないのであきらめることにした。

「それに折角の休日なんだから、この国の王都がどんなところなのか色々見て回るって言うのも面白そうでしょう？」

「ええ。……そうだわ！ それなら他のお友達も一緒に呼んだらどうかしら。キュルケさんとか、お洋服見たりするの好きそうだし、ちよつと今から聞いて——」

「待ちなさい」

アビゲイルが何気なく提案すると、ルイズの顔から急に笑顔がすつと消え、何とも言えない威圧感の様なものを纏った表情になった。

「え？」

「そこに座りなさい」

「な、なんで……？」

「そこに座りなさい」

「……………はい」

これは間違いなくお叱りを受けるパターンの奴だわ。

とアビゲイルは悟ったが、なぜ急に我がご主人様の機嫌を損ねてしまったのか、それは全く分からなかった。

先ほどまで妖しくも美しかった月明かりは今となつては魔王降臨のバックライトの様になり、ただただ恐怖感を増長させるだけになつてしまった。

ルイズは眉をびくびくと痙攣させ、猛り狂うルイズの本性が今にも暴れ出さんとしていた。

「一つ、誤解があるわ」

「誤解？」

「キュルケと友達だつて所よ。

私とあいつはいわば宿敵！ 水と

油なのよ！」

ああ、とアビゲイルは教室でキュルケに初めてルイズの事を聞いた時の事を思い出した。

「…………ヴァリエール家とツエルプストー家は因縁の相手だから」

「そうよ！ だからあいつと私がと、とと友達だなんて変なこと言わないでよね!!」

「その割には、何だかんだでお話ししてるし……あの時の後だって、鍊金の授業キュルケさんがルイズの事を心配していたわ」

「なっ……し、しし知らないわよ！ 何で私があいつなんか心配されなきゃなんないのよ！」

驚き、顔を真っ赤にして怒るルイズ、しかしその顔の赤さは怒りではなく、どこか嬉しそうな、恥ずかしきのようなものが混じっていた。

このツンデレめ……

アビゲイルはため息を吐き、じとつとした目をしてルイズに言った。

「ルイズ、素直じゃないのね」

「……へ、へえええ、ふーん。 ご主人様に向かってそんなこと言うんだ。 まるで私があの子と仲良くなりたみたいに思ってる??」

「ええー！ ルイズだって本当は仲良くなりたいて思っていたたたたたたたたたた！」

「……………」

「む、無言で頭をぐりぐりするのやめてえ！」

両手の拳をアビゲイルの両こめかみにグリグリとおしつけるルイズ。

意外と力がこもっていた為アビゲイルはこめかみの痛み<sup>に</sup>涙を流しながら身をよじっていた。

結局、キュルケ達を呼ぶと言う考えは却下となり、虚無の曜日<sup>に</sup>二人で王都へ行く事に決まったのであった。

|||||

コルベールは夜の書庫で一人、ルーンについての本を読み漁っていた。

それは学院長であるオールド・オスマンが警戒する金糸の髪を持つ少女、アビゲイルの胸元に浮かんだルーンのスケッチが珍しい文字を刻んでいたからだ。

もしかしたらスケッチを担当してくれたロングビルが物凄い下手で、全く形が違うと言う可能性も無くはない。

だがコルベールの中には何か『予感』のようなものがあつた。

「……………」

コルベールは眉間に皺を寄せてもう一度本の表紙を見る。

『始祖ブリミルの使い魔たち』

それがこの本の名前だ。

そしてそこにはブリミルの使い魔達を表す歌が記されていた。

神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に握んだ長槍で、導きし我を守りきる。

神の右手がヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空。

神の頭脳はミヨズニトニルン。知恵のかたまり神の本。あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す。

そして最後にもう一人。

記すことさえはばかられる。

「……………うむ、流石に私の杞憂だったか……………伝説の使い魔など、おとぎ話の世界か」

コルベールはホツと息を吐き本を閉じる。

珍しいルーンではあつたが、人間の使い魔などそれ自体がまず珍しい事なのだ。ルーンの形が多少珍しくてもそれは当たり前のことなのだろうとコルベールは思った。

「ミスタ・コルベール。何か見つけましたか？」

「おお、ミス・ロングビル。残念ながら私の杞憂だったようすな。

人間の使い魔であり、珍しいルーンを持つ、見たこともない魔法を使う少女———もしや、と思つたのですが」

「……………『始祖ブリミルの使い魔たち』ですか」

「貴女も読んだ事が？」

「流し見した程度ですけどね」

くすりとロングビルが笑う。

コルベールはあまり女つ気のある生活をしていなかった為、美女の  
見せる妖艶な笑みに少しだけ顔を赤らめて「そうですか」と後頭部を  
搔いた。

その様子を見てロングビルは内心でほくそ笑み、更にコルベールと  
の距離を詰めた。流し目をしてみれば、コルベールの表情はますます  
赤くなる。

「そういえば、オールド・オスマンから宝物庫に『あるもの』を取りに  
行くよう頼まれたそうですね。その『あるもの』とは一体なんなの  
ですか？」

「え？ ……あ、ああ。それはですな……」

この話をしているものかと一瞬頭の中に迷いが生じたが、ロングビ  
ルから香る良い香りに惑わされ、まあいいかと思ってしまう。

「私にも詳しい事は分かりませんが……どうやらその本の中には『混  
沌を祓う火炎』を呼び出す呪文が記されているらしいですぞ」

「……なるほど？ それ程までに強力な魔法なのですか？」

「恐らくは。火のスクエアメイジの生み出す火炎よりも強力な炎で  
あることは間違いないでしょう」

ロングビルは「へえ」と素直に感嘆の声をもらした。

それ程までに強力な火の呪文を唱えられるようになるのであれば、  
恐らく世界中のメイジたちが大金を積んで、否、借金を背負ってでも  
欲しがる代物だろうと容易に想像がついた。

「ではその本はとても貴重なのですね」

「そうですな。だからこそ嚴重に宝物庫にて管理していたのですが  
……」

コルベールは一端言葉を含み、そして言いづらそうにしながら言っ  
た。

「万が一あの少女がこの世界に混沌もたらす時が来たら、その時は迷  
わず『混沌を祓う火炎』を呼びださなくてはなりませんな」

## 16：王都へ行くこう！

ちゅんちゅん、と小鳥がさえずり、その声でアビゲイルは目を覚ます。

ふわあ、と小さく欠伸をしてから両手を上げて伸びをし、隣を見てみればまだルイズはまだ眠っているようだ。

今日は虚無の曜日、即ち王都へ行く日だ。

アビゲイルはわくわくとした気持ちでカーテンを開けると、まだ外は少しだけ薄暗い。

遙か遠方は白んでいるため、これから朝日が顔をだし、朝の訪れるのだろう。

耳を澄ませてみれば、人の喧騒や生活音はほとんど聞こえない。

まるで自分だけが今こうして目覚め、清澄な朝の空気を吸っているかのように思えて、不思議と気分が高揚してきた。

「まあ、そんなわけないんだけどね」

この時間であれば、既にシエスタ達は起きている筈だ。

貴族たちの洗濯や朝食を作ったり運んだりする使用人はおそらく休日でも日頃の習慣で起きてしまっているだろう。

アビゲイルは暫く朝の爽やかな風を浴びてからベッドへと腰を下ろす。

ルイズは相変わらずすうすうと寝息を立てて眠っていた。

その寝顔にはいつものツンと周りを突っぱねるような表情がないため、いつも以上に幼く見える。

むに、と頬を突いてみれば、そのきめ細やかな肌に指が沈み、むにむにと柔らかい感触が返ってくる。

それと同時に「うーん」と言葉を発したかと思えば、すぐににへらとだらしなく笑みを浮かべた。

「可愛い。ルイズったら、どんな夢を見てるのかしら」

アビゲイルはくすくすと独り言を呟く。

そしてルイズが起きるまでの間に、洗顔用のお水を汲んでくることにした。



・  
・  
…

「おはようシエスタさん！」

「おはようございます、アビーさん」

二人が遭遇したのは水汲み場。アウストリの広場から出てすぐ左側の外壁に設置されているこの水汲み場にはライオンの像が立っており、ライオンの口から流れ続ける水が半月型の受け皿に延々と注がれるという仕組みになっている。

どんな魔法がかかっているのか分からないが、この受け皿から水は溢れ出さないのだそうだ。

「今日は何処かへお出かけですか？」

「ええ！ ルイズと一緒に王都の方へ行くの。シエスタさんにも直してもらったけど、もうこの服も生地が弱っちゃって、きつとすぐ破れてしまうだろうし…」

「そうですね…折角似合っていたし、勿体無くもありますけど」

王都へ行っても流石に同じようなデザインの服は見つからないだろう、と言う事でシエスタは残念そうにしながら言う。

アビゲイルが水を汲み終えてせつせと重たくなった桶を持ち運び始めようとした時、「あっ」とシエスタが声をあげ、真面目なトーンでアビゲイルを呼び止めた。

「アビーさん、王都は人が一杯です。迷子にならないようにしてくださいね」

「え？ ええ」

「それと知らない人について行っちゃダメですよ。アビーさんは可愛いから何をされるかわかりませんからね」

「え、ええ……」

「持ち物は肌身離さず、しっかり持っていてくださいね。人が多いと落としてしまうかも」

「……、分かったわ」

「怪しい道に入るのも危ないです。悪い人達が一杯いるかもしれない  
せんから、極力大通りを歩いてくださいね」

「……………」

「あと変なお店に」

「子ども扱いしすぎじゃないかしら!？」

アビゲイルは、自分が周りからどんな風に思われているのか、少し  
だけ分かった気がしたのであった。

・  
・  
・

「ふあ……おはよう、アビー」

「おはようルイズ。早く支度しないと、トリスタニアには此処から  
馬で2時間もかかるんでしょ？ あんまりゆっくりしていると向こ  
うについた時に時間が無くなっちゃうわ」

「わかってるわよう……………」

眠い。二度寝したい。と思いつつ、ルイズはもそもそとベッド  
から動き出す。

それからクローゼットに掛かっている服をゆっくりと着る間にア  
ビゲイルはせっせとルイズの髪を梳かしていった。

「よし、もう大丈夫よ。お水は汲んでおいたから、それで顔洗ってく  
ださいな」

「……………」

寝ぼけたままルイズはパシャパシャと顔を洗う。ひんやりと冷  
たい水を受けて、少しだけ眠気が飛び、目覚めてきた。

「はいルイズ、タオルよ」

「ありがとう……手際いいわね、アビー」

「そう？ 普通じゃないかしら」

そう言つてキョトンとするアビー。

自分から言つたことだが、年下の小さな女の子に身の回りの世話をやらせるというのはなんとも言えない罪悪感があった。

しかし、本人が特に嫌がつているそぶりがないためその話については心の中で保留にしておく事にした。

女子寮の外へと出て、そのまま馬小屋へと向かう。

外は雲一つない快晴で、春の暖かい風と共にほかほかと陽気な気分にかけてくれる。

今日一日は雨も降らなそうであるため、絶好のお買い物の日和と言えるだろう。

ルイズは馬小屋へと着くと太陽に向かってぐぐつと大きく伸びをし、それから大きく息を吐いた。

これから2時間の馬に乗ることになるので、軽いストレッチもかねて体を解さなくてはならない。

アビゲイルは馬へと近づくと、「お馬さん、今日はよろしくね」と軽く首筋を撫でてにこりと笑う。

馬は目を細め気持ちよさそうにしてから、準備万端だと言わんばかりにぶると鼻を鳴らした。

「…さてと。アビーは馬に乗った事は？」

「ない…と思うわ」

「じゃ、私の後ろに乗って。私の腰に手を回してしっかりと捕まっとなさいよ」

「ええ」

まずはルイズが馬に乗り込み、ルイズの手を借りるような感じでアビゲイルも後ろへと着く。

それからルイズの腰へとしっかりと手を回し、胸を背中にくっ付けるようにしてしがみ付いた。

「そんなくっつくほどじゃなくてもいいけど……」

「だ、だって落ちたら怖いわ…」

確かに馬の高さから見下ろす景色は、馬に乗ることに慣れておら

ず、アビゲイルのように身長の高い少女であれば（ルイズもだが）恐怖感を抱いても仕方がないだろう。

ルイズは何となく『頼られてる感』があつて気分が良くなり、ふふと上機嫌に笑った。

「……それじゃ、出発するわよ！ いざ王都へ！」

「お、おー！」

ルイズが声高らかに宣言し、アビゲイルもそれに合わせるよう声を上げる。

こうして二人は馬を走らせ、王都へと向かっていくのであつた。

・  
:  
:

「アビーちゃん、あつそびーましょ♪」

ルイズとアビゲイルの居る部屋の扉の前。

キュルケはコンコンと扉をノックをした後、スキップして居るかのようなトーンで言った。

なんせ今日は虚無の曜日。

そして外はそれを祝福するかのようになつた快晴。

こんな日に外で遊ばなくて何が青春か！

手始めに、アビゲイルに王都の案内をしながら色んな店に連れ回してやろう。

「………」と思つてアビゲイルを誘いに来たのだが、部屋の中からは返事が無い。

「……アビーちゃん？ まさか、ルイズも居ないの？」

もしや、と思ひ急いで窓の外を見ると、そこには馬に乗り走り出していく二人の姿があるでは無いか。

「あー！」というキュルケの叫び声も当然届かず、馬に乗る二人の姿はぐんぐん遠くなり、あつという間に見えなくなつてしまった。

「先を越された……！ あたしだつてアビーちゃんと遊びたいのに！」

「というか、他のお誘い全部断っちゃったのに！」

キュルケは痛恨のミスを犯す。

ルイズの部屋にいる、ルイズの使い魔であるアビゲイル。であれば、先を越されるのは当然なのだが、そうであるならばアビゲイルが自分のことを誘ってくれるだろうと期待していた。

おそらくルイズの差し金だろう、とキュルケは予想し歯噛みする。

「おのれルイズ……」

このままでは折角の虚無の曜日が台無しになってしまう……！

そこからのキュルケの行動は早かった。

急いでタバサの部屋の前に向かい、「扉をがちゃがちゃと開けようとし、鍵が掛かっていることを認識すると素早く杖を取り出して《アンロック》を唱えた。

カチャン、という音とともに扉を思い切り開けると、そこにはベッドに座ったまま本の世界に閉じこもる親友の姿があった。

「タバサ！お願いがあるの！」

「……………」

「ルイズ達を追いかけてほしいのよ！」

「……………」

「タバサあ~~~~！お願いよ~~~~！」

必死に懇願するが、まるで聞こえて居ないかのように無視をするとタバサ。

というより事実、キュルケの発する騒音はタバサの耳には届いていなかった。

《サイレント》

周囲の音を遮断する風系統の魔法であるが、タバサはこれを本に集中したいときによく使うのだ。

しかし——ゆるる。

視界の端に、どすんどすと駄々をこねる地震の発生源の姿を見て、タバサは小さくため息を吐いて魔法を解除した。

「……………」

「あたしの休日がピンチなのよ~~~~！」

キュルケが先ほどの説明をもう一度繰り返し、タバサはなるほど、と理解し、頷く。

そして友人の方を顔だけで向き、無表情のまま言った。

「頑張つて」

「ありがとう！……じゃない!!？」

キュルケは一瞬期待していたがずるつとずつこけた。

タバサには王都へ行く予定はないし、今日はゆつくりと部屋の中で本を読もうと決めていたのだ。

風竜であるシルフィードに乗っていけば確かにあつという間に着くことはできるが、用事もないのにわざわざあの人ごみの中に突撃するのは余りにも馬鹿らしい。

タバサは静かに平和な一日を過ごしたいのだ。

既に此方への興味を失い、本に顔を落としてしまったタバサに対して、どうしたものかと頭を抱える。

何かタバサを王都へと連れ出すいい方法はないか……と考えている間に、タバサは杖をもつて今にも《サイレント》の再発動をしようとしている。

「ま、まってー！じゃあ、その——」

必死に時間稼ぎをしようと試みるキュルケ。

しかしその瞬間、一つの閃きが降りてきた。

「そうだわ！ねえタバサ、あなたその本の前に読んでた本あったわよね。確かそろそろ発売するんじゃないか？」

「……」

それを口にした瞬間、タバサは少しだけ目を大きくして此方を見た。

「……そうだったかもしれない」

「でしよう？… ついでだから行きましようよ！ お昼も奢るから！」

「……、……わかった」

タバサはしぶしぶと言った感じで頷くが、既にその本を買うつもり満々の乗り気の状態になっていた。

とある平民の男が己の借金を返済すべく、巨大な組織を相手に命を

懸けたギャンブルをする——という本なのだが、毎回の様になかなか話が進まず、早く先が読みたいとやきもきさせられていたのだ。

「それじゃ、あなたの風竜の所に先に行ってるから、タバサも準備が出来たら来て頂戴」

「わかった」

タバサが頷き、キュルケは部屋を出る。

素早く準備を終え、「はやくはやく」と足踏みするキュルケの元へ向かうのだった。

## 17：異界迷宮王都トリスタニア

辺りには一面の人、人、人。

虚無の曜日を迎えた王都はここ一番の活気を見せていた。

街の道幅は意外と狭く、人々の生み出す流れは川のように一定だ。

店の呼び込みや街の人たちの笑い声、無数の足音や荷物を運ぶ馬車の車輪が回る音。ここでは自分の叫び声などちっぽけなものだ。

全てが喧騒の一つとして街の空気に吸い込まれてしまう。

——そう、ここは異界迷宮王都トリスタニア。

迷い込んだが最後、ちっぽけな少女一人など一瞬での内に孤立し、太陽が犠牲者を見放すその瞬間、この街に蔓延る悪意によってその身を引き裂くのだ。

後戻りなど出来ない。

白壁は牢獄のように少女の脱走を阻む。

それは怪物のもつ鋭い牙のように、逃れる事が出来ないのだ。

少女の身体は、既に牙が食い込んでいる。

ならば無力な少女に残された未来は——

などと無駄な事を考えながら、アビゲイルは人の流れからなんとか外れ、裏道へと続く細道へと出た。

ふう、吐息を吐き、呼吸を整える。

冷静になったアビゲイルはやれやれ、と言ったように首をゆっくりと振り、現状を一言で表した。

「迷子になってしまったわ」

冷静になんて、泣きたくなった。

否、既に泣いていた。

泣いてなんかない！と誰に向ける訳でもなく言い訳していたが、既に目尻にはじわじわと、大きな水の塊ができています。



『迷子にならないように』とシエスタに言われ、全く、子供扱いなんて！と少し反発していた自分が猛烈に恥ずかしい。

まさか、あの一瞬ではぐれることになるとは思わなかったのだ。

『ルイズ、凄いわ！人がいっぱい！』

『ふふん、そうでしょう。ここはなんて言っただってトリスティン王国の首都なんだから。王城の方へいったらもつと綺麗な景観が見られると思うわよ。ブルドンネ街の大通りならいろんな露店もあるし見て回るだけでも楽しいかもね。それと——』  
(あつーパンケーキの香りがする!!!)

「うう……ルイズごめんなさい……私がいい香りにつられたばかりに……」

約数分——数十秒の出来事だろうか。

見事パンケーキの香りに釣られて迷子と化したアビゲイルは猛烈に反省していた。

一瞬足を止めて周囲を見渡してただけではぐれてしまうなど全くと言つていいほど想像だにしていなかった。

今頃ルイズも驚愕して必死に自分の事を探しているだろう。

そういえばはぐれた時どうするか、なども何も決めていなかった。

もしかしたら本当に合流できないまま夜になってしまいかも……  
そう思うと、さらに絶望的な気持ちになってくる。

とりあえず大通りを歩いているといつか潰されてしまいそうなので脇に逸れて裏通りを歩くことにした。

裏通りは表通りに比べて意外と汚く、平然とゴミなどが落ちているようだ。

人の流れから切り離されたこともあって、まるで別世界に迷い込んだような気分になる。

綺麗な表通りと、薄汚れた裏通り。それはまるで、この国の現状

を表しているようだった。

何か使えるものは……と手持ちの物を探すが、持っているものはお金の一銭すら持ち合わせていなかった。それも当然だろう、12歳の少女にお金を持たせるなどという危ないことは流石のルイズもしない。

しかし今回はそれに苦しめられることになった。

ぐうぐうとお腹が悲鳴をあげても、軽食すら購入する事が出来ないのだ。

「どうしよう……」

壁に背を預け、ひとり薄暗い路地裏でごちる。

これでは今日の目的であった本を買うという目的も果たす事が出来ない。

途方に暮れて俯いていると、今自分が入ってきた通路側の方から足音が聞こえて顔を上げた。

するとそこにはヨレヨレの服を着た少し薄汚い男性が立っていた。

「君、迷子かい？」

「え、ええと……」

アビゲイルは後ずさりをして言い淀む。

この男、見るからに怪しい。それに知らない人について行つてはいけない、とシエスタも言っていた。

訝しんだ視線を向けていると、男は「おつと……」と苦笑いを浮かべて自己紹介を始めた。

「私はウォルター。この先で店をやっている者だよ」

「そ、そうなんですか」

なんだ、とアビゲイルは胸をなでおろす。お店をやっているとい

うのなら、怪しい人物ではない。

きつと自分が泣きそうになりながら表通りを歩いているのを見て、追いかけてきてくれたのだろう。

ウォルターと名乗った男性はにこにこ柔和そうな目をして此方を見てくるので、アビゲイルも少しだけ笑顔を浮かべて自己紹介を返す事にした。

「私はアビゲイルよ。……実はウォルターさんの言う通りなの。一緒に来た人がいるんだけど、はぐれちゃって……」

「そうか……それは大変だな。何か連絡を取る手段はあるかい？はぐれたら、どこに集まるとか」

「……決めてなかったの。私、王都に来るのは初めてで、まさかこんなに込み合っているとは思ってもみなくて。まさかこの年になって迷子になるだなんて思ってもみなかったわ……」

ため息交じりに言うアビゲイル。

男はそうかそうかと言い、にやりと笑った。

「ははは、君は初めてなのか。まあ、ここトリスタリアに来る客の中にはそういうった風になってしまう人も多いんだ」

「そうなの？」

「ああ、だが安心してくれ。迷子になった時のために用意された迷子保護施設があっちにあるんだ」

「本当!? そこへ行けばルイズに会える？」

「ああ。きつとその保護者さんもそこに向かっている筈さ」

よかった、とアビゲイルは安堵の表情を浮かべた。

王都にそんな施設があるとは一度も聞いたことがなかったが、まさかこんな所でその情報を手でできることになるとは思わなかった。

このウォルターという男性に巡り合わせてくれた神様に感謝しなくてはならない。

「ありがとう、ウォルターさん。その保護施設はどこにあるの？」

「うーん、そうだな……また迷子になっても可哀想だ。私がそこまで案内してあげるよ」

「あ、ありがとう……! ウォルターさんって、とってもいい人ね! 私感謝の気持ちで胸がいっぱいだわ……」

アビゲイルは両手を合わせて握り、ウォルターに感謝の気持ちを送る。

するとウォルターは再びはははと笑って、路地裏の更に奥側へと歩き出すので、それを追いかけるようについていった。

一時はどうなる事かと思っただけ、これでルイズに会える! と気

分を良くしていた為、男の呟いた言葉を聞き取ることができなかった。

「よせよ、俺が感謝したいぐらいだ」

・  
:  
:

「——私のお勧めの料理店があるのよ。学院の料理もおいしいけど、こつちもきつと気に入ると思うわ。服とか本を買いに行く前に、まずはそこで食事をしましょう」

ふふふ、と上機嫌で王都についてアビゲイルに解説をしていたルイズは横を見る。

するとそこにはキラキラと目を輝かせ、自分の話に耳を傾けたアビゲイルの姿が——ない。

後ろを振り返る。

しかし、何処にも居ない。

王都の説明をしながら歩き、アビゲイルから目を離れたのは本の数十秒ぐらいか。

その一瞬で何処かへ消えてしまうなんて——  
「アビー!? どこ行っちゃったのよー」

ざわざわと賑わう表通りでルイズは声を上げるが、返事は帰ってこない。というか、この喧噪のなかではたとえ返事が返ってきたとしてもそれを聞き取るのはなかなか難しいだろう。

ルイズはサアアつと血の気が引いていく。

小さな国とは言え王都は王都。地理を把握して居なければどんな迷い込んでしまうのは間違いない。

それにアビゲイルに対してどれほどの街が美しく、素晴らしい場所であるかは言ったが、この王都トリスタニアはそれだけではないとルイズは知っている。

伝統にこだわり続け、年を経るごとに弱り続ける国力。それはいつしか深刻な問題へと発展してしまっていた。

そして国力の低下は国民への生活水準の低下へと繋がる——  
——  
ようはこの美しい街並みの裏には治安の悪い部分があるのだ。

誘拐されるアビゲイル。

知らぬ間に奴隷商へと売り出され、更なる買い手へと売り渡される。

純粹で従順。あの透き通った海をそのまま閉じ込めたような碧眼と、金糸を束ねたような美しく触り心地のいい髪。そして太陽の花の妖精を連れてきたかのような可愛らしい顔。

—— さぞ高値で売れるだろう。

「やばいやばいやばい……！」

全身にじつとりと汗を掻き、最悪の結末を想像する。

流星にそこまで酷い事にはならないと信じたくはあったが、今巷で噂になっている悪名高き『土塊のフーケ』の話もあり、樂觀視はできない。

「とにかく探さなきや……取り敢えずさつき通ってきた道を戻って……」

ルイズは人の流れから強引に外れて逆走を始める。

何度か道を曲がっていくと、歩き速さは焦りと共に早くなっていった。

もしかして、裏道に入っちゃった……？という不安が過ぎり、顔を横に向ける。すると、

「きやあ!？」

「わっ!？」

どん!と思い切り誰かとぶつかってしまふ。

相手の体格が大きかった為、ルイズは思わず尻餅をついた。

「す、すみません急いでたので」

「ったた、もう気をつけてよね……」

ルイズが謝り顔を上げる。

するとそこには——

「げえ！ キュルケ!？」

「あらルイズじゃない！ やつと追いついた……じゃなくて偶然ね！」

「もう全部言ってるわよこのストーカー！ あんた男漁りだけじゃなくてそんな事も始めたわけ？」

「す、ストーカーって……私はアビーちゃんと遊びたかっただけよ！」

ルイズだけ独り占めなんてずるいわ！」

「ずるくないわよ！ 私の使い魔なのよ！」

口撃の応酬。流石は犬猿の仲と言った所だが、キュルケはふとルイズの隣にアビゲイルの姿がない事に気がついた。

タバサと一度別れた後、ルイズさえ見つけ出せばアビゲイルと共に行動しているはずなのですぐに会えると思っていたのだが――

「……あれ？ アビーちゃんはどこ？」

「っ！ そうだった、あんたなんか構ってる場合じゃないのよ！」

「え、なによという事？」

ルイズは説明する時間も惜しい、と言った感じだったが、仕方がないので説明する事にした。

話を聞いたキュルケは一瞬驚いたが、目の前に冷静さを完全に欠いている人間がいた為逆に冷静になることができた。

「ルイズ、取り敢えず落ち着きなさい。今日のアビーちゃんはいつもの服よね？」

「ええ……」

「なら、憲兵の方達に手当たり次第声を掛けてみましょう。あの子の容姿なら目立つし、案外簡単に見つかるかも知れないわ」

「……で、でも」

「それにアビーちゃんは一度ギーシユを倒したのよ？ 本当に危険なら、自分でなんとかできる筈でしょ？」

宥めるように言う言葉に対して、たしかに、とルイズは冷静になる事が出来る。それを見てキュルケは「大丈夫だから」と優しい表情を浮かべて手を差し伸べてきた。

――こうして見ると、憎きライバルの筈のキュルケには何だかんだ

助けられている気がする。今のキュルケには何時ものような揶揄  
いの表情はなく、純粹に自分を心配してくれているようだ。

ルイズは無償に恥ずかしくなり、目をそらしながら、

「……あ、ありがとう」

とその手を掴んだのだった。

## 18：狂気と怒り

アビゲイルはウォルターと共に裏路地の奥を進んでいく。

表通りではあんなに人が居たはずが今ではすっかりひとの姿が見えなくなってしまうていた。喧騒から切り離されたこの道は薄暗く、まるで異界に通じる道へ迷い込んでしまったような錯覚さえ覚える。

道を右へ曲がり、次は左へ曲がり……もはやここまでどうやってきたのか、その道順さえ覚えていない。

アビゲイルは少しずつ、そして確実に違和感を覚えた。

頼れるのはこの目の前にいるウォルターだけであつたが、男との会話もいつのまにか途絶えてしまった。

こちらからウォルターに「どんなお店をしているの？」等と質問をしたりしていたのだが、あいまいな返事のままはぐらかされてしまった。

「……ね、ねえウォルターさん。道はこつちであつているの？」

「ああ、間違いないよ。大丈夫、こつちだから」

にこり、と笑うウォルター。その顔は今でも柔和で——そしてべつたりとそれを貼り付けただけのような、そんな表情だった。

いやな予感がし、引き返そうとアビゲイルは言い出そうと思つたが、しかし彼の言っている事が嘘だと言う保証も無い。彼を頼らなければまた一人迷子で彷徨う状態に逆戻りするだけなのだ。

それに、急に彼を怪しい人物だと決めつけ此処で別れても、もう帰り道などどつくに分からなくなってしまうている。

もはや自分には彼について行く以外の選択肢は無いのだ。

更に暫く歩き、たどり着いたのは廃墟のような寂れた地区。

床の舗装は剥がれ、そこから見える土には雑草が無秩序に生えている。

その道の端には一頭立ての馬車が一台止められていた。

一般的なその馬車の荷台部分は外からは中が見れないようにしっかりと密閉されており、出入り口には南京錠が開きっぱなしで掛けられている。



「……こんな所に迷子用の施設があるの？　なんだかとっても寂れていて……まるで廃墟みたいだわ」

「はは、心配要らないよ。あそこに馬車があるだろう。あれに乗るんだ」

「え……？」

「此処からまた少し離れた所にあるからね」

ニコニコと笑みを崩さないウォルターはいつのまにかアビゲイルの後ろに立ち、馬車へと乗りこむように促す。

ここでようやくアビゲイルはどう考えてもおかしい、と認識した。

迷子を集める場所だというのにこんな裏道を通っていたこと自体が既に怪しかったが、そこからさらに遠くへと馬車で移動しなくてはならないなど考えにくい事だ。

ぴたり、とアビゲイルが足を止めると、ウォルターが怪訝そうな表情をする。

「どうしたんだい？」

「……私乗らないわ」

「ほう……なぜ？」

ウォルターの目が鋭くなる。先ほどまでの柔らかな表情を浮かべていた男とは思えない、恐ろしい顔だ。

アビゲイルはじわじわと恐怖心が湧きあがり、数歩後ずさりをした。

「それは……と、とにかく乗らないわ。本当にごめんなさいっ！」

とにかくこの場から離れたい、という一心でアビゲイルは言い訳を思い浮かべる事もなくウォルターにから逃げ出す事にした。

この男は、間違いなく自分を騙している。

あの馬車はおそらく誰かを誘拐するために用意した馬車なのだろう。

かけっぱなしの南京錠が何よりの証拠だ。

今にして思えば、『店をやっている』というのも自分を安心させるための方便だったのだろう。

店をしている、という社会的地位によって与える安心感是非常に大

きい。

事実、自分の警戒心を解く事に効果的な力を発揮してしまったのだから。

もつと早くに気づくべきだった、と後悔するが——それはあまりにも遅かった。

どん！と逃げ出そうとする身体に強い衝撃が走りアビゲイルは姿勢を崩して転倒する。

——突きとばされた。

そう認識しながらも、転んだ際に擦った膝と手の痛みを我慢して急いで浮かべて立ち上がろうとすると、後ろから羽交い絞めをするようにウォルターが組み付いてきた。

「逃がすわけ無いだろう？ こつちへくるんだ！」

「いやあつ！ 離して!! だ、誰か助けて!!」

「ははは！ こんな廃墟に人なんかこないよ！」

もはや取り繕うこともせず、悪意に満ちた表情で笑い、身動きをふさいでくる。

ウォルターの身体は戦士のように鍛え上げられた筋肉を蓄えているわけではなく、中肉中背。

しかし今争っているのは大人の男と子供の女。ここに生まれる圧倒的な力の差は大きく、無慈悲にもアビゲイルの抵抗を許さない。

「——ッ!!」

あの馬車に入れられたら、どうなってしまうのだろうか。

先の見えない恐怖からアビゲイルは必死になり、思い切り頭を振った。

するとゴン！と鈍い音がし、アビゲイルの頭に鈍痛が走ったと思えば拘束が緩み、振り返ってみればウォルターが苦痛の声を漏らしながら鼻を押さえてうずくまっていた。

アビゲイルの頭頂部が思い切りウォルターの鼻頭にクリーンヒットしたのだ。

ウォルターの鼻を抑える手の隙間からは抑えきれない鼻血がポタポタと垂れおち、ふらふらと身体をよろめかせてなかなか立ち上がれ

ずにいた。

逃げるなら今しかない！

あの様子なら立ち上がり、急いで走って来れるようになるまで少し時間がかかるだろう。

アビゲイルは震える足に強引に力を入れて再び走り出し——ウォルターから数メートル離れたところで急に背筋が寒くなり、咄嗟に振り返った。

刹那、右腕に焼け付くような痛みが走り、じわじわとそこから服を赤く染めあげる。

ナイフだ。

ナイフが襲ってきた。

まるでナイフが意識を持ったかのように宙に浮かびあがり、アビゲイルの右腕を切り裂いたのだ。

不幸中の幸いか、咄嗟に振り向いた動作でナイフは殆ど深く切り裂く事なく、肌の上を滑るように切り裂いた程度で済んだ事だろうか。

「っ、痛……！」

「このガキ……綺麗な状態で運んでやろうと思ったのに、ゆ、ゆるさねえ」

男は鼻から血をたれながし、憎悪を滾らせる。

しかしその口元を釣り上げて笑った。

「おお、お前を生かして送ってやるつもりだったが辞めだ！　ここ、ここで、ここで殺してやる」

「なっ……！」

「へ、へへ、悪く思うな。　お前が悪いんだからな。　お前が抵抗さえ

しなければ、お前は此処で死なずに済んだんだ！　この俺に刃向かうから……！」

「い、言ってる事がめちゃくちゃだわ……！」

「俺に逆らえる奴なんて居ないんだ……そ、そうだよ、俺はもつと強くなれる……貴族なんかよりも……俺は神に選ばれたんだ……お前を殺して連れて行けば、もつと、もつと」

男はギラギラとした目をし、口から涎を垂らしながら笑う。

こちらを向いてはいるが、その瞳にはとうにアビゲイルの姿など映していない。白と黒の絵具をひたすらに混ぜたような、深い狂気で彩られたその瞳は、見ているだけでこちらまでおかしくなってしまうそうだ。

アビゲイルは目の前の男の言葉が全く理解できず、床に膝をついたままゆつくりとこちらへ掌を向けてくるのをぼんやりと眺めていた。頭では逃げなくてはならないという事は分かっている。しかし身体が全く動かないのだ。

敵意を向けられる恐怖。

それはギーシュと戦ったあの時に感じていたものだ。

しかし今回の場合はそれだけでは済まない。

殺意だ。

男の持つ狂気が、見えざる刃となってアビゲイルを突き刺し、その場に縫い付けているのだ。

ゆつくりと宙に浮いたナイフがこちらへと向くのが見える。

喉はカラカラに乾き、それでいて目はガラガラと妖しく光る銀色の刃に釘付けになっている。

酸素を求める身体とは対照にひきつけを起こしたように呼吸が上手くいかない。

助けて。

誰でも良い、誰か……!!

心の中でそう叫んだ瞬間——ふと、自分の右手に小さな何か握られているのに気がついた。

いつそれを握り込んだのかは分からない。だが、この感覚に覚えがあった。

そして直感的にこれをどうやって使えば良いか、アビゲイルには分かっていた。

「死ね……!!!」

「いやああああ!!!」

宙に浮かんだナイフがアビゲイルの心臓を貫かんと真っ直ぐに飛来する。

アビゲイルは右手に握り込んだそれを無我夢中で捻った。

ぐちゃり。

という音と共に宙に浮かんだナイフが勢いを失い、アビゲイルの頬を掠めてから床に転がる。

ウォルターの目の前にはいつのまにか名状し難い触手の様なものがゆらゆらと揺れ動いていた。

何が起きたんだ、と理解が追いつかないまま自分の腕を見ると、そこにはぐしゃぐしゃに潰した布の塊がぶら下がっていた。

—— ああ、これは自分の腕か。

「あ……あ？あああああ!?!? 俺の腕……腕が……!!」

それを認識した瞬間、痛みが爆発する。それは耐え難い痛みとなって全身に走った。

触手が腕に直撃した瞬間、その余りにも強力すぎる衝撃に耐えられず、熟れたトマトのようにぶちゆりと肩ごと潰れてしまったのだ。

ウォルターは悶絶し、何度も失神しそうになりながら地面にのたうち回る。

肉塊の詰まった布袋からは夥しい量の血が流れだし、転げまわると同時に辺りを赤く染めあげた。

そしてこの状況を作り上げた少女は——

「——え?」

ただただ、呆然としていた。

アビゲイルはあの瞬間、自分の力を行使した。

そしてウォルターをギーシュの時と同じように吹き飛ばし、この場をやり過ぎそうとしただけだったのだ。

気絶はしなくとも、少なくとも逃げる時間は稼げるはずだ。そう考えて鍵を捻った。

それがまさか、恐怖のあまりあの時決闘の時よりも威力が上がってしまうと

は。

「っ、ち、違うの……そこまでするつもりじゃ……」

早く助けないと、あの男は間違はなく失血死する。

アビゲイルは慌ててウォルターに近付こうとして——触手が未だゆらゆらと揺れ、ゆつくりと弓形にしなりだし、ウォルターに狙いを定めている事に気が付いた。

「……い」

自分が恐怖して、力加減を間違えた？

それは違う。

この触手はもとより自分の制御下になど居なかったのだ。

今は唯、この触手が意志を持ち、目の前の男を殺さんといきり立っているのだ。

「駄目……駄目!! 逃げてえっ!!」

必死に叫ぶが、地面に倒れ込むウォルターは潰れた右腕を抑えて蹲ったままだ。

これでは猛り狂う触手の一撃から逃げ出す事等到底できない。

もう駄目だ、とアビゲイルはこの後起こるであろう更なる凄惨な光景を予想して、目をぎゅつとかたく瞑る。

直後、ごきごき、ぐちやぐちやと音を立て、ウォルターは右腕がそうなったのと同じように全身を潰されて死んでしまうのだろう。

(ごめんなさい……い……い……)

心の中で謝罪をした次の瞬間、

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース」

少女の声が聞こえてきたかと思えば、何処からともなく飛来した氷の槍、《ジャベリン》が触手目掛けて幾つも降り注いだ。

そこにあるだけでぶるりと身体を振るわせてしまう程に氷は冷たく、周囲の温度を急速に奪っていく。

幾つもの氷の槍に貫かれ、地面に縫い付けられた触手は徐々に凍り付き、動きを鈍らせる。

一体誰が、と声のした方を見てみれば、青色の髪、眼鏡を掛け、大きな杖を持つ小柄な少女——タバサがそこに立っていた。

「タバサさん?! どうしてここに……」

「話した後。それより、早くここから離れて」

「え、ええ……」

触手がいつ再び暴れ出すか分からない。

アビゲイルが頷くとタバサは《レビテーション》を使ってウォルターを浮かせる。いつのまにかウォルターは気を失っていたため、なんの反応もなくふわりと宙に浮かび、二人は急いでこの場を離れる事にした。

二人は気づかなかつたが、背後ではいつのまにか触手が消えていた。

## 19：少女達と賭博場

あれから少し離れた場所へ移動し、タバサはアビゲイルにあの場で何があったのかを聞いた。流血沙汰になってしまったが、相手は先に明確な殺意を持って襲いかかってきたのだ。片腕で済んだのならむしろ慈悲があったと言える。憲兵に突き出せば後のことは勝手にやってくれるだろう。

《ヒーリング》で簡単な止血を施されたウォルターはぱちりと目をあけ、意識を取り戻す。それから腕の痛みを再び思い出し、ぐうう、と呻き声を上げる。

「いあ……いあ……くとうるふ・ふたぐん……にやるらとてつぶ・つがー

しやめつしゆ……何故だ……俺は神に選ばれたんじや無いのか……なあ……」

「……！」

その声は弱々しく、神に縋るように言葉を繰り返す。

治療を施したため、死ぬことはない。

だかその表情は死よりも深い絶望を宿していた。

アビゲイルとタバサはハツと驚いた表情を浮かべる。

二人は全く異なる場所で、似たような言葉を聞いた覚えがあったのだ。

アビゲイルの場合はギーシュとの決闘の最終局面。頭に響いた

言葉だ。

その言葉を口にする度に心に虚空が宿り、身体が満たされていく感覚に襲われた。その感覚は暖かくも、冷たくもない。しかし父の腕の中で眠りに着く赤子になったような心地よさがあった。

タバサの場合は約3年ほど前——家族が崩壊した時か。

あれは確か叔父の連れてきた女だ。紫陽花のように淡い紫色の髪をした女がそのような事を言っていたような気がする。

当時、意味が分からずに首を傾げていた自分に対してニツコリと笑みを浮かべ、こうも言っていた。



『ニャルラトホテプを崇めよ』と。

「っ！ その言葉……何処で聞いたの」

「……？ なんだ、お前は……」

「いいから私の質問に答えて。 誰にきいたの」

「……教えてもらったんだよ……黒い恰好をした神父に……」

タバサは記憶と食い違い、怪訝そうな表情を浮かべる。

「神父？ ……女じゃないの？」

「見間違えるわけない……あれは男だ。 あの男は、言ったんだ……」

『君は神に選ばれた。 我が神の眠りに君の祈りが届けば、君はこの夢の外の全てを支配できるだろう』と……」

「……良く分からない。 他には何か聞いたの？」

「何も……そのナイフだって、その男から渡されて使い方を教えてもらっただけだ……」

ウォルターは一度言葉を区切り、もしや、と言った様子で逆に問いかけてくる。

「おまえは……知っているのか……？」

「……知らない。 私は、何も知らない」

タバサは悔しそうに眉を潜め、下唇を噛む。

この男の言う神父が指し示す神と、あの紫陽花の髪色をした女の言う神。

この男の口ずさんだ言葉と、アビゲイルが決闘の時に口ずさんだ言葉。

それらの情報は余りにも断片的過ぎて、うまく繋ぎ合わせることができない。

強引につなぎ合わせるとしたら——そう、アビゲイルの持つ未知の力がその未知の神の力だ、という予想だろうか。

もしその予想を立てるのならば、彼女の記憶喪失が嘘だと疑い、アビゲイルをここで問い詰めて真実を吐かせるのも良いだろう。

だが、男の潰れた腕を呆然と見ながら、今にも罪悪感で押し潰されてしまいそうな彼女の表情を見てそんな事をする気にはなれなかった。

タバサはこの一瞬でどつと疲労した気分になり、ため息を吐く。それからアビゲイルを連れて憲兵を呼んでくることにした。今ここで考えても、良い結論が出そうにない。

タバサは杖を動かして、男の服を地面に凍り付かせる事で身動きを封じる。

それから地面に転がっているナイフを拾い上げると歩き出した。

「行こう」

「え……？」

「憲兵にこの人を突き出す」

「……そうね」

呆然としていたアビゲイルだが、タバサに声を掛けられて戸惑ったような表情を浮かべて返事をした。

それから間もなくして、二人は憲兵を見つけ出す。

事情を説明してから再び戻ると、触手は消えていた。

ほつと二人は胸を撫で下ろした後、あのウォルターという男については任せることにした。

「……」

「……」

タバサは再び裏通りを歩き出し、アビゲイルは道が分からないためそれを追いかけるように後ろにくっついて歩く。

その間二人には全く会話が無く、唯ひたすらに気まずい沈黙が続く時間だけが続いた。

しかしそれを先に破ったのはアビゲイルの方だった。

「……あ、あの、タバサさん」

「……何？」

「その……さつきはありがとう。もしあのままだったら、私……」

アビゲイルは言い淀み、スカートの裾を手の平で握りしめる。

タバサは『殺していたかもしれない』と言うアビゲイルの言葉を待たずして再び前に向き直り、歩き続けた。

「その力は危険」

「……ええ」

「だから、何か他に武器があった方が良くかもしれない」

「ぶ、武器……？」

「そう。あなたは見た目が弱い。だけど内側にはメイジよりも強力な力を秘めている。制御できないのなら、また今日みたいな事が起きるかも知れない」

「見た目が弱いだなんて初めて言われたわ……でも、確かにそうかも……」

ちらり、とタバサの方をみる。

タバサは自分よりも身長が低く、それでいて華奢だ。

それなのに自分よりも頼り甲斐があり、強そうに見えるのは——おそらくあの大きな杖の所為だろう。

見た目が弱い、はなんだか釈然としない気持ちではあったが、確かに一理あると思えてしまった。

そんな事を考えているうちにタバサ達は曲がり角を曲がって人通りの多い場所へと出た。

「武器を売っているのはこっち」

「今から行くの？ 私お金持ってないし、ルイズだって武器を買う予算なんて持ってないかも……っていうか、あったとしても買ってくれるかしら」

「……でも、早めになんとかした方が良い」

これはアビゲイルの為——と言うよりは周りの人間の為だ。

再びあのような事があれば、先ず人が死ぬ。

正当防衛だとはいえ、街中であのような怪物を召喚して暴れさせれば、憲兵はどっちが悪いと言うかは明白だろう。

続いている責任は、使い魔の主人であるルイズへと波及する。

おそらくルイズの性格からして、アビゲイルを守る為に必死の擁護を続けはするものの、上手く事態を収める事ができるようには見えない。

アビゲイルは重要な参考人なのだ。

もし王都の牢獄に幽閉されるような事があれば、家族を崩壊させたあの事件についての間接的・手掛かりさえなくなってしまう。

暫くは彼女の傍で、彼女の持つ力について調べなければならぬ。情によるお節介と言うわけではなく、打算的な考えを持ったまま、タバサは自分の持ち金を確認する。

……流石に武器を買うほどのお金は持ってきていない。

武具というのは非常に高いものだ。

金貨<sup>エキユ</sup>200、新金貨で300程といった所か。

タバサは「仕方がない」と言ってお金の入った袋を再びマントへと収納する。

「……お金を稼ぐ」

「え……？ 日雇いとかで賃金を稼ぐって事？」

「ついてきて」

困惑するアビゲイルをよそに、タバサは答えないまま早歩きで再び裏通りの方へと戻り始めた。何度か道を曲がると、一角に地下へと降りる階段が見えてきた。

『バー・エスポワール』

「バー……?! お酒屋さんじゃない！ ダメよ、未成年がこんなところ……!」

「この奥に用がある」

「どう言う事……?」

「見せた方が早い」

そういうと階段を降りて奥へ進んで行く。

アビゲイルは「まってよお！」と情けない声を上げてからタバサを追いかけた。

中に入ると見えてくるのは綺麗に掃除の行き届いたたつて普通のバーといった感じの光景だ。

昼だというのに、酒を飲む大人達がちらほら見え、その間を縫うように更に奥へと進んでいく。

「な、なにやってるの……?」

たどり着くとそこでは大人の男達が1つのテーブルを囲っていた。

中央からはカランカランと何かが転がり、硬いものにぶつかる音が聞こえる。

「チンチロリン」

「チン……何？」

疑問符を浮かべるアビゲイルに、タバサは説明してあげる事にした。

——チンチロリンとは、サイコロ3つと受け皿さえあれば出来る簡単なギャンブルであり、ルールも単純。親が何人かの子と賽の目によって決められた強さを競い合うというシンプルな内容となっている。勿論場所によってルールは増えたり減ったりするのだが、ここでも多少違うようだ。

掛け金の張り方としては、子が張りそれを親が受ける、という感じだ。

勿論親をパスする事も出来るが、親を受ける場合にはどんなに勝っても2回までとされ、1回目に親が1の目・目無し・123・シヨンをベンを出したらそこで親は終了。それ以外は必ず2回目の親をする。

最初に親が賽を振り、その後に子が順番に振っていくのだが、親の目に関係なく子も振ることが出来るようになっていく。

「まって、つまりギャンブルってこと？　タバサさん、まさかギャンブルでお金を増やすつもりなの!？」

アビゲイルが驚愕の声を上げると、チンチロリンに集中していた怖い大人の男達がじろりと此方をみてる。

アビゲイルは「ひい……ご、ごめんなさい」と上ずった声を上げてから声のボリュームを落として会話を続けた。

「ダメよギャンブルなんて……失敗したらお金がなくなっちゃう」「心配ない」

タバサはそれだけ言う顔の怖い大人達の中に混ざっていく。

「子供がこんなところ来てもいいのかわ？」などと冷やかしくそ受けたいたが、金を持って席に着くものは皆勝負師。

拒否する事もなく、すんなりと受け入れられてしまった。

なにが大丈夫なのか、その自信は一体何処から湧いてくるのか——  
——とここでアビゲイルはハッとする。

タバサは風系統のメイジだとキュルケが言っていたのを思い出した。

先ほどの氷の魔法は氷系統と言うわけではなく、水系統と風系統のライン、もしくはトライアングルだと言う事だ。

……つまり、タバサはサイコロに風を送ってイカサマするつもりではないか？

アビゲイルはそれに気づいた瞬間、あわわと口に手を当てる。

(ダメよイカサマなんて悪いこと……！ ああでも、お金も必要だし……、……ま、魔法だつて実力のうちつて事でいい、のかも？ そうよ、一回勝つぐらいなら……神様もお許しになるわ……たぶん……！)

イケナイ事だとわかっていても、どうしてもお金は欲しい。

うろう、と頭の中で天使と悪魔が戦っているが、7対3——8対2で悪魔の優勢だった。

「よし、始めるぞ。その前に嬢ちゃん、一応杖は連れの嬢ちゃんに預けてくれるかい？ 貴族様の大事なものを手放せさせるのは悪いが一応イカサマ防止の決まりごとなんでな」

「知っている」

タバサはコクリと頷くと「持っていて」とアビゲイルに杖を渡した。

「えっ？ えっ、ええ……え??」

アビゲイルは自分の手に握られた杖をみて信じられない物を見る目でガクガクと震えだした。

『持っていて』って、そんな。

まさか。

まさか……普通にいくつもりなの??

自分のお金ではないとはいえ、目の前でお金が散って行くと言うのは中々に辛いものがある。アビゲイルは急激に気分が悪くなり、動悸が激しくなると同時にじわじわと冷や汗が滲み出てくる。

一方のタバサは冷静——というよりは無表情を崩さない。

「さあ張った張った！ 今日の俺はツイてる。　どんだけ賭けてもらっても構わねえぜ」

へっへと大胆な事を言って笑うのは中々に華美な装いをした太った男性だ。

片手に握られている袋は勝負に勝って巻き上げた金と、もともと持ってきたのであろう金で丸々と肥えていた。

タバサはその肥えた袋を見て目を細め、少しだけ口元を緩ませる。

「どれだけ賭けてもいい……嘘ではない？」

「ま、勝てる自信があるなら、だけどな!!　無茶しろってんじゃないぜ？　お嬢ちゃんのお小遣い全部なくなっちゃ可哀想だからな！」

「そう……なら私は20金貨<sup>エキユー</sup>を賭ける」

タバサはマントのポケットから手持ちの袋を取り出したかと思えば、どん、とその全てをテーブルの上に置いた。

流石にそれは予想していなかったのか、男や周りの客たちもぎわ……ざわ……と響めきだす。

当然だろう。　トリステインの一人当たりの年間生活費が120金貨<sup>エキユー</sup>だと言われている。　その6分の1だとしても相当な額にあたるのだ。

「あああああああ!!?!　た、たば、タバサさん!!?!?　大丈夫!?!」

「任せて」

「違う!!　『タバサさん勝てる?』って意味じゃなくて、正気なのって意味よお!!」

「全然正気」

「そ、そんな『全然平気』みたいに言われても……!!」

アビゲイルはもはや冷静ではいられなかった。タバサという少女についてあまり知らなかったが、周囲の口ぶり、そして立ち振る舞いからもっと現実的で賢い選択をする少女だと思っていたからだ。

目の前でお金が溶けていく未来を幻視して、両目からは涙が出て溢れて止まらない。

「お、おい金髪の嬢ちゃん、泣くなよ……オレンジジュース奢ってやる

から」

「……だって……うう、あ、ありがとうございます……」

「まったく……本当にいいのか？ 青髪の嬢ちゃん」

泣きながらオレンジジュースをちびちびと飲み始めるアビゲイルを横目に、男はタバサに向かって再び確認を取る。

「当然。……賭博師ならば、一度賭けたチップは撤回しない」

「……そうか、そこまで言うなら俺は止めない。賭博師として……その勝負引き受けよう！」

超ハイレートの勝負が成立した事を男は高らかに宣言すると、観客達は普段では殆ど見られない光景にうおおお！と大いに盛り上がりを見せる。

他の参加者たちは当然静観する事にしたため、実質タバサと男の一对だ。

親である男はサイコロに念を送る様に集中力を高め、1度目のサイコロを振る。サイコロの行方に男や観客、アビゲイルまでもが器の中を凝視していた。

「からんからんと音を立て——そして静止した。」

「ろ、ろく……」

「おおおお！ 強いぞ！ やっぱり今日はツイてる！」

アビゲイルは意識がトびかけ、床にへたり込む。

男は勝利を確信してガッツポーズを作る。

周囲の観客も更なる歓声によって沸き立つが、タバサは何のリアクションも見せなかった。

「へへへ、悪いな」

「……早くサイコロを貸して」

「おう。頑張れよ」

既に勝利したつもりでいる男は上機嫌でサイコロをタバサへと手渡す。

タバサは掌でサイコロを少し遊ばせると、流れる様な手つきで器の中へと放り投げた。

カラカラ、カラカラと器の中を転がるサイコロ。



それはやがて力を失い――

赤い点を3つ並べた。

## 20：爆ぜる大剣

結局、あの子のギャンブルは男が親番を2回引き受けた所で終わり、タバサの手元にはエキ<sup>金</sup>キュー<sup>貨</sup>が300程詰まった袋が握られていた。

ピンゾロからのピンゾロ、五倍漬けからの五倍漬け。つまり本来であれば500程になるのだが、流石に男の手持ちの袋にはそんなに詰まっていなかったため、支払える分でキリのいい300を貰うことにしたのである。

「タバサさん、ギャンブル強いのね……」

「得意」

「得意ってレベルじゃなかったと思うわ」

アビゲイルは一瞬にして今日の稼ぎと軍資金の大半を失った男の絶望感溢れる表情を思い出し、なんとも言えない表情になる。

しかしタバサはそれはさておき、と言った風に気にも留めないで話し始めた。

「これで武器が買える。武器屋はこっち」

「え、ええ」

しばらく歩き進むと武器屋の看板が見えてきた。木の看板はすこしだけくたびれているものの、建物自体はそこまでボロボロと言わなければ無さそうだ。

武器屋の扉を開ける。

からんからんと鈴の音が鳴り、店主が此方を見た。

「いらっしやいませ。どの様な武器をお探しで？」

「……、何がいい？」

「え？ 私に振るの!？」

「あなたが握る武器」

タバサの無茶振りにアビゲイルは悲鳴をあげる。

「何がいい？」と聞かれても、何も握った事のないアビゲイルにとって武器の持つ特性など何も知らないのだ。精々剣は扱いやすい、槍はとても長い、ぐらいの認識だろう。

アビゲイルは暫く悩み、パニックを起こしながら言った。

「つ、使いやすい武器が良い！」

「はあ、使いやすい、ですかい……」

店主はなんと気も抜けた返事を返し、店の奥にある倉庫から武器を漁る。

見たところ貴族と平民の組み合わせの様だが、武具に関してはあまり詳しくは見えない。それに、話を聞く限り剣を振るうのはあの金髪の少女のようだ。どう見ても戦いを知らぬ華奢な町娘、といった感じで、武器などふれそうに見えない。

どうしたものか、と店主は頭を悩ませる。

店主は取り敢えず初心者が扱いやすそうな剣を渡してみることにした。

「初心者でしたらこいつなんかどうですか？ ブロードソードって言うんですが、突くもよし切るもよしのスタンダードな剣になつとります。騎士様の持つ様なロングソードよりは刀身が短いですが、その分重さも減ってるんでお嬢さんでももしかしたら振れるかもしれない」

「へえ……ちよつと持ってみてもいいかしら？」

「ええ、もちろん」

店主はアビゲイルの要望に答え、ブロードソードを手渡した。

アビゲイルがそれを受け取った途端、ずしりとブロードソードの重みが両手にのし掛かる。

刀身を鞘の外側へと抜き出してみればシャキン、という金属の擦れ合う音が聞こえ、刀身には照明の光がきらりと反射した。

それからギーシュの見せてくれた剣で武装したワルキューレの姿を真似て剣を構えて、縦へ、横へと何度か剣を振り回した。

ぶん、ぶんと風の切る音が店内に響くが、どれもこれも鋭さに欠ける。

店主の目から見て——誰の目から見ても剣に振り回されていた。

刃は振り下ろす瞬間にぶれてしまい、あれでは切っている、というよりぶん殴っているといった方が正しいかも知れない。

店主はなんだか幼い孫娘にせがまれて剣を貸してみた時の様な生暖かい気持ちに襲われ、頬杖をつきながらその様子を眺めていた。

アビゲイル暫く剣を振っていると、はあはあと息を切らして剣を下ろした。

「はあ……はあ……ど、どう?」

「あ……」

「……下手」

「うっ……仕方ないじゃない、武器なんて重たいもの振り回したことはないんだもの……!」

店主とタバサの視線が恥ずかしくなり、顔を真っ赤にして憤慨し、アビゲイルは店主に剣を返した。

「もつと軽いのではないの?」 例えば突き立てる用の細い剣とかがあるはずだわ……そう、レイピアだったかしら?」

「そりゃ細剣の類では軽そうに見えますがね……まあ、手に取ってみればわかると思いますぜ」

店主は再び奥へと引つ込み、倉庫からレイピアを取り出すとアビゲイルに渡す。

しかし、すらりとした細身な刀身とは裏腹にその重量は重く、ブロードソードを握っている時と同じぐらいの重みがあるように感じた。

「お、重いわ……」

「そりゃ刀身が1メートルほどはありますからね」

「……もつと短くて細い武器はない?」

「あるにはありますが、実戦には使えない練習用のものになりますぜ。そんな軽くて細いものを実戦で振り回そう物なら一瞬で壊れちゃいます」

「そうよね……タバサさん、どうしたらいいかしら?」

「とりあえず適当にいろいろ触ってみる?」

「……そうね。 店主さん、いいかしら?」

「ええ、そりゃ別にかまいませんが……『土塊のフーケ』に対抗するならそんな子供に武器を持たせるより、護衛を雇った方がいいのでは

？」

「フーケ??」

アビゲイルは聞き馴染みのない言葉に首をかしげる。

「土塊のフーケ。土系統のメイジで、貴族の邸宅に忍び込んで財宝を奪っていく盗賊」

「そうそう。しかも盗んだ後には必ず署名を残していくって噂ですぜ。そんなわけでフーケの襲撃を警戒して武器をお買い求めになるお客様が増えて、今こうして需要が高まっているってわけです。

……てつきりお客様方もそうのかと思ってきましたが、違いましたかい？」

確かにそういった事情があるのなら、こんな武器も使った事のないような少女に装備を買え与えるのは不自然ではない……のかもしれない。

タバサとアビゲイルは深く突っ込まれないようにするために、「まあそんなところです」と言葉を濁して返事をした。

棚に置かれた武器を改めて見てみると、その品質は良いものから悪そうなものまで様々であった。なぜ知識のないアビゲイルにもそれらがわかったかという点、武器の鏢の部分が欠けていたり、装飾の為の何かはまっていたであろう部分に何もなかったりなど、中古品であると分かりやすい目印があったからである。

先ほどのブロードソードとレイピアが店の奥から取り出されたのは、恐らく高価であるか、新品だった為だろう。

入り口付近に置かれた棚の中に詰められているもので特に酷いのは、錆にまみれて茶色くなってしまった剣だろうか。かなり大振りの剣で、自分には全く使えそうになさそうだ。

仕方がないので、さらに次の棚を見ようと移動する。すると先ほどまで見ていた棚の中でカタリ、何かが動いた。

「……え?」

ネズミか何かだろうか、と再び棚の方へと近づいていく。

しかしその音は徐々に激しくなり、カタカタカタカタとまるで金属と金属が噛み合う様な音が連続した。勿論その音に連動するかの



られた金具を激しく慣らした。

一方のアビゲイルも悲鳴を上げてすつ転び、タバサと店主も耳を押えて顔を顰めている。

「う、うるせえぞデル公！ 鼓膜がぶつ壊れるかとおもったじゃねえか！」

「ば、ばば、馬鹿やろおめえ!! 何て邪悪なもんを俺に触れさせようとか——」

怯えたようにまくし立てていたインテリジエンスソードだが、アビゲイルの姿を認識した途端にぴたりと止まった。

「いたた、なんなの……？ びつくりしたわ……」

「……あんだよ小娘じゃねえか」

「え？」

「全くビビらせんじゃねえよ！ いや、ビビッてなんかねえがな!!」

強がっているようにも見えなくもないが、インテリジエンスソードはケタケタと嗤い始める。

突然心臓が縮み上がるかと思う程の大絶叫をしたかと思えばこの態度。 流石のアビゲイルもムツと納得のいかない表情をしてインテリジエンスソードに詰め寄った。

「……もう、なによそれ！ 酷いわ！ 急に大声を出すなんて」

「へえへえ悪かったよ。 反省してるって、ハハ」

「全然反省してるように見えない！」

「うるせえやい！ 小娘がこんな所いないでさっさとお家帰んな！」

「あ、頭にきた……」

「おお？ やんのか！」

アビゲイルは再び立ち上がり青筋を浮かべてインテリジエンスソードの元へと近づいていく。

剣と人がどうやって喧嘩するつもりなんだ、と店主は内心呆れかえりながら店の奥の方へ引っ込んで行ってしまった。

「……邪悪？」

タバサはほつりと、小さく呟いた。

このインテリジエンスソードの言った言葉は余りにも突拍子もな





## 21：再会と帰宅

「……」

「……」

沈黙。

アビゲイルがインテリジェンスソードに触れた途端に、インテリジェンスソードが口らしき金具部分をガンガン鳴らして再び絶叫したと思っただら壊れてしまったのだ。

そして金具が思い切り吹き飛び、完全に不意打ちだった為タバサの額に直撃する。

出血こそしていないものの、ガン！という音がしたので相当痛そう  
だ。

「タ、タバサさん大丈夫…？」

「……」

額を抑えてしやがみこむタバサに対して安否を確認する声をかけるが、返事は帰ってこなかった。

タバサがゆっくりと顔を上げると、おでこが真っ赤になっており、それでいて両目には痛みの所為か涙がうっすらと滲んでいた。自分  
分がワザとやったわけではないが、何となく気まずい。

アビゲイルは暫く目を泳がせてから、インテリジェンスソードに声をかけてみることにした。

「インテリジェンスソードさん？」

「」

「……どうしたの？」

こちらからも返事が返ってこない。錆びた大剣はその刀身をピクリとも動かさず、まるで死体のように柵から落ち、床に横たわっていた。持ち上げてからコンコンと軽く指先で叩いてみても全く何の反応も返さない。

少し嫌な予感がしてきた直後、先ほどまで黙っていたタバサがゆらりと立ち上がり、口を開いた。

「死んだ」

「え……死んじやったの!？」

「悲しいことに」

「……そ、そんな……本当に?」

「本当に」

「わ、私何もしてないわ!　ただインテリジェンスソードさんに触れただけで……!」

淡々としたトーンでタバサが言い、アビゲイルはパニックになり震えながらタバサに詰め寄る。タバサはアビゲイルに服を引っ張られながら、「残念ながら……」と言わんばかりに静かに目を逸らした。アビゲイルはそれを見て愕然とする。まさかこんな所で殺人――殺インテリジェンスソードをしてしまうとは思わなかった。確かに口汚い剣であったが、だからと言って殺して良い理由にはならない。

タバサの服を掴む手から力が抜け、ずるずると床にへたり込んだ。

「なんてこと……私……また……?」

「お、おお?　どうしました?」

叫び声を聞いて奥から戻ってきた店主が不思議そうに出てくる。

タバサは床にへたり込んだまま呆然とするアビゲイルの代わりに事情を説明する事にした。

すると店主は「なんだ」とあつさりした声を出した。

別にインテリジェンスソードを破損したからと言って殺人罪にはならないし、商品を破壊してしまった事に対しても弁償代を支払ってくれば別にそれで良かったのだ。

アビゲイルは自分の中に渦巻いた暗い感情と店主のリアクションのギャップに

面食らったように目をぱちくりとさせた。

「それに『死んだ』とはいったけど、その表現は正しくない。正確には『居なくなつた』だけだと思う」

「そ、そう……でも居なくなつてしまった事には変わらないのね。

インテリジェンスソードさん……」

「事故だった。仕方ない」

自責の念で肩を落とすアビゲイルに対して、タバサは少しだけ慰めるように言った。冗談のつもりだったのだが、少しタイミングが悪かった。今のアビゲイルは『死』に敏感だったのだ。

タバサは店主にいくら支払えばいいかを問う。

通常の剣であれば200エキュールほどであるが、このインテリジェンスソードはボロボロだし、うるさいしで全く買い手のつかない売れ残りの剣だったために半額の100エキュールで良いと言ってくれた。

タバサは袋の中から100エキュールを取り出して支払い、「毎度」という言葉を背にしながら店から出ることにした。アビゲイルも釈然としない気分のままそれに続いて店の外に出ようとしたとき、バタン！と大きい音を立てて入り口の扉が開いた。

店の中に突撃してきたのは二人の貴族——ルイズとキュルケだ。ふわりとした桃色の髪はくしゃくしゃになり、額には汗が滲んでいる。先ほどまで走っていたかのように呼吸は荒く、その瞳がアビゲイルの姿を捉えると一瞬にして眉毛を釣り上げて詰め寄って来た。

「ア、アビーー！ やっと見つけた……!!」

「……!! ルイズー！」

「あんたね……今までどこほつつき歩いてたのよ！ ずっと探してたんだから！」

「ごめんなさい……私、迷子になって……」

「……何があったのよ？ ちゃんと説明して」

アビゲイルは俯き、ぽつぽつとあれから何があったのかを語り出す。

ルイズを見失い、しばらくの間さまよっていた事。

親切な男性が道案内をしてくれた事。

しかしその男が実は自分の事を騙っていた事。

——そしてその男を殺しかけた事。

そこまで語り、アビゲイルは言葉を詰まらせる。

ルイズ達に話した事で、先ほどまで意図的に考えないようにしていた事を再び思い出してしまったからだ。

——確かに自分の意思であの男を殺しかけた訳ではない。

しかしあの男の苦悶、絶望、絶叫、それらは全て自分に向けられたものだ。

もし、タバサが割り込んでいなかったら、恐らくあの男は人とも思えない様な肉塊へと変貌を遂げた遂げ、死んでいただろう。

自分の中に眠る何かが無慈悲にその触手を振り下ろした筈だ。

そうなった時、果たして自分はなんて言い訳を口にするのだろうか？

『私じゃ無い』

『ここまでするつもりじゃ無かった』

きっと自分はたった今そうしたように、何度もその言葉を口にするだろう。

例えそれが自分のせいで傷ついたルイズやキュルケの前だったとしても——

「——ビー、アビー、聞いているの?」

「……え?」

「大丈夫……? 顔色が悪いわよ」

いつのまにかルイズが自分に声をかけていることに気づかないほど、深い思考の中にいたようだ。アビゲイルは「何でもないわ」と笑顔を作る。

キュルケとルイズは怪訝そうな表情を浮かべて顔を見合わせた。

「ま、アビーちゃんが無事なら良かったじゃない。タバサも良く見つけてくれたわね」

「本屋へ行く途中だった」

実はキュルケ達はルイズ達を追いかけて街についた後、各々の目的の為に一旦別れた。

キュルケはアビゲイルを探しに行き、タバサはあの裏通りの奥にぽつんと立っている人気のない本屋に向かっている最中だったのだ。

アビゲイルは思考の海にそつと蓋をし、「そうだわ!」と無理やり大きい声を出して両手を叩いた。

「あたし達も本屋に用事があつたの。折角だからご一緒したらどうかしら！　ねえルイズいいでしょ？」

「いいわねアビーちゃん！　むしろ待つてましたって感じだけど。タバサもそれでいいでしょ？」

「私は構わない」

「……ま、まあ私も良いわ。　またアビーが迷子になつても困るもの」  
仕方がない、と言つた風のため息を吐いてルイズも承諾する。それからアビゲイルの方へと右手を差し出した。

「ほら、アビー」

「……？」

「手よ。　手を繋いで歩けばもうはぐれないでしょ？」

ルイズは急かすようにもう一度だけ差し出した手を動かした。

はぐれないように、というのは勿論建前と言うわけではないが、ルイズとしてはそれだけの理由ではなかった。　目の前の少女がどこか小さく、未だ迷子になっているかのように見えたからだ。

「……ええ、そうね」

アビゲイルは微笑み、ルイズの差し出した手をゆつくりと握る。

小さなアビゲイル手から伝わってくる温度は冷たく、それを包み込んで温めてあげるようにしてルイズはその小さな手を強く握りしめて歩き出した。

・  
・  
・  
…

「はーあ、結構買い込んだじゃった」

「ふふふ、　だけどとつても楽しかったわ」

「そうねえ、タバサも服を色々買うなんて珍しいんじゃない？」

「今日は稼いだから」

四人は楽しそうに歓談をしながら、日の傾き始めたブルドンネ街の大通りを歩いていた。

あれから一度昼食をとり、そこから本屋、服屋、装飾屋など目的の店からそうでない寄り道まで様々な場所に訪れ楽しい時間を過ごした。

いまやよれよれだったアビゲイルの服も新品の物となった。とはいえ、やはり周りの一般的な服とは少し浮いたような服をチョイスしたようだ。

特徴的だった帽子、黒、リボンの内、リボンは髪に結びつけ、全体的にやはり黒っぽい服装のまま。

首元には口元まで届きそうなほどに長めの布があり、両手の裾も前と同じようになり余裕がある。

しかしそれとは裏腹に、すらりと伸びた白い足は太ももの半ばよりも更に上あたりまで露出していた。

……なんだろう、この子の拘りなのだろうか。

そう3人は心の内に思ったが、似合っているしたので黙っておくことにした。

「荷物の殆どは学院に送ってもらうからいいとして……ああ、私たちここからまた2時間も馬に乗って帰るのね……」

「そうね……馬に乗る経験がなかったから楽しかったけれど、お尻と腰が痛くなるわ」

ルイズとアビゲイルはげんなりとする。

流石に2時間も馬の上で上下運動を繰り返すのは運動としてもなかなかハードだった。慣れているルイズと違って、アビゲイルは尚更その感覚が強いだろう。

これからの帰宅を想像して二人揃ってため息を吐くと、タバサは思い出したようにマントのポケットから白いハンカチに包まれたナイフを取り出した。

「……そう言えば武器。 やっぱり、何かしら持っていた方がいいと思う」

「これ……あの人が持っていた武器？」

「そう。 ……ナイフなら威嚇程度にはなる。 鞘はないから、そのハンカチを使って」

アビゲイルはタバサからナイフを受け取るとその刃を改めて観察した。

まるで研いだけばかりのように刃はきらりと光沢のを放ち、自分自身の顔を映す。軽く握ったグリップ部分は自分の小さな手でもしっかりとフィットし、重さも武器屋で持ったブロードソードやレイピアに比べれば遥かに軽い。これならば腕力が無くとも扱えそうだ。「さてとー、それじゃあたしたちシルフィードに乗って帰るから一旦はここでお別れね」

「シルフィード？」

聞きなれない言葉。乗って来たと言うからには、生物の名前か乗り物の名前なのだろう。

アビゲイルが聞き返すと、タバサが答えた。

「私の使い魔。空を飛ぶ、ウインド・ドラゴン風竜」

「へええ…ドラゴン。この世界にはドラゴンも居るのね」

「……今度乗ってみる？」

「いいの？ ええ、乗ってみたいわ！ ありがとう、タバサさん！」

アビゲイルは嬉しそうに飛び跳ねてタバサの手を握る。ここに来てからは初めての事ばかりだが、ドラゴンに乗ることができると言うのは予想外であった。

初めての授業の時、生徒たちの使い魔は皆教室の後ろでおとなしくしていたが、その時は見当たらなかった。

それはきつと教室に入れるにはドラゴンが大きすぎる所為だったのだろう。

そこまで嬉しそうにすると思っていたいなかったタバサは一瞬面食らったように目をぱちくりとさせて、それから少しだけ頬を緩ませて「構わない」と呟いた。

（あらあら、タバサもアビーちゃんと同良くなれたのね）

隣で見ていた親友のキュルケは目を細めてふふふと笑う。

タバサは基本的に周囲に壁を作り上げ、距離をとっているような素振りが見られた。

更には基本的に無口で、感情をあまり表に出さないタイプのために

周囲の生徒達も魔法の腕前には賞賛を送るものの積極的にタバサへと話しかけ、友達になろうという人はなかなか居なかった。

だからこそ、このアビゲイルという少女と共に友人のように振る舞うタバサの姿が堪らなく嬉しかったのだ。

「何にやにやしてんのよ気持ち悪い」

「えー？ 別に。アビーちゃんには感謝しなきゃって思ってたね」

「どういう事？」

具体的な事を言わずにキュルケは「何でもないわよ」と言っただけで離れる。

ルイズは何の事だかさっぱり分からなかったが、キュルケの上機嫌そうな表情を見て、悪いことではないだろうと察する事はできた。

「それじゃまたねアビーちゃん！ ついでにルイズも！」

「ついであって何よ！ まったく！」

「ええ！ また遊んでくださいな！」

キュルケが大きく手を振り、タバサもその隣で小さく手を振る。

アビゲイルもそれに答えて大きく手を振り、ルイズは口をへの字に曲げながらも手を小さく振っていた。

日の傾き始めた空は茜色に染まり、これからの夜の訪れを知らせる。

ここから2時間馬に乗って帰るのであれば、学院につく頃には夜を迎えているだろう。

混雑していたはずの表通りはいつの間にか人の姿が減り、ぎわぎわと騒がしかった声も今や落ち着いたものだ。

「……さ、私たちも帰りましょうか」

「ええ」

ルイズ達は馬小屋に預けた馬に跨りゆったりとした速度で走り出す。

ゆつくりと境界線へ夕日は沈み、二つの月が今夜も顔を覗かせたのだった。



## 22：夜の訓練と忍び寄る怪盗

虚無の曜日も終わり、今日はユルの曜日、つまり平日だ。

学院の生徒達は何処か気だるげな雰囲気で朝食を取り、眠たそうにしながら教室の席に着いていた。

休日明けの曜日は異世界だろうと変わらないのだろう。

騒がしく遊んだ者、ゆつくりと静かな時間を過ごした者、延々と眠り続けた所為で休日の記憶が全く無い物、その誰しもが虚無の曜日を惜しみ、ぼんやりとしている。

そしてそれはアビゲイルも例外ではない。

昨日は王都の人ごみに揉まれ、誘拐未遂と力の暴走を味わい、薄暗い賭博場に連れられ、友人との買い物巡りをして——とにかく色々な事があつた。身体に蓄積した疲労は未だ抜けきらず、目覚めてから今もぼんやりと頭に靄が掛かったかのように睡魔がちらほらと襲ってくる。

ルイズは既に席に中央辺りの席に着いているが、そこにたどり着いた瞬間再び眠りに落ちてしまいそうだ。

「ふわあ……」

「おや、なんだか眠たそうだね」

小さくあくびをすると、席に向う途中の位置に座っていたギーシユが声を掛けてくる。

「あ……おはようギーシユさん。 そうなの。 昨日はちよつと色々あつて疲れちゃつて……」

「ふうん……？ しかし授業中に眠ってしまったら流石に怒られてしまうよ。 ……そうだ」

ギーシユはマントのポケットをぐそぐそと漁りだす。

何を探しているのだろう、と思っていると、取り出したのは小さな薬瓶に詰められたポーシヨンだ。

「君にこれをあげるよ。 疲労を回復してくれるポーシヨンさ」

「へえ……ポーシヨンにはそんなものもあるのね」

「それを飲めば今よりずっと楽になるはずだよ。 かくいう僕も昨晚

はそれに助けられているからね。そのポジションをわざわざ作ってくれたモンモランシーには感謝しなくては…」

「モンモランシーさんが作ってくれたんだ……って、ギーシュさんも昨日は何かあったの？」

「そういえば昨日、ギーシュやモンモランシーはどういった休日を過ごしていたのだろう。」

「自分は早朝からルイズと共に王都へ行き、帰ってくるのも殆どの生徒達が既に帰宅し、寮の中に戻っている時間帯だった。」

「その為学院の他の生徒達がどのような事をしていたのか全くと言っていいほど知らない。」

「それはだね……」

「ず~~~~~と訓練してたんだよ！」

ギーシュが語ろうとした直後、その脇からまんまると太った少年が大声で割り込んで来た。

「前髪は両脇に流しているが一房だけちよろりと垂れており、目は開いているのか閉じているのか分からない程に細目だ。」

「誰だったかしら、と思い、直ぐに心当たり思い当たる。この人は」

「——そう、初回の授業の際、ルイズを『ゼロ』だと煽っていた男子学生の一人だ。」

「この男子学生にはあまりいい印象が無かったため、アビゲイルは「えっと…」と少しだけ口ごもってしまう。」

「男子学生はそんなアビゲイルを意に介さず、不機嫌そうにしながら言葉を続ける。」

「全く聞いてくれよ！　ギーシュの奴、突然『訓練をしよう！』とか言い出してさ、お陰で僕もヘトヘトだし、全身筋肉痛で今も体を動かすのが辛いんだよ！」

「何を言う。マリコルヌだつて『ちよつとぐらい身体を動かすか〜』って最初は乗り気だったじゃないか」

「まさか一日中やるとは思わないだろオオ!?!」

「マリコルヌと呼ばれた少年は憤慨しながら叫び声をあげる。」

「それはもはや悲鳴に近く、なかなかハードな訓練だったことが伺

える。……というより、内容はともかくとして一日中訓練をしていたと言うのならヘトヘトになってしまうのも頷ける。

「それは大変だったわね……ギーシユさんもあまり無茶しちやだめよ？」

「なに、無茶なものか。僕は立派なメイジになるってあの時改めて決めたのだからね。……それになんだか、がむしやらに頑張っていたあの頃を思い出して楽しかったよ」

「……そう。ふふふ、そうみたいね。ギーシユさん、とつてもいい顔してるわ」

「ほんと、お前あの決闘から変わったよな……そんなキャラだったっけ？」

マリコル又はぐったりと疲弊していたが、ギーシユは訓練に明け暮れていたと言うのに本当に楽しそうだ。いつもの気取った表情も様になっていて格好いいが、晴れやかに、そして熱く夢を語るような少年の顔の方がもっと魅力的に映る。

自然とアビゲイル自身も嬉しくなり、頬が緩む。

「今日も夕食の後にちよつとだけ訓練をするつもりなんだ。もしよかつたら君も見に来てくれないか？」

「そうね……あ、それだったら私も見に行くだけじゃなくって参加させてくださいらないかしら！」

アビゲイルの提案にギーシユは疑問符を浮かべ、マリコル又はサアつと顔を青ざめさせた。

ギーシユ達は魔法の訓練だけでは無く、魔法の地力となる基礎体力をつける訓練も勿論していた。しかしアビゲイルの訓練となると、基礎体力をつける訓練と……あの触手を使いこなす訓練だろうか？

「い、いやいや！君があんたの力を使って訓練なんかしたら訓練相手が死んじゃうよ！」

「うーむ……まあ、僕は構わないが、僕のワルキューレで訓練相手が務まるかどうか……」

「あ、それなら大丈夫よ。私が練習したいのはこれなの」  
ポケットから取り出したのは白い布に包まれたナイフだ。

刃はそこまで長くなく、コンパクトな印象を受ける扱いやすそうな武器だ。

「ナイフ…？ 急にどうしたんだい？」

「まあ、ちよつと色々あつて……」

誘拐されたりとか。

……などと言うときつと驚かせてしまう為、言葉を濁してあははと苦笑いを浮かべた。

ギーシュは首を傾げるが、まあいいかと納得して、親指を立てる。

「……よし、そういう事ならば共に訓練をしようか！」

「ありがとうギーシュさん！ それじゃあ、夕食の後に！」

アビゲイルはそう言つてルイズの元へ戻る。

ルイズもやや眠たそうにしながら「早く座りなさい」とアビゲイルに促した。

「よし……とりあえず今日の授業は頑張らなきゃ」

ぱしんと自分の頬を叩いて気付けると、ギーシュから貰つたポーションをぐくりと飲み干し、その後の授業を何とか乗り切る事にした。

・  
:  
…

夕食の後、ヴェストリの広場には2人……ではなく、なんとその倍である4人が集まっていた。

アビゲイルが教室で「授業が終わつた後ギーシュさんと訓練をする」といった所、それを聞いていたルイズ、キュルケも見物に来てしまったのだ。

ルイズはアビゲイルを心配して、キュルケは単に面白そうだから、という理由だ。

また、モンモランシーも先ほどまでいたのだが、ポーションを渡した後は自分の寮へと戻つていった。

「訓練だなんて……また怪我したらどうするのかしら！」

「あつはつは。ルイズは心配性ねえ。……アビーちゃん！頑張ってねー！」

「な、なんだか見物客が騒がしいね……」

「そうね……あまり皆に言わない方が良かったかも……」

「ううむ……まあいいか。僕らのやる事には何ら変わりないさ。」

——それじゃ、早速始めるとしようか！ 掛かってくると良い！  
「ええー！」

ギーシュは高らかに叫びをあげると薔薇を模した杖をマントから抜き取り振るう。

その先端からははらはらと花びらが数枚地面に落ち、その場所を起点に何体もの土人形が現れた。

《クリエイト・ゴーレム》

しかし、あの決闘の時とは違い、青銅で作られた頑強なワルキューレではない。

むしろ意図的に脆く作られたこのゴーレムであればナイフで突き立てた場合しつかりと刃をその身体に沈ませる事ができるだろう。

とはいえ土は土。人の形に象られたゴーレムの土の拳はまともに食らえば青銅程ではないとはいえそれなりの衝撃になるだろう。

幾つも生み出したゴーレムは一人を残して離れた場所へと移動していった。

これはギーシュの『複数のゴーレムを同時に操作する訓練』の一環だという。

アビゲイルを相手にする一体のゴーレムに意識を割きながら、他のゴーレムに剣舞をやらせる、というのは中々に集中力が必要になる動作だ。

アビゲイルはナイフを握り、とりあえず戦闘態勢を取ってみた。

脳裏に思い浮かべるのは物語の挿絵に出てくる騎士の構え——  
剣を正面に突き立てたような構え方だ。

この構え方から繰り出される強烈な一撃は、凶暴なドラゴンの首を一撃で刈り取った。

「……」

……長さが物語の騎士の持つ剣に比べて圧倒的に短い。

これではダメだ、とアビゲイルはすぐに構え方を変える。

今度は何の物語の主役の構えだったろうか。身体を横に向けて、相手からの攻撃を受ける面積を減らす、という構え方だ。

この構え方ならばリーチの短いナイフであっても、ほんの少しだけリーチを伸ばすことができる。

「……」

「……………掛かってこないのかい？」

ギーシュは高らかに「掛かってくるが良い！」と言い、それに応えられた為、アビゲイルから仕掛けてくるものと思っていたのだが一向に動き出さないため思わず聞いてしまう。

するとアビゲイルは先ほどまでの真剣な表情を崩して、困ったような表情を浮かべた。

「この構え、この姿勢からどうやって相手に接近すれば良いのか分からないわ」

「……………横歩き？」

「う、うーん…………」

そんなカツコ悪い動きだっただろうか…………？

暫く考えてみても、一向に良い解が思い浮かばない。そもそも記憶が断片的にしか無い為、どんな物語でどんなシチュエーションで行われた戦いだったのかも分からなかった。

一方の外野二人の間にも、何とも言えない微妙な空気が流れていた。

悲しいかな、アビゲイルはこの後もいくつか構え方を試してみるものの、そのどれもが様になっていなかった。

「ねえルイズ。あれって何してるの？」

「さあ……………本当に大丈夫なのかしら、アビー」

余りにも初心者過ぎるその姿に、まだまだ道のりは長そうだ、と不安になるルイズ達なのであった。

・  
:  
:  
:

アビゲイル達がヴェストリの広場で訓練をしている頃、巨大な二つの月が魔法学院の本塔の外壁に立つ巨大な影を浮かび上がらせていた。

その人影こそ、今国内で貴族達の蓄えたお宝を奪い去っていく怪盗、土塊のフーケの生み出したゴーレムであった。

フーケはそのゴーレムの肩の上に立ち、頭まですっぽりと覆う外套を被り、長い髪を夜風に靡かせながら、手のひらで宝物庫の壁に触れていた。

土塊のフーケは土系統のメイジ、つまり土のスペシャリストだ。壁に触れる事でその材質、厚みなどを判別する事など朝飯前なのである。

「ちっ、流石は魔法学院の宝物庫。《固定化》しか掛かってないってあのハゲが言っていたから衝撃で何とかならないかと思ったのに、この厚みじゃ私のゴーレムでも壊せそうにないね」

フーケは腕を組み、歯噛みする。

この宝物庫の中に眠るのは『混沌を祓う火炎』——コルベールの話によれば、スクエアメイジをも容易く超える火炎を呼び出す事ができる呪文が記された本らしい。

そんな代物であれば、今まで盗んできた貴族の金銀財宝など余りにもちっぽけなものだ。

「そう簡単に諦められる代物じゃない……さて、どうしたもんかね」  
こんな夜遅くだ。既に学院の生徒や教師達は部屋に戻っているころだろう。

とはいえ生み出したゴーレムは巨大だ。ふとした拍子に誰かに

見られてしまう可能性もある。

フーケはいち早くこの中のお宝を奪い去る方法を考えなくてはならなかった。



## 23：土くれのフーケ

「はあ、はあ……」

「ふう……今日はこれぐらいにしておこうか」

「そうね……うーん、やっぱり武器を持って戦う、って言うのは難しいのね。全然上手くいかなかったわ……」

アビゲイルは頬を伝う汗を袖で拭いながら、がくりと首を垂れる。

ギーシュの生み出したゴーレムには何回かナイフを突き立てた形跡があるが、そのうちの殆どは掠っただけだ。

明確に相手へダメージを与えた、と言える箇所は一、二か所程度だろう。

「ははは、まあ、初日でこれなら良いほうではないかな？ 寧ろ、僕の方こそまだまだだよ。最後の方なんか集中力が途切れてしまった」  
剣舞をしていたゴーレムの軍団を見れば、いつの間にか破損しているものや剣の突き刺さったゴーレムが居た。

複数体を操作するというのは、巨大なゴーレムを形成して維持するというものとはまた違った難しさがある。

改めてギーシュはそれを実感したのだった。

アビゲイルが肩で息をしていると、ルイズ達が歩いてきた。

「お疲れ様。 全く、汗でびしょびしょじゃないの」

「あはは……こんなに汗かいたのあの時振りかも」

「さっさとシャワーを浴びて寮に戻りましょう？ もうそろそろ私も眠たくなってきたし……」

「あたし実はちよつと寝落ち仕掛けてたわ」

空に輝く月の位置を見れば、確かに訓練の前の位置より随分と移動しているように見える。

いつの間にか熱中していた所為で随分と時間がたってしまったのだろう。

「それじゃ此処で解散だね」

「ええ。 それじゃギーシュさんまた明日——」

ふと、意識を広場の外に向けたその瞬間。

本塔の方に何か黒い影が見えたような気がした。  
アビゲイルは足を止め、なんだろう、と目を細める。

暗闇に浮かぶその影ははつきりとした輪郭まで映してくれないが、巨大だ。

その大きさは「気のせいか」で済ませられる程小さくは無い。

「どうしたの？ アビー」

「……あれ。何か見えない？」

「……？」

ルイズは首を傾げ、アビゲイルの目線の先を追う。既に歩き出して  
いたギーシュとキュルケも足を止めて振り返った。

目線の先には確かに巨大な黒い影がある。

「……な、なんだね、あのゴーレムは」

ギーシュが震えた声で呟く。

あれは——ゴーレムだろうか。しかし30メートル程の巨体を  
持つゴーレムなどめつたに見られるものではない。

自分の尊敬する兄の生み出すゴーレムでさえ、20メートル程だった  
はずだ。

「まさか」とキュルケが口を押えて震えた。

4人で王都へ向かった時にもちらほらと聞こえてきた『土塊のフ  
ケ』の噂。

今国中の貴族を震え上がらせるその怪盗は巨大なゴーレムを生み  
出す事ができるのだという。

「あれって、土塊のフーケじゃない？」

「土塊のフーケ!? なんでそんな奴がこんな所にいんのよ！」

「そりゃ怪盗なもの、お宝を盗みに来たんでしょ！」

確かに、魔法学院の本塔5階には『宝物庫』が有るらしい。実際  
に生徒が立ち入ったことは無い為、その中身にどんなお宝が眠ってい  
るのかは全く見当もつかない。しかし、土塊のフーケが此処に現れ  
たという事はつまり、本塔への襲撃を意味しているのだろう。

キュルケが叫び返すのを聞いた瞬間、ルイズは衝動的に走り出して  
いた。

敵は土塊のフーケ、30メートル程にもなる巨大なゴーレムを生み出す事の出来る凄腕のメイジ。

それに比べて自分は魔法の扱えないメイジ。自分がその場へといった所で何ができるわけでもない。

しかしそれがなんだ。悪党を前にして逃げ出す事は自分の矜持に反する。

「ちよ、ちよつと待つてよルイズ！」

「ああもう……悪い癖が出た！ ギーシュ、あんたは先生方を呼んできて！ あたしはあのバカを連れ戻してくるから！」

「わ、分かった！ くれぐれも気を付けてくれたまえよ！」

アビゲイルはルイズを追って走り出し、キュルケは頭を抱えてギーシュへと指示を出す。

ギーシュは返事を帰すと、大急ぎで当直の教師が居るであろう場所へと駆け出した。

・  
:  
:

「……一か八か、鋼鉄の拳で何発かぶん殴ってみるか？」

妙案は思い浮かばない。ともなれば、自分の力を信じてこの強固な壁をぶち抜いてみるべきか？

万が一それで失敗した場合、この場から逃げ切る事は恐らく可能ではあるが、この宝物庫の守りは更に強固になり、二度と例の魔法書を盗み出す事は叶わないだろう。

しかし、ここで諦めるわけにもいかない。

コルベールはオスマンからあの魔法書を宝物庫から取り出すように言っていた。

つまり、このタイミングを逃せば恐らく魔法書はオスマンの手に渡り、盗み出すという事が困難になってしまうだろう。

宝物庫から取り出され、オスマンの手に渡ったタイミングで盗み出せばよいと思うかもしれないが、それは恐らく宝物庫から盗み出す以

上に困難だ。

あの男は、普段の姿からは想像もつかない程に抜け目なく、それについて深い英知を蓄えている。

トリスティン魔法学院の長を務めているという肩書は伊達ではないのだ。

「やるしかないか……」

フーケは息を吐き、心の中から躊躇いを抹殺する。

それから杖を一振りして《錬金》を唱え、ゴーレムの右腕を土から鋼鉄の拳へと変化させた。

ゴーレムの巨軀を弓なりにしならせ、拳を振り上げた、その時。

ドン！

と、ゴーレムの一部が突如として爆発した。

「――!?」

一瞬声を漏らしそうになるが、それを噛みしめる事でぐっと堪える。

声を聞かれてしまうのは不味い。特に、このトリスティン魔法学院の生徒や教師には絶対に聞かれてはならなかった。

フーケは声を漏らす代わりに小さく舌打ちをし、攻撃をしてきた人物の姿を探す。

すると、居た。桃色の髪を揺らし、走ってきたのか、杖を此方に向けたまま荒い息を吐いて此方を睨みつける少女の姿が。

「お、大人しくしなさい、土塊のフーケ!!」

ルイズは叫び声をあげるが、その中に滲む恐怖を隠す事が出来なかった。

それもそうだろう。遠くから見ただけでも大きいと分かったゴーレムが、近くまでくると更に大きく感じるのだ。

ルイズは近くまで着て初めてゴーレムの肩にフーケと思われる人影を認識したのだが、フードを被り、そして月明かりのみに照らされた薄暗い環境のせいでその顔まで確認することができなかった。

しかし、位置さえわかれば何とかなるかもしれない、と杖を握りなおす。

確かにゴーレムは固く巨大だが、それを操るメイジまでが固い訳ではない。

つまりあの方に乗ってゴーレムを操るメイジさえ何とかすれば、自分でも倒すことができるかもしれないのだ。

ルイズは集中力を高め、フーケへと狙いを定める。

「《ファイアボール》!!」

どん!と再び爆発音が聞こえた。

しかし狙いは全くの外。フーケに当たるところか、ゴーレムにすら当たっていない。

当たったのは丁度宝物庫辺りの壁の一部のようだ。

ぱらぱらと壁の一部にヒビが入った為、直ぐに分かった。

そしてそれをこの大怪盗は見逃さない。

(なっ……壁にヒビが?! あの娘、一体どんな魔法を……いや、考えるのは後ね。とにかく今はこの好機を逃すわけにはいかないね!)  
フーケはルイズを無視し、再びゴーレムの巨軀を弓なりにしならせる。

ヒビを目掛けて振り下ろした巨大な鋼鉄の拳は、風を切る音と共に宝物庫の外壁を粉々に砕いた。

「あっ……!」

驚愕の声を漏らすルイズを他所に、フーケはゴーレムの肩から宝物庫の内部へとひよいと飛び降りる。

宝物庫の内部には価値のありそうなものが幾つか散見されたが、自分の目的はただ一つ、『混沌を祓う火炎』の魔法書だ。

そしてそれは直ぐに見つかった。拍子に書かれた文字は何処の国の文字なのか全く分からなかったが、魔法書自体から感じる膨大な魔力は、たとえドットのメイジだったとしても簡単に見分ける事ができるだろう。

「こりゃ本物だね……私の思ってた以上の代物だ。この本に触れた瞬間から震えが止まらないよ」

ニヤリ、と口角を吊り上げ、それをマントの内側へと仕舞い込む。それからいつものように署名の入ったカードを宝物庫に投げ捨て

ると再び待機させたままのゴーレムへと乗り込み、壁の外へと歩き出す。

目的は達成した。後はこの学院の壁を越えて逃げ出すだけで今回の盗みは成功となる。

「させないわ……」

ルイズは二回、三回と《ファイアボール》を唱える。その何れもがフーケに命中することは無かったが――

「!? ちっ……あの小娘」

フーケは舌打をし、ぐらりと揺れるゴーレムの頭にしがみ付く。

様子を見てみれば、がむしゃらに撃ち続けたルイズの失敗魔法がゴーレムの足の膝裏を破壊し、歩みが止まってしまったのだ。

もちろん、この土塊の生み出したゴーレムにとってはさしたる問題では無かった。

土から作られたゴーレムは壊れて剥がれ落ちた土、あるいは周囲の土を使って自己再生を繰り返すのだ。

しかしそれを何度も繰り返されて足止めを食らうのは非常に不味い状況だ。

フーケは苛立ちルイズを睨みつける。生徒に攻撃するつもりは無かったが、邪魔をするのなら容赦はしない。

ゴーレムをルイズの方へ向き直すと、その右手でルイズを捕まえ、握りつぶす為に手を伸ばした。

「あ……」

ルイズは恐怖で足が竦んで逃げられなかった――というよりは、ゴーレムの動きが想像以上に早かったことに対応できなかった。

ゴーレムの巨軀は一見緩慢な動きを繰り返しているようにも見え、それは大ききの生み出す錯覚に過ぎない。

拳を振り上げたかと思えば、その手は一瞬のうちに迫ってくるのだ。

「ルイズ危ない……!!」

「きゃあっ!」

捕まる。

そう思った次の瞬間、ルイズは一瞬横から突き飛ばされるような衝撃が走り、そのまま芝生の上に転がっていった。

一体誰が、と思ひ顔をあげてみると、そこにはゴーレムの手に捉えられるアビゲイルの姿があった。

「アビーちゃん！」

「アビー！」

ルイズはいつの間にか追いついてきたキュルケと共に叫び声をあげる。

ゴーレムの手につかまる瞬間、アビゲイルがルイズを突き飛ばし、代わりに掴まってしまったのだ。

「ぐ、う……………」

アビゲイルは苦悶の表情を浮かべる。ぎちぎちと締め上げてるゴーレムの手は、ゆつくりと、しかし確実に自分の身体を握りつぶそうとしているのがわかる。

「っ、《ファイア——》」

「馬鹿！ アビーちゃんに当たったらどうするの！」

「そんな事言っちゃって、このままじゃアビーが!!」

咄嗟にフーケに向って再び魔法を打とうとしたルイズをキュルケが止める。ゴーレムの手には既にアビゲイルが握られているのだ。

でたらめな場所に命中してアビゲイルに命中するのも危険だし、自分が《ファイアボール》を唱えた所で盾にされる可能性も非常に高い。

かといって、このまま見過ごす訳にもいかないのは事実だ。

今はとにかく、あのゴーレムの動きを止め、アビゲイルを助け出さなくてはならない。

狙う場所は、盾にされ辛く、誤射してしまう可能性の低い場所——

「ルイズ、足よ！ 片足でもぶつ壊しちゃえば、あいつの動き位止められるでしょ！」

「え、ええ……………」

ルイズとキュルケはゴーレムの足の付け根辺りを狙って《ファイアボール》を唱え始める。

キュルケの攻撃は命中精度は高いが、ゴーレムを破壊できるほどの攻撃力を有していない。

ルイズの攻撃は命中精度は低い、当たれば小さい範囲を確実に破壊する程の攻撃力を有していた。

二人の放った《ファイアボール》(ルイズの場合は失敗魔法であるが)は少しずつゴーレムの足を削り取り、フーケに真つすぐ立っているのが難しい程の揺れが襲う。

(くそ……面倒臭いガキどもだね……!)

フーケは心の中で悪態をつき、二人の方へと意識を向たその瞬間。アビゲイルを握りつぶさんとしていたゴーレムの手の力が一瞬だけ緩んだ。抜け出せる程のゆるみ方ではない。精々締め付けられた手から両腕を抜き出すことがやつとだ。

しかしアビゲイルにとってはそれでよかつた。

片腕さえ使えれば、鍵を捻ることができる——

『あ……あ? ああああ!?? 俺の腕……腕が……!!』

「——っ」

喉奥から込み上げる吐き気。

ゴーレムの手で締め上げられているから、というのもあるがそれだけでは無かつた。

王都で力を使った時、自分にはそれを制御することができなかつた。

その結果、男の腕を引きちぎり、ミンチの様に粉々に骨ごと粉碎してしまったのである。

——もし、今ここで使えば、ルイズやキュルケも巻き込んでしまうのではないか。

その恐怖感がアビゲイルの胃を締め上げ、吐き気を催させていたのだ。

(何か……他に方法は……)

能力を使わないでこの状況を打開する方法……



そんなものが容易く見つかったら苦労はしない、と自分の考えながら思わず自重してしまう。

しかし、何か持っていないかとポケットを探ると、指先に当たる感覚が一つあった。

先ほどまで訓練に使っていたナイフだ。

アビゲイルはハツと思いつく。

ゴーレムの手に握られた自分はゴーレムの肩の上に立つフーケに對してそれなりに近く、それでいてルイズとキュルケが注意をそらしてくれているお陰で此方の動きに全く気が付いていない。

これを投げ、フーケにあてる事が出来れば、状況を変えられるかもしれない。

他に方法も残されていないため、アビゲイルはやるしかなかった。

ナイフを握り、思い切り振り振り投げつける。

狙うはフーケの胴体辺り——！

(お願い、当たって……!!!)

アビゲイルの手から離れたナイフは弧を描き、フーケの太もも辺りにへと吸い込まれるように飛び——その横をすり抜けるように通過していった。

「あ……」

「!? ……ちっ、こんなものを隠してたのかい。でも残念だったね」

フーケは驚いた表情を見せるが、直ぐに不敵に笑う。アビゲイルは絶望的な気持ちだった。

もはや打つ手は、自らの力を使うしか残されていない。しかし、それを使ってしまったら……

「っ、あ、ああああー！」

ぎちぎちとゴーレムの手の力が強まる。

全身の骨が悲鳴を上げ、あと数秒もしない内にぺしゃんこになってしまうだろう。

(もう、だめ……)

アビゲイルは諦めたように涙を頬に伝わせる。  
死ぬことは怖い。しかし、能力を使って暴走し、ルイズ達を殺してしまふ事の方がずっと怖かったのだ。

それならば、自分がこのまま潰されてしまった方がずっとマシだ。  
「ごめんなさい、ルイズ……キルケさん……」

遺言の様に呟き、アビゲイルは目を閉じる。

ルイズとキルケが何か叫んでいるが、それすらももう耳に入ってこなかった。

自分の身体はこのままゴーレムの手によって潰され、一瞬の痛みの後死へと誘われるのだろう。

そう思っていた次の瞬間。フーケからつんぎくような悲鳴が聞こえた。

「ああああっ!!」

何事か、と目を開く。

するとそこには宙を舞うナイフがフーケへと襲いかかる光景があった。

フーケを見てみると左腕にはぎっくりとナイフで切りつけられた跡があり、そこから流れ出す血液の量からそれなりに深く切り裂いたことが伺える。

腕の痛みによるめいたフーケは思わず腕を抑えて集中力を切らしてしまふ。すると、ゴーレムの手の力が急速に弱まり、アビゲイルはするりとその手から滑り落ちる。

「えっ……? きゃ、きゃあああ!?」

「嬢ちゃん! 早く《レビテーシヨン》を!」

「え? ……ええ!!」

何処からか乱暴な男の声で怒鳴られ、キルケは一瞬鳩が豆鉄砲を食ったようにぽかんと口を開けるも、素早くアビゲイルに《レビテーシヨン》を唱えた。

アビゲイルの落下運動は急速に弱まり、羽のように静かに地面へと着地する。

「……これ以上は本当にまずいね」

お宝は既に手の中にある。

これ以上こんな所で時間を使っている場合では無い。

フーケは小さく呟くと仕方がないと杖を振り上げる。

逃げるならばルイズ達がアビゲイルに気を取られている今しかない。

フーケは急速にゴーレムの足を回復させ、素早く走れる状態まで戻すと一気に学院の外壁へとゴーレムを動かした。

「まちやがれい！」

ナイフがフーケへと飛びかかる。

しかしフーケが素早く杖を振るうと、そこから現れたいくつかの土の塊によって叩き落とされてしまった。

「っ、フーケが……」

「もう無理よ、諦めなさい」

ルイズはアビゲイルを抱きかかえながら悔しそうに呟く。

既にゴーレムの背中では遠く、砂が舞うようにその体を散らすと完全にその行方が分からなくなってしまった。

## 24：忍び寄る混沌

フーケが去ってから暫くして、ギーシュとともにコルベールが現場に到着した。

ギーシュが教師を呼んでくるのに意外と時間がかかってしまったのには理由があり、なんと当直の教師が何処にも見当たらないと言うアクシデントがあったからである。

代わりに呼ばれたのはその時丁度研究室から出てきた所を捕まったコルベールであり、彼もまた「土塊のフーケが現れた」と言った瞬間顔を青ざめさせ、息を切らしながらこの場に來た訳なのである。

コルベールはアビゲイル達の無事を確認すると、すぐに寮へ戻るように指示をした。

フーケについての細かい事情説明はまた明日の朝、と言う事にするらしい。

コルベールは一刻も早く宝物庫の中を確認しなければならなかった。

そしてあの宝が無事か確認しなければならない。

『混沌を払う火炎』

オールド・オスマンが言うには、世界へと降りかかる混沌に対する特攻魔法のようなものらしいのだ。そんな強力な魔法が土塊のフーケなどと言う賊に盗まれたとしたら、どうなってしまうかなど容易に想像がつくだろう。

炎とは正しく使えば人々を明るく照らす希望の光となり、悪用すればあらゆるものを破壊し、灰燼に帰す恐ろしいものだ。

コルベールはそれを知っているのだ。

(どうか無事であってくれ……)

祈るような気持ちで破壊された宝物庫へと急ぐ。

しかし、コルベールは宝物庫の中でがっくりと項垂れる事となった。

…

「で？　なんでナイフが喋ってんのよ」

部屋に戻るとルイズは至極当然な疑問をぶつけた。

確かこのナイフはアビゲイルがウォルターという男に誘拐されそうになった時に使われたという空飛ぶナイフだ。それをタバサが拾い、武器としてアビゲイルに持たせた事でここにあるのだが、ナイフが喋り出すなどという話は聞いていない。

アビゲイルも正直何故このナイフが喋り出したのか、よくわかっていなかった。

武器が喋り出すなど、あの武器屋で出会ったインテリジェンスソードぐらいしか思いつかない。

「へへへ、なんでだろうな？」

「なんかムカつくわね。　売り飛ばしてやろうかしら……」

「ま、まあまあ、ルイズ。　……でも本当に不思議。　まるであのイン

テリジェンスソードさんみたい」

「あのインテリジェンスソードさんだからな」

インテリジェンスナイフ……インテリジェンスソードはさらりと口にする。

アビゲイルは驚愕の事実思わず叫び声をあげた。

「え!?　で、でもあの剣は？　壊れてしまったから、てっきり死んでしまったのかと……」

「俺は死なねえよ。　剣が意識を持つてるんじゃないよ、意識を持った俺が剣に憑依してるんだからな」

まあ、お陰でいろいろ思い出しちゃったが……と小さな声でナイフが呟く。

「じゃああれは何よ。　あんた、空飛んでたじゃない」

「ありや俺もおでれーた。　このナイフにやよく分からん魔法がかかってやがる。　そのせいで喋れるようになるまで時間がかかったけどな」

「それじゃあなたは自由に空が飛べるの？」

「おうよ！ 自由に俺の意思で動けるなんて夢みてえだ！」

彼は楽しそうにひゅんひゅんと動き回る。

抜き身のナイフの為、なかなか危険な行為である。

「危ないわよ！」とルイズが叫んだ時には既に遅く、ナイフは勢い余って壁に突き刺さった。

「……………え、ええと。それであなたはこれからどうするの？」

「？ どうつて？」

「だつて意識を持ったナイフでしょう？ 私がずっと持つてるのは嫌かなつて…………」

アビゲイルは言いながら壁に突き刺さったナイフを引き抜く。

意識を持った武器、というのは珍しいが、考えようによつては恐ろしい状態にも思える。何故ならばそこに意識があるのに動くことが出来ない。その一生を主人と共にし、血や泥を浴び続ける事になるのだ。

おずおずとアビゲイルが言うと、ナイフはすぐに否定する。

「嫌なんてこたあねえさ。俺は飛べるようになったつて使い手と一

心同体、それは変わらねえ」

「そういうものかしら…………？」

「ああ、そういうもんさ」

アビゲイルはあまり納得がいていないような声をだすが、ナイフはどこか言い聞かせるような優しい声でそう繰り返す為、本人がそれでいいというのなら自分からはもう何も言わない事にした。

「…………それじゃあ、自己紹介をしなくちゃ。私はアビゲイル。インテリジェンスソードさんにはお名前はあるのかしら？」

「俺はデルFRINGガー。デルフでいいぜ。よろしくな、相棒」

「ええ、よろしくね、デルフさん！」

アビゲイルはにこりと嬉しそうに笑う。武器相手であっても、人を相手にしている時と変わらないその笑顔はデルFRINGガーとつて眩しく見えた。

そして同時に痛ましくも思った。

（リーヴスラシル……『過酷な運命』か。なんて皮肉だよ。 あんまりじゃねえか、神様って奴はよ）

アビゲイルに触れた瞬間に見えた懐かしい感覚、そして深淵と呼ぶに相応しい底なしの狂気。 二つの異なる魔力は、その小さな身体に背負うには重たすぎる過酷な運命を表していた。

その花のような笑顔の内側には、彼女本人にも分からない程の闇が眠っている。

——しかしただの武器である自分には、彼女を重ねり合った運命の道から救い出すことはできない。 武器として、側に居ることしかできないのだ。

・  
・  
・

「はあ、はあ……」

フーケは宙に浮かぶナイフによって傷つけられた腕からの出血を強引に布で抑え、森の中に立つ小屋へと向かっていた。

あれは《レビテーション》を応用したものだろうか。ナイフがまるで鳥のように宙を舞い、切りつけてくるなんて聞いたことがない。

「……全くなんてザマだよ。 あんなガキどもに遅れをとる事になるなんてね。 まあ目的のものは手に入ったんだ。 あとはこいつを読ませてもらって……後で高値で売りつけてやろうかね」

にやりとフーケはあくどい笑みを浮かべる。

今回手に入れたお宝の内容が事実なら、しばらくは休業しても良いほどの纏まったお金が手に入る。

そうすればちまちまとした金を送らなくても快適に過ごせるはずだ。

普段は皮算用などしないフーケであるが、今回ばかりは「彼が本物だったら……」と、つい先のことを考えてしまう。

少しだけ気分が高まりながら、ようやく見えてきた森の小屋の中へ

と入る。ここはかなり古い小屋で、森の近くに家を構える農民達もこの小屋のことなどすっかり忘れている。つまり、身を隠すのにはうってつけのポイントなのだ。

「さてと……早速読ませてもらおうかね。全く、こんなにワクワクしながら本を開くなんていつ以来だか」

埃の被ったベッドの上をパンと払うとその上に腰を下ろした。

本に触れるだけで痛いほどに伝わってくる魔力。この本自体に驚く程巨大な魔力が封じ込められているのだろう。

フーケは期待に胸を膨らませて、本の表紙を捲った。

——そしてフーケは固まる。

そこに書かれていたのは、見たこともない文字。

どこの国の文字だとか、何時の時代の文字だとか、そういったレベルのものでは無かった。

「……くそっ、なんだい！ 『混沌を祓う火炎』も何も、読めないんじゃないよ！」

フーケは怒りに任せて本を壁に思い切り投げつける。

ばん！と大きい音を立てて壁にぶつかつた本は床に落ち、中途半端にページが開かれた状態になった。

その瞬間、はらはらと一枚の紙が本の隙間から落下したが、フーケは拾い上げる気にもなれずそのままベッドに寝転がった。

あのトリステイン魔法学院の宝物庫から、腕を怪我してまで入手したというのに、これでは拍子抜けである。

確かに魔力を感じるが、中身も分からない状態で「これでスクエア以上の炎を出せる」などといった所で誰が信じるのだろう。精々呪いの品を集めているコレクターに今までの様に売りつけるのが関の山だろう。

「あーあ……折角なら他の宝物でも盗めばよかつたよ」

「へえ、じゃあこれ貰って良いですかあ？」

後悔交じりの声で呟くと、何処からか甘つたるい女性の声が聞こえてきた。

フーケは慌ててベッドから飛び起き、声の聞こえた方へと杖を構え



る。

するとそこにはいつの間にか小屋の扉から入ってきた紫陽花のように淡い紫色の髪をした女性がそこには立っていた。

入口から差し込む月の光が彼女の背中を照らし、くすくすと笑みを浮かべるその姿を妖しく彩る。

「あなた、何者だ」

「あく！人に名前を尋ねる時は先ず自分から、ですよ！」

「……………」

「なーんてウソウソ、冗談です！ ……うーん、そうですねえ。私が誰かと言われるとちよつと難しい所なんですよ。あ、記憶喪失だとか、電波ちゃんだとかそういう類の物ではないのでご安心を！」

「……………」

「……………ちよつとは反応返してくれても良いんじゃないですか？相槌も打たないなんて、さては友達も居ないタイ——」

「さつさと言わないと殺すよ」

ころころと表情を変える彼女に、先ほどまで燻っていた苛立ちが更に燃え上り、その怒りをぶつけるように杖を突きつける。

彼女と話をしていると、どこか神経を逆撫でされているような感覚になる。

今すぐにもぶーぶーと唇を尖らせる可愛らしい顔をぶん殴つてやろうかと思つたが、先ずは相手が何者なのか見極める必要があるとフーケは冷静に心を落ち着かせた。

すると彼女は「せつかちさんはモテませんよ？」と軽口を叩いてから続けた。

「でも実際のところ、お前はなんだと言われても困るんですよ。この性キヤラクター格アバターもこの容姿アバターも借りものですし」

「……………ああそう。真面目に言う気はないんだね」

「がーん！真面目な話をしたのに不真面目だと捉えられるのは結構ショックです……………」

よよよ、とウソ泣きをする彼女に対してシラけた目線を向ける。しかし怪盗である自分の前に、それも隠れ家に急に現れたこの女はただ

物ではないと内心理解していた。振る舞いはふざけて居るが、彼女を侮つてはいけなさと自分の直感がそう告げている。

「で、あんたは何をしにきた。私を捕まえにでもきたのかい？」

「いえいえまさか！貴方ごとくこれっぽっちも興味ありません」

「ああ、そう。……じゃあなんだい」

フーケが言うと、彼女はにっこりと微笑み、告げた。

それは麻薬の様に脳に染み込んでいく。

「貴方は神に選ばれました。我が神の眠りに貴方の祈りが届けば、貴方はこの夢の外の全てを支配できるでしょう」

## 25：結成、捜索隊

翌朝、学院内では大混乱が巻き起こっていた。

それも当然だろう。今や貴族の中で知らない者は居ない程の大怪盗、土くれのフーケがこの学院内部に現れたというのだから。

昨晚、フーケとルイズ達の激しい戦闘によって起こされた騒音と地響きによって眠りからさめてしまった生徒達が、その巨大なゴーレムを見てしまったのが噂話の発端である。

そしてそれを明確に裏付けたのは、本日の全授業の中止発表であった。

生徒たちは口々「これは本当にフーケが来たんだ」「一体何を盗まれたんだ」と騒ぎ立て、また今晚行われる『フリッグの舞踏会』の開催が危ぶまれる状況に不安の声がちらほらと上がっていた。

そして混乱が広がっているのは生徒達の間だけではない。

学院長室に集められた教師達もまた、不安と怒りの声で混沌としていた。

「だから平民の衛兵などアテにならんと言っただろう!」

「そもそも当直の教師はどこで何をしていたのかね!？」

「そ、それは……でも貴方たちだっていつもはサボって居たではありませんか!」

「なっ……それとこれとは話が別だ! とにかく弁償でもなんでもして責任をとってもらおうぞ!!」

昨晚の当事者であるルイズ、アビゲイル、キュルケ、ギーシュが学院長室へと呼び出しを受けて来てみれば、教師達の責任の押し付け合いが始まっていた。当直であったシュヴルーズは自室でサボって眠りに着いていたという非があった為に格好的になり、総攻撃を受けている。

「……なによこれ」

なんとまあ見苦しい事か、とルイズとキュルケは呆れた表情を浮かべた。

そしてギーシュは「決闘の時に頭に血が上っていた僕って、きつと

あんな風だったんだな……」と今更ながら恥ずかしくなってきた。それほどまでにこの教師達の醜態は見苦しすぎる。

暫くすると「静まらんか！」というオールド・オスマンの一喝によって教師達はシン、と静まり返った。

「まったく、揃いも揃って責任の押し付け合いか。学院の教師達全員の怠慢ろうに」

「っ……………」

オスマンは険しい表情でぴしやりと言い放ち、教師達は何も言い返せなくなってしまう。ここはトリステイン魔法学院。強固な壁に強力な魔法の使い手の教師が何人もいるから大丈夫だろう、という甘えた意識が蔓延し、結果として多くの教師達のサボリの常習化が引き起こされて居たのは事実だ。

「……………それに盗まれたものは弁償などできる代物ではない。高価なものだとか貴重なものとか、そんな小さなものではない。あれは

——悪しき人間には渡ってはいけないものじゃ」

そう語るオスマンの表情は深刻だ。組まれた両掌は爪が立っており、眉間に刻みこまれた皺は今まで以上に深く刻み込まれている。

ここに居る人達全てがその空気にあてられ、ゴクリと唾を飲んだ。

「い、一体何を盗まれたのですか？」

「それは……………」

おそろおそろルイズは尋ねる。

するとオスマンはアビゲイルをちらりと一瞥した。

アビゲイルは射抜かれるようなその視線に、自分の中身を見透かされているような気がして逃げるように視線を逸らした。

「……………一冊の本じゃ。そこには『混沌を払う火炎』を呼び出す為の呪文が記されておる」

『混沌を払う火炎』……………?」

「うむ。あの本はある男から譲り受けたものなのじゃ。そして

彼はこう言った。『無数の貌を持つ神の代行者現る時、世界に狂気と混沌をもたらすだろう』……………とな」

「は、はあ……………」

世界の危機、そしてそれを祓う火炎を呼び出す魔法ときた。それを聞いたルイズやキュルケ、ギーシュだけでなく、教師達も間の抜けたような声を零す。

物語の上で語るのならそれは壮大な物語なのだろうが、それで現実を語るのは余りにも真実味がなさすぎる。

しかしアビゲイルはオスマンの言葉を聞いた瞬間、何か頭の中に引っかかりのようなものを感じた。しかしそれがなんなのか、自分の中で答えを見つけ出すことができずにいた。

「因みにその男は一体誰なのですか？」

教師の一人がオスマンへと当然の疑問をぶつける。

するとオスマンは困ったような表情をして言った。

「……それが分からんのじゃ。彼の言語はまるで覚えてたの様に拙い。文字も書けぬようじゃった。一体何処の人間なのか……そして今何処にいるのか、それすらも分からんのじゃ」

ため息を零すオスマンに教師達はやや失笑気味だ。

演劇作家か何かの妄言か、占い師の世迷言か。何れにせよその言葉信じると値する要素が一つたりとして見当たらない。

ざわつき始める教師達にオスマンはやや失望したように目を伏せ、それから再び「オホン」と咳払いをした。

「それで、昨日の目撃者というのはこの者達で間違いないかね」

「はい。私が現場に向かった時にいたのも彼女たちでした」

唯一オスマンの言葉を信じているコルベールが真剣な表情を崩さないままオスマンへと返事をした。

「学院長先生、わたくし達は昨日フーケと戦いました。あの巨大なゴーレムは、間違いなく噂の『土くれのフーケ』ですわ」

「申し訳ありません……力及ばず、フーケを取り逃がしてしまいました」

「……いや、君達に大事が無くて良かった。教師の失態で学生が大怪我をするような事があったら、親御さんに申し訳が立たん。むしろ危険な目に合わせてしまったと、儂から謝罪しよう」

ルイズの謝罪に対して逆にオスマンは謝罪をする。学院長から

謝罪が有るとは思わず、ルイズ達はやや慌てて気味になるが、プライドの高い教師達はバツの悪そうに視線を逸らした。

「それで……フーケについて何か分かった事はないかのう。実際に対峙したと言う君達なら何か気づいた事があるのではないかと思つての」

ルイズ達は顔を見合わせる。

気付いた事と言ってもあの場合は月明かり以外に明かりが何も無く、それでいて30メートル程もするゴーレムの上にならした為、フーケについて噂になつている情報以上の事は何も分からなかった。

「……残念ながら僕は先生を呼びに行つていました。遠くから見たゴーレムの姿しか見ておりません」

「わたくしも容姿については何も。分かったのは精々『土のゴーレムは再生する』という事ぐらいですわ」

「私もミス・ツエルプストーリーと同じです……」

3人の悔いるような声に、オスマンは「そうか……」と落胆した様に呟く。

するとアビゲイルがそういえば、と言つた風に顎に手を当てて言う。

「……その人つて、どれぐらいの事がわかつているの?」

「フーケの容姿についてでしたら、何も分かつておりませんぞ。年齢から生まれ、性別も何も」

「コルベールはやれやれと首を振つて答える。  
土くれのフーケはまさしく凄腕だ。」

「これほどまでに国内を騒がせていると言うのに、その手掛かりは一切掴めていないのだ。」

しかし、アビゲイルにはある手掛かりが有つた。

「……フーケは女性だと思つた。声を聞いたもの」  
「な、なんですと!? それは本当かね!」

「え、ええ。ルイズ達も本当は聴いているはずよ。だってあの時悲鳴をあげていたじゃない」

「悲鳴……ああっ! 確かに。デルフリンガーに気を取られて気にし

ていなかったけど……」

「それに、今ならきつとフーケの見分けを付けられると思うの。だって、今フーケの腕には——」

とその瞬間、割り込む様に数回のノックの音が聞こえた後、ガチャリと扉が開いた。

中に入ってきたのは学院長の秘書、ロングビルだ。

余談ではあるが、秘書として仕事をする彼女は真面目によく働き、それでいて美人な彼女には、男子生徒のみならず男性教員の中にも——実はコルベールも——彼女のファンが居た。常に冷静でクールな表情を持つ彼女が時折浮かべる優しい笑顔にやられてしまう人間が多いのだろう。

「申し訳ございません、遅れてしまいました」

とロングビルが言うと、教師の中から「何故こんな時に遅刻など」と非難の声がちらほらとあがる。しかしロングビルはそれを意にも返さず手に待っていた一枚の紙を取り出すと、オスマンの机の上へと提出した。

「ミス・ロングビル、これは？」

「土くれのフーケの潜伏先と思われる場所です」

ロングビルがそう言うと、ざわざわと教師達がどよめいた。

話を詳しく聴いてみると、近在の農民に聞き込みをし、その目撃情報から推測した場所だそうだ。ロングビルは今朝宝物庫が破壊されているのを見た瞬間から馬を飛ばし、フーケの居場所を探っていたらしい。

その証拠に、馬を走らせる為にロングビルは分厚い外套を羽織り、すっぽりと全身を覆っていた。

「では早速、王室に報告をして兵の派遣を——」

「ならん」

教師が提案をすると、オスマンはきっぱりと言い放つ。

「これは学院の起こした問題というのものもある。しかし……王室にその様な強い力を秘めた書物があると知ればどうなるか、容易に想像がつくじやろう？」

「それは……」

もし本当にその本の事が真実であれば、という考えを内心思いながら、教師たちは口ごもらせる。

王室の手に書物が渡れば、国の力を付けるためにその魔法書を嬉々として使い始めるだろう。

余りにも強力な力はいつか身を滅ぼす。であれば、そのようなものは秘匿しておくのが一番なのだ。

「だからこそ我々の手でフーケを捕まえねばならん。捜索隊へと志願する者は杖を掲げよ！」

——しかし、教師たちは誰も杖を掲げない。目を反らすか、困ったように顔を見合わせるだけであった。

「どうした？ 誰もおらぬのか？ フーケを捕まえて名を上げようと思う貴族は！」

オスマンは声を張るが、それでも教師たちは手を上げない。トライアングルメイジの教師もちらほらと居るにも拘らず、皆関わりたくなさそうにしながら、誰かが挙手するのを内心願っていた。

その様子をルイズは失望したような目で眺めていた。

そしてそれは徐々に怒りへと変わり、ふるふる震えた手がびたりと止まった瞬間に覚悟を決めた。

「っ……！」

「る、ルイズ？」

ルイズの垂直にピンと掲げられた杖。アビゲイルは驚きの声をあげ、それを見たキュルケは内心で「ああ、やっぱり……」と思い、もはや何度目かも分からないため息を吐いた。

「ミ、ミス・ヴァリエール！ 本気かね!？」

「子供がフーケを捕まえる等不可能だ！」

「だって誰も杖を掲げていないじゃないですか!!」

困惑する教師たちの言葉にルイズは被せるようにして怒鳴った。するとルイズの両脇に立つキュルケ、ギーシュまでもがゆっくりと杖を掲げた。

「ミス・ツェルプストー！ ミスタ・グラモンまでもですか!？」



教師たちは更に驚きの声を上げ、ルイズもまた驚いて目をぱちくりとさせた。

「ツエルプストーの女として、ヴァリエールには負けられませんわ」  
「僕もグラモンの家の名を持つ男です。フーケ相手に逃げ出した等と知られたら兄上達に笑われてしまう」

「あ、あんたたち……」

ルイズは二人をみて少しだけ目を潤ませ感動する。

例え自分一人であっても行つてやるつもりだったが、二人も付いてきてくれるのならばかなり心強い。

オスマンはそんな3人を見て「ふむ」と小さく呟いてから、パン！と手を叩き言った。

「ならばフーケの搜索は君達に任せよう。目標は第一に本の奪還、その次にフーケの捕縛じゃ。危険な任務にはなってしまうが、よろしく頼むぞ」

「オールド・オスマン！ 何を言っているのですか！ 彼女らには荷が重すぎる！」

風系統の教師——ギトーが驚きの声を上げる。

しかしオスマンは首を振り、言葉を撤回しない意思を伝えた。

「この子らは実力ある生徒達じゃ。 実際に対峙し、そして立ち向かうことの出来る勇気ある貴族じゃ」

「っ……っ！」

恐れをなして戦うこともしない君達と違っての、とオスマンが付け加えると、ギトーだけでなく、他の教師達も悔しそうに顔を歪めた。

しかしその中で一人、ゆつくりとルイズ達のように手を挙げた女性がいた。

それは、学院長秘書であるロングビルである。

「流石に子供達だけで行かせるのは心配なので、誰も行かないと言うのなら私が行きましょう」

「……良いのかね？」

「はっ」

「……では決まりじやな。 我々は諸君らの勇敢さ期待しよう。 速や

かに馬車を用意させる。諸君らも準備が終わり次第、直ぐに正門まで来るように」

「はいー」

「はい」

キルケはともかく、ルイズとギーシユは熱に浮かされた様に気分が高まっている様に見える。アビゲイルは少しだけ不安になりながら、小さく返事をした。

…  
…

搜索隊が決定し、既に馬車に搜索隊の面々が乗り込んだ所だろうか。先ほどまでとは違い静まり返った学院長室にコンコンとノックが響く。

「来たか。入って良いぞ」

「失礼します」

がちやりとドアが開き、中に入ってきたのはタバサだ。タバサは無表情のまま一度お辞儀をするとオスマンの机の前までまで移動する。

「よく来てくれたな」

「どう言った用件でしょうか」

「……実は先ほど搜索隊を編成したのじゃ。メンバーミス・ロングビル、ミスタ・グラモン、ミス・ツエルプストー、そしてミス・ヴァリエールじゃ。恐らくミス・ヴァリエールの使い魔もくるじやろう」

「……！」

タバサは少しだけ目を大きくして驚く。

まさか搜索隊に自ら志願したのだろうか——いや、一人だけいた。恐らくそれに乗じて、という事だろうか。

「今回盗まれたのは一冊の本じゃ。そこには強力な力が秘められておる危険なものでな……それを君に任せたい」

「……？」

タバサはよく分からない、と言った表情を浮かべる。搜索隊が回収するのでは無かったのか？

「ああ、すまんの、言い方が悪かった。その本が無事この学院に届けられるのを見守ってほしい、という事じゃ」

オスマンは未だアビゲイルを疑っている。本を手に入れた途端、それを奪って逃走する可能性も考えられる。だからこそそのタバサだ。彼女はシュヴァリエの称号をもつ実力者だ。万が一があつたとしても、彼女ならば心強い。

タバサはやや納得の行つてない状態ではあつたが、「わかりました」と頷いた。

彼女にとつても親友と——そして最近できた友達が危険を冒しに行くと言うのを黙って見過ごすわけには行かなかつた。

タバサは学院長室を出ると準備を整え、シルフィードの上へと乗り込んだ。

## 26：手紙

ルイズ達は馬車へと乗り込み、ロングビルの集めてくれた情報から推測された場所へと向かう。フーケの発見を見逃さないように屋根のない馬車が選ばれたのだが、あまり座り心地は良くない。

整備されてから相当時間の立っているであろう道はガタガタと馬車を激しく揺らすほどの凸凹道だ。

「……きもちわるい」

うつぶ、とアビゲイルは吐き気を抑えながら、ぐったりと荷台の淵に腕枕をして目を閉じていた。

「大丈夫かい？　顔色が悪いよ」

「大丈夫……じゃない、かも。吐いたらごめんなさい……」

「ていうかアビー、さっさと吐いちゃいなさいよ。そっちの方が多分楽よ？」

「それはいや……」

恥ずかしいから、とふるふる小さく首を振る。気持ち悪いのは嫌だが、これでも年頃の乙女だ。そう簡単に口から胃液を吐き出すというのは如何なものだろうか。

「……少し狭いですが、横になつてはいかがですか？」

「そうねえ、まだまだ時間もかかりそうだし、なんならあたしが膝を貸してあげるわよ？」

「……うう、ごめんなさい、お言葉に甘えさせて貰うわ……」

ロングビルとキュルケの提案を素直に受け入れ、アビゲイルはキュルケの膝の上に頭を乗せた。キュルケは見るからにナイスバディだったが、太ももの柔らかさも抜群だった。「アビーちゃん可愛いわ」と言いながら頭に触れるため、キュルケの人より少しだけ高い体温を持つ肌の温もりと合わせてすぐに眠気が訪れる。

完全に意識を失うと、既に仲のいい人達に紹介されているデルフリンガーがアビゲイルのポケットから抜け出して言った。

「早。相棒もう寝ちまいやがった」

「昨日の事もあったし疲れてるのよきつと」

「……全く、危ないんだからアビーは付いてこなくて良かったのに。なんで付いてきたのかしら」

ルイズはキュルケの上ですやすやと寝息を立てるアビゲイルの顔を見て眩く。するとギーシュとキュルケが呆れたような表情をしてルイズをじとつと見た。

「な……なによ二人とも」

「いや……ちよつとアビーに同情してしまつてね」

「あんたが心配だからに決まつてるでしょ、この猪」

「い、猪つてなによ！あんた達だつて杖を掲げてたじゃない！」

「何言つてんのかしらこの猪は。あたしは最初は全くあげる気は無かつたわよ。でも……ねえ？」

ギーシュとキュルケは顔を見合わせてあの時の事を思い出す。大人達の会話になかなか入れずに静かにしていたアビゲイルが、ルイズの暴挙によって青ざめていくその様を。恐らくは後は大人に任せる流れになると思つていたのだろう。

「うぐ……だ、だつて仕方ないじゃない。誰も手を上げないんだもの。私だつて先生方の誰かが立候補すれば出しや張らなかつたわよ」

ルイズは唇を尖らせて言う。以前の自分であつたら、「ゼロと呼ぶ皆を見返してやる！」と躍起になつていたかも知れないが、今は違つた。

ギーシュとの決闘の際にアビゲイルの言つた言葉の数々に励まされ、今はゆつくり努力を続けようと考えているのだった。

そんな三人のやり取りをみて、ロングビルはくすりと笑つた。

「皆さん仲がいいのですね」

「そんな事無いと思います」

「は、ははは……」

息ぴつたりと否定する二人に苦笑いを浮かべるギーシュ。ロングビルはますます楽しそうにして笑つた。

確かに、言われてみればこんな風にやり取りをするようになったのはつい最近になつてからだ。

少し前であれば「魔法が使えなくてプライドばかり高い」「男漁りば

かりしている」「気障で口を開くと三枚目」などという一つの側面の印象ばかりが強かったが、今では意外と思いやりが有るとか、情に熱いとか、目に見えなかった部分まで見えていた。

それに三人の間だけではない。タバサやシエスタ、モンモランシー達もだ。

もしロングビルから見てそう見えるのならば、きっとそれはこの子のおかげだろう。

彼女との触れ合いを通じて、今こうして繋がりを持つことができたのだ。

三人はアビゲイルを見てくすりと笑う。その寝顔は————苦しそうで、限界を迎えた顔色の悪さをしていた。

・  
・  
・

結局吐いた。

「もうそろそろです」

「……や、やったあ」

学院から数時間馬車に揺られ、ようやく森の奥あたりへとやって来た。

高く成長した木に囲まれたその場所は、昼だというのに僅かな日の光しか通さずに薄暗い。

こんな場所までくる農民もそうそういないため、もしフーケが隠れているとしたら確かにここは最適な場所だろうと感じだろう。

一方、ぐったりとした調子で返事をしたアビゲイルの顔色は先ほどよりはマシにはなったが、それでもやはり白い。

これじゃあ戦うのが難しそう……とアビゲイルは落ち込んでいたが、三人はアビゲイルにあの力を使わせるつもりは無かった為、戦力的に痛手とはならなかった。

「まあ落ち込むなよ相棒。お前さんの魔力を俺に送ってくれりゃあ、

あと俺が何とかするからよ」

「う、うん……ありがとうデルフさん」

実際に「送る」という感覚はないが、こうしてデルフリンガーに触れているだけで向こうが勝手に魔力を吸収してくれるそうだ。本来であればこの魔法のナイフに対する理解がないとできない芸当であるが、デルフリンガーという意思を持つ武器に変わったことでそういった事に理解がなくなるとも宙に浮かせる、魔力を貯めるということができるのである。

「空飛ぶナイフなんてほんとに凄いわよね。これが決闘の時にあつたらギーシュなんて瞬殺だったんじゃない?」

「……そ、そうかもしれないが、もうそこを掘り返すのはよしてくれないか……」

けらけらと笑うキュルケに対して、ギーシュはがくりと首を垂れる。

10割自分が悪い事だった為、それを突かれては何も言い訳はできない。

「あと1回位は弄りたい」

「鬼かね君は!? 本当に反省しているから勘弁してくれ……」

「も、もうキュルケさんったら! ギーシュさんも、本当に気にしてないから頭を上げて?」

アビゲイルは苦笑いを浮かべながらフォローをする。

さらりとした美しい髪、幼さを持ちながら、どこか聖母のように慈愛に満ちた優しい瞳。

ギーシュは一瞬、天使がそこに居るのかと思った。

否、今思えば、ルイズが召喚したのは初めから天使だった様な気がする。

「ああ……友よ……いや、マイ・エンジェルと呼んでもいいかい……?」

「それは嫌」

アビゲイルは即答した。

『我らが希望』と同等の恥ずかしさだった。

「あんた達アホしてないでさっさと降りるわよ」

呆れた声を出してルイズは馬車から降りる。フーケに気づかれな  
いように、ここからは徒歩で向かうことになっていたようだ。

「「はい」」

三人は素直に返事をして降りる。

アビゲイルは未だ具合を悪そうにしているが、フーケの潜んでい  
たと思われる小屋が見えて来る頃にはだいぶマシになっていた。

「あそこにフーケが？」

「ええ、恐らくは……ですか、既に時間も経ってしまったので、小屋の  
中にはもういないと思います。私はどちらの方へ移動したのか調査  
してきますので、皆さんは小屋の中に何か手がかりがあるか探して  
みてください」

「わかりました……」

ロングビルは森の奥へと一人で進んでいった。

ルイズはそれを見送った後、小屋の方へと一歩踏み出そうとして、  
ふと嫌な予感がして立ち止まった。

「どうしたのよルイズ」

「……、なんか嫌な予感がして」

「あら、怖気ついたの？」

「ち、違うわよ！あんたこそ余裕そうな顔してちよつと震えてんじや  
ないのよ！」

「あらやだ。これは武者震いでしてよ」

ルイズとキュルケがやいやいと喧嘩を始める。

「全く君達はもう少し静かにだね……」とギーシュが頭を抱え、割り込  
むようにして二人を落ち着かせた。そしてこほんと咳払いをすると  
改めて口を開く。

「確かに僕も嫌な予感がする。もちろん僕も怖気ついただけの可能性  
もあるが……なんだか誘い込まれているような気がしてね」

「そうなの？……でも中に何か手がかりがあるかも知れないし、中に  
入らない訳にも行かないでしょう？」

腕を組むギーシュに対してアビゲイルが疑問を飛ばす。



するとギーシユは得意そうに笑い、「僕に任せてくれたまえ」と杖を振った。

その杖先からひらひらと落ちた花卉は地面に落ち、もごもごと土が固まり、そして青銅の騎士——ワルキューレへと変化した。

「なるほど、ワルキューレを偵察に向かわせるのね」

「そういう事さ。 さあ行け、ワルキューレ」

ギーシユは魔力を送り、ワルキューレを偵察に向かわせる。

そろりそろりと歩いて小屋へ近づいていったワルキューレはドアノブに手をかけ、ゆっくりと開け放った。

「よし……ドアノブには何も仕掛けられていないようだね」

「やるじゃない。で、中はどうやって見るの？」

意外なギーシユの活躍を素直に褒めるキュルケ。

しかし次の言葉を発した瞬間、ギーシユは言葉を返さずぴたりと固まった。

「……」

「……、……ねえあなた」

「……………」

ギーシユは三人の視線からすいー、と気まずそうに目を逸らした。

使い魔のように主人の目となり耳となる、という芸当はワルキューレにはできない。

「あんだねえ……カッコつけるなら最後までカッコつけなさいよ……」

「す、すまない……」

ルイズは溜息を吐く。

とはいえ、少なくとも身を潜めていたフーケが突然入り口を開けた瞬間に襲ってくる、という事にならないのが分かっただけマシだったかも知れない。

取り敢えず中を調べるにしても全員が中に入る訳にもいかないので、ギーシユとキュルケが外で見張り役を務めることとなった。

ルイズは杖を握りしめ、小屋の中へと足を踏み入れる。アビゲイルはその後ろに付いて行き、デルフリンガーがその隣でふよふよと宙に

浮きながら部屋に入った。

小屋の中はテーブルが一つと椅子が二つ。そしてベッドが一つと、クローゼットの様な家具の残骸が一つあるだけだ。窓の縁やテーブルの上には埃が分厚く積もり、木製の小屋の為至る所に腐食が進み、見るからに古めかしい廃屋といった印象を受ける。ベッドの上の埃が払いのけられているのがデルフリンガーの言っていた『人の居た痕跡』なのだろう。

「……確かにフーケが居たって可能性はあるけど、何も残されてはいなさそうね」

「まあそうだろうな。お宝だって一冊の本なんだったら、わざわざこんな所に置いて行ったりしねえだろうよ」

「うーん、それならロングビルさんの方をお手伝いしに行った方がいいかしら……ん？」

アビゲイルはふと、クローゼットの残骸付近に一枚の紙が落ちているのを見つけた。

拾い上げてみると、其処は手紙のようだった。字は綺麗という訳ではないが、筆記体で書かれた文字は自分にとっては読みやすいと感じた。

「何か見つけた？」

「ええ……かなり古い手紙みたい。所々がボロボロになってしまっていて、送り主も誰宛に書いたものなのかも分からないけど……」

「手紙？これが？こんなの唯の落書きじゃないの？」

ルイズは首を傾げる。ルイズの目からは、うにようによとした意味のない模様がびっしりと白い紙に書かれているようにしか見えない。

——そう、まるで自分が夜更かしをした翌日、眠くてたまらない授業が終わった時に書いた記憶の全くない謎の文字のようだ。

「あ……」

アビゲイルは気付き、そして衝撃を受ける。

ルイズが落書きと言ったこの文字が——読める。

「これは……英語だわ！」

「英語？なにそれ」



奴がそこを見つげ出して、一体何をしようとしているのか、そして『夢の外』が何処の世界を指しているのか、それを知る事が出来なかった。

だか、間違いなく言えるのは『奴は破滅と混沌しかもたらさない』という事だ。

『夢の外』を奴が手に入れた時、恐ろしい事が起こってしまうだろう。

だからこそ、君にこの呪文を託そうと思う。

這い寄る——の天敵である旧支配者の招来の呪文、そして退散の呪文だ。

もし君が再び奴と邂逅した時はその呪文を唱えてフォーマルハウトからクトウグアを呼びだすといい。

ただし、この世界の空は我々の知っているものとは少し違うようだから注意が必要だ。

フォーマルハウトはこの地からは見えない。しかしクトウグアはフォーマルハウトが地平線上にある時しか呼び声に答えてくれないんだ。

だからこそ、君が銀の鍵としての力を使って門を開き、フォーマルハウトからの道を作ってあげなくてはいけないよ。

私は君を探しながら、『夢の外』についてももう少し詳しく調べてみようと思う。

だから君の方でも何か分かったら調べてみて欲しい。奴の計画を止められるのは我々だけなのだから。

P・S パンケーキが好きなのは構わないが、三食パンケーキは控えるように。



アビゲイルが読み上げ終わると同時にぽたぽた雫が頬を伝って流れ落ち、紙に小さな染みを作った。

「相棒、泣いてんのか？」

「え……？ あ、あれ、なんで泣いてるのかしら……」

アビゲイルは慌てて袖で目元を拭う。悲しい、という訳ではない。むしろ手紙を読んでいるとなんだか懐かしい気持ちになり、心が温かくなったのだ。

「大丈夫、もう泣き止むから……」

「……良く分からないけど、本当に大丈夫なのね？」

ルイズがそう尋ねると、ぐしぐしと数回目元をこすった後、「全然大丈夫」と言うようににこりと笑みを浮かべて見せる。

目元は赤くなってしまったが、ルイズの見た限りでは本当に辛いとか悲しいとかではなさそうだと感じた。

「この手紙に書いてあること、少し気になる箇所が幾つかあったの。フーケの手掛かりにはならないけれど……」

「ま、仕方ないわよ。それじゃあそろそろ二人の所に戻——!?」

その瞬間、ぐらぐらと大きな地震が起きたと思えば、外から二人の悲鳴が聞こえてきた。

「っ！今のはギーシユさんとキュルケさんの……!」

「相棒！嬢ちゃん！伏せろ!!」

デルフリンガーが叫ぶ。

それに従って二人が地面に伏せた次の瞬間——小屋の屋根が耳をつんざくような破壊音と共に吹き飛んだ。

## 27：強敵

「ゴーレム………！」

ルイズは屋根が消し飛び、高くそびえ立つ木々が見えるようになった空を見上げて叫ぶ。そこにはあの夜に見た、30メートルほどもある巨大なゴーレムがこちらを見下ろしていた。

「ギーシュさん！キュルケさん！大丈夫!？」

「ああ、こつちはなんとか………！」

咄嗟に二人の安否を確認しようとアビゲイルも声を張り上げ二人の姿を探る。

するとすぐにゴーレムの足元近くから返事が帰ってきた。

両者ともに外傷は見当たらず、真つ直ぐにゴーレム見上げて杖を構えている。

ロングビルの姿は見当たらないが、しばらくすればこの音と揺れを聞いて駆けつけて来る筈だ。

「フーケは!？」

「全然見当たらないわ！もしかしたら木にでも隠れてるのかもね！」

ルイズの叫びにキュルケは答え、それからすぐに《ファイアボール》を放つ。炎の爆発は土の塊であるゴーレムを多少なり削る事ができるが、それ以上の効果は見られなかった。

「やっぱりダメね………！もうルイズ！どうするのよこれ！」

「私に振られたって分からないわよ………！」

フーケの姿が見えないのではメイジ本体を狙うということも出来ない。

かと言ってゴーレムを相手にいつまでも戦い続けていたらいずれ精神力が尽きてしまうだろう。

ルイズはどうしようもなく、悔しそうに歯噛みした。

するとゴーレム相手に《錬金》を何回か放って居たギーシュが叫んだ。

「ここは僕が何とかする！君達はフーケを探してきてくれ!!」

ルイズ達は「えっ？」と驚きの声を上げる。

「何言ってるの!?! あんただけでどうにかなるような相手じゃないでしょう!」

「そ、そうよギーシユさん! 一人でなんて危険だわ!」

ゴーレムは拳を振るい、無差別に攻撃を繰り返す。

現状で被害が出て居ないのはそれぞれがゴーレムへと何回も攻撃をして動きを鈍らせているからに過ぎない。

しかしギーシユは静かに首を振った。

「だけどこのままではジリ貧だ。 たしかにゴーレムの維持には精神力が必要な筈だけど、それよりも僕たちの精神力が切れる方が間違いない先だろう。 そうなったら僕らはおしまいだ」

「それは……」

「だったら僕は少しでも可能性のある方に賭けるべきだと思う。」

フーケを見つけることさえ出来ればあのゴーレムを止めることだって出来る筈さ」

ギーシユは言い切り、杖を構える。 ゴーレムのくりだした拳に対して《鍊金》を放ち、その一部を砂へと変えて形を崩した。

アビゲイルはギーシユの背中をみる。

ゴーレムに比べたらはるかに小さい後ろ姿には恐怖が見て取れた。

たった一つ握りしめた杖などあまりにも心許なく、ゴーレムの片腕が直撃するだけで容易にその命は刈り取られてしまうだろう。

「アビーちゃん、行くわよ!」

「で、でも……!」

アビゲイルは直ぐに頷く事が出来なかった。 頭ではそれが最善なのだど理解しているにも関わらず、不安という感情だけが身体の動きを縛り付ける。

するとギーシユは顔を横に向け、フツと不敵に笑ってみせた。

その表情は無理やり作って見せたものだど容易に分かるが、その瞳は真剣そのもので、思わずアビゲイルは口を噤んだ。

「僕を信じてくれ」

「……!」

ギーシュは落ち着いた声で言う。  
覚悟を決めた者の声だ。

「……分かったわ。私、信じるわ。……だからどうか、死なないでね。約束よ」

アビゲイルは自分の服の裾を握りしめ、懇願するように言う。

ギーシュは満足そうに笑うと、杖を振り、4体のワルキューレを召喚すると叫んだ。

「さあ走れ！ フーケの事は頼んだぞ！」

「っ、ええ……！」

「かつこ付けちゃって……死ぬんじゃないわよ！」

アビゲイル達はギーシュの叫び声に押されるような形で走り出す。

後ろ髪が引かれる思いだったが、ギーシュの決意と想いを無駄にしてはならない。

彼の身を案じるならば——1秒でも早く、フーケを見つけ出さなければ。

・  
:  
…

ギーシュは森の中へと走っていくアビゲイル達の背中をちらりと横目で見た。

あとは彼女たちがフーケを見つけ出すまでの辛抱だ。

視線を前に戻してみれば、立ちふさがるのは巨大なゴーレム。土で構成されたその体は、自分の作り出したゴーレムの大ききさからしてみても圧倒的だ。

昨晚、ルイズ達はこんなにも恐ろしい相手を前にして逃げ出さず、立ち向かったのか……とギーシュは内心で舌を巻いた。

対して自分の足は鉛でも付けたかのように重たく、杖を持つ手はじつとりと汗をかき、震えが止まらない。

全身に恐怖が駆け巡っていた。



「は、はは。全く、僕もとんでもないことを言うようになったね」  
手のひらを見つめ、呆れたように笑う。威勢など、一人になって仕舞えば一瞬にしてしぼんでしまうものだ。

以前の自分であれば、こんなにも無謀なことはきつとしないだろう。

それでも『無理だ』と言わず、立ち向かおうと思うようになることができたのは彼女の影響に違いない。

「ああ……僕が死んだら、皆僕の事を讃えてくれるだろうか……」

初めて味わう、本当の脅威。

学生同士の小さな喧嘩とは違う、命のやり取り。

一歩間違えれば死は免れない。

貴族は、名譽の為には死すらも厭わない。

……きつとここで死んでも、名譽の死として周知される事だろう。

ならばあとではできる限りの事をして、胸を張って散って行こう。さ

あ思った時、

——だからどうか、死なないでね。 約束よ。

今にも泣き出しそうな彼女の言い放った言葉を思い出した。

きつと約束を破ってしまったら、涙が枯れるほど悲しんで、その太陽のような表情を長く暗雲で包み込んでしまう事だろう。

それはなんか、嫌だ。

「あいつを倒せたら、きつと彼女も驚くだろうな」

脳裏に思い浮かぶのは、驚いて目を丸くし、賞賛を浴びせてくる彼女の声。

明るく跳ねるような喜びの声は、きつと何よりも嬉しい褒美になるだろう。

彼女の素直な感情は、それほどまでに価値のあるものだ。

「……ああ、それもいいな」

グラモン家の名に恥じぬ名譽家の輝き。

そして、ギーシュ僕へ向けられた友の賞賛僕の声。

その二つを同時に手に入れられるのはどれだけ素晴らしい事か。

ギーシュは息を吐くと、全身の震えが止まる。

自分はやはり欲張りなぐらいが丁度いいなと改めて認識した。  
ゆつくりとゴーレムが此方へ近づいてくる。

こちらには既にゴーレムの足を止めるだけの人数は居ない。  
ならば寧ろ、此方側から仕掛けるべきだ。

ギーシュはワルク्यूレを右に二体、左に二体と左右に分けて突撃させた。

土を蹴り上げて、矢のようにゴーレムの懐へと飛び込むワルク्यूレは、ゴーレムの動きよりも圧倒的に早い。 払いのけようとしたゴーレムの腕を巧みな動きで掻い潜ると、素早く足を切りつけた。

「流石に簡単には切れないか……！」

ざくり、と沈み込んだ剣は凝縮された土によってその勢いを殺されてしまう。 ワルク्यूレは素早く剣を引き抜き、舞うようにして後方へ飛び去ると、頭上から叩きつけるようにして振るわれたゴーレムの攻撃をかわした。

たったこれだけの動作だが、ギーシュの頬にはたらりと汗が流れ落ちる。

手元を起点として放たれる魔法ではなく、遠方にあるワルク्यूレを起点とした魔力操作。

これはあらかじめ命令をインプットされて動いている目の前のゴーレムとは違い、四体のワルク्यूレをそれぞれ精密操作している状態だ。これは高位のメイジであっても難しい芸当である。

ゴーレムは追撃するように纏まって飛びのいたワルク्यूレへと拳を繰り出す。

ギーシュは慌ててワルク्यूレを操作し、剣にゴーレムの腕を滑らせらるようにして飛び上がると、再び纏めて薙ぎ払われないようにワルク्यूレを散開させた。

恐らくあのゴーレムに与えられた命令は『近くの敵を攻撃する事』ワルク्यूレを散開させたとしても、ゴーレムの周りにワルク्यूレが存在する限り、ギーシュへと向かって突進してくるということは無い筈だ。

ギーシュは杖を振り、再びワルク्यूレを走らせる。 ぐるぐると

ゴーレムの周りを取り囲むような動きをしたワルキューレは、ゴーレムの腕が振るわれると同時に疾風の如く素早さでゴーレムの片足へとすべりこみ、剣を突き立てた。

精密な操作で四方から切断面を水平に揃えることで、あの太い脚の中心部まで切断する作戦だ。

「っ……い！」

ゴキン、と青銅の折れる音。

相手が土でできたゴーレムとはいえ、勢いをつけて切りつけたワルキューレたちの剣は、その刀身に受ける重みに耐えられず、根元からぽつきりと折れてしまったのだ。

ギーシュは驚き、剣が折れてしまったことによつて勢い余ったワルキューレを一体転倒させてしまう。

そしてゴーレムはそれを見逃さなかった。

「しまった……い！」

ゴーレムの掬い上げるような拳を避けきらず、一体のワルキューレが直撃を受ける。

バキン!!と激しく青銅が碎ける音が鳴り響き、ワルキューレの残骸はまるで散弾銃のように拡散し、眼前に鋭い青銅の破片が迫ってくるのが見えた。

——避けられない!!

ギーシュは腕で顔を覆い、この後襲ってくるであろう全身をつらぬく激痛に身を硬ばらせる。

しかしそれはいつになつてもやつてこなかった。

少女の声。そして吹き荒れる突風によつて破片の軌道が外れ、ギーシュを避けるようにして後方の木々に深々と突き刺さる。

啞然としていると、上空からふわりと少女が舞い降り、着地した。

「き、君は……タバサ! どうしてここに!?!」

「……詳しい事は、あと」

タバサは顔を逸らして言う。

初めから監視していたという事、そして本を優先するか、ギーシュを優先するかという二つの選択に迷い、手助けが遅れてしまった事に

よる後ろめたさがタバサをそうさせた。

しかし事情を知らないギーシュは特に追及することなく礼を言った。

「……そうか。だけど助かった。ありがとう」

「礼はいい。それよりどう倒す?」

「さっきの作戦はうまく行くと思っただがね……」

「だけどあと一手……二手足りない」

ゴーレムの足を切断する程の威力、そしてそれに耐えられるだけのワルキューレの強度。

この二つの問題をクリアできなければ、剣はゴーレムの身体を切断するには至らない。

だが、突破口は見えた。

ギーシュはにやりと笑い、杖を再び振って新たなゴーレムを召喚する。

「なら——僕がその一手を埋めてみせよう」

「……じゃあ私はもう片方の一手を埋める」

自信のある表情を浮かべるギーシュに対して、タバサは一瞬珍しいものを見たような表情を浮かべるが、すぐに頷くと杖を構えた。

新たに作り出したワルキューレはゴーレムを包围する隊列に加わり、そして残っていたワルキューレは新たに青銅の剣を手にする。

そこからは先ほどと同じだ。

ゴーレムの周りをワルキューレは素早く回り続ける。

そしてゴーレムがまるでしびれを切らしたかのように拳を振り下ろした瞬間、ワルキューレは素早く駆け出す。

しかし先ほどとは違い、全てのワルキューレが同時ではない。それぞれに一秒か、二秒程のズレができてしまっていた。

だが、それで良いのだ。

ワルキューレは思い切り助走を付けると、ゴーレムの足へと向かって飛び込んだ。

「《ウィンド》……!」

タバサは魔法を唱える。

突風を起こし、相手を吹き飛ばす魔法だ。

相手はゴーレムではなく、四体のワルキューレ。

それぞれの時間のズレは、全員にこの魔法を受けさせる必要があったからだ。

青銅の鎧はタバサの生み出した爆発的な風圧によって加速し、瞬きをする間もなくゴーレムへと肉薄する。

この加速度はから与えられる威力は、ワルキューレの助走も合わせかなりの物になっているだろう。

そして、ワルキューレの剣がゴーレムの足に届くその瞬間。

「——《錬金》!!」

ワルキューレの握る青銅の剣は見る見るうちにその刀身の色を変え、固く鋭い鉄の剣へと姿を変えた。

「いけえええ!!ワルキューレエエツ!!」

一撃、二撃、三撃、四撃。

ヒュン、と風を切り、鉄砲のように放たれた四体のワルキューレは、ゴーレムの足を切り裂き——その足を完全に切断した。

ずずん、と片足の無くなったゴーレムはよろめき、周囲に生い茂った草や木々を巻き込みながら地面に倒れこむ。

もはや片足の無くなった状態では、あの巨躯な身体を支えることはできないだろう。

「……終わった?」

「いいや、まだだ」

首をかしげるタバサに、ギーシュは首を振る。

よく見てみると、ゴーレムの足には周囲の土が集まり始め、それらはゆっくりと結合を始める。新たな足を生み出そうとしていたのだ。

「どうするの?」

「……何、簡単な事さ」

ギーシュはゴーレムに近づいていく。

そしてもう一度《錬金》を唱え、切断面を鉄へと変えた。するとどうだろう。

集まってきていた筈の土は鉄になった部分に阻まれ、うまく結合す

ることが出来なくなっていた。

タバサはなるほど、と思った。

土と土を結合させ、身体を修復させる土のゴーレム。無敵かと思われたそのゴーレムにそんな対処法があったとは。

「どこでそんな事を？」

「ははは、僕はこれでも土系統の家系のメイジだからね……フーケのゴーレムが持つ再生能力についてはキュルケ達に聞いていたし、もしかしららと思つて……ね……」

ギーシユは精神力を使い果たし、ぐらりと身体を揺らしたかと思えば地面に座り込む。

「大丈夫？」

「……は、はは……精神力もだけど、緊張が解けてしまつてね……情けない話だが、暫く動けそうに無い……」

「……暫く休むといい。私はゴーレムを見てる」

「ああ……助かる……」

そういうとギーシユはがくりと気絶した。

勢い余つて地面に頭をぶつけないようにギーシユを横に倒したタバサは、改めて彼を見る。

自分が途中で手を貸したとはいえ、ドットメイジで有るはずの彼があの大怪盗フーケのゴーレムを打ち倒すとは思つても見なかった。

彼はまだまだ成長する。

タバサはそう確信し、自身のマントを丸めて枕を作つてあげるのだつた。

## 28：混沌と火炎

「はあ、はあ……！」

ルイズ達は森の中を走っていた。

初めはゴーレムの出現した場所から円形に探していたのだが結局見つからず、もつと奥に居るのかも知れないと思い、小屋よりも更に奥へと進んでいく。

早くしなければギーシュがやられてしまう。

全員は表情に焦りの色を浮かべながら周囲を見渡す。

するとキュルケが「あ！」と叫び声をあげる。

ルイズとアビゲイルはそちらの方を向くと、ロングビルが開けた場所の中央に立っているのが見えた。

「ロングビル先生！」

ルイズは声を張り上げて呼び、ロングビルの方へと走る。

振り返ったロングビルは三人の姿を認識すると一瞬驚いたような顔を浮かべ、それからすぐに「どうかしたのですか？」と不思議そうに言う。

「大変なんです！あつちにフーケのゴーレムが現れて……！」

「ゴーレムが!？」

「はい！それでギーシュが囿になって、フーケを探している最中なんです！先生はフーケの姿を見ませんでしたか!？」

「い、いえ、残念ながら私は見ていませんわ……！」

今にも掴みかからんとするルイズに対して、少し気圧され気味に答えるロングビル。「そうですか……！」とルイズは悔しそうに肩を落としました。

先ほどの音はロングビルの耳には届かなかったのだろうか？

アビゲイルは眉をひそめてロングビルを見る。

地面に着く両足に集中してみれば、今もなお小さな揺れが伝わってくるのがわかる。

確かにあの場所から少し離れたところではあるが、何の異変も感じていないということはあり得ないだろう。

「手分けして探るのが一番でしょう。私は——」  
ロングビルは指を差すために手を持ち上げようとしてぴたりと止まる。

ルイズは不思議そうな表情をしたが、アビゲイルは「まさか」と内心で思った。

「あちらを探しますから、あなた達はあちらをお願いします」

「わかりました！」

ルイズとキュルケは頷き、フーケに背を向けようとしたその瞬間。

「デルフさん、お願い」

「おう」

アビゲイルが静かにデルフリンガーに指示を飛ばす。

するとデルフリンガーはアビゲイルの手からするりと抜け――

「……何のつもりですか？」

ぴたりと、ロングビルの首元にその刃を突きつけた。

ルイズとキュルケは一瞬何が起きているのか理解できずにぽかんと口を開けていたが、直ぐにアビゲイルとデルフリンガーの行動を理解すると、ルイズは慌てて声を張り上げた。

「ち、ちよつとあんたなにやってんのよ？」

しかしデルフリンガーは何も返事を返さず、その代わりにアビゲイルはロングビルを睨み付けたまま口を開いた。

「その外套、外していただけるかしら」

「……どうしてですか？」

ロングビルは先ほどまでの表情から一転し、まるで突き刺すような冷たい目でアビゲイルを見た。

まるで別人になったようだ。アビゲイルは思い、そして彼女の正体を確信した。

両者のにらみ合いにルイズとキュルケは顔を見合わせ、息を飲んで見守る。

「それは――」

「うるせえやい、さつさと脱がねえと刺すぞ」

「……………、……………その前に杖を捨てて」



「……ちっ」

理由を話そうとしたが、面倒くせえと言わんばかりにデルフリンガーが口をはさむ。

少し不服そうにしながらアビゲイルは更なる命令を下す。

ロングビルは軽く舌打ちをして、手に持った杖を投げ捨てると、ゆっくりと外套を脱ぎ去った。

するとそこには、ざっくりと切れ目の入った服と、切れ目から覗く止血用の包帯があった。

ロングビルは「やっぱり着替えぐらいは用意しておくべきだったね」と愚痴り、両手を挙げる。あの落ち着きを持った淑女然とした表情の面影はもはや何処にもなく、そこにあるのは獰猛な鳥類のように鋭く目を吊り上げ、見るものに恐怖を与えるように口元を釣り上げた怪盗の顔だけだ。

「ど、どういうこと？ アビーちゃん、その傷ってまさか」

「そう、デルフさんが付けた切り傷よ。……どうやら着替える時間は無かったみたい」

馬を飛ばしても学院からそれなりに時間のかかるこの場所に一度逃げ戻り、止血と休眠をとって、すぐに学院に馬飛ばした……といったところだろう。

「え……？ じ、じゃあフーケって！」

「この女って事だな」

ルイズはようやく状況を察してフーケに杖を向ける。

既に杖も捨てている上に首元にはナイフが突きつけられている為、その行動が必要だったかと言われると微妙な線だが、ルイズにとって気分の問題だった。

ルイズは憤慨し、フーケに杖を突きつけたまま叫ぶ。

「よくも騙してくれたわね！」

「なんの疑問も持たないあんた達が悪い。事件が発覚してから情報を集めてくるまでの時間を考えれば馬鹿でも分かると思っただけどねえ？」

「……この女……！」

杖を突きつけられたまま煽るようにしていうフーケに対して、ルイズは今にもその杖先から失敗魔法が漏れ出すのでは無いかと思うほど怒り狂っていた。

先程ロングビルに駆け寄った時に一瞬みせたあの驚いたような顔は、急に声をかけたからではなく、まだ生きていたことに対する驚きと言ったところだろう。

キュルケはどうだろう、とルイズを宥めて杖を下ろさせると、腑に落ちない点が一つ思い浮かんだ。

「……でもなんでわざわざ戻ってきたのかしら？ お宝は手に入れてるんだし、そのまま逃げちゃえば良かったのに」

「そうね……確かに。もしかして読めなかったから、代わりに他人を誘い込もうとしてたとか……？」

アビゲイルは考える。

あの手紙が本に挟まっていたものだと考えれば、『混沌を払う火炎』の呪文も英語で書かれているはずだ。だとすればフーケが本を読むことができずに苦肉の策に出たと考えてもおかしくはない。

しばらく顎に手を当てて考えていたが、今はそれよりも優先する事がある。

本の回収、そしてゴーレムの停止だ。

アビゲイルは再びフーケに近づき、マントの内側にでもしまっているであろう本を回収する為に手を伸ばしたその瞬間。

「はーい残念、大外れですー！」

この場に似つかわしくない、まるでクイズの司会者のような台詞が森に響いた。

透き通ったソプラノのような声質なのに、砂糖を入れすぎたコーヒーのように甘ったるく、そして嫌に残る。

「ッ、誰?！」

アビゲイルは慌てて振り返る。

するとルイズの真後ろには紫陽花のような淡い紫色の髪を腰あたりまで伸ばし、ニコニコと楽しそうな笑みを浮かべながらルイズに杖を突きつける女性がいた。

「ついつの間に……!」

「おーっと、動いちやダメですよ? ちよつとでも動けばこの娘のお腹がR—18G的な事になっちゃいます」

キュルケは慌てて杖をルイズの後ろに立つ女に向けようとすると、女はルイズの背中に杖をぐりぐりと押し当ててそう言った。

ルイズはひい、と声を上ずらせる。

この女はいつの間に現れたのか。

音もなく、気配すら隠して忍び寄るなど、並大抵の人間ではない。

フーケに仲間が居るといふ話を全く聞いた事がなかった為、相手が複数人いる可能性を考えなかった過去の自分を恨んだ。

「お、おい、オメエこそ下手な動きすんじゃねえぞ。フーケの命はこの俺が握ってるんだからな」

「はあ……何ですかあなた。武器風情が喋りかけないでくれますか?」

「なんだと——うお!?!」

女が指をパチンと鳴らすと、デルフリンガーは急に浮かぶことをやめ、地面へと墜落する。デルフリンガーはなんとか再び浮き上がろうとするものの、その場から動く事ができなかった。

縛り付けられたと言うよりは、《飛ぶ力を失った》と言ったほうが正しいかも知れない。

「先住魔法……!?!」

杖なしで発動した謎の魔法を目の当たりにしてキュルケは驚く。

聞きなれない単語にアビゲイルは女から目を離さないようにしながら聞いた。

「先住魔法……?」

「精霊の力を借りて使う魔法……簡単に言えば杖なしで使える魔法よ」

「ぶつぶー!!違いますー! 精霊なんて綺麗な力じゃありません。

もっとカオスでコズミックな邪神パワーですー!」

けたけたと再び愉快そうに笑う声。

その鬱陶しさにアビゲイル達だけではなく、フーケでさえ顔をしか

めていた。

「全く、助けてもらった事は感謝してるが、もうちよつと真面目に出来ないもんかね。空気が台無しだよ」

「えー、いいじゃないですか。それよりもほら、約束はまだ果たされていませんよ?」

「ちつ……分かつてるよ」

そういうとフーケは《アースハンド》を唱え、アビゲイル達の足を縛り付ける。その後自分たちのいる開けた場所の中央から、端の辺りまで移動し始めた。

よく見ると、この広間の地面には巨大な五芒星の魔方陣が描かれている。

今まで気づかなかったのはその魔方陣の余りの巨大さゆえだろう。

アビゲイルは足に絡まりついた土を何とかはがそうともがきながら、女を睨み付け言った。

「約束って何……?」

「ふふふ、とぼけちゃつて。あなたを殺す事に決まっているじゃないですか」

当然でしょう?と言った様な口調で女は言った。

アビゲイルは「え?」と声を漏らす。

あなたたち、ではなく、あなた。

それは追っ手を退けるといふ事ではなく、明確に自分を狙っているという発言に他ならなかった。

「困るんですよね、あなたみたいな存在。あなた自身が銀の鍵?

外なる神の巫女? そんなの認めません。ニンゲンはニンゲンらしく、無様で楽しい狂気の探索ダンスをしていなくてはいけませんよ。時空間跳躍なら、ティンダロスの獵犬に追い回される恐怖に怯えて余生を過ごすのは当然の義務でしょう?」

先ほどまでのふざけた声の調子はなりを潜め、吐き捨てる様にして言い放つ。

言っている意味が分からない。

だが、『銀の鍵』という単語は何度か耳にした事があった。

『銀の鍵』って何なの……？　あなたは、何か知っているの？　もしかして……私の中の恐ろしい力と何か関係があるの？』

「おいよせ、相棒」

何か知っているのかもしれない。

教えてくれる事などあり得ないとは思っていたが、アビゲイルは聞かざるを得なかった。

デルフリンガーが驚いたような声を出して止めようとしたが、どうしてもこの恐ろしい力について知りたかったのだ。

震える声で聞いてみると、女は目を丸くし、口を抑える。

それは貼り付けたような作られた表情ではなく、彼女がここに来て初めて見せる、心の底から驚いている顔だ。

「あ、あなた……まさか記憶喪失にでもなつたんですか？」

「……っ」

アビゲイルは静かに俯く。

銀の鍵の事やこの力の事だけじゃなく、この目の前にいる女の事も分からない。

あの手紙だって、おそらく自分の知っている誰かが自分に宛てて書いたものに違いなかった。それなのに、肝心な事は何も思い出せない。

女は次第にぶるぶると震え、次第にそれは堪えられない程の笑いへと変化した。三日月の様に口角を吊り上げ、ひいひいと言いながら笑いすぎて涙さえ流している。

「あははははは!!　何も知らない!　そんな事ありますか?　そんなにも巨大で邪悪な力を持つていながら!？」

「お、おいよせ!　何を言うつもりかしらねえがこれ以上相棒を苦しめるんじゃねえよ!」

「ふふ、ふふふ。　知りたがったのはその子じゃないですか。本当ならそういうのは自分で発見して欲しいんですけど……どうせあなたはここでデッドエンド。　冥土の土産に教えてあげましょう!」

出血大サービスです」

女は心底愉快そうにしながら、ルイズに突きつけた杖を離すとくる

くると踊る様にアビゲイルの目の前に移動した。

「あなたは『銀の鍵』。窮極の門を開く事の出来る唯一の鍵たる存在——そして、その先に眠る限りない空虚の力を宿す虚無の巫女。……もつとも、過去のあなたならともかく、今のあなたにはその真髓の一端を現すのも難しいでしょうけど」

「はあ……？ 全っ然意味がわかんない！ 結局はどう言うことなのよー！」

くすくすと笑いながら言う女に、ルイズは苛立ち声を荒げた。

女は一瞬不服そうに口をへの字に曲げ、やれやれと見下したような溜息を吐いて言う。

「要するにあなたは超危険人物って事ですよ。あなたの中に眠る力が暴れ出せば、隣にいるお友達どころか、こんな世界一瞬で壊せちゃうんじゃないですか？」

「嘘……」

漏らした声は一体誰のものだったか。

アビゲイルはふらふらと揺れ、倒れそうになる。

その顔色は今にも気絶してしまいそうなほど真っ青で、それ程までにシヨックだったのだろうという事が伺える。

「ア、アビー……」

「……そんな……」

——この力はそんなに危険なものだったのか。

もちろんこの女が嘘をついている可能性もあるが、女の言葉を嘘だと言い張るのは少し楽観的すぎると言わざるを得ない。

現に自分の中に眠るこの力は謎な部分が多く、それでいて男の腕やギーシュの生み出したワルキューレを粉々にする程の破壊力を持っていたのだ。

それがまさか、世界を壊せるなどと言う冗談みたいな規模だとは思えなかったが——きつと彼女の言う『真髓』とやらを發揮したとき、世界を滅亡させるほどの力になってしまおうのだろう。

ずきん、ずきんと頭が痛む。

女の話がトリガーになったかのように、アビゲイルは何かを思い出

せそうな気がした。

「……さてきて！私好みの絶望顔を見られて満足したところで、そろそろこの世界からご退場願いまししょうか！」

そんな事には気付かず、女はステップを踏むようにしてフーケの方へと近づいていく。

「フーケさーん！ あとは私が教えた通りの呪文でお願いしますね。ゼーんぶ片が付いたら、あとでその本を回収しに戻ってきますから」「分かってるよ」

森の奥へと消えて行く女の姿を横目で見てから、フーケは『混沌を払う火炎』——クトウグアの招来の呪文が書かれた魔法書を手に取る。

「あんた達には悪いけど、そういう取引なんだ。ここで死んでもらうよ」

本を開きはしませんが、表紙を艶めかしい手つきで一度なぞると、にやりと口元に笑みを浮かべた。

「不味いわよ！ このままじゃあたし達殺されるわ！」

「……待って。あのメモに書いてある事が本当なら、フーケはクトウグアを呼び出すことはできないはずよ」

「え？ どういうこと？」

キュルケは疑問符を浮かべる。そういえばあの時のメモの内容を聞いたのはデルフリンガーと自分だけだったなと思い出し、説明する事にした。

「あの本に書かれている招来の呪文を完成させる為には、アビーの……銀の鍵？ の力が必要みたいなの。その力で門を開いて、フォーマル……なんとかからの道を作ってあげないといけないって」

「ん、んん……？ ごめんルイズ、あなたの言ってる事全然良く分からなインだけど……つまり、あの本を持ってても意味がないって事？」

「そのはずよ」

ルイズは若干不安が残っているものの、そう言い切った。

確認を取るようにして「そうなの？」とキュルケが俯いたままのアビゲイルの方を向く。

するとアビゲイルは急に目を見開いたかと思うと、狂ったように叫んだ。

「駄目！ 呪文を止めなきゃ!!!」

「え？ そ、それはそうだけど別に大丈夫って話……」

「そうじゃなくなつて……!!あの、あのあれが、あれが出てくるの!」

「あれあれってどれよ?!」

わたわたと慌てふためくアビゲイルの言葉にルイズが困惑していると、フーケがついに呪文を唱え始めた。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうと んが  
あ・ぐあ なふるたぐん いあ! くとうぐあ!」

一度目。

地面に描かれた魔方阵が淡い光を放ち始める。

それは目に見えるほど濃厚な魔力の輝きだ。

あの女が満たしたのか——それともあの魔法書が満たしたのか。それは分からないが、ルイズ達の感じたことのない程の強い魔力だった。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうと んが  
あ・ぐあ なふるたぐん いあ! くとうぐあ!」

二度目。

空間が揺らぐ。

アビゲイルが鍵を捻った時に現れる虚空と少し似た、暗くて巨大な通り道だ。

その穴こそ、フォーマルハウトとこの地をつなぎ、クトウグアを導くための門なのだろう。

「……ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうと ん  
があ・ぐあ なふるたぐん いあ! くとうぐあ!!!」



そして——三度目。

先ほどの空間の揺らぎは完全なものとなり、ついに異界への通路が完成した。

ルイズ達はまるであの穴に吸い込まれてしまいそうな錯覚を覚えながら、この後に現れるであろう脅威に身を強張らせる。

「はははーさあさつさと現れて燃やし尽くしちゃいな……！」

フーケは高らかに言い放つ。しかし——

「……？ 何も……来ない……？」

ルイズはきよとんとしながらその異界の通路を眺める。

その奥先から現れると思われる炎の権化が、姿を現さない。

「どうなってるんだい！ あの女、嘘をついたってのかい!？」

「……な、なんだかよくわからないけど、ほら、やっぱり何ともなかったじゃない。『混沌を払う火炎』なんてちつとも姿を現さないし！」

形成逆転、と言うべきか。先ほどまでの態度が入れ替わったかのようにフーケは慌てだし、対してルイズは強気の態度で笑っている。

「おっぱいの姉ちゃん！ 俺を魔法で引っ張ってくれ！ 俺で土を削れば拘束も溶けるはずだ！」

キュルケは言われた通りに《レビテーション》で浮遊させ、土に刃を触れさせてみると魔法が解けたように土が崩れた。

どうやらデルフリンガーには魔法を打ち消す効果があるらしい。

「やったー！」と喜びの声を上げ、アビゲイル、ルイズの順番で拘束を解く。

「くそっ！ それらしいゲートは出来ているのに……なんで出てこないのさー！」

「フーケも案外間抜けなところがあるのね」

「全く驚かせてくれちゃって。今度はあたしたちがフーケを捕まえる番ね」

まだ捕まえた訳ではないが先ほどの絶体絶命を乗り越えたルイズ達は既に勝ったような、余裕そうな表情を浮かべて言った。出るはず

のないものを出ると信じ、未だ本を手に異界の通路を睨みつけている。

しかし余裕そうなルイズ達とは対照的に、アビゲイルは未だ必死な形相で二人の手を思い切り引っ張った。

「二人とも、逃げましょう！ 今すぐ！」

「きやあ!? ちょっとなにをするのよアビー！」

「そうよ、フーケを捕まえる為にここまで来たのに」

「いいから！もう出てくるかも！」

今までに無いぐらい興奮したアビゲイルがぐいぐいと引っ張ってくる。

時折ちらちらと、異界の通路を怯えた表情で見っていた。

二人はアビゲイルが何に怯えているのか全く分からず、もう一度開かれた異界の通路を眺める。

その通路は閉じることなく、未だ開いたままだ。

ぽつかりと空間に穴を開け、今もなお通路を開き続けている。

しかしそこから『混沌を祓う火炎』は出てこない筈だ。

「」

あ。という声は、音には成らなかった。

ルイズとキュルケがそれを認識した瞬間、全身の熱が抜き取られていくような感覚に襲われたのだ。

それはまるで、松明のような小さな炎。

脅威と呼ぶには程遠い、程のちっぽけな炎だ。

しかしルイズとキュルケは即時に理解する。

ゆらゆらと揺れる炎から伝わる、明確な敵意。

見るだけで心を揺さぶられるような、冒瀆的な光。

あれは『混沌を祓う火炎』などではない。

言うならば、『混沌を齎す火炎』である、と。

炎はやがて、異界の通路を抜けるとゆらゆらと円を描く様に回転を

始める。

それはまるで、元々環状の炎であったかのように輪を作ると、その中心から炎の花弁が生み出された。

一枚、二枚——そして三枚。

今ここに、炎の花が咲いた。

## 29：父なる神よ

咲き誇る炎の花。

イオマグヌツト、あるいはヤマンソ。

異次元へと潜み続け、異次元の門が開いたその瞬間、あらゆる物を燃やし、食らいつくそうと這い出てくる悪虐の炎王。

アビゲイルは目を見開き、全身に駆け巡るような衝撃に驚いていた。

あの炎を視認した瞬間、記憶の扉にかけられた錠が、まるでいくつも破壊されたかのように急激に様々なことを思い出したのだ。

あの女、這い寄る混沌ニヤルラトホテプの事。

あの手紙の主である叔父の事。

目の前にいるこの炎の神の事。

——そして、自分外なる神の中に眠る力カの事。

もちろん全てを思い出したわけではないが、確かに自分は叔父と共に旅をし、その最後にこの炎の神から辛くも逃れたのだ。

今はまだ召喚されて間もなく、あの時に比べれば遥かに小さな魔力しか持っていない。しかし、何人もの魔力を食い荒らし、再び成長

をすれば、この世界ハルケギニアはまたあの時の世界と同じ道を辿ることになる。

とにかくなんとかしないと……！

アビゲイルがそう思っていると、フーケは狂ったように笑いだす。

「アハ、アハハハハハハハ！ こいつが、こいつが『混沌を払う火炎』かい！ 確かにこりやすごい！ こいつの光に当てられているだけで死んじまいそうだよ!!」

「フーケさん！ その魔導書を渡して！ この怪物を退散させる呪文があるかもしれない……!!」

「はあ？ 何言ってるんだい!! そんなことさせるわけ無いじゃないか!」

「それは『混沌を払う火炎』なんかじゃないの！ もっと危険で——」  
「はっ！ うるさいね！ 命乞いなんか聞かないよ!!」

フーケは吐き捨てるように叫ぶと、「やっっちゃいな！」と命令を下

す。

全身を貫く圧倒的な魔力。熱くもなく、冷たくもない不思議な炎が奏でる音色は、聴くものの心を惑わせる。

彼女は狂ったように見えたのではなく、その威光によって既に狂っていたのだ。

だからこそ気付かない。

その敵意が向けられているのはフーケ自身であると。

「——はっ。」

ガブリ、と炎が食らいつく。

イオマグヌットから伸びた炎はフーケの腕へと伸び、牙を立てるようにその肉を貫いた。

「が、ああああああ!!?!」

それは焼けた鉄板で挟み込まれたような——あるいは腕か急に凍結されてしまったような、そんな焼けるような痛みが腕に走る。

それだけではない。

ぐちやぐちやと獣に肉を咀嚼されているかのように、炎に包まれたフーケの腕は食い続けられている。

フーケは手に持っていた本を遠くへと放り投げ、炎を消そうと何度も地面をのたうち回るが、その炎は鎮火されるどころかますます燃え上がり、周囲の草木すら同時に燃やしなからフーケの身体を喰らい始めていた。

「っ……い！ あのままじゃ死んでしまうわ……い！」

「おいまさか助けようってんじゃねえだろうな!?!」

「そのまさかよ！ ちゃんと理由もあるわ！」

イオマグヌットは人の持つ魔力をも食らう暴食の炎王でありながら、召喚に携わった者の顔を覚え、喰い殺すその瞬間まで追い続ける恐怖の追跡者でもあるのだ。

結局のところフーケを見殺しにしたところで、彼女の持つ潤沢な魔力をイオマグヌットに与えるだけになる。

——という、三割ほどの論理的理由を瞬時に思い浮かべ、七割程の『人を死なせたくない』という感情的理由で動き出した。

「しようがねえ、わかった!! 俺を使え! さっきフーケの土を断ち切ったみたいにあの炎も吸収できるかもしれねえ!!」

「分かった……!」

アビゲイルは素早くデルフリンガーを拾うと、フーケに向かって走り出す。

既に暴れる体力も無くなり、炎に包まれたまま動かなくなったフーケの表面の炎を切り裂く。

すると刃が強い光を放ったかと思うと、纏わりついていた炎は消滅していた。

「凄い……!」

「お、おお……できちゃった。俺って本当に凄い……」

どうやらあの炎を構成するものには強い魔力が込められているらしい。

正直言つて本当にただの炎なら消すことはできなかったため、デルフリンガー自身かなり驚いていた。

アビゲイルはフーケを見る。

既に動かなくなっていたフーケは死んでしまったのかと思っただが、よく見ると弱々しくも背中を上下し、浅い呼吸を繰り返しているのが分かった。

今すぐにも治療を施してあげたいところだが、そんな時間をイオマグヌットは与えてくれない。

「治療は後だ!今はこいつを何とかするぞ!!」

「分かってる!」

イオマグヌットはようやくアビゲイル達を認識したかのように周囲に意識を向ける。

そして周りにもまだ3匹も餌がある事を確認すると、舌舐めずりするように環状の炎から赤熱が噴き出し、再び食事をする為に炎を伸ばした。

(このままじゃまずい。でも本を拾って、退散の呪文を探す時間さえ稼げれば……そうだ!)

アビゲイルはイオマグヌットから伸びる炎を転がるようにして交

わしてから思い付く。

ルイズとキュルケに時間を稼いでもらう事が出来れば、僅かな時間だが本を読む事が出来る筈だ。

「ルイズ・キュルケさん！私に考えが——!?」

後ろを振り返る。

——するとそこには、杖を構えながら顔を白くし、今にも過呼吸で死んでしまいそうなルイズの姿と、まるで子供の様に涙を流しながら、震えるキュルケの姿があった。

二人の変わり果てた姿。それは実は、イオマグヌットがその姿を表したその瞬間から始まっていたのだ。

彼女たちの想像していた物よりも遥かに小さな炎の集まり。しかしそれは二人にとって——否、フーケにとってもおぞましく、人知を超えたモノだった。

彼女たちにとって、真に身も心も凍り付かせる様な恐怖を刻みつけたのは、イオマグヌットの放つその名状しがたい嫌悪感によるものであり、見た目による脅威の差など些細なものだ。

例えば、それは高貴な王族の前に立った時のような物だろう。

自分と同じ人の形をした生き物であるのに、その人物の纏うオーラ一つで感じ方全てが変わってしまう。

王族の放つ威光あるオーラは、その目の前に立つだけで身体が震え、胃が痛くなるほどに緊張するものだ。

そして今、彼女たちはイオマグヌットの纏う名状しがたい嫌悪感、そのオーラに完全に飲まれていた。

ルイズは既に足に力が入らず、握った杖もほとんど手を添えているのみ。

立ち向かうか、逃げなければならぬと分かっているのに、脳は思考を放棄し、ただ杖を握るという形だけ作っただけのまま硬直してしまっていた。

さらに酷いのはキュルケの方だろう。

精神が死の恐怖に支配されただけでなく、既にその肉体すら死を受け入れている。生を投げ出したその体は、硬直させるどころか、む

しろ無防備に脱力していた。

既に彼女は杖を持つ事も出来ず、ぐっしよりとその大地を濡らしながら、悪夢から目覚めるその瞬間が訪れるのを待つ事しか出来なくなっていた。

「二人とも……!」

二人の方へとイオマグヌットの炎の手が伸びる。

アビゲイルは急いで二人を庇うように駆け出すと炎の手を切り払った。

たった一回だが、あの俊敏なワルキューレを相手にナイフの扱いを練習してよかったと内心でギーシュに感謝した。

「ぐ……相棒、悪い知らせだ、もう次の攻撃は受けらんねえ。あくまで俺のは魔力の吸収だ……あんな巨大な魔力に触れたら吸収するどころか俺がぶっ壊れちまう」

「っ、そう……なら、残された手は……」

もはやあの本の中に退散の呪文が乗っていたとしても、読むための時間も無い。

ルイズ達がこの状態では、逃げ出して体勢を立て直すことも不可能だ。

——残された手はたった一つ。銀の鍵としての力を使うしかない。

アビゲイルはゆっくりと手を伸ばす。今自分の中にあるのは『ルイズ達を助きたい』という願いと、『この力を使いたくない』という恐怖だ。

自分の故郷<sup>セイレム</sup>での記憶は、夢のような感覚で曖昧だ。

だからこそ、うつすらと残された記憶の中に眠る自分の姿が怖いのだ。

「相棒、迷う事なんかねえ」

「え……?」

「こうなりやもう、選ぶのはお前さんがどうしたいかだけだ。逃げるも良い、戦うも良い……これだけ状況が最悪なら、何をしたらっお前さんを恨む奴なんざいねえよ」



「……デルフさん」

デルフリンガーの言葉に、アビゲイルは面食らったように目をぱくりと瞬きし、それからふっと笑みを浮かべた。

それは決して恐怖を克服したという訳ではない。

しかし、今のアビゲイルにとって自分の作り出したその笑顔が嘘であったとしても、自分の心を誤魔化すには十分だった。

「そう……ね。私、この力が怖い……凄く怖いけど……でも私、ルイズ達を助きたい。その為だったら、世界を滅ぼしてしまうような危険な力だって構わない……!!」

アビゲイルは身体の芯から叫び、銀の鍵を中空に向かって捨てる。

自身が鍵だと言うのならそんな行動も要らないのだが、一種の自己暗示の様なものだ。

「お願い……皆を守って……!」

今はただ、皆を守りたいという強い祈り。

やがてそれに呼応するようにして、アビゲイルの身体にらあの時と同じように満たされていく感覚があった。

それはギーシュと戦っていた時に近い感覚。

自分の身体が、心が、自分でなくなっていくような、冷たくもあり、暖かくもある感覚。

あの時と違うのは、自分の意識がはつきりとしている事だろうか。

「相棒!!」

イオマグヌットから三本の炎の手が伸びるその瞬間。

アビゲイルの祈りに答える様にして虚空から触手が現れ、その全てを払い落とした。

その虚空の数は三本。それぞれの穴の中から一本ずつ生えていた。

イオマグヌットはまるで苛立ちを覚えたかのように執拗にアビゲイルを狙い始める。炎の手の数は無数に分岐し、アビゲイルの肉体を食いつくさんと一斉に飛来した。

「っ!」

アビゲイルは再び鍵を捨てる。

炎の手に合わせる様にして出現させた虚空と触手は、それら全てを再び薙ぎ払った。それはまるでこの触手を自分が操り動かしているような感覚に、アビゲイルは少しだけ戸惑いを覚えながら、幾つもの虚空を生み出していく。

鋭くしなつた触手は目にもとまらぬ速さで動かされ、伸ばされた炎の手だけではなく、触接イオマグヌットへと攻撃を重ねた。

『!!』

イオマグヌットは咆哮する。これは実際に音として発されたわけではなく、念力のような力でそう感じ取っただけだ。

炎の手が伸び、触手の一つへと食らいつく。がぶりと深く食い込んだ炎は、触手からみるみるその魔力を吸い取り、炎の勢いを増した。「くそつ、あいつの炎、ちよつとずつ強く成ってやがる！ どうすんだ相棒！」

「……」

アビゲイルはルイズとキュルケをもう一度見る。

未だ怯えの色を見せるその表情は、イオマグヌットに向けられたものか、それとも自分に向けられたものか、もはやアビゲイル自身には分からなかった。

「……それでも構わない。」

二人を守るのならば、例え恐れられ、嫌われようとも。

「大丈夫……私が何とかするわ。私は虚構への門を開く『鍵』なんだから……」

アビゲイルは両手を合わせて目を閉じる。

例え自分がまだ未熟な存在だとしても、虚構への門を開くことは出来たのだ。

ならばその先——境界の先で眠る神へと声を届ける事だって出来るかも知れない。

「ルイズ、キュルケさん……どうか、どうか目を閉じていてくださいな。きつとあなた達はこの境界の景色に耐えられない……」

アビゲイルは息を吐き、震える声で、その力を解放した。

「——我が手に銀（しろがね）の鍵あり……！ 虚無より顕れ、その

指先で触れたもう。我が父なる神よ……！薔薇の眠りを超え、いざ窮極の門へと至らん……！！」

力を制御する事に専念し、苦しうにアビゲイルは言葉を紡ぐ。

「クリフォード・ライゾム光殻湛えし虚樹っつ！！」

アビゲイルの背後に門が開く。

そこから現れる無数の冒流的な邪神の触手が、イオマグヌットを包み、そして引き摺り込んでいく。

その先は次元の狭間、あるいは深淵の闇、あるいは星の海だ。

イオマグヌットは領域外へと繋がる門の先へと引きずりこまれていき——その姿を消滅させた

### 30：帰路

「……あーあ、予想は外れちゃいましたか。悔しいですが、あなたのプランで行きましょう」

女は回収した本に付いた土をぱんぱんと払い落としながら、背後に立つ男へと顔を向けずに言った。

あの外なる神の巫女である彼女が随分とおとなしいとは思っていたが、まさか本当に記憶を失っているとは思わず、迷いが出て余計な事を言ってしまった。

「君が切っ掛けを与えたのだろうか？」

「……まあ、そうですね」

「フ、君もそれだけ不安だったという事だろう。確かにこいつは強力だが、それを遥かに上回る神格の力を引く巫女を失ってしまっているものか、と」

「……凶星ですけど、あなたに言われるとムカつきますね」

「寝ているのだよ。君の巫女愉に向ける私怨みより、我らの悲願を選んでくれたと言う事を」

男はやれやれと言った風に肩を竦める。

女は苛立ちを隠さないままに、ふん、と鼻を鳴らして言った。

「ええ、確かにその通りです。私たちはあの星の戦士が逃げ込んだこの世界をようやく見つけた。我が主の手の届かない絶対領域を。……ですが、今の私たちはただの化身。彼を屠るだけのスペックが無い」

「その通りだとも。かの者をこの世界から追い出し、我々の物にする為にはその勝利は確実なものとしなくてはならない。この地にこうして呼び出されたのは、まさしく奇跡以外の何者でもなく、チャンスなど二度と巡ってこないのだから」

それは砂漠の中の一粒の砂を探すような途方も無い偶然。

一度掌から落として仕舞えば、その砂粒はたちまち風に吹かれて消えてしまう。

だからこそ切り札になり得る可能性をみすみす手放してしまうの

を女は躊躇ったのだ。

『始祖ブリミル』……か。 全く驚かされる」

男の眩きは森の闇の中へと吸い込まれていき、妖しく輝く二つの月に左手を重ねて、男は再び愉しそうに笑う。

その手の甲の輝きは月の光に負けないぐらいに眩しく輝いていた。

・  
:  
:  
:

あれから時間が経ち、アビゲイル達は行く時と同様に屋根の無い馬車に乗って運ばれていた。

あの中の事は大変だった。

主にタバサが、であるが。

フーケのゴーレムがもがくのを止め、ばらばらとその姿を維持しなくなつてから間もなくして、上空で偵察をしていたシルフィードが急にパニックになつて墜落するように降りてきた。

事情を聴いてみればアビゲイル達が大変な事に成っているらしい。

それを聞いたタバサはすぐさま行動し、精神力を使い果たして気絶するように眠るギーシュを木の陰に素早く隠すとシルフィードに乗ってアビゲイル達を見た場所まで案内してもらった。

するとどうだろう。

そこに居たのは、前のめりになつて、糸が切れた人形の様に倒れ込むアビゲイルと、地面に転がり落ちたまま叫び声をあげるナイフ（タバサはデルフリンガーについて知らなかった為、これもかなり驚いた）。

そしてその後方には固く目を閉じて涙を零し、まるで幼子の様に震えながら身を縮こませるキュルケと、これまた気絶して倒れたまま動かないルイズ（しかし杖は握ったままだったのにはタバサは内心で賞賛を送った）。

まさかフーケにやられたのか、と思つてはみたが、それもどうやら違うらしい。フーケもまた身体の一部を炭に変えてしまったかの様な重症を負っていたからだ。

タバサは取り敢えずフーケへと近づくと、素早く手当をする。

悪党を手当するのはこれで二度目だな、と思いながらも、手当が済むとキュルケへと近づいて身を屈める。

「大丈夫?」

声をかけてみても、キュルケはこちらに全く気づかない様に震えたままだ。

まさか、アビゲイルの力が再び暴走したのか?と思つたが、周囲の状況を見て直ぐに察した。

草木の一部はその生命力を吸い取られた様に焦げ付き、ついさつきまで燃えていたであろう部分が黒煙を燻らせる。

これは炎だ。

それに気づいた瞬間、タバサは一瞬にして顔を青ざめて立ち上がり、慌てて周囲を見渡した。

『混沌を払う火炎』、その本が無いのだ。

「本は……どこ?!」

この場で唯一目を覚まし、会話をできる人物——デルフリンガーに向かって問いかける。

「……残念だが俺にや分からん、フーケがそっちの茂みにブン投げて、それきりだ」

「そう……少し探してくる」

シルフィードにこの場の警護を任せ、タバサは周囲の散策を始める。

キュルケたちをあのままにしておくのは心苦しかったが、あの本の中身がこの惨状を生み出した可能性は高く、もしそうだとしたらあの本をこのまま野放しにすることはできない。

——しかし結果として本を見つけることは叶わず、こうして馬車に揺られているのだった。

「調子はどう?」

「……僕は平気さ。もうある程度は魔法も使えるぐらいには回復したよ。アビー、君はどうかね？」

「私も平気。きつといういろいろ思い出して、体が吃驚しちやっただけだから……でも……」

目覚めたあとすぐに記憶取り戻した事を二人に告げたアビゲイルは、ちらりと眠る三人を見る。

キュルケ、ルイズ、そしてフーケ。

彼女たちは重傷だ。

物理的な側面で言ったらフーケだけであるが、キュルケとルイズの精神には甚大な悪影響を及ぼしている。

それも当然だろう。

見た目は単なる炎であるとはいえ、人知を超えた封印されし神々——旧支配者の姿を見てしまったのだから。神というのは、『見た目が怖い』などという生半可な恐怖など持ち合わせていない。脳に、心に、その名状しがたい嫌悪感、直接届き、揺さぶり、そして崩壊させるのだ。

もつと早くに記憶を取り戻すべきだった。

そうすれば、こんな事にはならなかったのに。

アビゲイルは馬車に揺られながら体育座りをして、その膝に顔を埋める。

「……気に病むことは無いよ。君は良くやったさ。なんせ『混沌を祓う火炎』——じゃ無いんだっけか。まあ、それと同じくらい恐ろしい存在を退けたんだからね」

「……」

馬を操りながら慰めるギーシュの言葉に、こくと頷く様な反応は見せるが、やはりアビゲイルの心は鉛を付けたように重い。

詳しい話は後で学院長であるオールド・オスマンを交えて行う為、アビゲイルの記憶については未だ聞けずにいたタバサは、そんなアビゲイルの姿が儂く、放っておくと今にも壊れてしまいそうに見えた。

タバサはギーシュの様な慰めの言葉が見つからず、キュルケならこうしそうだ、というイメージでアビゲイルの隣に座り、そつと俯いた

その頭を撫でる。

すると暫く撫でていると、髪を触れられるのが気持ちよかったのか、それともやはり疲れがあったのか、すうすうと寝息を立て始めた。タバサがホツと胸をなで下ろすと、ギーシュが再び口を開く。

「……なんだか悔しいな。フーケのゴーレムを倒したと舞い上がっていたが、彼女達はずっと危険な目にあつて居たなんて。……これでは彼女を守る騎士にはまだまだ遠いな」

ギーシュの呟く声は苦々しく、後悔の色を滲ませて居た。

フーケが学院に襲撃をかけたあの日も、自分は先生を探しにはしり、危険な目にあつたのはキュルケ、ルイズ、そしてアビゲイルだ。いつだったかシエスタとアビゲイルを混ぜて話した『理想の騎士の姿』とは程遠い。

「……それは……私も同じ。もつと早くに加勢すべきだった」

本の回収という任務と、友人達を守るという事、その二つを天秤に掛けて迷っている間にどちらも取り落としてしまうなど、ガリア王家の職員として有るまじき失態だった。

それに、とタバサは言葉を繋げる。

「……あなたも充分凄い。少なくとも私だったら、ゴーレムの攻略法は見えなかった」

「そうかい？」

「そう。あなたはきつとライン……トライアングルになれる。この子を守りたいなら、下を向くのはまだ早い」

「……はは、君が励ましてくれるのはなんだか新鮮だね。というか、こうして肩を並べて戦うのも、語り合うのも珍しいか……」

ギーシュは後頭部を掻き、はははと照れた様に笑う。

自分にとって彼女は幼くしてトライアングルのメイジという風と水の使い手。学院に入ってからの、一つの目標でも有る人物だった。

もちろん少し前は挫折の原因の一つだったのだが、その本人からこゝうも褒められるとなんだかむず痒い、というか素直に嬉しかった。

ギーシュは気落ちした気分を多少なり回復させ、改めて頑張ろうと



心に誓ったのだった。

・  
:  
:

「——と言うのが、あの場で起こった全てです」

「ふむ。そしてミス・タバサが後からその場に訪れた……という事か」

学院長室にはギーシュ、タバサ、オスマン、コルベール、アビゲイルの五人が居た。フーケは既に王都から呼び寄せた兵によつて捕えられ、王都へと送られている筈だ。

あの現場を最後まで見届けていたのはデルフリンガー、そして、アビゲイル。

その為アビゲイルが説明役として学院長室であの場で何が起こったのかを説明した。

その中でもオスマン、そしてタバサが最も強く反応したのは、無貌の神、這い寄る混沌、ニヤルラトホテプ、そしてその化身である紫陽花の様な淡い紫色の髪を腰より下まで伸ばした女の事についてだ。詳しく尋ねられたアビゲイルはその食いつきっぷりに困惑しつつも、この邪神の持つ『人を弄ぶ悪性』について知る限りのことを話した。

そしてまた、伯父からの手紙の内容についてもだ。

奴らは『夢の外』と呼ばれた場所を探しているらしいと記されていたのだ。

一通りの内容を聞いたオスマンは険しく眉間に深いシワを作り、それから大きなため息を吐いた。

「……無数の貌を持つ神の代行者現る時、世界に狂気と混沌をもたらすだろう」。つまりは、その女性を指していたというわけか」

「そうだと思います……」

「……しかし君は急にいろいろ思い浮かぶようになったようじゃが、

まさか記憶が……?」

「はい」

オスマンが尋ねると、アビゲイルは力強く頷く。

「では君の知っている事を教えてくれるかの?」

「……分かりました。今から言う事は全て真実です。どうか疑わずに聞いてくださいいな」

アビゲイルは静かに語りだす。

自分は銀の鍵という窮極の門を通り抜けるための鍵であり、その境界の先に居る神の一端を宿す巫女であり、その力は這い寄る混沌よりも強大で、危険極まりない存在であるという事。

その力を制御するために伯父と共に時空間を跳躍する旅に出たという事。

そしてその旅の途中——ある世界でニヤラトホテプの化身と、彼女の呼び出した信奉者種族達、そして狂信者の呼び出したイオマグヌツトが暴れだし、伯父とはぐれ、そしてこの世界に流れ着いた事。どれもスケールが大きすぎて飲み込むのに時間が掛かったが、それでもこの場に居る4人は静かに聞いた。

オスマンはなるほど、と呟いて髭を数回撫で、口を開いた。

「……なるほど、つまり儂と出会い、あの本を託してくれた男は君の伯父だった……という訳か」

ふう、と自分自身に対して呆れたようなため息を吐いたオスマンは立ち上がると、アビゲイルに対して頭を下げる。アビゲイルとしては二度目になるが、偉い人から謝罪されるというのにはどうも慣れず、わたわたと慌ててしまう。

「済まなかったのう。君は既に感づいていたかも知れぬが……君の事を『無貌の神』だとずっと疑っていた。君がこの世界を混沌に導き、破滅を呼び起こす悪しき存在であると」

「顔を上げてくださいいな、学院長先生。それに私は……『無貌の神』では無いけれど、同じように危険な存在なんですもの……」

「危険か否かは使うものの心次第じゃ。それに、その力を制御する為に旅を始めたのじゃろう?」

諭されるような口調に、アビゲイルはゆつくりと頷く。

しかし、それはこの場に居るものたちの認識だと理解していた。ルイズとキュルケは、そんな風には思ってくれない。

もう彼女達と笑い合う事はきつと難しい。

アビゲイルは胸の内に悲しみを秘め、スカートの裾を強く握ったのだった。

### 31：心の爪痕

翌朝。

ルイズはこれまでにない位最悪の目覚めをした。ぐっしよりとシーツは汗に濡れ、髪は過去最高にみだれ、顔にペタペタと張り付いている。

昨日のことはそれなりに覚えている。

あの炎の花を見た瞬間、今までの人生で感じたことも無いような恐怖感に襲われ、思わず杖を握ったまま固まってしまった。戦わなければ死ぬと分かっているのに動けなかったのは、今となつてはかなり悔しい記憶だ。

しかし記憶に残っているのはなにも悪い物ばかりではない。

まず一つは、フーケを捕まえたと言う事だろう。

正直な所自分が役に立ったかと言われると否としか言いようがないが、それでも国中を震え上がらせる大怪盗であるフーケを捕まえる事に成功したことは喜ばしい事だ。

そしてもう一つはアビゲイルの記憶が戻ったらしい、という事だ。

実は帰りの馬車の中、一瞬だけ目を覚ましたルイズは、おぼろげながらにその話を聞いていたのだ。もちろん、アビゲイルが『もつと記憶を取り戻すのが早ければ』と落ち込んでいる、という事も聞こえていた。

ここは主人として一つ、今回の一件の功労者の一人を労ってあげなくてはならない。

ルイズはこほんと咳払いをしてアビゲイルに語りかける。

「……おはようアビー。昨日のことなんだけど、気にすることは無いわよ。あんたは良くやってくれたわ。あんたが居たから、私はこうして学院に戻ってこられたのよ」

ルイズは優しく微笑みながらアビゲイルの頭の位置にポンポンと手を乗せる。

まるで洗い立ての布のようにサラサラで、羽毛が詰まっているかのようにふかふかなその手触りはまるで枕のようだ。

というか、枕だった。

「…………あれ!? アビー!?!」

横を向いてみると、アビゲイルの姿がない。それどころか部屋の中にもいなかった。

ルイズは今の一連の流れと臭い台詞を思い出して急に恥ずかしくなり、何でいないのよ!と憤りつつ、今の台詞聞かれなくてよかった…と安堵した。

「そっか。この時間帯なら水汲みとか洗濯かしら……」

アビゲイルも疲れているだろうし、今日ぐらいは休んでいてもいいのにとルイズは思いつつベッドの上でゴロゴロと寝転がる。

「そういえば、昨日の一件はあの後どうなったのかしら……後で学院長先生に直接聞きに行こうっ」と

とりあえずはアビーが返ってきてからね、と枕を抱きしめながら、二度寝をしないように体を軽く動かしながら彼女が返ってくるのを待った。

「お、遅い……全然帰ってこないじゃないの」

それから30分ほどたったが、アビゲイルが一向に帰ってくる気配を見せない。

ルイズは若干の憤りと心配を混ぜ込んだ声を出してベッドから立ち上がると、素早く服に着替えて水汲み場へと向かう。

するとシエスタが今朝の洗濯をしているのが見えた為、この辺りでアビゲイルを見なかったかも聞いてみることにした。

「シエスタ!」

「わっ……あ、ミス・ヴァリエール。おはようございます」

「ルイズで良いわよ。それより、アビーを見なかった?」

「アビーさんですか? いいえ私は見てませんけど……」

「そうなの? ……まったくアビーは、ご主人様に無断でどこほつき歩いてるんだか……」

アビゲイルを一人にする、イコール、事件発生、の方程式がルイズの中では既に完成していた為、アビゲイルを一人にさせる事にたまらない不安感を募らせていると、シエスタが首を傾げる。

「何かあったんですか？」

「それが朝からアビーの姿が見えないのよ。 　　いつもふらふらふらどっか行っちゃうんだから……そろそろお仕置が必要かしら」  
「ほ、程々にしてあげてくださいね……？　　私の方でアビーさんを見つけたらご連絡しますので」

「ありがとう、助かるわ」

ルイズはシエスタに礼を言うと、次にアビゲイルが行きそうな場所——キユルケ、タバサ、モンモランシー、そしてギーシユの部屋を訪れる。

しかし時間が時間の為返事がなく、寝ているかもしれないと思い、仕方ないので一度学院長室を訪れ、昨日の出来事について尋ねた。

話を聞いてみればフーケは捕まり、今日は授業がなし、そして夜は舞踏会を行うのだそうだ。アビゲイルの事についても尋ねてみたのだが、「それは本人の口から聞いた方が良いじやろう」とまるで彼女を庇うような口調ではぐらかされてしまった。

それから暫く彷徨い続け、結局お昼近く。

流石に疲れたので、一度部屋に戻って休む事にした。

「もお……アビーだったらいつまでもご主人様をほったらかしにして！

悪い子には鞭……おしりペンペンして反省させてやらなきゃー！」

ルイズはぷりぷりと怒り出し、ベッドの上で暴れる。

ここまでアビゲイルの居場所が分からないとなると、逆に彼女に何かあったのだろうかと不安が募る。

するとコンコンと部屋がノックされる音が聞こえ、ルイズは勢いそのまま扉を思い切り開けた。

「ちよつとアビー!!　どこをほつつき歩いてたのよ!　ご主人様にも何も言わないで——」

「あの子じゃない」

よく見るアビゲイルではなく、タバサだった。

タバサはうるさそうに耳を塞ぎながらきつぱりと言う。

「な、なんだタバサじゃない……どうしたの？ 珍しいわね」

「……あなたの様子を見にきた。……けど、平気そう」

タバサは感心したように言う。

昨日の様子からするに、ルイズとキュルケはかなりの精神的なダメージを負っていたように見えたからだ。

あの様子はそう、まるで狂ってしまった母親のようで、それなりに心配していたのだが――

「そう？ まあ、結局は終わったことだし……それに炎つてキュルケの得意系統だと思つたら、なんかあの炎に怖がつてる事実がなんだかむかついてくるのよね……」

「そ……そう」

狂気に飲まれるもの、飲まれないもの、その違いはこういった認知の差で生まれるものなのだろうか。 それにしても割り切れ過ぎている、とタバサなんとも言えない気持ちになる。

「あいつの方はどうなのよ。 意外とケロッツとしてるんじゃない？」

「……それは難しいと思う。 あなたが異常」

「ふーん………え？ いま異常つて言った？」

「言つてない」

「言つたわよね……？」

「……それは置いといて、取り敢えずこれから部屋に行つてみようと思うけど、来る？」

「まあいいけど……」

アビーも全然見つからないし、と内心ため息を吐き、二人はキュルケの部屋へと改めて向かう。

「さつき私もノックしたんだけど、まだ寝てたみたいなのよね」

「……そう」

タバサはコンコンと二度部屋のドアをノックする。

……しかし返事はなく、扉が開く様子もない。

「……まだ寝てるのかしら？」

「……」

ルイズがそう言うと、タバサは無言で首を振る。

実際、ルイズはイオマグヌツトの事で精一杯だったためキュルケがどんな状態だったのかあまり記憶にない。

怪訝そうな顔を浮かべると、タバサは小さく《アンロック》の呪文を唱えた。

良いの？とルイズはタバサの顔を見るが、その表情は真剣だ。

ギイ、と扉がゆっくりと開かれるのを静かに眺め、そして部屋の中を見る。

すると目に入ったのはベッドの上で足を抱えるキュルケの姿だった。

「なんだ、いるんじゃない」

「……タバサとルイズじゃないの」

「居るなら返事ぐらいしなさいよね……」

「……それは悪かったけど、勝手に入っちゃうのもダメでしょ……」

ルイズの文句に、いつもどおりキュルケが言い返す。

しかしいつもと決定的に違うのは覇気の違いだろう。

今はルイズを小馬鹿にして楽しむような声を潜め、代わりにあるのは余りにも弱々しい、絞り出すような声だ。

きつとキュルケも昨日までの自分と同じ状態だったのだろう。

よく見ると、キュルケもほとんど眠れていないのか目の下に隈がびっちり刻み込まれており、いつも身嗜みだけはきちんとしている筈の髪は整えられている様子がなくぼさぼさなままだ。

今朝の鏡に映った自分も大概だった為人の事は言えないが、ルイズにとつてキュルケという女はいつも余裕そうにしている印象があった為、この姿は余りにも酷い有様に映った。

「あんた、酷い顔してるわよ。本当に大丈夫なの？」

「……ルイズこそ、平気なわけ？ 昨日、あんなのを見たのに」

「そ、そりゃ怖かったけど……もう終わった事じゃない。いつまでも怖がってたってしょうがないわ」

「……終わった……事？」

キュルケはルイズを見上げる。



その表情は非難するような怒りと、未だ消えない恐怖の入り混じった複雑な感情を浮かべていた。

「終わってない……何も終わってない！ あたしの中にはずっと残ってるのよ！ あの怪物の恐怖が！！ 触れてさえ居ないのに、この身体が永遠に燃やし尽くされているみたいに！！」

「き、キュルケ？」

キュルケの慟哭にルイズは戸惑いを隠せない。

塞き止められた川の流れが一気に流れ出すように、彼女の内側から湧き上がる悲鳴が一気に噴出する。

「あたしだってそんな事分かってるのよ……だけど怖い……あの時のことを思い出すだけで震えが止まらない……」

「それって……アビーの事も怖い？」

「……っ」

キュルケは顔を伏せる。

それは即ち肯定を示した。

キュルケとてアビゲイルが嫌いになったわけではない。あの花の様な笑顔はいつだって見ていたいし、鈴の音の様な彼女の声はいつだって聞いていたい。

それでも彼女の中に眠るといふ力はどうしても恐ろしい。

あの力は炎の怪物と同様に冒流的な存在なのだ。

「……」

ルイズはなにも言えなくなった。

アビゲイルを怖がるなんて、と怒る事も出来たが、彼女の持つ恐怖が分からない訳でもない。

ギーシュの時に見せた力など、彼女の持つ力のほんのわずかでしか無かった。

あの時に現れた無数の触手、その一つ一つがまさしく狂気に彩られた異形の神の腕なのだ。

するとずっと黙っていたタバサが一步前に踏み出し、口を開く。

「……怖がっているのは、あの子と同じ。怖がられる事に、怖がってる。それだけは覚えて置いて欲しい」

「え……？」

「……」

キュルケは反応を返さない。

タバサはそれだけ言うと、部屋から出るために踵を返したので、ルイズは慌てて後を追った。

「……ねえタバサ。 さっきの、どういう意味？」

「……そのままの意味。 あの子が昨日の夜に言っていた。 二人に拒絶されるのが何よりも怖いと」

タバサは眩き、目を伏せる。

大切な人に拒絶される恐怖と苦しみは、それを受けたことのある者にしかわからない、想像を絶する痛みだ。

それはやがて人からの孤立を生み、だれかが手を差し伸べない限り孤独となり続ける。

もし、アビゲイルがルイズとキュルケの二人から拒絶された時、彼女の心はどうなってしまうのだろうか。

タバサはそれを思うだけで胸の奥が苦しくなる感覚に襲われた。

ルイズはそんなタバサの様子を見て言葉を詰まらせるが、すぐに思い出したように口を開いた。

「……昨日の夜？ そういえばアビーがどこにいるのか、タバサは知ってるの？」

「さっきまで一緒にいた」

「え!?! どういう事よ!?!」

ルイズは目を見開いて食いつく。

話によると、昨晩はルイズと顔を合わせるのが怖かった為、アビーは暫くタバサの部屋に居る事にしたそうだ。

購入した本を使って読み書きの勉強をしたり、アビゲイルの知る異世界の知識について詳しく聞いていく内に夜も更け、そのままベッドで眠ってしまったらしい。

そして二人して目が覚めたのは昼前——つまり、ついさっきという訳だ。

「ふ……ふーん。 じゃあ、私がアビーの事を拒絶すると思って逃げ

「回ってるって訳ね？」

「……否定はしない」

「……そう。この私が使い魔を怖がって拒絶すると、アビーはそう思ってるのね」

「……」

ルイズは声を震わせてにっこりと笑う。しかし表情の端々はひくひくと引きつり、どう見ても怒っていた。

「で、アビーはどこへ行ったの？」

「……知らない」

「ふーん……そう、わかったわ。見つけたら教えて頂戴ね」

「……………、……………わかった」

なんとなくアビゲイルに待ち受ける未来を不憫に思いつつ、タバサは返事をする。流石にルイズの癩癩に巻き込まれたくないと言うのが半分、キュルケも心配なのが半分、と言った所だ。

ルイズはタバサと別れ、再びアビゲイルを探し始める。

その雰囲気は他の生徒達が若干引くぐらいだったとか。

### 32：ランチタイム

朝、アビゲイルはタバサのベッドで目を覚ました。

昨晚、オスマンとの話を終えた後、ルイズ達と顔を合わせて拒絶されるのが怖い、とギーシュとタバサへ胸の内を明かした所、意外にもタバサが「今日は私の部屋に来るといい」と申し出てくれたのだ。

一見冷たそうな印象のあるこの少女、しかしその中身はとても優しい少女なんだなと改めて実感する。

隣のタバサは可愛らしいナイトキャップを被り、自分の腕に抱きつくような形で眠っていた。

(ふふ……意外と甘えん坊さんなのかしら?)

眼鏡を外すとまた印象が変わり、身長が小さいのも相まってかなり幼い印象を受ける。

なんていうか、妹が出来たような気分だ。

年上ではあるが、自分よりも10cmほど小さな少女なのだ。

アビゲイルは思わず抱きしめ返したくなる欲求が胸の内から湧き上がったが、タバサのこれは無意識の行動。目を覚ました瞬間に自分が抱きついていて、「え、なに怖い」みたいな目線を向けられる可能性があったためぐつと欲求を堪える。

でもちよつとぐらいなら!

ちよつとぐらいなら平気よね!

「おはよう」

「お、お、おはよう」

危ない。

二人はお互いに挨拶を交わし、ゆつくりと離れる。

変な気を起こさなくて良かった、とアビゲイルは心からそう思った。

タバサはカーテンを開くと、先ほどまで薄暗かった部屋の中には一気に陽の光が差し込み、暗闇を払った。

空は既に太陽が昇り、午後には差し掛かりそうと言った所か。

「随分と眠ってしまったわ……」

「仕方ない、昨日は疲れた」

「ええ……今日は授業が休みで良かったわ」

ホッと胸を撫で下ろしてアビゲイルは笑う。

「昨晚オスマンから聞かされた事なのだが、今日は舞踏会の準備の為に授業を休みにするらしい。本来なら昨日に行われる予定だったのだが、とある事情により今日にずれ込んだのだ。」

「というのも、フーケを捕まえた功績として舞踏会の際に名誉を与え授与式を行うらしく、主賓達が不在のままでは行うことができなかったからだ。」

「タバサさんは今日はどうするの?」

「……取り敢えず二人の様子を見てくる」

「そ……そう」

タバサがそう言うのとアビゲイルは気まずそうにして目を泳がせる。

「……あなたもくる?」

「わ、私は……ううん、止めておくわ。二人ともまだ本調子ではないと思うし、ええ」

「そう」

早口で言うアビゲイルに対して、何となくそう言うと思っていたタバサは返事をする、素早く身支度を整える。

それに倣ってアビゲイルも仕度を始めた。

「タバサさん、昨日は泊めてくれてありがとう」

「構わない」

仕度が終わると二人は部屋を出て別れる。

タバサはまずルイズの部屋へと向かっていくようだ。

アビゲイルは腰につけたナイフホルダーからデルフリンガーを抜くと、話しかける。

「私たちはどうしよう?」

「好きにしていれば。ああ、自由に飛べたのはあの僅か一日だったな……」

しみじみと言うデルフリンガーにアビゲイルは苦笑いを浮かべる。どういった呪文が掛かっていたのかわからないが、あの女が呪文を解いてしまったから浮遊する事が出来なくなってしまうていた。

お陰でナイフホルダー（コルベールに抜き身は危険だからと昨晚貰った）にしまっている時は口を開けず、お喋りの自由度が減ってしまったている。

その為、今こうして会話しているのもナイフを抜き身にした状態なのだ。

「それじゃあ……お昼も近いし、厨房にでも行こうかしら」

「食堂じゃなくて良いのかい？」

「……ええ、今日は厨房の机がいい」

「……そうかい。相棒がそれで良いつつうんなら、そうするか」

デルフリンガーは口を挟もうとしたが、アビゲイルの何とも言えない表情を見てやめた。勿論ルイズ達から逃げ回っていても事態は好転しないと分かっているのだが、一度気持ちを整理する時間も必要だと考えたのだ。

アビゲイルは寮の階段を降りると厨房の方へと向かう。

すると給仕担当のメイド達が忙しく食事の準備をしているのが見え、その中には台拭きを持ったシエスタの姿もあった。

アビゲイルはナイフを仕舞うとシエスタの元へと近づき挨拶をする。

「おはよう、シエスタさん」

「あ……アビーさん！ おはようございます」

シエスタはアビゲイルを見つけると嬉しそうに笑顔を見せて近づいてくる。

「昨日は帰りが遅かったみたいでしたから、すつごく心配したんですよ。また無茶してるんじゃないかって」

「あはは……ごめんなさい。というか、私たちが何をしに行ったか、知ってらっしゃるのね」

「だって昨日はフーケの話でもちきりだったじゃないですか。そんな中で先生方に見送られながら馬車に乗っていく貴方たちを見かけ

たら……」

「……………そ、それもそうね」

よくよく考えてみたら、あの状況では『これからフーケを捜索しに行ってください!!』と言っているような物だろう。

恐らく生徒達の間にも既に噂として流れているかもしれない。

「おいシエスタ！ サボってないでこいつを運んでくれ！」

「あつ、はーい！」

「なんだか忙しそうね」

「もうすぐお昼ですからね。授業がないとは言え、虚無の曜日ではないですからしっかりお食事は用意しないと」

今日の舞踏会の準備もありますしね、とシエスタはやや疲れた表情で笑う。

「そうだわ！ 食堂の準備、私にも手伝わせてくださらない？ そのかわり、配膳が終わったらここで食べさせて欲しいの」

急な提案にシエスタはどうしたんだろう、と思いつく考えした後、ふと今朝のことを思い出す。

「それはいいですけど……………ルイズさんとはお会いしました？」

「え？ ど、どうして？」

「今朝、ルイズさんがアビーさんの事を探してましたよ。あれは今朝の水汲みの時間でしたから……………」

と言うと、すい、とアビゲイルは目を逸らす。

シエスタは「やっぱり、これは何かあったな」という確信をもった。

しかしこれは聞いても話してくれなさそうだと深くは突っ込まないようにして、シエスタは笑みを浮かべる。

「……………まあ、お手伝いしてくれると言うのは私達としても助かるのでお願いしても良いですか？」

「え、ええ！ 勿論！ 任せてくださいな！」

・  
:

…

ぞろぞろと人が食堂に集まる頃、ギーシュ、モンモランシー、そしてマリコルヌがテラス席を確保して座っていた。

「はいこれ。　お願いされてたポーシヨンよ」

「いやあ、ありがとう、助かるよ」

「……君もよくそんなにポーシヨンばかり作るよね。　しかも材料費だけで作ってあげてるそうじゃないか」

「いや、僕も手数料ぐらい払おうと思っていたのだがね……」

ちらりとモンモランシーを見る。

彼女は澄まし顔でふん、と鼻を鳴らして言った。

「別にいいわよ、私もポーシヨンの研究になるし」

「へえ……？」

「ちよつと前まではポーシヨンなんて作り飽きたと思っていただけ、意外と奥深いのよね。　ちよつとした配合の違いで効果も変わってくるし、材料の選別だって大切なの」

「でもさあ……なんで急に君までやる気出し始めたのさ」

マリコルヌは頬杖をつきながら退屈そうに言う。

周りが急にやる気を出し始めると、なんとなく置いていかれているような気がしてあまり気分が良くない。

するとモンモランシーは少し照れながら言う。

「……頑張ってるやつが私の周りに多すぎるのよ」

ギーシュもそうだが、アビゲイル、そしてルイズもだ。

彼女らの姿を見てみると、自分も何かしなくては、という気になってくる。

「それに今までは自分の為にポーシヨンを作ってたけど、作ったポーシヨンが誰かの為になるのも嬉しいしね」

ボロボロになったアビゲイルが自分の薬のお陰で傷跡も残らず回復したのを見たときは結構嬉しかった。　ルイズからお礼を言われたのは初めてだったかも知れない。

「じゃあ将来はそういつた道に進むのかい？」



「んー……まだ分からないわよ。でもそれも良いかも知れないわね」

「うわあ……止めてよ将来の話とか……」

二人の会話に、マリコルヌは付いて行きたくないと言った風に机に突っ伏す。そんな将来の事はもつと先で良いのだ。あと一年ぐらいしたら考えれば良い。

今は学生気分を謳歌したいのだ。

げんなりとした気分で視線を彷徨わせると、ふと目に付いたのは光を集めた様に美しく眩しい金髪のメイドだ。髪を後ろで団子状に——どこぞの騎士王の様に——束ね、にこにここと愛想よく給仕する姿は愛らしい。

「な、なあなあ、あんな可愛い子うちのメイドに居たっけ?」

「え?」

「ほらあの子だよあの子。いいなあ……うへへ」

ギーシュとモンモランシーも視線を向ける。

確かにあれほど綺麗な金髪を持つメイドは居なかった様な——

「あ、あれアビーじゃない?」

「本当だ」

「え? あれが?」

容姿が良い所為か、フーケの件が噂話の比率の殆どを占めていたからか、皆アビゲイルに対して過剰に恐れるような様子を見せない。

マリコルヌは「むむむ」と唸り、記憶を頼りにあのメイドと照合をする。

すると確かに、何度か見たあの少女の顔をしている。

「……ほんとだ。いつも奇妙な格好してたから全然気づかなかった……」

「なんでメイド服なんか着てるのかしら?」

「さあ……」

三人がヒソヒソと会話しているとアビゲイルがこちらに気づき、近づいて来る。

「ギーシュさんとモンモランシーさんと……えつと、マリコルヌ

さん？　こんにちは」

「こんにちは。……ところで何でメイド服？」

「ああこれ。　シエスタさんのお手伝いをする事になったから借していただいたの！　髪の毛も長いから、まとめて貰っちゃったわ」

アビゲイルひらひらと摘んだスカートを揺らし、くるりと回ると嬉しそうに笑う。

長い髪はまとめられている為、少女ながらに色気のあるうなじが覗き、白いエプロンやヘッドドレスにあしらわれたフリルが幼さと可愛らしさを増長させていた。

「へえ……似合ってるじゃないか。　やっぱり黄金の髪は黒もいいが白も映えるね」

「同感ね。　素敵よアビー。　とつても可愛いわ！」

「あ……ありがとう。　そういつて下さると嬉しいわ。　ちよつと恥ずかしいけれど……」

頬を赤らめて、しかし嬉しさをふにやりと頬を緩ませて笑顔を見せる。

見た目は勿論のことだが、なによりこの素直さと初々しさが愛らしい。

ギーシュとモンモランシーはにやにやと、自分自身の頬が緩むのを感じていた。

「すぐにお料理を運んでくるから待っていてね」

「ああ。　走って転ばない様に気をつけたまえよ」

「もう、ギーシュさん！　私そこまで子供じゃないつたら……」

「ふふふ、頑張ってねアビー」

アビゲイルは頬を膨らませるが、それは勿論起こっている様に見えるだけだという事は二人にも分かっている。

ますます頬が緩むのを自覚しながら二人は歩き出した背中を見送った。

「……か、可愛いなあ……くそお、僕も可愛い女の子の使い魔欲しかったな……」

マリコルヌが「うへへ」とべたついた声を出す。

モンモランシーは心底嫌そうにして顔を顰めた。

「あなたの所にアビーが呼ばれなくて良かったわ。 邪な目で見られるなんて可哀想」

「ば、ばっか！ そ、そんなエッチなことなんて考えてないよ！ ただちよつと色んな服を着せ替えたりしたら楽しそうだなって……」

「君はそんなこと言って露出多めの変態みたいな格好にするつもりだろ。 彼女を汚すのはやめたまえ」

「うぐ……いい、いいじゃないか妄想の中でぐらい好きにさせろよ！」  
「ダメです」

「なんなの君ら！ 保護者なの!?!」

頭を抱えて嘆くマリコルヌに対して峻厳な態度をとる二人。

どうにも納得がいかないが、この二人相手に何を言っても無駄だろうと肩を落として再び机に突っ伏した。

すると、「ねえ」と再び三人に声が掛かる。

振り向いて見れば、アビゲイルの主人、ルイズだった。

「ルイズじゃないか！ 昨日は気分が悪そうだったけど、もう平気なのかい？」

「ええ、まあ。 寝たら気分も良くなったわ」

「そ、そうなのか……」

「そんな事より、アビーが何処に居るか知らない？」

昨日の顔色の悪さなど何処かへ失せ、にっこりと笑みを浮かべる。

三人は心の中で「うわ」と嫌な予感を抱いた。

ルイズは基本、人前でこんなになっこりと笑顔を見せる事はない。

こういう時のルイズは間違いなくキレている時だ。

アビゲイルの事を伝えるべきか、はぐらかすべきか――。

今彼女を探しているという事は、ルイズの怒りの矛先が彼女を向いているというのはまず間違い無い。

「どうか訳で、ここはアビゲイルの肩を持って黙っておくことに決めた。」

「う、うーん？ 僕は見てないよ。 もしかしたら君と入れ違いになつて部屋に戻ってるんじゃないかな？」

「ふーん」

ルイズは疑わしい目を向けたままギーシュをじろりと見る。相変わらず嘘が下手な男だ、とモンモランシーは内心で溜息を吐いた。「あんたは見てないの？」

「え?! ぼ、僕も見えてないよ! 本当だよ! ランチを賭けてもいいね!」

「ふーん——ん」

その後。

「皆さんお待ちせしました! 今日夜がパーティだから、ちよつと軽めにスープとサンド……」

「あつ……」

ルイズはにつこりと凶悪な笑みを浮かべながら、持ってきた内の一つのサンドイッチを掴んで食らう。立ちながら食べるのはかなり行儀が悪かったが、マリコルヌは恐怖で何も言えずに震えるだけだった。

「おはよう、アビー」

「お……お、おはよう……」

ゆつくりルイズは近づいてくる——かと思われたその瞬間、ルイズは急に走り出して掴みかかった。

それはまさに肉食獣に襲われる獲物そのもの。

アビゲイルは驚き、咄嗟に身を翻すとルイズの手をかわし、全力で逃亡を始めた。

「あつ、コラア!! アビー!! 待ちなさい!!!」

「ひゃあああ!!」

叫び声と共に二人の追いかけてつこが始まる。

その背中をギーシュとモンモランシーは啞然と見つめ、マリコルヌは失われたサンドイッチの皿を眺めてがっくりと肩を落としていた。

### 333：暖かな君

ルイズの自室のベッドの上。

そこにはちよこんと身体を縮こませたアビゲイルと、それを睨みつけるルイズの姿があった。

その後、結局逃げ回っていたアビゲイルは厨房へと逃げ込み、シエスタに助けを求めたのだが、「ちゃんと話し合った方がいいですよ」とまさかのルイズ側。

結局捕まり、今に至るのである。

「…そ、その、ルイズ。 どうして怒ってるの?」

「それはあんたが一番よく分かってるんじゃない?」

「う……」

アビゲイルはとぼけてみるも、ルイズに向けられる鋭い視線に射抜かれて怯む。

タバサは『様子を見に行く』と言ってルイズの部屋に向かっていた。つまり、タバサをに対して昨日自分が打ち明けた内容がルイズの元へと伝わっているという事だろう。

『ルイズ達に拒絶されるのが怖い』

裏を返してみれば、これはルイズ達を信用していないと言ってるのと同義だ。

真にルイズ達を信じるのならば、自分の事を受け入れてくれる、そう信じるべきなのだから。

そんな事を言われたルイズがこうして怒りを露わにするのは当然だろう。

「…………ごめんなさい、ルイズ。 ……恐がられて、嫌われたんじゃないかと思ったら、胸が張り裂けてしまいそうで……」

「……」

「そうしたら、ルイズと顔を合わせるのが怖くなって……それで……逃げ出したの……」

アビゲイルは声を震わせる。

気がつけば双眸から温かい涙が頬を伝い、ぼたぼたと白いエプロン

に丸い雫跡を残した。

大勢の生徒が食堂へと移動して静かになった寮の部屋の中に、すすり泣く声のような声だけが静かく響く。

逃げたからと言って、それが一時しのぎにすらならない事は自分自身にもわかっていた。

少しの時間は気持ちを落ち着かせる事が出来るかもしれないが、それが長くなればなるほど人との関係という物は溝を深く、そして広くしてしまうものだ。

そうなればもうどうやって話しかけていたかも忘れ、胸の内に残された『楽しかった思い出』が杭となり、拒絶される事への恐怖によって打ち付けられ、穿たれた心は永遠に痛み、苦しむ事になっていただろう。

しかし、そうはならなかった。

アビゲイルは涙で濡れた睫毛を揺らし、隣に座るルイズの顔を横目で見る。

そこにあるのは眉を釣り上げたままの、優しいご主人様の顔。

アビゲイルはそつと手を伸ばそうとし、しかし再びベッドにその手を下ろす。

「……だけどルイズは追いかけてきてくれるのね。昨日の事、怖くなかった？ ……それとも、ルイズはいいご主人様だから、使い魔の事は放っておけないのかしら」

アビゲイルは自嘲気味に、そして少しだけ突き放すように言い放つ。

ルイズは自分を追いかけて来てくれた、それは自分を拒絶しなかったという事だ。

しかし、それでもなおアビゲイルは心の何処かで彼女を信じられずに居た。

——例えばそう、昨日ルイズ達に目を閉じるように言わなかったら、どうなっていたらどうか。

アビゲイルの宝具、《クリフオーライゾラム光殻湛えし虚樹》。

開かれた門とその境界の先に垣間見える邪悪の樹。

その深淵と覗いていたら、きっと彼女は崩壊する。

狂気に飲まれて心を壊し、今もなおベッドの上で廃人のようになっていたに違いない。

「でもね、ルイズ。あなたはきつと私の全部を知ったら……きつと嫌いになってしまおうわ」

ルイズが好意を寄せてくれているのは、真面目で良い子でしかないのだ。

だからこそ、自分はこの手をルイズへと伸ばせない。

本当の自分はもつとわがままで悪い子なのだから。

すると、ベッドの上に置いた手の上にルイズが手を重ねる。

そのまま手を持ち上げ、自分ごとベッドに倒れるようにして強引に手を引つ張った。

「る、ルイズ？」

胸に飛び込む形になり、困惑した声を上げる。

なだらかな胸の奥から聞こえる、どくんどくんという心臓の音。

ルイズの奏でるその音色は暖かく、心が安らいでいくような感覚があった。

「……嫌いになるなんて勝手に決めないで。誰かを思う気持ちは、

誰かが勝手に選んでいいもんじゃないのよ」

「それは……そう、だけど」

「アビー、私はあんたの事が大切だと思ってる。それはご主人様だから、使い魔だから、それだけの事じゃないわ！」

ルイズの手には力がこもり、アビゲイルの小さな手に少しだけ痛みがはしる。

「っ、でも！ ルイズは私の中の狂気にきつと耐えられない！」

「そんなもん全部ひっくるめて受け入れてやるわよ！」

「無理よ！ そんなの言うだけなら簡単だわ！ 門の先のあの景色を見たら絶対そんな事言えないもの！ 何なら昨日見せた景色を今ここで見せてあげましょうか!？」

「ええ、いいわよ！ やってみなさいよ！ 昨日と同じ程度の事だったら全然へっちゃらなんだから！」

「そんな強がり——え？」

アビゲイルは目を丸くして何度か瞬きをする。

今、ルイズは何と言っただろうか？

「……ルイズ、昨日のあれ宝具を見たの？」

「はあ？ 見たわよ。 敵を目の前にして目を閉じるなんて私のプライドが許さないわ」

「うそ……」

信じられない、とアビゲイルは口を押え、言葉を失った。

《光殻湛えし虚樹》。

それは邪悪の樹より生い添う地下茎の力の具現である。

人類とは決して相容れる事のない領域外へと門を開くそれは、門の先に誘われた者の精神と肉体に深刻な歪みを生じさせるものだ。

勿論、誘われなかったとしても、その門の先を見た者で有れば精神を狂わせてしまうには十分な筈。

だからこそ、こうしてルイズが『平気』だというのは、何かの間違いとしか考えられない。

領域外の景色は、強い精神力を持っている程度ではどうしようもないのだ。

「本当に平気……なの？ 嘘じゃない……？」

「心外ね……私が嘘なんかついた事あった？」

ルイズは不服そうに唇を尖らせる。

「う、ううん。 ルイズはいつも真面目で誠実だわ……」

「でしょ？ ……だからね、アビー。 さつき言った事も嘘じゃないわ。 あんたの事が大切だから、私は全部受け入れられる」

「ルイズ……」

自分の身体が触れた先からじんわりと溶け出し、まるでルイズへと流れ出していくような感覚。

何故ルイズが平気だったのか、その仕組みは分からない。 伯父に聴けば分かるかもしれないが、今ここでそれを知る術は何も持ち合わせない。

今分かる事は——この胸の奥に現れる感覚と、ルイズの握る手の暖



かさが、とてもいい心地よいものだと言う事だけだ。

「その、ルイズ、お願いがあるの」

「どうしたの？」

「……痛いほど手を握って。今はただ、それだけでいいの」

「……いいわ」

ルイズは優しく微笑むと、手を握る力を強くする。

手に跡がついてしまうかもしれないが、アビゲイルにとってそんな事はどうでもよく、今はこの痛みさえ心地いい。

この痛みこそが、今自分がルイズと共にいると言う証明なのだから。

「……ありがとう。大好きよ、ルイズ」

アビゲイルは濡れた睫毛のまま小さく微笑む。

暫くそうしたまましていると、安心感からか、うとうとと瞼が落ち始める。

昼まで眠っていたとはいえ、アビゲイルもあまり寝付くことができずにいた為、疲れが取れたとは言いつらい状態だったのだ。

今はこの微睡みに身を委ねよう。

アビゲイルはルイズの胸に頭を下ろし、瞼を閉じた。

ルイズはそんなアビゲイルの顔を覗き込んで、睫毛についたままの涙の雫を人差し指で拭き取る。それからすうすうと寝息を立て始めたのを見計らって小さな声で呟いた。

「おやすみアビー。私も大好きよ」

・  
:  
…

「——きて、ルイズ！ 起きてつてば！」

「ん、んん……なによう……まだ外は暗いじゃないのよ……」

ルイズはアビゲイルの慌てた声に叩き起こされて眼を覚ます。

開かれたままのカーテンの外を見ると、月の光がいつものように妖しく部屋を照らしていた。

「もう……何よ……夜更かしはお肌に悪いんだからね……」

「違うつたら！ 私たち寝すぎたの!!」

「……は？」

慌てふためくアビゲイルを見ていると、徐々にルイズの頭は覚醒する。

まだ外は暗いんじゃない。

もう外が暗くなってしまったのだ。

「あ—————っ!!! 舞踏会！ もう！もつと早く起こしてよ！」

「わ、私だつてさつき起きたの！ そんな事より急いで支度しないと

——ええと、何を準備すればいいの!?!」

「ドレス！一着買ってあげたのがあるでしょう！ 髪は……今更だけ

ど、似合ってるわね！ 可愛いからそれで行きましよう!!」

「ありがとう!!」

ルイズの雑な褒め言葉に雑に返しながら準備を進めていく。新しく買ったのは黒を基調としたスカート丈のやや短めのドレスに、小さな黒のリボンがあしらわれたヒールの靴。

踵の高めの靴はあまり履き慣れていなかったが、アビゲイルはなんとかそれらを身につけて部屋を出る。

「ああ……そうだね。お手伝いも放っぽり出しちゃって、あとでシエスタさんに謝らなきゃ……」

「もう！ そんなのあとで考えなさい！」

「うう、わかってるったら……!」

こうして二人は食堂へ向かってドタバタと走り出す。

たどり着く頃には二人は揃って息を切らしていた。

### 34：フリックの舞踏会

食堂の上の階は巨大なホールになっており、そこが今宵の舞踏会の舞台となる会場だ。

数々の絢爛豪華な飾りもさることながら、いつも昼食や夕食などには決して出てこないであろうご馳走の山がいくつかの巨大なサークル型のテーブルの上に並べられていた。

そしていつもと違うのは何も物だけではない。

ギーシュのような例外もいるが、基本的に学院が指定した制服を着用するのが基本であるが、今は皆統一感なく、各々が選んできたパーティードレスや礼装を身につけていた。

そう、今宵はフリックの舞踏会。

年に一度の特別なパーティなのだ。

子供らしいいつもの雰囲気とは違って、しっかりと身嗜みを整えた生徒たちはどこか皆大人びて見える。

その中でも生徒たちが注目したのは、あのヴァリエールの三女ルイズだろう。ルイズは長い桃色の髪をバレッタで纏め、純白のパーティードレスを身につけたその姿は、性格を知らなければ誰もが認める清楚で上品な貴族の令嬢と言わざるを得ない。

そして生徒達を更に驚かせたのはアビゲイルだろう。

アビゲイルはルイズとは対極に、黒を基調としたシックなパーティードレスだ。

長い金髪を後頭部でまとめ上げたシニヨンヘアになっており、さらけだされたうなじは幼い少女というイメージからは想像できない、胸をくすぐるような色気を持っていた。短めのスカートから覗く生足は細く、それでいて少女特有の柔らかさがある。

ゼロのルイズ、そしてその使い魔アビゲイル。

二人の評判は生徒の間では決して良いものではなかったが、この時ばかりは皆その容姿に魅せられ、思わず唾を飲んでいた。

そんな中、テーブルの一角でアビゲイルは顔を赤くして頬を抑えていた。

「はああ……恥ずかしかった」

「は、ははは……まあ、榮譽授与式の真つ最中だったからね」

「遅刻してくるからそうなるのよ」

「寧ろあの場に飛び込めるのは勇気がある」

ギーシユが苦笑いを浮かべて、モンモランシーがちくりと刺す。

タバサは寧ろ感心したように言うが、全く嬉しくはない。

遅刻してきた二人が思い切り扉を開いたのは、まさに式の最中。

全生徒の視線がこちらへと集り、教師たちのあちこちから何とも言えない視線と溜息があつた。

「でも一番の重傷者はルイズね。あの後せえせえ息を切らしながら学院長先生の前に立つ事になったんだから」

「そ……そうね」

やれやれと肩を竦めるモンモランシーにアビゲイルは同意する。

アビゲイルは貴族ではないため壇上へは立たないで済んだが、ルイズはフーケ捕縛の作戦に参加した栄えある貴族の一人なのだ。

顔を真つ赤にしながら息を切らして壇上へ向かう様は、なんとも残念な感じだった。

アビゲイルは隣でがむしやらに食事を口の中に詰め込むルイズを見る。

先ほどの羞恥心を忘れようとしているのと、単に昼食を食べていなかった事によってそのスピードは異常だ。

「ルイズ……喉に詰まらせないようにしてね？」

「うるひゃいわね……！」

つんのそつぽを向き、再び料理を口に詰め続けるルイズを見て溜息を吐く。

「そ……それにしても、貴族では無いとは言え、アビーに何も無しと言うのは釈然としないね。一番の立役者はアビーだと言うのに」

「そんな事ないわ！ ギーシユさんがゴーレムを引きつけてくれて無かったら、フーケにたどり着くこともできなかったもの。タバサさんとギーシユさんが二人でゴーレムを倒すところ、見てみたかったな」

「ううむ……君がそれで良いのなら良いが……そういつて貰えると頑張った甲斐があつたつて素直に喜べるよ」

「実際にあなたの戦術は凄かった。誇つていい」

「そうなの？へえ……意外ね。やるじゃないあなたも」

アビゲイルに続き、タバサ、そしてモンモランシーがギーシユへの褒め言葉を送る。

想像以上に周囲から褒められ、ギーシユはハハハと照れ笑いを浮かべた。

ルイズはそんなギーシユを見て、やや不服そうに口をへの字に曲げながら呟いた。

「よくよく考えると私なんもしてない」

「そんなことないわ。ねえ皆」

アビゲイルは目を泳がせて周りに同意を求める。

「私は見てないから良くわからない」

「……ま、まああのフーケと、凶悪な邪神に立ち向かったのだからむしろ誇るべきことだよ、うん」

ばつさりと切り捨てるタバサだが、自分が駆け付けたのはギーシユとゴーレムの側だし、再度合流したときには既に全員が気を失った状態だった為判断のしようがないのも事実だ。

ギーシユもそれは同じことだが、とりあえずフオローをするという判断をする。

しかしルイズは納得しないようで、ギギギと悔しそうに奇声を上げたと思いきや、再び料理をガンガン胃袋の中に詰め込み始めた。

「……あー、えっと、ほどほどにね、ルイズ。ほらダンスがあるんでしよう？ お誘いは受けたの？」

「それなりにね……」

「まあ……さすがルイズね。御伽噺のお姫様みたいに綺麗だから、やっぱり皆放っておかないのかしら！」

「そ……そう？ そうかもね」

先程までの不機嫌そうな表情はどこへ行ったのか、アビゲイルの屈託のない賞賛を聴き、ニヤけ始める。

ギーシュたちは、ルイズの扱いが上手いな、と内心で舌を巻いた。これを素でやってのけるのだから、恐ろしい少女である。

「アビーは誰かに誘われたの？」

「……う、うん。　私の事を怖がらずに来てくれた人が、何人か……でも、全部断ってしまったわ」

アビゲイルが伏し目がちに言うので、ルイズは目を丸くする。

「え？　なんでよ勿体ない」

「だってダンスなんてした事ないんですもの……足を踏んだり、転んだり、きつと皆の迷惑になってしまおうわ」

「ああ……なるほど」

ルイズは納得する。　そう言えば煌びやかなドレスを身に纏うのも初めてだと言っていたのを思い出した。

確かに初めてのダンスを、初めての衣装を身にまとい、あまり顔の知らない相手と踊ると言うのはハードルが高い。

特にアビゲイルは人懐こく、誰にでもいい笑顔を振りまけるように見えるがその実、一人きりになると意外と人見知りする性格らしいのだ。

相手を思いやる優しさを持つてるが故に必要以上に他人の顔色を伺ってしまうのが彼女の悪い所と言えるかもしれない。

ルイズは暫く考えて、「そうだわ」と声をあげた。

「それなら私と踊らない？　　最初の感覚だけ覚えれば、色んな人と踊れるようになるわ。　貴族にとってダンスは必須科目だし、アビーが踊らなくても皆たぶんリードしてくれるわよ」

「そう……なのかしら？　　でもいいの？　　ルイズは皆のお誘いを受けてるんでしょ？」

「別にならずと同じ相手と踊らなきゃいけないルールなんてないから安心なさい。　それに異性じゃなきゃいけないルールなんていうのもね」

不安そうに言うアビゲイルに対してルイズが言うと、ギーシュもそれに同意するようにして口を開いた。

「そうさ。　社交界の様なものを兼ねているとはいえ、パーティは楽

しむものさ。　あまり気を張らずに緩く楽しめばいいよ」

「……踊らないで延々と食べ続けるつもりの子もいるみたいだしね」  
モンモランシーが呆れた表情で隣を見ると、そこには山盛りに積んだハシバミ草のサラダを黙々と食べ続けるタバサの姿があった。

アビゲイルはやや引きつった笑みを浮かべてから「ほんと軽く咳払いをして、ルイズを見た。」

「それじゃあ……私と一緒に踊ってくださいる？」

「ええ、もちろん！」

にこりとルイズが笑みを返すと、アビゲイルの表情にはあつと花が咲く。

それから暫くすると、ゆつくりと優雅な曲が会場に流れ出した。

生徒達は食事や歓談を止めると、料理の並べられているテーブルから移動して会場の中央へと移動する。　それから予め誘っていたペア同士を見つけ出すと、手を繋いで曲のリズムに合わせてゆったりと踊り出した。

それに習ってルイズとアビゲイルも踊り出す。

アビゲイルはやはりぎこちないステップであるが、ルイズが優しく、そして動きやすい様に手を引いてリードしてくれる為、アビゲイルも徐々にコツを掴み、やがて楽しくなってきたのか高揚した笑みを浮かべて踊り出す。

そこにあるのは白と黒のコントラスト。

二人の少女が手を取り混ざり合う、美しき花園。

見目麗しい同性同士というのもさる事ながら、使い魔とその主人が踊るというのも珍しく、生徒達の注目を集めた。

一步、また一步と足を出すたびに二人の間には笑顔が浮かぶ。

そこには確かに絆があり、愛情があった。

昨晚、彼女が恐れていた事なんて何処にもない。

「良かったな相棒。　ああ、本当に良かったなあ……」

タバサがハシバミ草のサラダを喰らい続けるテーブルの上で、ダンスの際には危ないからと留守番をすることになったデルフリンガー

がしみじみと言う。その様子は単に二人の仲が治った事に対する喜びだけではなく、まるでアビゲイルの幸せを切に願っているようだ。た。

「……あなたは全部知ってるの？ 彼女の事」

「あん？ ……さあな。俺が知ってる事なんてちっぽけなもんだ。

俺から話せる事はそう多くはねえよ」

タバサが疑問を投げかけてみれば、デルフリンガーは突っぱねるようになして言う。

「相棒の中に眠る——いや、繋がってるつつうべきか。その力がどこのどいつから来てるのかは俺にもわかんね」

「そう……」

「だけど近しい力は知ってる。それが生み出したクソみたいな結末もな」

デルフリンガーの言葉に宿っているのは無数の怒りと、そして悲しみだった。

タバサは怪訝そうな顔をしてデルフリンガーを見る。

「……どう言う事？」

「それは……」

デルフリンガーは珍しく言い淀む。その様子は普段の口の悪く、思った事をすぐに口にしてしまう性格の持ち主とは思えない程だ。

気づけば一曲目のダンスが終わってしまうほどの沈黙。

目線の先にいたアビゲイルは、次はギーシュと踊り始めている。

流れる曲は先程までのゆったりとした曲から、少しだけ陽気でテンポも先程と比べれば早い。しかし、それでもルイズと踊った経験とギーシュのしつかりとしたリードによって踊ることができているようだ。

「はは、もうちゃんと踊れるじゃねーか。流石相棒だぜ」

デルフリンガーは独り言のように呟く。

それから続けて言葉を紡いだ。

「俺の昔の担い手も、あんな風に友達と楽しそうにしてたよ。喧嘩したり、泣いたり、仲直りして笑いあったり……」



「……」

「でも全部ぶつ壊れちゃった。皆狂っちゃった。……あの時の俺あ始めて武器になった事を後悔したよ。今になってもあの感覚だけは忘れやしねえ。ちよつと前までバカみたいな話で笑いあつてた友達の首を掻つ切つて……心臓を貫いて……」

ナイフであるデルフリンガーには涙は無い。しかしタバサにはどこか後悔で泣いているようにも見えた。

「……だめだ、これ以上は言えねえ。いや、全部言つた方が良いのかもしれないねえが……いくら口の固そうな嬢ちゃんでもこれ以上は」

「……そう」

「臆病な野郎で悪かったな。……くれぐれも相棒にだけは言わねえでくれよ」

デルフリンガーはそう自嘲気味に言うのと口を閉ざす。

タバサもそれを見て再び手を動かし、皿の上に盛り付けられた大量のハシバミ草のサラダを口に運び始めた。

結局キュルケは参加できなかったか、とタバサは気分を沈ませる。皆言葉にはしなかったが、内心ではそれを思っていただろう。

再び曲が変わり、中央ではアビゲイルとモンモランシーが踊っている。

会場の照明に照らされた二人の笑顔はいつまでも眩しく輝いていた。

### 35：少女と葡萄酒の休日――1

あれから数日が経ち、再び虚無休みのの曜日日がやって来た。

アビゲイルは水汲みを終えてからふわあ、と小さく欠伸をし、カーテンを開け、窓を開けて外の新鮮な空気を取り込む。

空を見上げれば適度な雲の浮かぶ良い天気。

昼頃になれば、ポカポカと眠気を誘う陽気な日になる事間違いないだろう。

「今日は何をしようかしら……ああ、パンケーキもまた食べたいわ……でもお勉強もしないと……」

窓際で暖かな風を感じながら頬杖をつき、多少の眠気であうとうとしながら窓の外を眺めた。

舞踏会を経て、アビゲイルを取り巻く環境は少し変わった様に思える。

まず一つは、周囲の生徒の態度がある程度緩和された事だろうか。

決闘の一件で生徒達がアビゲイルを忌避していたのは、『得体の知れない何者か』という認識が強かった事が大きい。人間は得体の知れないものに対して恐怖心をだき、自然と拒絶してしまうのは自然なことだった。

しかしフーケ捜索隊に加わったという実績、そしてあの舞踏会での交流を経て少しずつ塗り変わっていくこととなったのだ。

恐ろしい力で貴族を一撃で倒してしまう恐ろしい少女は、蓋を開けてみれば優しく、そして純粹無垢な可愛らしい少女だったのだ。

一部の人間は近寄りがたい、と未だ嫌悪感を示すが、そのまた一部ではその愛らしい姿と中身に惹かれ、少しずつ歩み寄る姿勢を見せている。

だが、変わったことといえば良いことばかりではない。

あれからキュルケとは言葉を交わすどころか、会ってすらいないのだ。

タバサから話を聞く限り最初の頃よりは遥かに顔色は良くなっている層なのだが、まだコンデイション的には十全とは言えない。

休み明けには回復して授業に出られるかどうか……と言ったところらしかつた。

はあ、とアビゲイルの口から大きなため息が溢れる。

きつと体調が良くなっても以前の様に接してくれることはもうできないうらう。

だからこそキュルケの他の人よりも少し熱い体温、膝枕をしてもらった時に感じたあの柔らかい太腿の感覚。そしてその場にいるだけで雰囲気明るくしてくれる、いたずらっぽい楽しげな声。そのどれもが急激に恋しく感じる。

はあ、ともう一度ため息を吐くと、ルイズがもぞもぞと動き出して口を開いた。

「もう……朝からため息ばかり吐かないでよ。幸せが逃げるわよ」

「あ……おはようルイズ。こうしてぼーっとしていると、キュルケさんとお喋りしたくなってしまう……ルイズもそう思わない？」

「はあ？私は別に……ま、まあ元気になるに越したことは無いけどね」「そうよね。ルイズはキュルケさんのこと大好きなものね」

「え？今はっ倒してほしいって言った？」

ルイズはにつこりと背筋を凍らせる様な笑顔を浮かべるため、アビゲイルは慌てて「冗談だから！」と手を横に振って後ずさる。

とは言え、ここ数日のルイズの様子を見る限りは友達としてちゃんと心配していることは分かっている為、アビゲイルは内心で「素直じゃ無いなあ」と溜息を吐いた。

…  
:

食堂に着くと、起きてきた生徒が疎らに席についており、シエスタがそこへ朝食を運んでいる最中だった。

虚無の曜日は王都へ出かける者や部屋や図書館などに籠る生徒たちがいる為、食事が必要な場合はまず厨房にいるコックやメイド達に

声をかけてオーダーする事になっている。

「おはよう、シエスタさん。朝食を二ついいかしら？」

「あ、おはようございますルイズさん、アビーさん。すぐにお持ちしますね！」

笑顔でやり取りをし、それから普段は一年生が使っている席に腰を下ろした。

間も無くして料理が運ばれ、そこから発される美味しそうな匂いきゆう、とお腹が鳴る。

「美味しそう……それにいい香りだわ」

「ふふ、そう言っていたけるとマルトーさんも喜びますよ。……

あ、そうだ、ルイズさん」

「ん？」

思い出したように言うシエスタに急に話を振られてルイズは首をかしげる。

「この前の舞踏会で開ける予定だった葡萄酒がまだ残ってるんですけど、飲みます？」

「ああ……あの美味しかったやつ？ それって栓を抜いたやつ？」

「いいえ、まだ抜いてない物なので品質は落ちてませんよ」

「ふーん……？じゃあ貰おうかしら」

「かしこまりました。すぐにお持ちしますね！」

そう言っすぐに厨房に葡萄酒とグラスを取りに行こうとするシエスタだったが、背後から強烈な視線を感じて振り返る。

そこにはじーつと羨ましそうな目をしながら先ほど持ってきたオレンジジュースをちびちび口に含むアビゲイルの姿があった。

「……………」

「……………」

ルイズとシエスタは顔を見合わせる。

あれだけ物欲しそうな表情を浮かべられたら、なにを言いたいのかすぐに察することができたからだ。

「……『子供はお酒を飲んじゃダメ』」

「うつ……………」

「あなたの伯父様の言いつけだって、自分で言っただけでなかった？」  
「ううっ……」

そう、アビゲイルはフリッグの舞踏会で一度としてお酒を口に含まなかった。というのも、アビゲイルの住む世界では『お酒は大人になつてから』と決められているらしく、自主的にお酒を飲まない様にしていたのである。

とはいえ、ダンスが終わってから、パーティがお開きになるまでずっと生徒達が飲んでる葡萄酒を物欲しそうに見つめていたのだった。

「ええ……そうよ。　子供は飲んだらいけないの……身体に悪いから……」

「ま、まあ、確かに飲み過ぎると体に悪いですね」

「……でもきつと美味しいんだろうなあ……身体に悪いから……きつと大人の味がするんだわ……いいなあ……」

「……いいなあ……いいなあ……」

未練がましく呟き続けるアビゲイルに、ルイズは思わず溜息を零す。

「別に飲めばいいじゃない。　伯父も居ないんだし、私も別に止めないわよ」

「ええ!?　だ、ダメよ、そんな。　いけない事だわ……そんな事したら私、いけない子になっちゃう……」

「……あ、そう。　それじゃシエスタ、グラスは一つで——」

「で、でも!!　ルイズが飲めって言うなら、私は飲むわ!　だってそうでしょう!?　伯父様の言いつけももちろん大切だけれど、今の私はルイズの使い魔なんですもの!」

「……………」

めんどくさい。

すつつごくめんどくさい。

と、ルイズはげんなりした表情を浮かべて口をへの字に曲げた。

シエスタも少しそれを感じ取っているのか、苦笑いを浮かべている。

それに他人に言われたら実行する、とは責任を自分以外に押し付けようとしている事に他ならない。良いのかそれは。それはいけない子ではないのかアビー。

はあああ、とルイズはため息を吐いて口を開いた。

「分かったわ」

「!! そ、それなら……」

「グラスは 一つで お願い」

「やった——あれ?!」

アビゲイルは喜びかけ、直ぐに悲鳴をあげる。

それから泣きそうな表情でルイズを見た。

「ル、ルイズ!!」

「ダメよ、飲みたいなら自分でグラスを頼みなさい。言われた事をきちんとやるのは立派だけど、何でもかんでも言われた事だけしかやらないっていうのも良くないわ」

「おお……」

これが正しい躰か、とシエスタは感嘆の声を漏らす。

偏見を持っていた頃の貴族の躰とは、自分の都合のいいように育て上げる事だと認識していたが、これは母が子に、もしくは教師が生徒に道を正す時の躰だ。

アビゲイルが、ううう、と唸り声をあげてシエスタを見る。

涙で少し潤んだ瞳で上目遣いをしてくるアビゲイルに思わずキュン死するかと思ったが、シエスタとしてもルイズの意図を汲み取って道を正してあげなくてはならない。

たとえ悪い事であっても、責任だけは他人に押し付けてはならないのだと。

ここは心を鬼にして、シエスタは毅然とした態度をとる事にした。

「グラスはおひとつでよろしいでしょうか?」

「う、うう……その、あの……」

「はい?」

「わたし……も、飲みたい……から……その、もう一つ……用意してくださる……?」



自分の中に思い描いていた『葡萄酒』というのは、『葡萄酒ジュース』  
+『アルコールの味(苦い?)』程度の認識だったのだが、実際に口に  
してみるとそれは全く違った。

まず、葡萄酒ジュースを飲んだ時に感じるのは舌の上に残るのつペリ  
した感触だ。

しかし葡萄酒にはそれが無く、その代わりに繊細で滑らかな口当た  
りがある。

そしてその次に鼻の奥からつうつと抜ける風味、そして優しい甘さ  
と渋みだ。

葡萄酒ジュースの場合であれば、叩きつけるような強烈な甘みと、舌  
の奥の根の方に残る渋みが暫く残り続ける。

しかしこの葡萄酒は飲んだ後はさっぱりとし、残るのは鼻から抜け  
ていく甘美の余韻のみ。

まさに葡萄酒の中の葡萄酒。 真の葡萄酒とはこの事を言うのだとアビ  
ゲイルはこの異世界に来て初めて認識した。

「ああ……凄い……なんて素晴らしいのかしら……葡萄酒ジュースなん  
かより葡萄酒って感じで……」

「いや葡萄酒ジュースの方が葡萄酒でしょ」  
「大人はずっとこんなおいしいものを独り占めしていたのね……」

「……あ、あはは。 お気に召したようであれば何よりです」  
「ぐくりぐくりと飲み進める度に、アビゲイルは目をとろんとさせて

恍惚の笑みを浮かべる。  
ルイズはそれを眺めながら自分もグラスに注がれた葡萄酒に口を

つけ、その香りと味を楽しんだ。  
朝からお酒とはいかがなものか、とは思ったが、こういった優雅な

休日を通すのも悪くはない。  
寧ろ少し前までが波乱万丈すぎたのだ。 これはいわば、頑張つて

来た自分を癒すためのご褒美なのである。  
「ん……本当に美味しいわね。 飲みやすくて、油断してるとどんど

ん飲んじやって酔っ払っちゃいそう……」  
ルイズは飲みすぎないようにちびちびと、舌を濡らしてから、軽く



口に含む程度の速度で飲んでいく。

みたところこの葡萄酒の度数はそう高くはないが、この飲みやすさからして調子に乗っているとすぐに酔っ払ってしまう為気を付けねばならない。

ルイズはグラスをテーブルに置き、アビゲイルの方を見る。一応は注意をしておいた方がいいかもしれないと思ったからだ。

「あんたも気を付けなさいよ？ 調子に乗ってぐびぐび飲んでたら――」

「うふ、ふふふ……らいじょうぶよルイズ……ちよつとだけ……ちよつとだけ……かみさまもお許しになるわ……」

しかし時すでに遅し。

そこには顔を真っ赤にし、呂律も若干回っていないアビゲイルの姿があった。

### 36：少女と葡萄酒の休日―2

「えへへへ……るいずうー」

「ちよつとアビー、飲み過ぎよ！ あんた水か何かと勘違いしてるんじゃないでしょうねえ!？」

ふわふわ——ふらふらと、幸福にまみれたような顔を浮かべるアビゲイルに、ルイズは批難の声を上げる。

アビゲイルの顔はまるで湯にでも浸かったかのように赤く染まり、その瞳はギーシュとの決闘の時にに見せたように虚ろだ。

とはいえ、あの時のような薄暗く、感情を失ってしまったかのような様子の変化ではなく、陽気で感情豊かだ。

まさか、と思いいルイズはアビゲイルの持つ葡萄酒の瓶を見る。

気がつけば栓を抜きたてのはずの瓶の中には残り僅かの葡萄酒しか入っていない。ゆらせどゆらせど、ちやぶちやぶと瓶底で虚しい水音をたてるだけだ。

いったいどんなスピードで飲んだのだろうか。

少なくとも減っている量からして、まるで長い馬拉ソンを終えた後に飲む水のようにがぶ飲みをした事は明らかだった。

するとアビゲイルは、ぷうつと頬を膨らませて抗議する。

「してないったら！ ほんのちよつと、ちよつとなんらから！」

「見え見えの嘘つくんじゃないわよ！ シエスタも気づいてたならとめてよ！」

「す、すみません！ 幸せそうなアビーさんが可愛くてつい……！」

だめだこのメイド……！

ルイズは思う。 なんだかアビゲイルの周りにいる人は、アビゲイルに対してやたら甘くないだろうか？と。

キュルケといえば、彼女を溺愛していたために激甘。

そしてシエスタもそれと同じような節がちらほら見られる。

ギーシュとモンモランシーは二人に比べてまだまともだが、あの二人がアビゲイルを見る目はまるで年の離れた幼い妹を見るようだ。

さらには熟年夫婦が我が子を見守っている時のような目を向ける

ことさえある。

わが友とか言ってるくせになんて欲張りな奴だ。絶対許さんし渡さん。

そして驚くべきはタバサだ。

一見して冷たく見えるが、結構友達思いだ……というのは最近になつてわかつてきた事だ。

しかし聞けば部屋に泊めたと言うではないか。

それだけではない。王都では物を買ひ与えようとしたり、共に食事をした時なんかは自分の好物であるハシバミ草のサラダをオススメしていた。本屋に向かった時は自分の読んでいた本についての概要を説明したり、初心者勉強にオススメの絵本なんかも熱心を選んであげていたような気がする。それはまるで……

……今思えばあれは仲の良い友だちができてはしゃいでるだけか。

ともかく、アビゲイルの周りが皆甘いというのは教育上よろしくない。

ここはご主人様としてがつんと叱り、躰ける必要があると考えた。

「アビーー！」

「っ！」

ルイズが大きい声を出すと、びくりとアビゲイルは肩を震わせて、驚いたようにルイズを見つめる。

「いい？酒は飲んでも飲まれるなって言葉があるのよ。美味しいお酒だからどんどん飲んじやいそうになるのは分かるけど、そういうのはぐつと堪え——ちよちよちよつとなんで泣くのよ!?! 早すぎるでしよー！」

「ひつく……ふええん……」

アビゲイルの両目からはとめどなく涙があふれ、ぐずぐずと鼻をすすりながら嗚咽を繰り返し始めた。

その両手はまるでぬいぐるみを持っているかのごとく葡萄酒の瓶を抱き込み、酒瓶という事に目をつぶればその姿はより一層幼く感じてしまう。

「ルイズさん！言い過ぎでは!?!」

「う、うとうるさいわね！全然言いすぎじゃないわよ!?!」

罪悪感に耐えられなくなりシエスタが悲鳴のように声を上げ、ルイズも動揺して声を震わせる。

しかしここで負けてはならない。挫けてはならない。

本当に彼女の事を想うなら、正しい道へと導いて上げるのが主人としての務めなのだ。

ルイズは心を鬼にする。

鋼のような体で少女の涙をはね飛ばすのだ。心を穿つ銃弾

「な……泣いたって駄目なんだからね！私はあるを甘やかさないって決めたの!」

「うう……るいずはわたしの事きらいになってしまったんらわ……わたしがいけない子らから……ごめんなさいるいず……」

「んもー!! 違うわよ!! 前も言ったけどすぐそうやって決めつけないの!」

「だつてえ……」

ぐずぐずと涙声で訴えかけられる度にルイズの装甲良心が砕けていく。

それでもルイズは止まらない。そう、全ては彼女のために。

「ちゃんと聞きなさい。私はあるが嫌いになったからこういう事を言ってるんじゃないの!」

「じゃあなんれ……?」

「それはその、あなたの事がす、すす、好きだからよ！だからこうして心配して言ってるの!」

「好き……?」

アビゲイルは涙で潤んだ目をぱちくりと瞬きさせるとルイズに聞き返す。ルイズが明確にそんな言葉を口にしたのは初めてだったからである。

ルイズはフリッグの舞踏会の日、アビゲイルが眠りに落ちたのを見計らってから「好き」と好意を口にはしていたのだが、アビゲイルにはそれを知る由がない。

だからこそ胸の奥が熱くなり、どうしようもない多幸感によって身

が包まれる思いだった。

「まあ……るいずがすきだつて！ しえすたさん！ 今の聞いていらっしやった!?」

「ええ、聞いていましたとも！ あのルイズさんが『好き』って！」「ふふ、ふふふっ！ 嬉しい……！ ぽかぽか身体があつくなくて、むねもドキドキしてる……。『好き』って凄いのね！ わたし、幸せな気持ちでくらくらしてしまっそう……」

「いや、くらくらっというかフラフラしてるから！ 完全に酔っ払いの症状よそれ!! シエスタ、一緒になって盛り上がってないで水差しを持ってきて!!」

様子がおかしいのは明白だが、いつ倒れてもおかしくない状態にルイズは声を張り上げる。シエスタも流石に反省したのか「直ちに！」と言つて厨房の方へと駆け出して行つた。

「全くなんで朝っぱらからこんな事に……」

ルイズは、はあ……とため息を吐いて、ぐったりと椅子にもたれかかる。こんな優雅な休日もいいだろう、とかぬかしていた数分前の自分がやけに滑稽に思えた。

まさかアビゲイルがそこまでアルコールに対して執着……というか、タガが外れるとは思つてもみなかった。

考えてみればアビゲイルはかなり自分の中の感情を抑圧する方だ。だからこそ、アルコールというか栓抜きを与えた瞬間こうして溜まりに溜まった感情が爆発してしまう……。のかもしれない。

(流石に好意的な解釈すぎか……まあ、今はただの酔っ払いよね)

ルイズは何度目かもわからないため息を吐き、そういえばアビゲイルが抱え込んだ葡萄酒の瓶を回収しなくてはと思ひ出す。酔っ払いに瓶を持たせた場合、ぶっ倒れるまで中身を飲み続けるか、急に凶暴化して酒瓶を振り回すものと相場が決まっていると誰かが言っていたような気がするのだ。

ルイズはアビゲイルの方を向く。

するとその瞬間。

「ん〜……」

「!?!?!」

「眼前にあったのはアビゲイルの真っ赤な顔。」

そしてルイズが横を向いてしまったがために触れ合ったのは唇と唇。

小さな桜色が自分の唇に押し当てられ、手を繋いだり身体を寄せ合うのとはまた違った暖かさを感じるようになった。

コントラクト・サーヴァントの時は軽く触れるようなライトキスだったが、今回は少し深めのプレッシャーキス。しかも前回はルイズこちらからだっただのに対して、今回はあちらからだ。自らのタイミングでするのはまた違った感覚に戸惑いを隠せず、ルイズは思わず身を硬直させてしまう。

「ん、んん……!?!」

唇から伝わる暖かな温度。葡萄酒で少し湿った皮膚は採れたての果物のように瑞々しく、このまま永遠に味わっていたくなるほどの魅力を発していた。

ルイズの全身に力が漲る。

これは性欲か。

なんとという事だ。可愛い好きだとは言ったが、まさか自分がこんな幼気な子供を相手に、それも女の子相手に興奮してしまうなんて――

ではなく。

これは魔力だ。

彼女に触れるたびに濃い魔力が流れてくる（最近になって感じられるようになってきた）のだが、キスをした時はそれがより顕著に現れるのだろう。

――もしプレッシャーキスよりも深いキスをしたらどうなってしまうのだろうか？

ルイズは知的好奇心を試すためにアビゲイルの後頭部を支えるようにして持ち、一度顔を離す。ぬらり、と粘膜が糸を引き、ぼんやりとしたアビゲイルの顔が映った。

「……はれ……う？」

こいつ、マウスとウマウスでキスした事分かってないな？

恐らく頬にでもキスをするつもりだったのが、自分が横を向いたせいでこうなってしまったのだろう。とろんと今にも瞼が落ちそうな彼女の表情は、「あれ？なんで正面むいてるのかしら」と言った所か。

「フー、フー、か、かか、覚悟しなさいよ……」

だけでもうそんな事はどうでも良い。

ルイズの中にあるのは溢れ出る知的好奇心を満たしたいという欲求だけだ。

断じて、そう断じて邪な気持ちなどこれっぽっちも無いのだ。

ルイズは生唾を飲むと、ヴァリエール家の名を背負い、アビゲイルの顔に再び顔を寄せる。

アビゲイルはもはや思考が回っていないのか、「何をしているんだろう？」という表情を浮かべながらルイズを見つめるだけだ。

やがて唇と唇が触れ合う。

優しく這うようにして唇をスライドさせると、ルイズはゆっくりと舌をその鮮やかな二つの桜色に突っ込んだ。

「ふぁ……」

「あらま……」

「オオ……」

アビゲイルの甘い声——となんか後二人ぐらいの声が聞こえた気がする。

それを認識した瞬間、先ほどまでの熱っぽい思考は吹き飛び、思考だけでなく全身までもが急激に冷えていった。

恐る恐る横目で声のした方を見ると——そこには顔を赤らめ、手で顔を覆いながらもその隙間からにやにやと笑みを浮かべるシエスタと、あんぐりと口を開けたまま手に持っていたであろうグラスを床に落としたギーシュの姿があった。

アビゲイルの後頭部をしっかりと押さえていた自分の手ゆっくり





### 37：ルイズと夢のなかの男

「ルイズ……」

ハーブの音色のように耳障りのいい声がルイズの耳を撫でる。

小さな口から紡がれた彼女の甘い声は人を狂わせてしまうほどに艶やかでいて、無邪気な子供が母に甘えているかのように純粹だ。

線の細く、強く抱きしめてしまえば飴細工のように容易く折れてしまいそうなその身体は、まるで美しい陶器を思わせるほどに白く、さらさらと腰より少し下まで伸びた髪さえも何処かへ色を置いてきてしまったように錯覚してしまう。

衣類などはなく、その華奢な肢体を隠すのはいくつも連なった黒い蝶だけだ。

身体が揺れるたびに彼女の小ぶりな乳房と恥丘が見え隠れし、ルイズを愛おしそうに見つめる彼女の口元には、巫人を思わせるような鋭い歯が生え揃っている。

しかし雪のような冷たさを感じさせる彼女の見た目とは裏腹に、ルイズに触れた箇所から伝わる温度は暖かく、少女特有の柔らかさを秘めた肌をしている。

二人は見つめ合い、やがて唇と唇が触れ合う。

ここには二人以外の物も音も色もない。

ぴちやぴちやと艶めかしく奏でられる水音が反響し、理性という思考を奪っていく。

小さな双丘の先にある桜色の蕾が擦れ合い、電撃にも似た快感が襲う。

ルイズはぼんやりと彼女の額を眺めた。

ぽつかりと開かれた鍵穴の奥には、妖しく光る神の瞳が映っている。

「アビー」

ルイズは愛おしそうに彼女の名前を呼ぶ。

そして二人は溶け合い、混ざり合い、無限にも思える永遠の虚構へと溺れていった――

「おっと、それ以上は危険だ」

「!?!」

突然聞こえたのは男の声。

ルイズは辺りを見渡し、周りにはこの男以外の何も無いことを確認すると、ようやくこれが夢だという事を察した。

「私、今何をしてたんだっけ?」

「さてね、私には君の見る具体的な夢はわからない。人の見る夢は移ろいゆくものだから」

「ふーん……?　じゃあ何が危険なの?」

「君があれに吞まれてしまうことが」

男はルイズの後ろに視線を向ける。そこには確かに底なしの無が広がっていた。

ルイズはごくりと生唾を飲む。

あれに飲み込まれたものがどうなってしまうか、聞かなくともルイズには分かっていたからだ。

ルイズは一步後退りをし、再び男へと視線を向ける。

「つていうかあんた誰よ。　ていうか、これって夢……よね?」

「そうだね。　これは紛れもなく、君のしている夢だ。　君が毎晩眠りについて、毎晩見ているであろう空想の出来事だ」

しかし、と男は続ける。

「それは全てが真実ではない。　確かに君は虚無に吞まれようとしている。　ゆっくりと、綺麗な水に絵の具筆を突っ込むように、君という色は変質しているんだ」

「……なにそれ?　よく分からないけど……何が原因なのよ」

ルイズは訝しみながら男に質問を投げかける。

言っている意味はなんとなくしか分かったが、そもそも『夢で出会った男』と会話していること自体があまりにも胡散臭い。

すると男は、うーむと顎を数回擦り、考え込むように唸った。

「君と彼女の私の姪のもつ異質な魔力がなんらかの手段で混じり合ってしまったのが原因かも知れない。まあ、お陰で彼女の痕跡をなんとか夢という形で探ることができたのだが……」

「はあ……え、姪?」

「いや、すまない、話を戻そう。つい最近……昨日から一昨日の事なんだが、何か知らないかな?」

「うー……ん。使コントラクト・サーヴァントい魔契約の儀式じゃないのかしら……? でもそれについてもうそこそこ前の話なのよね」

まず最初に彼女と『繋がりを持った』と実感したのは、使コントラクト・サーヴァントい魔契約の儀式の時だ。あの時感じた体に流れ込んでくるような感覚は、今思ってみれば彼女の持つ魔力がルイズへと流れ込んでいたのだろう。

しかしそれは昨日一昨日の話ではないため、この男の言う原因とは一致しない。

……となると残されたのは。

「……………」

「……………? 何か心当たりがあるみたいだね」

「はあ?! なな、何も無いわよ!!?」

使コントラクト・サーヴァントい魔契約の儀式の時よりも深く、感情の籠った口付けデイトキス。

それによって伝わってくる彼女の魔力の量はその時と比べても遥かに多かった気がする。

ルイズは赤面しながら視線をあちらこちらに泳がせた。

この男が何者なのか、おおよその予想はついたが（というか先ほどさりと暴露していたが）、ついていけるからこそ真実を言う事が憚られる。

『お宅の可愛い姪っ子の唇を奪っただけでなくその唾液までも堪能しました』

これを言えたら大したものだろう。

世界中から賞賛軽蔑され、『へんたいよくできました』と名誉の勲章を貰ってしまうこと間違いなしだ。

それだけは避けなければならない



に目を覚ます事となった。

・  
:  
…

「……で、なんなの？ また喧嘩？ 懲りないわねあなた達も」

教室の席に着き、モンモランシーはげんなりとした表情を浮かべる。

先週、アビゲイルとルイズの両者は仲直りしたばかりではないか。

昨日、あの後食堂を粉砕したルイズは当然のごとく学院長室へ呼び出され、みつちりとお叱りを受けた後罰として食堂の掃除と補修作業の手伝いをさせられていた。

一方のアビゲイルは葡萄酒のアルコールによって完全に前後不覚に陥り倒れそうになっていたところに、ちよūdごその場に訪れたモンモランシーによってそのまま医務室へと運ばれ、昨晚を医務室で過ごす事となったのだが……

「……だ、だ、だってルイズったら、ああ、あんな事してくるんだもの……！」

「は、はあく!? それはその、………、………あんたが最初に酔っ払ってキスなんかしてきたんでしようが！」

「それはそう………だったかもしれないけど！ でも酔っ払ってたってあんな、あああんな破廉恥な事しないわ！」

「な、なんて事いうのかしらこの子はごごごご主人様に向かって破廉恥だなんて！ 破廉恥はあんたよ！ どうせ隣に居たのがギーシユでもキスしてたでしょ!!」

「なっ………しない！ しないから！」

……と、こんな調子である。

最後のキスについてのみを指摘されるとルイズにとってはかなり

苦しいが、そもそもを辿ればアビゲイルが酔っ払ってキスなんかしたのが悪い！とお互いは主張を譲らない。

「なんか飛び火しないか、僕は不安でたまらないよモンモランシー。

どうしたらいいかな……」

「アホくさ。ほっときなさい」

もはや関与したくない、といった風にモンモランシーは頬杖をついてそっぽを向く。タバサと言えば、近くに座ってはいるものの先程から本を読み続け、こちらに対してちらりとも視線を向けていない。

ギヤーギヤーと騒ぎ立て二人を他所に、教室にいる人たちもヒソヒソと噂話に花を咲かせていた。もはや生徒達にとって『ゼロのルイズ』という渾名は完全に過去のものとなってしまったのだ。

『百合のルイズ』

舞踏会で見せた純白を身に纏った百合の花は、艶やかな輝きで着飾った黒い妖精と戯れる。

蜜を食んだのはどちらかといえば逆だったが、誰かがそう言った途端、爆発的に広まってしまった。

二人してその容姿と内面が評価され始めたタイミングでやらかしてしまったのは要因の一つとしてはかなり大きいかも知れない。

それほどまでに昨日の光景はあまりにも衝撃的だった。

目の前で美しい少女によってあんなものが繰り広げられれば、思春期の少年少女にとってどんな影響をもたらすか想像するのは容易だろう。

事実、ギーシュは悶々として一睡も出来なかった。

彼の名誉のため一つ付け加えるとすれば、他の生徒とは違って空想上とは言え親友を汚すような真似はしていない。

彼は紳士の中の紳士なのだ。

それから暫くしたが二人は沈静化するどころか、顔を怒りと羞恥で真っ赤に染め上げながらきんきんきんとさらに激しく吠えあっている。

そろそろ先生も来るし、止めに入ろうかとモンモランシーが深々と

ため息を吐いた時、新たな声が割り込んできた。

「……あんた達ほんと元気ねえ……先生もそろそろくるから少し静かにしなさい」

とやや呆れを滲ませるのは久し振りの声。

ルイズとアビゲイル、そして本を読み続けていたタバサでさえ目を見開き、その声の主人の方は振り向いた。

「おはよう、皆」

燃えるような長い赤毛。

男性だけでなく女性までもが凝視してしまうほどの恵まれた肢体。へらりと悪戯っぽい笑みを浮かべるのは――

紛れもなく、キュルケだった。

### 388：トラウマ

「キュルケさん……!」

アビゲイルは嬉しそうに顔を綻ばせ、彼女に駆け寄ろうとする。しかしそれから直ぐにハツとしてその身体を制止させた。

今直ぐにでも飛びつき、抱きしめ、その温もりを感じたかったが、自分にはその資格は無い。あれほど心に傷を負ったキュルケが、自分のことを受け入れる事など――

「……ふふ、アビーちゃんも久しぶりね」

「!!」

ぎゅつと向こうから抱きしめられ、アビゲイルは目を丸くする。

燃えるような赤毛が頬をなでて少しだけくすぐったく、強めの力で抱きしめられた事によって胸に押し付けられ、少しだけ苦しい。

しかしそれよりも何故、という思考がアビゲイルを困惑させていた。

「んー……やっぱりこの抱き心地は最高ね。抱き枕にしたらぐつすり眠れそうだわ」

にこにこことこちらの困惑など御構い無しにキュルケはその抱き心地を堪能する。ふがふがとしばらく布に当たって喋らないでいたアビゲイルであつたが、しばらくもがいてようやく口を開くことができた。

「……怖く、ないの?」

私が、という言葉を飲み込み、目を泳がせる。

するとキュルケは優しい微笑みを浮かべて答えた。

「全部が怖くない訳じゃ無いけど。……でも、アビーちゃんの事は好きよ? それだけは変わらないわ」

「……っ!」

じわりと目頭が熱くなり、鼻の奥がつんとする。

アビゲイルは再びキュルケの胸に頭を押し付けた。

小さなしゃくり声は授業が始まる直前まで繰り返され、その間もずっとキュルケの胸の中に顔を埋めるのだった。



「では授業を始める前に自己紹介をしよう。私は『疾風』のギト―だ」

長い黒髪に、夜の様なマント。教師と呼ぶにはやや不気味なその佇まい。そしてやや高圧的な態度のこの男は、生徒たちに人気がない。

「諸君らに問おう。最も優れている系統とは一体なんなのか。誰が答えられるものはいるかね？」

最初に二つ名を自慢げに語つといて何言ってるんだこいつ。と、多くの生徒は思ったが、ルイズの思考は全くの外。昨晚に見た夢を思い浮かべていた。

(アビーの魔力が私を犯してきている……?)

昨日夢の中に出てきた誰かがそう言っていた様な気がする。所詮は夢だといえよそれまでだが、昨日見た夢はなんだかいつもよりもリアリティがあつた。どろりと混じり合い、溶け合い、ルイズとアビゲイルが一つになったならば――二度とあの夢から覚醒しなかつただろう。

(ああ、もう、どうすれば良いかだけ聞けばよかった！)

理由を聞く前に暴れ出したのは間違いなくルイズなのだが、ルイズはそれを棚に上げて誰かに向かつて憤慨した。

夢に現れた人物――再びこちらにコンタクトを取る様なことがあれば良いのだが、その人物がどの様な声で、どの様な姿をしていたか、いまいち思い出すことができないでいた。

結局のところ、昨晚の出来事は人が眠りにつき、目覚めた時には殆ど記憶から消え去ってしまう夢の一つに過ぎないのだ。

ルイズがもやもやとしながらそうしていると、アビゲイルが突然ギト―に指名され、少し驚いた様な表情を浮かべた後に緊張した面持ちで返事をする。

「は、はい！ ええと……どの系統も強みが違うから、決められないと思います。水は人の心と身体を癒す事においては最も優れている

し、土だつて生活には絶対欠かせないですから。 風や火も同じです」

「ほう……」

アビゲイルは急な指名にちよつぴりドキドキしながら落ち着いて答える。

するとギトーは少し意外そうな表情を浮かべ、それからやや不服そうな声を漏らした。

わざわざ生徒ではなく使い魔であるアビゲイルを指名したというのも、大方無知な使い魔を出汁にして「それは違う。最強の系統とはく」と繋げる魂胆だったのだろう。しかしアビゲイルは意外にも生徒の多くを納得させる様な答えを用意してきた。

「まあそれは間違いでは無いだろう。それぞれの系統には可能な事、不可能な事が存在する」

しかし……とギトーは続ける。

「最も『脅威となり得る』系統は何か？ それならば答えられるだろう。ミス・ツエルプストー」

ギトーは目線をキュルケへと向け、再び問いかける。

こいつ、意地でも「風が最強だ」と言わせる気だな、と誰しもが思ったが、それを火のメイジあるキュルケに振るというのも性格が悪い。事実、ギトーの表情には自分の持つ系統こそが最強だという傲慢さと、それ以外の系統を見下す様な嘲りが浮かんでいた。

「……それならば、火じゃありませんこと？ ミスタ・ギトー」

「何故そう思う？」

「燃え盛る炎は全てを焼き尽くす。 燃え広がる炎は圧倒的な熱量と破壊力を持って——その場にいる物全てに絶望を齎しますわ」

そう語るキュルケの瞳は、口元に浮かべている笑みとは対照的に真剣だ。

イオマグヌット。

あの炎の化身を目の当たりにしてしまったのだから、当然の事かもしれない、とアビゲイルは思った。

しかしギトーは仕返しといわんばかりに、ふんと鼻を鳴らし、再び

嫌らしく口元に嘲笑を浮かべて言った。

「残念ながら、それは違うな。正解は風だ。風はすべてを薙ぎ払う。水も、土も、当然火さえも風の前では立つことすらできない。残念ながら試したことはないが、『虚無』さえ吹き飛ばすだろう。それが風なのだよ、諸君」

小馬鹿にした様な声色に教室の生徒に苛立ちが募る。

当然その様な口ぶりをされてしまえばキュルケの表情にもそれが浮かんで見えた。

「ふむ、不満そうだな。……君は火のメイジだったか。ならば、君の炎を私に思い切りぶつけてみると良い。それで全てが分かる」  
「……………」

「どうしたね？ かの有名なツエルプストーの赤毛が飾りでは無いというのなら、君の全力をもって火の系統が風を打ち破ることを証明してみせたまえ」

ギトーの煽りに対して流石に苛立ちを抑えられなくなったのか、キュルケは杖を構える。しか一向に呪文を使う気配を見せない。

ただ杖を構え、今にも火ファイアボール球をあの憎たらしく傲慢な教師にぶつけようとする姿勢を取っているだけだった。

(どうしたのかしら……………?)

アビゲイルだけではなく、教室の生徒たちも皆その姿を不審に思った。

キュルケの性格からして、この憎たらしい教師を前に——それも家の名前まで出されて怖気付くなどとは考えにくい。

何を躊躇っているのか？

アビゲイルはキュルケを見た。

するとそこに映るキュルケの姿に、アビゲイルは目を丸くした。

キュルケはギトーなど見ておらず、ただ自分の杖の先を見つめていた。

その指先は躊躇っている、というよりは怯えている様に震え、杖の先はその震えに答える様に揺れ動いている。

——要するに、火が怖いのだ。

それも、自分の得意とする呪文が扱えなくなってしまうほどに。

「……恐れをなしたか。 まあ、無理もない」

やれやれ、とキュルケの様子にさえ気付かずにギトーは悦に浸った声を出す。

……なんだかむかつく。

どの系統が最強か？という議論などアビゲイルにとつてはどうでも良かったが、まるでキュルケを馬鹿にされている様な気がして、アビゲイルは胸の内にもやもやと不快な気持ちが沸き起こる。

何か言つてやろう、とアビゲイルが立ち上がろうとしたその時、

「私がやります」

隣に座っていたルイズがすつと立ち上がり、素早く杖を構えた。

「ルイズ……？」

「何……？」

キュルケはぱちくりと驚いた様に、ギトーは眉をひそめてルイズを見た。

しかしルイズはそれらの反応を全く気にも留めずに「行きます」というと杖を振った。

ファイアボール  
「火球」

次の瞬間、発動したのはやはり当然と呼ぶべき爆発。

慌ててギトーは風の呪文で防御しようとするがそれを貫通。ギ

トーはあえなく吹き飛ばされ、背後の黒板に叩きつけられた。

「……………どうやら私の火の呪文の方が上だったみたいですね」

「る、ルイズ……やりすぎじゃない……？」

「そんな事ないわよ。 ねえ？」

失神したギトーを眺めながら声を震わせるアビゲイルに対してにこり、と笑顔を浮かべるルイズ。

生徒たちは「あ、これはキレイてるな」と直ぐに察し、こくこくと冷や汗をかきながら頷くのであった。